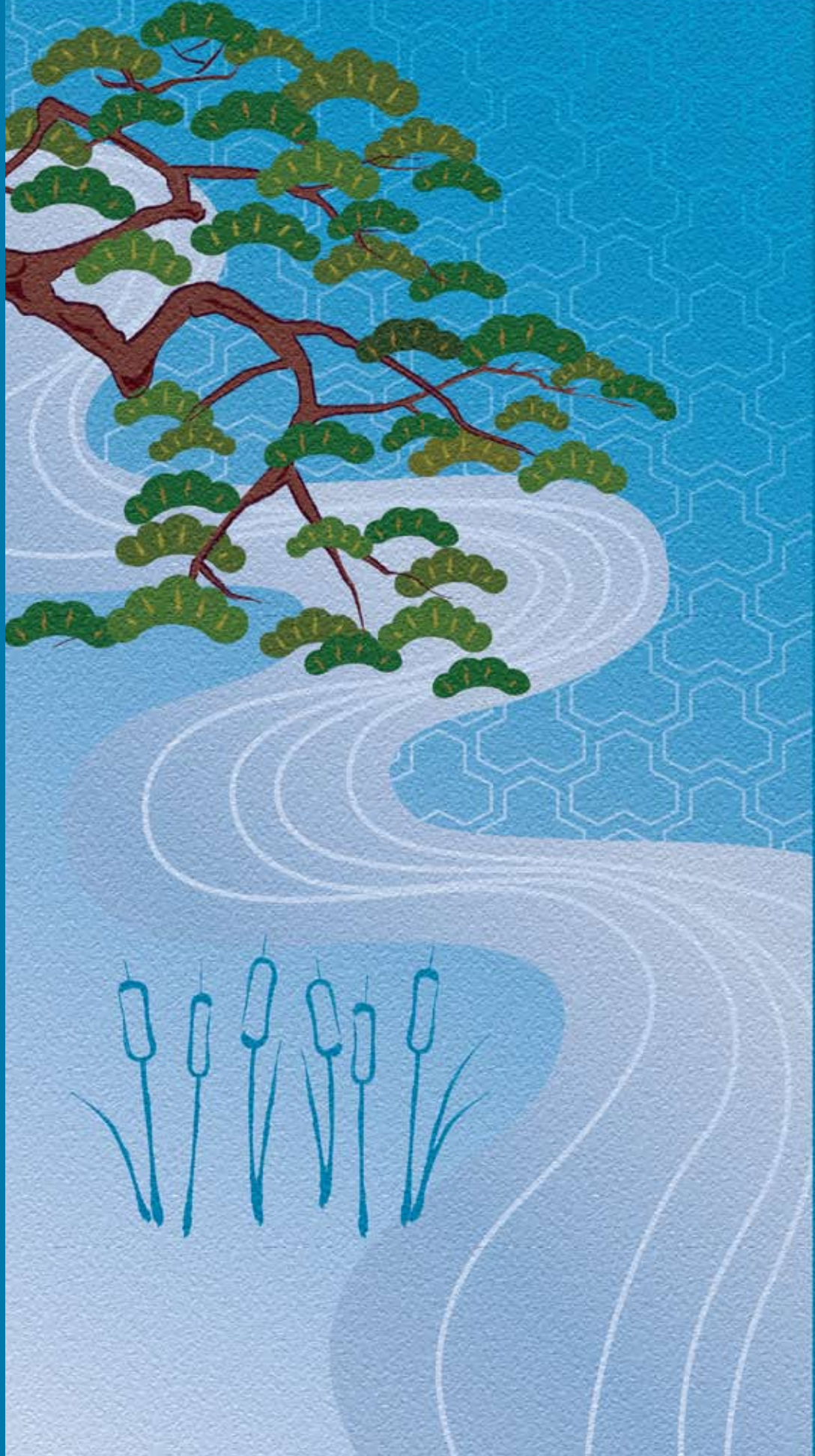


因幡・国府のうつろう流れ

殿ダム・袋川流域風土記



因幡・国府のうつろう流れ 殿ダム・袋川流域風土記

因幡・国府のうつろう流れ
袋川流域風土記

1. 鳥取平野の成り立ち 大地創生物語

- (1) 鳥取平野 海進・海退物語……………4
- (2) 中国山地の特徴……………6
- (3) 地質構造の歴史……………6
- (4) 鳥取平野と千代川……………7
- (5) 鳥取平野と鳥取砂丘……………7
- (6) 湖山池物語……………8

2. 袋川流域の山々の伝言

- (1) 外の五山物語……………10
- (2) 内の四山物語……………12
- (3) 因幡三山物語……………13
- (4) 「平」（がなる）と呼ばれる三つの丘……………14
- (5) 三峠物語……………15

3. 袋川流域 水の流れのメッセージ

- (1) 千代川……………16
- (2) 雨滝川から因幡川そして袋川……………17
- (3) 支流・派流……………18
- (4) 雨滝四十八滝物語……………19

4. 袋川流域 地名が語る物語

- (1) 広域地名の伝言……………22
- (2) 大字、小字 集落地名の伝言……………24

5. 袋川 水害との斗いの歴史

- (1) 洪水の記憶を今に伝える本邦随一の古記録……………34
- (2) 藩政・五水記が記す水害の伝言……………35
- (3) 大地に刻された洪水の記憶……………40
- (4) 藩橋五橋の物語……………42
- (5) 洪水に備える先人の知恵……………44
- (6) 明治時代の主な水害……………45
- (7) 大正時代の主な水害……………45
- (8) 昭和時代の主な水害……………46

- (9) 袋川の斗いの歴史を伝える二つの碑……………47

6. 袋川の三変遷 鳥取城下の整備と河道改修物語

- (1) 第一期改修：池田長吉による付け替え……………50
- (2) 第二期改修：池田光政による付け替え……………50
- (3) 第三期改修：千代川改修工事に伴う付け替え……………51
- (4) 惣門、九門……………52
- (5) いと場……………52
- (6) 武者走り……………52
- (7) 柳堤と桜堤……………53
- (8) 旧河道跡……………54
- (9) 千代川の治水史……………54

7. 鳥取城築城と袋川

- (1) 鳥取城の築城……………56
- (2) 羽柴秀吉による鳥取城攻め……………57
- (3) 池田家（岡山とのお国替え）……………61
- (4) 鳥取城下と水運……………63
- (5) 袋川の二規律……………65

8. 袋川流域 水を求めて先人の血と汗

- (1) 城下町の飲み水……………66
- (2) 水道水源を求めて……………67
- (3) 美敷水源物語……………67
- (4) 百谷ダム……………68
- (5) 石山用水と京ヶ原用水……………69
- (6) 水力発電……………69
- (7) 棚田、甘茶、三公園……………70

9. 袋川流域に華開く歴史・伝承

- (1) 伊福部氏と宇倍神社……………72
- (2) 因幡国府と古代の国づくり……………73
- (3) 大伴家持と万葉の里……………75
- (4) 国府の三堂……………77
- (5) 袋川流域の祈り……………78

10. 袋川流域 誇り高き歌人たちの里

- (1) 万葉の里・因幡国府の詠歌……………90
- (2) 鳥取砂丘の句碑・歌碑……………94
- (3) 童謡・唱歌の故郷……………96

11. 袋川流域民話・伝承が伝えるメッセージ

- (1) いなばの白兎……………98
- (2) 多鯨ヶ池伝説……………98
- (3) 民話・伝説……………99
- (4) 安徳天皇伝説……………110
- (5) 鳥取市のかたちが語るもの……………112

12. 袋川流域 街道と峠

- (1) 京都－鳥取－岡山の一円集……………114
- (2) 智頭街道……………114
- (3) 若桜街道……………114
- (4) 鹿野街道……………114
- (5) 雨滝街道……………115

13. 袋川が育む流域の自然

- (1) 鳥取市の花木……………122
- (2) 袋川流域の生き物……………122
- (3) 鳥取砂丘の動植物……………123
- (4) 貴重種……………123

14. 袋川流域 暮らしの歳時記

- (1) 祭りイベント……………124
- (2) 四季の名産物……………128

15. 山陰海岸ジオパークと殿ダム周辺のジオサイトを巡る旅

- (1) 山陰海岸ジオパークとは……………141
- (2) 山陰海岸ジオパークと殿ダム周辺ジオサイトルート案内図……………142
- (3) 殿ダム周辺の地質資産を巡る……………144
- (4) 殿ダム周辺のジオサイトを学ぶ……………154

16. 殿ダム・因幡万葉湖を巡るウォーキングトレイル

- (1) 殿ダム周辺ウォーキングトレイルとは……………158
- (2) 殿ダム・因幡万葉湖を巡るウォーキングトレイルのルートマップ……………160
- (3) 見どころ紹介……………162

17. 袋川八景二十勝

- (1) 因幡八景……………170
- (2) 湖山池八景……………171
- (3) 袋川八景二十勝（新作）……………172

18. 袋川 風土いろは歌留多

- (1) 袋川いろは歌留多……………182

19. 日本列島 災害の宿命と備え

- (1) 日本の国土の七つの宿命……………188
- (2) 日本列島は砂山……………188
- (3) 21世紀天変地異の世紀が始まった……………188
- (4) 巨大地震の活動期に突入……………189
- (5) 着実に進んでいる地球温暖化……………189
- (6) 備えあれば憂いなし……………189

1. 鳥取平野の成り立ち 大地創生物語

(1) 鳥取平野 海進・海退物語

① 古代の鳥取平野 (200 万年前) 湯山層の堆積と古砂丘

古代、鳥取平野は海でした。花崗岩や安山岩、凝灰岩、火山性礫岩などの基盤岩が岬状に日本海に突出して、遠浅の大きな湾を形成していました。この湾内には基盤岩から切り離された多くの島々が点在し、砂を堆積させるのに好都合な環境が整っていました。この多くの島々が点在する遠浅の大きな内湾を古鳥取湾と呼んでいます。

古鳥取湾には中国山地から砂礫が運び込まれ、湾内の埋め立てが進行していきました。運び込まれた砂や礫は湾内を流れる潮流により、礫・砂・シルトなどにふるい分けられ、大きな礫は河口に近い湾奥部に、細粒の粘土などは湾外へ運び去られました。砂は湾内を移動する間にさらに粒子の大きさが揃い、湾口部の岬や島々の周辺に付着するように堆積していき、これらの砂は次第に高まりを増し、相互につながって湾口部を塞ぐまでに発達していきました。このように海底に堆積した砂層(水付き砂層)には、特徴的に間隔の狭い水平ラミナが入っているため地層の堆積環境を見分ける一つの目安となり、この地層は模式地である福部町湯山の地名をとって「湯山層」と命名されています。この湯山層を堆積させた海は、更新世末期に海水面が高まった下末吉海進(今から 12 万年前)と呼ばれる海で、現在より海水面が 25 ~ 30 m も高かったと考えられています。

この湯山層は次第に水中で高まりを増し、ついには水面上に顔を出して、その後は海岸に打ち上げられた砂が風の力で運ばれるようになり、起伏をもった砂丘へと成長していきました。

② ウルム氷河期の鳥取平野 (2 万年前) 砂丘の草原化

下末吉海進をもたらした緩やかな時期はそれほど長く続かず、地球は次第に寒冷化していきました。地球全体が寒くなると、蒸発した海の水は広い範囲に雪となって降り積もりますが、この雪は夏になってもとけずに氷となって陸上に閉じ込められるようになります。つまり、蒸発した水が陸上に閉じ込められて海にかえってこないため、海水面が次第に下がっていきます。

最も厳しい氷河期となった約 2 万年前(ウルム氷河期)には、日本海の海水面が 80 m ほど低下したといわれ、鳥取砂丘付近では海岸線が 10 km 以上も沖合に退いたといわれています。千代川によって搬出された大量の砂が岬の先端や島に付着し、やがて湾を閉じるように古い砂丘が成長しました。さらにこの時期、日本列島の各地で大規模の火山活動(阿蘇・大山・アイラ火山等)があり、大量の火山灰が放出されて各地に厚く降り積もり、砂丘の砂はまったく移動しなくなります。



1. 古代の鳥取平野(200 万年前)



2. ウルム氷河期の鳥取平野 (2 万年前)



3. 縄文海進時代の鳥取平野 (6000 年前)



4. 有史時代以降の鳥取平野 (3000 年前)

海岸線が 10km 以上も後退して砂の供給が絶たれた上に、降灰のため砂も移動しなくなってしまったため、砂丘及びその周辺には植物が繁茂し、広大な草原が出現したと推察されています。また、大山の火山灰層に覆われてしまった砂丘は「古砂丘」と呼ばれています。

③ 縄文海進時代の鳥取平野 (6000 年前) 縄文人の生活

厳しかった水河も 1 万年前頃から暖かくなり始めます。この暖かさは次第にその度合いを増して、今から 6 ~ 5 千年ほど前に最も暖かくなりました。このため、陸地に閉じ込められていた雪や氷がとけて、海水面が上昇してきました。遙か沖合に遠退いていた海岸線は再び戻り始め、最も暖かくなったときには、現在の海水面より 2 ~ 6 m ほど高まったといわれています。この温暖化で拡大した海は縄文海進といわれ、鳥取砂丘付近は再び大きな内湾となり、この内湾は新鳥取湾と呼ばれています。鳥取市丸山や一ツ山に見られる離水海食洞は、このときの激しい波浪の浸食によってできたものです。また、鳥取平野の地下数メートルのところからは多数の貝化石が出土しています。この内湾には新たに砂礫が運び込まれて埋め立てが進行するとともに、新しい砂丘を作るための準備が整えられていき、やがて内湾は埋積され、古砂丘の前面には徐々に砂が堆積しました。

この時期は砂丘の停滞期にあたり、砂丘には草木が繁茂して小型の動物が生活するようになり、また、大きくなった内湾は良好の漁場となって人々の生活しやすい条件が整ってきたため、縄文人が砂丘地に進出して生活するようになりました。その生活遺物を今でも鳥取砂丘の長者庭等で採集することができます。

④ 有史時代以降の鳥取平野 (3000 年前) 弥生人の生活

縄文時代の終わり頃から少しずつ寒くなってきます。今から 2 千年ほど前の弥生時代は冷涼期となり、海水面が再び低下しました。海水面は 2 m 前後下がったのではないかとされています。このため、縄文時代に拡大していた新鳥取湾は急速に小さくなっていきます。海水面が下がったことで、山地と平地の間に高低差が生じて山地の浸食が復活し、千代川により大量の砂礫が運び出されました。かつての内湾は急速に埋め立てられて平野が形成され、また、海に運び出された砂は海岸に打ち上げられて、再度砂丘が発達し、湖山池が海から切り離され潟湖となります。このため各地に新しい砂丘が次々と誕生し、古砂丘にこれらの砂丘が埋積されて、大砂丘へと成長していきました。縄文時代に緩やかな砂丘での狩猟生活をしてきた縄文人は、この急速に成長する砂丘に生活の場を奪われて砂丘地から撤退していきました。これと入れ替わるかのように、弥生人が砂丘背後の高台や潟周辺で生活するようになり、新しく形成された平野で新技術を取り入れた稲作中心の農耕生活を始めるようになっていきます。最初、水田は山の谷あいなどの高台に作られ、やがて川から水が引きやすい低湿地を選んで水田を作るようになりました。しかし、洪水から家を守るため、人々は自然の丘や台地、川沿いの小高い土地などに住んでいたと考えられています。

離水海食洞

昔、鳥取平野は海の底でした。「離水海食洞」は海の波浪によって形成された高さ 1 メートル、幅 0.6 メートル、奥行 18 メートルの海食洞です。縄文時代(約 6 千年前)に海水面が上昇した縄文海進によってこの洞窟が形成され、その後の海退によって陸化したと考えられています。現在は海岸線から遠く離れた場所にあるため、かつての海岸線や鳥取平野形成の地史を今に伝える貴重なものなのです。



離水海食洞 (丸山)

香合石

三代寺・広西の丘陵地から産出される箱型の小さな石で、海進海退の作用によって自然が作り上げた、全国的にも類のない珍しい石です。石の表面は黄鉄鉱で出来ていますが、内部は淡黄色の粘土を含んでいるため石を割って取り除くと、蓋付きの箱のようになります。5 cm 前後のマッチ箱のような四角柱や三角柱といった形状が仏前の香合(香盒)に似ているのでこの名がつけました。明治 20 年頃地元で発見され、その後明治 40 年頃から田中香石氏が採掘し、香合に加工して販売し始め、当時は銘石の呼び名で古物商の店頭を飾ったと言われていました。この石は土中石であることと、その産地が極めて限られているため、今日では採掘が困難を極め、幻の石となりつつあります。

桂見遺跡と丸木舟

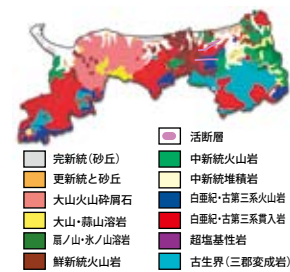
湖山池南東岸の桂見遺跡において、全国最大級の丸木舟が 2 艘発見されました。全長は 641cm、最大幅 70cm、深さ 10cm 規模の大型丸木

舟で、縄文時代後期に外洋航海用と物資運搬用として使用されたと考えられています。

鳥取の地質年代表

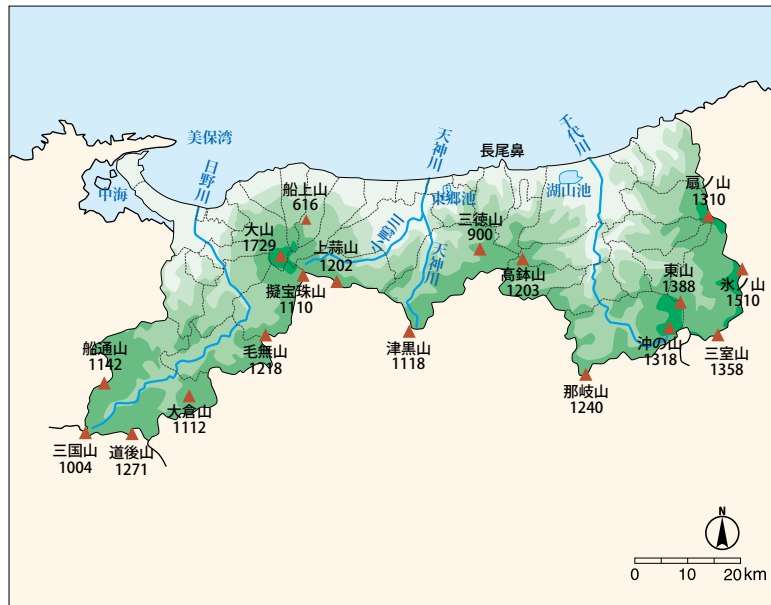
地質時代	地質層	地質層他			
先カンヤン時代	始生代	(地球上の最古の岩石)			
	原生代	(地球上の最古の化石) (日本最古の岩石)			
古生代	リアンブ	(日本最古の化石)			
	ピオスル				
	シルル				
	デボン				
中生代	石炭紀	三那変成岩類			
	ペルム紀				
	紀トリアス	角谷層 智頭層			
	ジュラ紀	八頭層 志谷層			
	白亜紀	斑撫岩類			
		中生代火山岩類			
新生代	古第三紀	久松山花崗岩			
		鳥取花崗岩			
	第三紀	八頭累層	郡家礫岩層		
			河原火山岩層		
		鳥取層群	泥雲山礫	三代寺シルト岩層	岩井火砕岩
			砂岩層	円通寺礫岩	
			私都累層		
		新第三紀	諸鹿礫岩層		
			善含寺泥岩層		
			小田安山岩層		
			円護寺火山岩層	荒金火砕岩層	
第四紀	照来層群	歌長流紋岩層			
		湯谷礫岩層			
		春米泥岩層			
		寺田安山岩			
	新鮮更新群	因幡山礫層			
		因幡山安山岩			
	更新世	霊石山玄武岩			
		扇ノ山火山			
完新世	高位段丘礫層				
	湯山砂層(古砂丘)				
	大山火山灰層				
第四紀	層沖積層	古鳥取湾の形成			
		砂丘・湖山地の完成			
		鳥取平野の完成			

鳥取の地質図



(2) 中国山地の特徴

中国山地は、標高 1,000 メートル以上の山岳が中国地方をほぼ東西に延々と伸び、12 ある山系中その半数以上が鳥取南東部に集中しています。これは中生代の火山岩類と花崗岩類第三紀層で構成された山地で、鳥取県と兵庫・岡山両県と接する県境の氷ノ山、後山、那岐山といった連峰は「因幡山岳地帯」とも呼ばれています。そのため陸路で県外に出るためには、必ずこの山地越えをすることが必要な地域となっています。扇ノ山はこの中国山地の東列に位置する古い火山で、わずかに火山地形を残し、妻鹿野付近と菅野には溶岩流が見られます。また、広留野、河合谷高原のような原野が開け、袋川・八東川の浸食が進み、川には多くの滝がかかっています。



(3) 地質構造の歴史

① 地質の特性

中生代白亜紀後半から古第三紀初頭にかけての大規模で複雑な花崗岩の侵入活動は、中国地方全般の大底盤を形成しました。最も遅い時期の岩体は鳥取花崗岩と呼ばれており、年代は5～6千万年とされ、最も広い面積を占めています。この鳥取花崗岩が国府町松尾・吉野周辺にも分布し、この地域の最も古い時代の岩石となっています。

新第三紀の初頭、著しい沈降と海底火山を主とする火山活動期に入り、東北日本を中心とした日本海側に厚い海成層が堆積しました。この時代はグリーンタフ時代と言われています。この時代、県内に広く堆積した地層である鳥取層群は、凝灰岩や泥岩を主とするもので、この地域で最も広い面積を占めています。

中新世後期から鮮新世にかけて全般的に隆起して陸域は拡大しましたが、部分的に急激な沈降が火山活動を伴いながら起こりました。この時代に形成された地層が、鳥取県東縁部から兵庫県北西部にかけて分布する照来層群です。その後も何回も火山活動が続き、その火山噴出物を鮮新世火山岩類と呼んでいます。

第四紀は全世界的に大氷河が繰返し発達した時代で、海水面の昇降に伴い海岸・河岸段丘が発達し、同時に火山活動も活発な時代で、現在の火山はほとんどこの時代に形成されました。扇ノ山・大山などの火山が形成され、沖積平野が成立しました。この時代の噴出溶岩を扇ノ山安山岩類と呼び、この地域では最も新しい(100 万年未満前) 岩石になります。

(4) 鳥取平野と千代川

① 川の土砂により形成

この 200 万年の間に、現在私たちが住む土地の地形がほぼ形作られてきました。千代川の歴史も例外ではなく、この時間の流れの中、中国山地の山々の肌をけずり取り、谷を刻み、運んだ土砂を河口近くにためて、鳥取平野という沖積平野を生成していきました。

千代川河域で第四紀に造成された沖積平野と川の変遷過程には、多くの因果関係が含まれています。川は流域から多量の土砂を運搬し、扇状地を造り、天井川となって、ここから脱落した川筋は転位して新川となり、土砂を伴った水が平野の真ん中をまんべんなく流れていきます。微高地や自然堤防は海進期の堆積地であったり、かつて流れていた古川筋の姿なのです。

長い年月をかけて、鳥取平野の中で千代川の流れは変遷を繰り返してきました。現在流れている千代川は、自然河川から固定化された人工河川であるともいえます。

(5) 鳥取平野と鳥取砂丘

① 鳥取砂丘(浜坂砂丘)

成り立ち

鳥取市の北、日本海に臨む海岸一帯に鳥取砂丘が広がっています。砂丘の範囲は、東が岩美郡の駒馳山(314m)の麓から始まって、海士・浜場山・多鯨ヶ池・浜坂・賀露・湖山・白兔にいたる、東西約 16km、南北 2 km 余りに及びます。鳥取砂丘は火山灰土に覆われた更新世の古砂丘と完新世の新砂丘(一般の海岸砂丘)から成る複合砂丘です。中国地方の基盤は花崗岩で、花崗岩は地殻の深いところで固まった火成岩です。これが地表面に露出するには、長年月を経て上部の地層が削り取られたこととなります。千代川流域における花崗岩の分布をみると本流の

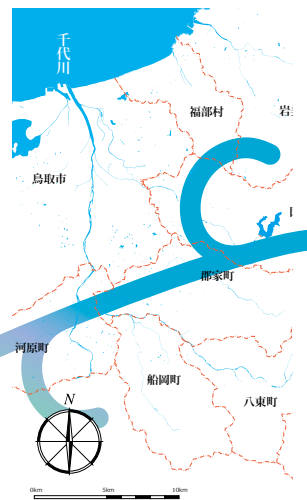
上地の貝化石

善含寺泥岩層といわれる約 1500 万年前の新生代第三紀の層から出土した貝の化石です。上地からは他にもイタヤガイやウニの化石が出土しており、太古は上地周辺も海の中であつたことを物語っています。



宇倍神社裏山の魚の化石

宇倍神社裏山の善含寺泥岩層からは、コノシロ、カタクチイワシ科、カレイ科などの魚の化石が見つっています。善含寺泥岩層は約 1500 万年前の土層で、宇倍神社周辺においてもかつては海に覆われていた時代があつたことがわかります。



千代川の流路図



鳥取砂丘

①砂丘の番地をしるした杭

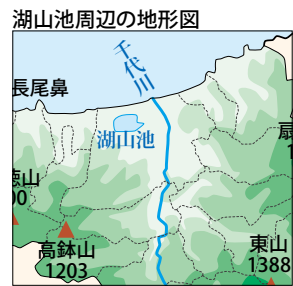
砂丘には、第一砂丘列の方向から海岸沿いに0、1、2…、内陸側にA、B、C…、と100m置きに線を引き、それらの交わる場所に砂丘の番地をしるした杭を打ち込んであります。これは鳥取砂丘の砂の移動を調査するために設けられたものですが、この番地で場所を把握しながら、自然観察や砂丘探索を楽しむことができます。



砂丘の番地をしるした杭



湖山池



②長者伝説

『因幡誌』にこの地の長者の伝説が紹介されています。

智頭谷から中国分水嶺にかけて広く、最も厳しい侵食を受けたこの地域の大量の砂礫が日本海に運ばれたと考えられています。つまり、鳥取砂丘の莫大な砂は、中国分水嶺附近、湖山池南方などの花崗岩が侵食されて千代川によって大量に日本海に放出され、それらが海底に沈積し、後の地形変遷を経て吹き上げられ、海岸砂丘を形成するに至ったのです。

古鳥取湾の形成

更新世末期（5～1万年前）の一時期には海水が増加して、前述の通り現在の陸地は沈降海岸の形態となり、古鳥取湾とも呼ばれる大湾入がつくられました。当時は沖積層の堆積もなかったので平野もできておらず、湾入はかなりの深さがあったのではないかと考えられています。湾奥附近には現在鳥取平野に散在する面影山や大呂山、また砂丘の二ツ山・二ツ山・馬ノ背・伴山、賀露町背後の岩山、さらにスクモ山など湾の外側にある島々により、湾内には小さな島が多く点在していたと考えられます。中国の山地と新しい火山に降り注ぐ雨が洪水となって、侵食を激しくおこない、花崗岩・安山岩の山を削って礫・砂・土を大量に日本海に放出しました。大礫は陸地にとどまり、小礫は湾奥附近に、砂は湾口から湾外に厚く堆積し、泥土は濁水となって遠く沖合に運び去られたことにより、海岸部には泥を含まない美しい砂が堆積しました。砂丘を形成する海底砂はこの頃から存在していたものと考えられています。

古砂丘の誕生

また、更新世にできた沿岸洲は湾口を完全に塞いではおらず、海水は内側に入り、内湾と外海はかなり広範囲につながっていました。外海から打寄せる波は海底を攪乱しながら沿岸洲の汀線附近に砂を打ち上げ、潮流が砂を運び、また打ち上げ、その砂が北からの風によって内側に運ばれます。これが繰り返されて、沿岸洲は次第に幅を広げて高さを増し、小岩島や砂の盛りあがりやを這い上がり、埋めつくして砂丘を形成してきました。特に浜坂付近と多鯨ヶ池北東方には、山々が連なっていたので山裾付近で風勢が急に落ちることから、砂の堆積は大きくなり、砂丘は高さを増し、80メートルを超えるに至りました。この時代につくられた古砂丘は現在の砂丘面積の4分の1から5分の1程度のものでしたが、このようにして鳥取砂丘の原地形である古砂丘が誕生し、その後長い年月を経て新しい砂丘がこれに重なって、現在のような大砂丘になりました。

さらに砂丘は古代人の生活舞台であったため、石器や縄文・弥生土器の出土が多数分布しています。

(6) 因幡二池物語

①砂丘によりつくられた潟湖 湖山池

かつては日本海の湾入部でしたが、千代川による土砂の堆積作用によって北部に湖山砂丘ができて古代鳥取砂丘を塞いだために生じた潟湖です。春には湖面がかすんで対岸が見えないことから「かすみ湖」とも呼ばれています。池は東西に約4km、南北に2.4km、深さ3mほどで水面の広さは約6.8km²あり、池の周囲はおよそ16kmになります。水は長柄川から注ぎ、湖山川によって賀露港に流れでます。

海進海退と湖山池

海進や海退は周辺の縄文、弥生、古墳時代の遺跡によって論じられ、縄文海進や弥生海退などがいわれています。湖山池は弥生海退の2千年前（弥生時代）頃が一番狭かったとされており、その後は次第に水位を上げ、古墳時代以後、おそらく1千年前の平安時代に水位が急上昇したのではないかと考えられています。湖山池南西の桂見遺跡や布勢遺跡に厚く溜まっているガマクソと呼ばれる泥炭層がありますが、桂見のガマクソの下には縄文と古墳時代の遺跡が、布勢ではガマクソの上に中世の遺物が見られることからわかってきたのです。

七つの島

池中には青島・団子島・猫島・津生島など7の小島が浮かび、最大の青島からは、珍しい子持勾玉や、縄文・弥生土器などが多数出土しています。また、日本のサクラの全品種、250種1000本のサクラ並木があり、四季ごとに変わる美しい風景で地域の人々に親しまれています。

②中国地方で最も深い 多鯨ヶ池

鳥取砂丘の南方に位置し、東西に930m、南北に480m、湖岸線3.38km、面積約2.4km²あります。2～3月の増水期と7～8月の減水期とでは1～2mの水位変化があり、最大深度は17.3mと中国地方では最も深く、湖面は海面より16mも高いところにあります。透明度も湖山池や東郷池に比べて高く、約3.2mあります。

昔は海に連なっていましたが、砂の堆積によって切り離された潟湖です。一般の潟湖とは異なった性質をもち、第三紀層の浸食谷を砂丘が塞いだ堰止湖であります。注入する河川も流出する河川もありませんが、近くの山々から水を集めて、排水は湖の東から行われ、灌漑用に使われています。また、中央部には磯の御前島・沖の御前島の2つの暗礁があり、減水期には水面上に姿を現わします。

昔、湖山池は池ではなく、長者所有の田地でした。ある年の田植の時、国中の人夫を使って一日ですべて植えようとしましたが、少し残ってしまったので、その長者は金の団扇を持って夕陽に向かって三度招いたところ、山に入ろうとしていた太陽が3段ほど昇り、無事に田植を終えることができました。次の年も富の力によって同じ事をしようとしたところ、ついに天罰が降り、田地はたちまち湖水へと変わって財宝もすべて跡形もなくなってしまうました。

つまり、これは、著り高ぶっていた長者の田畑が、天罰が下って一夜にして湖底に沈んでしまった話ですが、この伝承は平安時代の湖面の急上昇を物語っているのではないともいわれています。



湖山池（青島）



多鯨ヶ池

③多鯨ヶ池の伝説

池には悲しい伝説があります。昔、お種という美しい女中がいました。冬の夜、誰かが「何か甘い物が食べたい」と言うと、お種はどこからかおいしい柿を取ってきて食べさせてくれました。不思議に思った若衆がある夜、お種の後をつけると、お種はこの池に来て蛇に身を変え、池の中にある島の柿の木に登っていました。若衆は驚いて逃げ帰りましたが、本当の姿を見られたお種は、そのまま池に沈み、再び姿を現すことはなかったそうです。

2. 袋川流域の山々の伝言

山をどうして「せん」と呼ぶのか

鳥取県と兵庫、岡山県にまたがる地域の山は「せん」と呼ぶ山が多くあります。

だいせん ひるせん いずみせん けなしせん
大山、蒜山、泉山、毛無山、
かぶとがせん とうせん おうぎのせん ひょうのせん
甲ヶ山、東山、扇ノ山、氷ノ山、
みながせん やはずがせん あさなべわしがせん
菅ヶ山、矢筈ヶ山、朝鍋鷲ヶ山……

等々大昔からこの地方の人は山を「せん」と発音していました。

また、仏教のお経の読みは全て呉音です。そこで山岳修験道場の山、例えば吉野大峰の弥山、安芸の宮島・厳島の弥山、伊予の石鎚山の弥山、京都東山の霊山等、「せん」が使われている山も多いのです。



流域の山々▲

(1) 外の四山物語

1 扇ノ山

鳥取県と兵庫県の県境に位置する扇ノ山は、標高 1309.9 メートル、国府、郡家、八東、若桜の境ともなっています。南北に連なるなだらかな尾根筋と、裾野に広がる広大な高原からなり、遠くから見ると扇の形に似ていることから名付けられました。また、邑美野の中心、源太橋あたりから眺めると、扇は半開きにゆったりとしたスロープで左右に広がっていくことから、「扇」とは因幡鳥取側からの命名ではないかといわれています。新三紀末から新四紀にかけて盛んに噴火を繰り返して山が高くなり、噴出溶岩によってできた標高 1000 メートル付近の台地状地形は美しい高原となっています。麓には名瀑の雨滝があり、登山口の近くには河合谷牧場、それを過ぎると水とのふれあい広場があります。中国自然歩道と登山ルートとして、スギの植林地に沿って起伏のない平坦な道をしばらく進むと、ブナやコナラなどの雑木林に変わって緩やかな登りとなります。山頂は雑木林に囲まれた円形の広場のようになっていて、南西方向に展望が開けて兵庫県側がよく見下ろせます。袋川はこの扇ノ山に源を発し、国府町から雨滝地区にある県下最大の名瀑、雨滝から西流して鳥取市街地へ流れ出ていきます。

2 大茅山

岩美町と国府町の境、雨滝北西に位置し、標高は 664.1m メートル。昔は茅を刈り取る山であったということから、この名がつけました。地形図には登山道が記されていませんが、国府町の木原のスギ林の沢から入ることができま



扇ノ山

面影山と長慶院法皇の伝説

南北朝時代、甑山は北朝方に面影山は南朝方と関係があり、面影山に伝説が残っています。因州の守護民部少輔山名氏清公は、弟の氏冬に南朝第三代長慶天皇(当時はすでに長慶院法皇)を迎えに行かせ、丹後国桑田郡千歳村の千年山からこの面影山に招きました。法皇は蒲生峠を越え、因幡国の岩美郡岩美町洗井の豪農井本家に宿泊しました。この時、旅でボロボロになった法衣を井本家に与え、今もそれは秘蔵されているといわれます。次いで岩美町長郷に滞在し、そこは“天皇ヶ平”と呼ばれ、また面影山では西麓の正蓮寺に隠れ住み、付近には“隠れ里”と呼ばれる所もあると伝えられています。さ

す。途中で道は消えてしまいますが、尾根づたいに歩けるそうです。今では茅の山にヒノキの植林が進んでいて、山頂には何もありません。

3 宝山

国府町清水と八頭郡八頭町山上の間に位置する標高 294.6 メートルの山です。

4 稲葉山

美敷水源地の北西にあり、頂上から尾根筋にかけて平坦な稜線が続く、標高 248.9 メートルの山です。「因幡山」「稲羽山」「伊奈波山」の他、宇倍神社鎮座まします山として「宇倍野山」「上野山」など多くの名で登場してきましたが、現在は「稲葉山」と呼ばれています。『稲葉民談記』の「古来より大きな松山にて翠樹陰深い」姿は今はなく、近世の池田長吉時代に羽柴秀吉の鳥取城攻めによって荒れ果てた鳥取城の造営の用材として松や樺などの伐採が進んで入会の採草地となり、薪や肥やし草などの恵みの山となりました。また、その昔、多くの歌人に詠まれた山であり、因幡国守に就任した在原行平が詠んだ歌は百人一首の 16 番歌として知られています。マツ林の中には、行平塚とよばれる石塚があります。また、行平の屋敷があったとも伝えられていますが、『稲葉民談記』には誤って伝わったものであると指摘されています。

登山口は宇倍神社にあり、神社の石段上がると宇倍神社の手水鉢にも引かれている「七宝水」と呼ばれる水場に着き、脇には道標があります。中腹に開墾された林檎園や梨園まで自動車での通行が可能で、町屋からの道や美敷砂防ダムを通る道もあり、奥谷からも入る事ができます。この山道沿いには、栗の柴木を炭にして、数々の名刀を鍛えた稲葉小鍛冶景長の屋敷があったといわれ、また古い書物によれば、但馬へ抜ける道にもなっていたということです。

(2) 内の五山物語

1 面影山

蜘蛛山の東尾根の小峰にあたり、中村山、正蓮寺山、^{おもかげ} 佛山などとも呼ばれている、因幡国庁跡の東にそびえる標高 100 メートルの山です。国庁跡から見ると、夕陽に照らされた美しい姿を臨むことができます。

地元の人は中村山、正蓮寺山と呼んでいましたが、歌書には因幡国面影山や佛山とも書かれていました。また、昔、山中に面影山正蓮寺という寺があったので、山号の面影山がこの山の本名であると伝えられています。

大伴家持の叔母である大伴坂上郎女の歌に、面影山を詠んだ歌があります。
「わがせこが おもかげやまの さかあまに

われのみこひて 見ぬはねたしも」[図 1]

らに面影東麓の東今在家の御所に移り、“御所裡”と呼ばれる由縁だということです。山名氏清公は足利義満公に討たれ、潜幸していた長慶院法皇も南朝暦元中 9 年(北朝暦明德 3 年(1392))に病死して御所近くの面影山に葬られました。そこには立岩大権現が祀られており、御陵は南麓桜谷岡谷の“御王畑”の宝篋印塔であると伝えられています。

一般的には、長慶院法皇の晩年の状況は住居を含めて全く不明とされており、応永元年(1394)8月1日に崩御されたといわれています。

面影山と八百比丘尼の伝説

山の中腹に「八百比丘尼の住居跡」があります。面影山麓の居住する老女が大路山の鼠の岩屋で御馳走になりましたが、人魚の料理だけは食べることができず、懐に入れて持ち帰りました。老女の一人娘がそれを食べたところ、美しい娘のままで八百年生きたという、不老長寿の伝説が残っています。



面影山

わがせこが おもかげやまの さかあまに
われのみこひて 見ぬはねたしも

[図 1]

いなほよと 同ましものをこひしたい
わすれかたきは梯の山

〔図2〕



今木山

知しらぬ 御法にもれぬ教へにて
跡したはるる面影の山

〔図3〕



甌山

藤波の散らまく惜しみほほとぎす
今木の丘を鳴きて越ゆなり

ほかにも面影山を詠んでいる歌がこの里に2首伝えられています。

〔稲葉よと 問ましものをこひしたひ わすれかたきは梯の山〕〔図2〕

〔知るしらぬ 御法にもれぬ教へにて 跡したはるる面影の山〕〔図3〕

2首目の「因幡よ……」の歌は『夫木集』に収められている古歌ですが、この里の農夫の家に代々に伝えられていたということです。

また、佛山は本陣山、御城山のことを指す説がありますが、本陣山は元々帝釈山と呼ばれて今の摩尼寺の古地であり、帝釈山御城山と呼ぶことはあっても、面影山と言われていた記録は見あたらず、面影山は正蓮寺山であることは疑いがない、と『因幡誌』には書かれています。

2 今木山

法花寺集落の東南にある標高 88.9 メートルの山で、古代に海を渡ってきた渡来人が住んでいた地として、「今来の山」ともいわれました。昔はこの山に木が多く生え、稲を植えているようだったことから稲木山と言って今木山と書くようになったとする言い伝えはありますが、かつてこの地に今キ大明神という神社があり、地名を神号とする習わしがあったため、この里は今キといい、この地の山であるので今キ（衣）の山と言われていたと『因幡誌』にはあります。聖武天皇の御時以来、この一帯は国分尼寺である法華寺の境内であったので、大伽藍の前に今キ（衣）の名前は隠れて土地も山も法華寺と言うようになってしまいましたが、今木（衣）山は法華寺村に鎮座した今木（衣）大明神の山であったようです。また、『万葉集』にも詠まれている山です。

3 甌山

稲葉山塊が大きく南に裾を落とし、袋川をねじ曲げるようにして打ち込んだ楔のようにそびえる標高 110 メートルの山で、第三紀中新世の堆積泥岩と安山岩質の火山砕屑岩からなる国府盆地の東の要衝的な存在の山です。山名は、岡益の太田神社の太多羅大明神が近くの山をモッコで担いで国府町の町家までやって来た時にモッコの棒が折れて、担いでいた山を置き去りにしたという話や、武内宿禰が因幡の国に入った時、高草の鍋山に鍋をすえ、この山に甌（蒸し器）を置いて飯を焚いたという、国府の里が製鉄や袋川の穀倉で栄えたことを示唆するような昔話に由来しています。また山頂にあった甌山城は、南北朝の建武四年（1337）に北朝方の武将・平貞泰が、この城を守って南朝と戦ったという記録が見られ、さらには天正元年（1573）に山中鹿之助が鳥取城主武田高信との合戦で陣取った城であり、この合戦は「たのも崩れ」と呼ばれています。

4 御陵山

標高 90 メートルの御陵山は、「石堂の森」とも呼ばれています。壇ノ浦の合戦から逃れてきた安徳帝がこの地に留まり、崩御されたという伝説が残ることから、この名が付けられました。麓には 6 m 四方の基壇の上に厚さ 40 cm の壁石で囲まれた石室があり、石室中央の柱礎の上にエンタシス方式の円柱が立てられ、中台の裏の忍冬文（パルメット）の浮き彫りにされ大陸伝来説も言われる、山陰最古の 7 世紀後半の建造物である「岡益の石堂」があり、安徳天皇御陵参考地としての指定を受けています。当初の石堂は寛文 2 年（1662）の大地震で倒壊し、現在のものは近代の復元であるため、正確に元来の姿を伝えているかどうかは不明であり、また天皇陵と石造物との関係も明らかではありません。しかし、壇ノ浦での安徳天皇の生存説は枚挙にいとまなく、陵地の伝承が各地に点在し、鳥取県の他にも山口、高知、佐賀、福岡、熊本、長崎、鹿児島、宮崎県など 10 余県に残されています。その内の 5 ヲ所が陵墓参考地として指定を受けています。一般には安徳天皇は文治元年（1185）3 月 24 日、享年 8 歳で壇の浦で海中に没し、山口県下関市阿弥陀寺町の「阿弥陀寺陵」という御陵に祭られていると伝わっています。



御陵山



手放山

やまとさんざん 大和三山
大和三山（耳成山、畝傍山、天香具山）

奈良盆地南部にある天香具山（152m）・畝傍山（199m）・耳成山（139m）の三山の総称であり、畝傍山を頂点にして、藤原京跡を二等辺三角形に囲んでいます。

畝傍山や耳成山は旧火山のため独立峰ですが、天香久山は龍門山地の支脈が風化侵食された山で、古代から神聖視されてきました。耳成山と天香具山を男性にたとえ、女性にたとえられた畝傍山の恋争いをしたという伝説になぞり、中大兄皇子が弟の大海人皇子と額田王の妻争いを詠った三山歌を『万葉集』に見ることができます。他にも畝傍山の櫻児伝説、耳成山の伝説など、美しい女性が複数の男性に求婚され、悩んだ末に死を選ぶという伝承が残ります。三山はいずれも標高 200m に満たない低山ですが、都の四季の情景として、都を離れた地での思い出として、または男女の三角関係にたとえられたりと、神聖であり親しみのある山として多くの歌人に愛され、詠まれた山です。

5 手放山

美しい山容から地元の人々からは別名「神垣富士」とも呼ばれている、標高 461.2 メートルの山です。手放山はさらに袋川上流にあり、宝山との間に袋川が流れています。

(3) 因幡三山物語

大和三山に思いを馳せた因幡三山として、因幡国庁跡を取り囲むように身近に見える山です。東に甌山、南に今木山、そして西に面影山がそびえます。国府に赴任してきた当時の人々にとって、この三つの山は国庁を中心に三角形に配置されているところや独立峰であるところ、さらにはなだらかな女性的な面影山と男性的な両側の甌山と今木山の山容が大和三山（耳成山、畝傍山、天香具山）を彷彿させたことに因み、昭和 30 年ごろ高岡の川上貞夫氏により命名されたと言われています。

わがせこがかけやまの さかあまに
われのみこひて 見ぬはわたしも

大伴坂上郎女

〔図1〕



▲因幡三山の位置図

藤波の散らまく惜しみほほとぎす
今木の丘を鳴きて越ゆなり

詠み人知らず

〔図2〕

因幡三山と大和三山

因幡三山

- ・ 甌山 (110m) …武内宿禰の甌伝説 (支峰) (男性)
- ・ 今木山 (89m) …今木大明神 (渡来文明の神) [独立峰] (男性)
- ・ 面影山 (100m) …八百比丘尼の伝説 (独立峰) (女性)

大和三山

- ・ 天香具山 (152m) …中大兄皇子 [支峰] (男性)
- ・ 畝傍山 (199m) …額田王 [独立峰] (女性)
- ・ 耳成山 (139m) …大海人皇子 [独立峰] (男性)



大和三山の位置図

巨人がつくった甌山

- 岡益の太田神社の太多羅大明神 (巨人ダイタラ坊) が近くの山をモッコで担いで歩いていた時、担ぎ棒が折れて、担いでいた山がこぼれて甌山となった。
- 因幡の巨人・ダイタラ坊は、はたして何者か？

武内宿禰の甌山伝説

武内宿禰が因幡の国に入った時、高草の鍋山に鍋をすえ、蒸し器 (甌) を置いて飯を炊いた山が甌山といわれています。



太閤ヶ平

1 面影山

東に因幡国庁跡があり、夕陽で空が黄金色に染まる頃、国庁跡からみると、夕陽に照らされた美しい面影山を臨むことができます。

2 今木山

因幡国庁跡から南東にあり、平野に屹立する独立峰。

3 甌山

因幡国庁跡から朝日を迎える真東にそびえる小さな尖峰。

(4) 「平」(がなる) と呼ばれる丘

鳥取地方では、ひらけた地域を「平」(がなる)と呼んでいます。袋川流域にもこの名が示すように「平」と呼ばれる、ひらけた丘があります。

1 宝殿ヶ平

高岡集落の上に見える、なだらかな丘のことを宝殿ヶ平と呼んでいます。名前の由来はよくわかっていないようですが、昔、高岡神社があった所といわれています。宝殿ヶ平は非常に見晴らしがよく、国府平野が一望できます。

2 崩御ヶ平

荒舟集落の南方の山頂に崩御ヶ平といわれる台地があり、壇ノ浦より落ち延びた安徳天皇崩御の地と伝承されています。そこには武王神社、皇居、平家城、崩御宮、寺院等多くの建物のほか、馬の調練場所まであったとも言われていますが、確かなことはわかっていません。

3 太閤ヶ平

久松山の東北にあり、本陣山とも呼ばれています。登山道を 3500 m 登り切ると、約 400 年前、天正年間に羽柴秀吉が鳥取城を攻めた時に羽柴秀吉率いる織田勢がこの太閤ヶ平に陣屋を置き、久松城を守る吉川経家を大規模な包囲作戦と兵糧攻めで自刃に追いつめた戦の跡が残っています。この山の山頂 600 坪を切り開いて陣屋を置き、土手の高さ 3 m の塹壕、土塁を築いて、周辺に空堀を廻らせました。その陣屋跡は今も残り、千成ひょうたんを模した土塁の跡が現存しています。馬場跡には現在マイクロ中継塔が立っています。山頂一帯は自然公園として整備され、市街地や日本海の眺めがよく、江戸時代、王子谷とも呼ばれた樗谿の山道にはウバユリ群生地が広がり、樗谿公園から久松山へ至るハイキングコースに通じています。

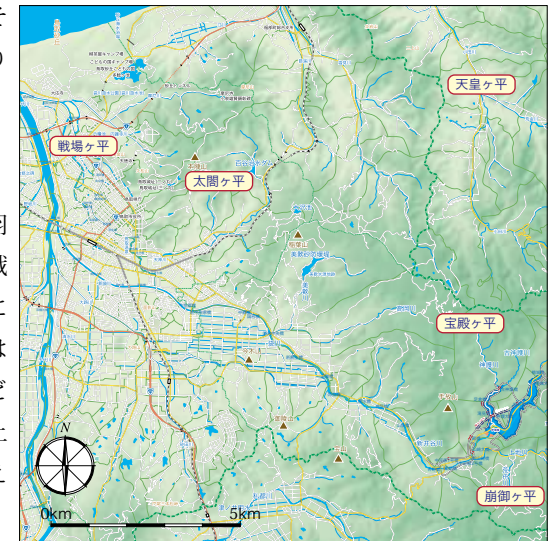
4 天皇ヶ平

南北朝時代、因州の守護民部少輔山名氏清公は、南朝の長慶院法皇を面影山に招き、そのとき法皇は蒲生峠を越え、因幡国の岩美郡岩美町洗井、

そして岩美町長郷に滞在したと伝えられています。そのため長郷のあたりは天皇ヶ平と呼ばれるようになりました。

5 戦場ヶ平

『稲葉佳景 無駄安留記』(著:逸處米質)では、羽柴秀吉の鳥取攻めの舞台となった丸山のあたりを、「戦場ヶ平 鶴尾」と書きあらわしています。『因幡誌』には「丸山」「千本松」と書かれ、険しい山谷で簡単には登れず、夏になると蚊が多く、山に入る人はほとんどいなかったとありますが、『無駄安留記』の著者は頂上でゆっくりお酒を飲みながら楽しんでいた様子が伺えます。



がなる平の位置図▲

(5) 流域の三峠物語

1 十王峠

雨滝集落から十五町ほど登った所にある十王峠は、雨滝街道 (法美往来) の国府町と岩美町の堺にあたり、昔から但馬を通って京都に至る山陰道として、国府から国主を初め諸役人の往来や貢物の運搬などの重要な役割を果たしてきました。戦国時代の末、豊臣秀吉が牛が峯や七曲城を攻めた時に、十王峠を登ったとも言われています。旧藩時代も但馬や岩井郡に行く通行の要路であったので、幕末には雨滝部落の峠道に番所を置いて通行を取り締った事もありました。十王とは、死者が冥途に行く時、この世でおかした罪を裁く閻魔大王など十人の王の事で、この王たちに裁かれて来世では善人になって生れてくるといわれています。山岳修験にゆかりの地でもあることから、あの世の入口と信じて名付けられたということです。又峠にある地藏堂より名付けられたとも言われています。



十王峠



十王峠地藏堂

2 門尾三本松峠

この峠は、江戸時代、若桜往来と呼ばれた道が通っていた所で、鳥取の城下町に入る最後の峠でした。鳥取市祇宜谷と八頭町門尾の境に位置しており、峠には三本の松がありましたが、現在は二本の大松が残っています。法華宗供養塔・茶屋跡・孝夫塚・岡嶋家墓地なども残っており、峠は町の文化財に指定されています。

3 鶏冠尾の峠

下木原から岩美町へ通じている道で、この峠の下には茅ん堂と呼ばれる小さなお堂があります。茅ん堂のお地蔵様は岩美町外邑 (とのむら) のお地蔵様と仲良しで、ある日外邑が火事に見舞われた時には、峠を越えて外邑の地蔵を助けに行き、消化につとめたという民話が残っています。



峠の位置図▲

3. 袋川流域 水の流れのメッセージ



千代川



国府平野と袋川

袋川の源流を訪ねて

「扇ノ山に源を発する袋川。その袋川の源流に建てられた碑は、雨風に晒され朽ち果てた状態でした。そこで新たな碑を建立することが決まり、平成 17 年 10 月 11 日、小学生 21 名を含む総勢 38 名の『袋川源流探検隊』が、扇ノ山の中国自然歩道「河合谷登山道コース」から入山し、源流を目指しました。40 分ほど歩くとブナの林に囲まれた自然豊かな所に「袋川源流の碑」を発見。9 年前に建てた時にはここから水が湧き出していたそうですが、驚いたことに、この年は夏の降水量が少なかったせいか、水は湧き出ていませんでしたが、袋川の河原で拾った石に参加者が思い思いのメッセージを書いて、水の恵みと豊かな自然、世界の平和などの願いを込めて再建立した「袋川源流の碑」の根元に埋め、袋川への思いを新たにしました。」

(出典：「殿まる通信」)



源流の碑

(1) 千代川

① 千代川

千代川は、岡山県境に近い智頭町駒島の東方沖ノ山(1318.8 m)を源流とし県東部を北流する、流域面積 1,190km²、幹川流路延長 52km の一級河川です。智頭町・鳥取市用瀬町・鳥取市河原町を貫流し、土師川・佐治川・曳田川・八東川・野坂川・袋川を合流して賀露港に注いでいます。鳥取市円通寺で鳥取平野に達し、平野では自然流として幾度も流路を変えて来た暴れ川でした。昭和 2 年には八千代橋から賀露港まで河道をつかえ、堤防が完備されました。

② 千代川の流れと鳥取平野

千代川は中国山地の山々の肌をけずり取り、谷を刻み、運んだ土砂を河口近くにためて、鳥取平野という沖積平野を生成していきました。

山間の谷筋を流れ下ってきた千代川は、鳥取平野で縦横にその流れを変えて上流から下流へと土砂を運びながら、その流れを洪水のたびごとに変化させてきました。底湿の沖積平野のほとんどの場所は人の生活できる場所ではなく、原始のままに川筋を変え、氾濫する千代川の沖積地は、アシの生い茂る湿原であったと考えられています。

こうした低湿地が水田に開拓されて整えられていくのは、16 世紀(江戸時代初期)以降になります。それらの開拓と治水の歴史は、現在でも千代川の川筋に追うことができます。

③ 千代川の名称由来

千代川の名称は「大川」と親しまれていますが、戦国時代末期から江戸時代初期には「仙大川」(寛永 22 年『山県長茂覚書』吉川家文書)、『陰徳太平記』には「千谷川」と記され、一国数郡の谷々の流れがみなこの川に流れかわることから付けられた名で「せんたに」と唱えるのを文字に受けて「せんだい」と書かれたという説や、地元民が「せむだい」とよんだことから「千代」の字が当てられるようになったという説があり、その他にも「泉台」や「千体」といった説があります。

④ 「千体」にまつわる伝説

弘法大師が上流の山にある千の谷に一体ずつ仏像を安置しようと千体の仏像を刻んでいたところ、999 谷しかなかったために、仏像を全て川に流

したという伝説や、三面鬼という山賊を退治の際に、薬師如来の像を千体に刻んで成敗の成就を祈願し、願いが叶ったという伝説があります。

(2) 雨滝川から因幡川そして袋川

① 袋川

千代川水系の 1 級河川。同水系では八東川に次いで 2 番目に長く、流長 28.4km あります。兵庫県境にそびえる扇ノ山に源を発し、県下最大を誇る雨滝地区の高さ約 40 m の雨滝から西流して木原・下木原地区で流れを南に向け、柘本地区で大石川を合流し、楠城・拾石と流れ、殿地区で神護川を、下流の源門寺地区で上地川をそれぞれ合流します。松尾地区で北西に大きく流れを変えて新井・山根・神垣・谷・玉銚・麻生を通過し、南流してきた美敷川と合流したのち、宮下地区や面影山の北、東今在家・大木の地区を通り抜けます。

昭和 9 年、大木の太木橋から西進して吉成・古市を通り、千代橋のたもとで千代川に注ぐ放水路が完成したため、新河道を「袋川」と呼ぶようになり、大木を北流し、市街地をうねるように流れて浜坂で千代川と合流する旧河道を「旧袋川」と呼称しましたが、平成 18 年 4 月より名称が改められ、新河道が「新袋川」、旧河道が「袋川」へと変更されました。

② 袋川の名称由来

『鳥府志』によると、「鳥取の山下にありたる沼沢を埋地となさんとて、川脈を此方へ切込みたる時、数町の間いづれを川脈と云ふことも無く、広き処を流通りしゆへ、袋川の名称は是より起りたる歟。されば今の御城下のあたりにて呼たる名ならん歟と臆察せらるる也」とあるように、屈曲の激しい蛇行河川であることから袋川の名が名付けられたといわれています。特に袋川下流部一帯は軟弱地盤のため浸食が甚だしく、流路の蛇行は千代川水系で最も激しいものでした。

③ 袋川・九呼称

雨滝川

雨滝より国府町谷までの、現在の袋川上流は雨滝川と呼ばれている。

国府川

雨滝川より下流で天神川と合流する矢津(現・立川町)辺りまでの、現在の袋川中流部分の別称。因幡川ともいう。明治の始め頃開校した宮ノ下小学校校歌に見られる。

『鳥府志』とは

文政 12 年(1829)に鳥取藩士・岡嶋正義(1784~1859)が著した鳥取の地誌。

「袋」地名の由来

「袋」地名の由来

説一、水に囲まれた袋状の地形

説二、ヒク(低)・ド(所)の点で

低湿地等

説三、行き止まりになった袋小路



袋川名の看板



雨滝付近の袋川



袋川 (楠城付近)



袋川 (谷付近)



袋川 (国府町清水地内)



袋川 (鳥取市街)

因幡川

天神川と合流する矢津（現・立川町）の辺りまでの別称。国府川ともいう。平安時代の歌人・藤原兼輔の和歌や『因幡誌』に見られる。

袋川

因幡川より下流部分のことを昔は袋川と呼んでいた。明治時代に行政名として指定されて以降は、全川を袋川と呼んでいる。

新袋川

昭和9年に完成した、大杵から西進して千代川に注ぐ放水路。平成18年より新袋川と名称が変わった。

城川

鳥取城の堀をなす川として城下付近を呼んでいた。

法美川

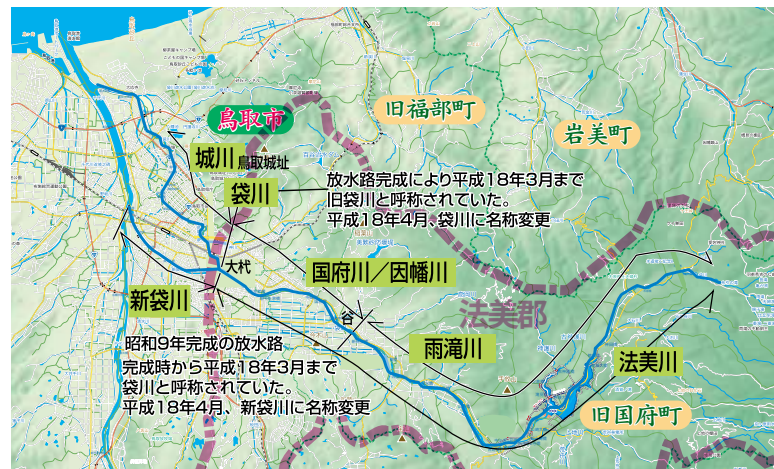
源流から大杵地区あたりまで、法美郡を流れることによる別称。『時範記』（因幡国守平時範の日記。承徳3年（1099）2月26日のくだりに「次于法美川乗船参三嶋社（法美川から船に乗り三嶋社へ参る）」とある。）

湊川

『太閤記』（賀露の湊から鳥取城に舟運の使いをもたらす唯一の水路）に記載。

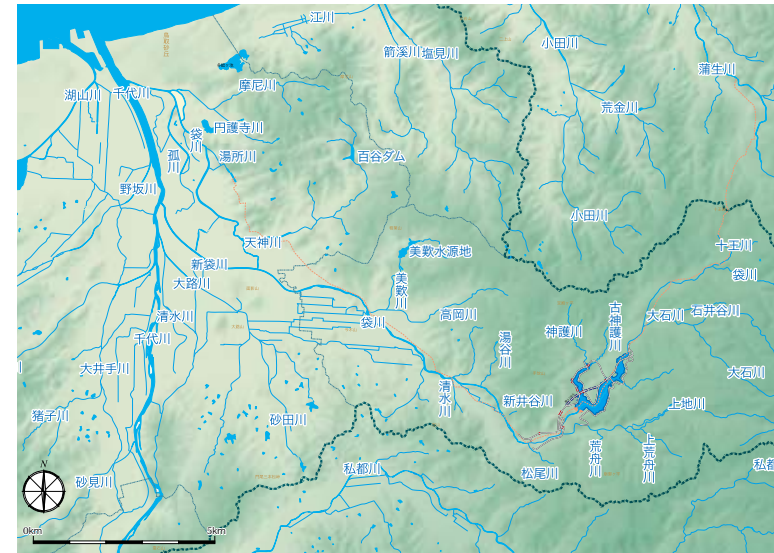
とっとり川

『信長公記』（織田信長の一代記。著者は信長の家臣・太田牛一）に記載。



袋川の九別名

(3) 袋川十二支川物語



① 十王川 <一次支川>

▲ 袋川支川図

岩美町燕島の十王峠（430 m）に源を発し、南流して国府町雨滝地区で、西進してきた袋川に注ぎます。流長は 1.3km。

② 大石川 <一次支川>

兵庫県境にそびえる扇ノ山に源を発し、大石地区を通過して、石井谷の下流で石井谷川と合流し、西流して栃本地区で袋川に注ぎます。流長は 6.5km。

③ 石井谷川 <二次支川>

扇ノ山に源を発し、山間を西流して石井谷地区の下流で大石川に注ぎます。流長は 4.1km。

④ 神護川 <一次支川>

神護地区に源を発して流れ、古神護川を合流しながら南流し、殿地区で西流してきた袋川に注ぎます。流長は 3.0 km。

⑤ 古神護川 <二次支川>

楠城、神護地区より南流して神護川と合流し、袋川へ注ぎます。流長は 1.5km。

⑥ 上地川 <一次支川>

兵庫県境にそびえる扇ノ山に源を発し、山あい西流して棚田で有名な上地地区に入り、続いて下上地を通り、流れを南西に向け、上荒舟・荒舟を通過し、山崎地区で袋川に注ぎます。流長は 10.0 km。



袋川名の看板



大石川



神護川



上地川



袋川・天神川合流点

7 美歎川〈一次支川〉

鳥取市の上水道の水源地である美歎地区の「美歎水源地」上流の山中に源を發し、美歎地区を南流して高岡川と合流するところから西流し、まもなくして袋川に注ぎます。流長は 3.5 km。

8 高岡川〈二次支川〉

宝殿地区に源を發し、南西流して高岡に入り、この下流で流れを西に変え、麻生の北側を通過して南流してきた美歎川へ合流します。流長は 4.9km。

9 天神川〈一次支川〉

太閤ヶ平の本陣山に水源を發し、百谷地区の百谷治水ダムを経て、JR 山陰本線に沿って南西に下り、滝山地区で流れを西に変えて卯垣を通過し、立川 5 丁目を西進して袋川に注ぎます。流長は 5.92km。

10 摩尼川〈一次支川〉

鳥取市と福部町との境にある摩尼山（240 m）に源を發し、西に向かって急流して V 字状の谷をつくり、覺寺で北流してきた円護寺川と合流したのち浜坂で袋川に注ぎます。流長は 3.8km。

11 円護寺川〈二次支川〉

太閤ヶ平（241m）に源を發し、久松山（263.1m）の北側を北西に流れて円護寺地区を通過し、国道 9 号線付近で西流してきた摩尼川へ合流します。

12 狐川〈一次支川〉

千代川と袋川の中間の市街地を流れています。鳥取駅西の今町付近から流れ行徳・新品治・薬師の各町区を通り、相生町を北流して松並町で袋川に注ぎます。流長は 4.2km。

(4) 雨滝四十八滝物語

雨滝四十八滝とは、那智の四十八滝や、いろは四十八文字にたとえたもので、四十八は実際の滝の数ではなく、次に説明する滝もふくめての総称であり、数が多いという事を言葉に表わした呼び名です。

1 雨滝（本滝）

雨滝は扇ノ山溶岩がつくる河合谷高原の北西縁部の溶岩流の末端部にあって、幅 4 m、高さ 40 m の鳥取県随一の飛瀑を誇っています。安山岩の冷却に伴って規則的な柱状の割目（柱状節理）を生じた岸壁よりなる特異



雨滝（本滝）

な景観を呈し、トチ、ブナなどの千古の原生林に包まれた滝です。昭和 60 年鳥取県が選定した「因伯の名水」の指定を受け、また、断崖絶壁を轟音とともに落水する壮観な威容から、平成 2 年には「日本の滝百選」にも選ばれています。

古来より有数の霊場として善男善女の修行の場、お遍路さんの信仰の場として知られ、今なお神秘的な霊境としての雰囲気を残しています。滝の下には石造りの不動明王が安置されています。



雨滝の不動明王

古書に見る雨滝

『稲葉民談記』

「雨滝、妙見大明神。タキナミ間アリ。前ニカツラギノ木アリ、廻り十三カカヘ有。布引タキ、箱ダキ大魔処ナリ。仏谷ト云有。村ノオクヨリ但馬海上ニ出ル」

- ◆「タキナミ間」…たきつば
- ◆「カツラギ」…桂の木
- ◆「十三カカへ」…大人 13 人が手をつないで計った長さ、約 20 m
- ◆「大魔処」…ものすごく険しいところ



▲『稲葉民談記』の筆地図

『因幡誌』

「村より東に當りて谷奥十五町許りにあり。其地絶岩聳え谿谷幽にして四時蒼翠たり。ばく布は南向にしてたかさ十二丈余なり。飛泉雲を穿ちて上天より下りきたるが水響般々山鳴り谷応ふ。奇絶言はん方なし。以て慮山の銀河三千丈の壮観にも比すべきか（中略）たきの右方、石壁に不動の像を彫刻せり。直下に桂の老樹あり一株十二本に分れたり。周囲五丈余うっそうとして一大森林の観あり。幾ばくの星霜を経てここに至れるや（中略）またその北側に一瀑布あり（中略）布引瀑という。風景また佳なり…」



▲『因幡誌』の雨滝図

雨滝の由来

『因幡誌』では、「飛溜沛然として四方に乱れ散る勢ひ、さながら暴雨のそそぐが如く空翠常に人衣を濕せり。昔は如何許りにや有けん。あめ滝と名づけしも其故なるべし。」と書かれており、季節を問わずに常に豊富な水量で、雨のように勢いよく飛沫を上げて落ちてくることに由来しています。

2 布引の滝

『稲葉民談記』とは

江戸時代、小泉友賢（1622～1691）によって書かれた鳥取の地誌。貞享 5 年（1688）頃完成したといわれています。寛永 9 年（1632）のお国替えにより備前国から移住し、藩医を辞職した後に約 20 年かけて因幡国中の名勝旧蹟等を訪ね、また各土地の古老から口碑・伝説を聞いてまわり、記録したものです。

『因幡誌』とは

藩医・安陪惟親（1734～1808）によって民談記の体制がさらに整えられ、詳細に書かれた鳥取の地誌。寛政7年（1795）頃完成。『稲葉民談記』から百年間の史誌の変遷とともに、異説があれば自ら古文書を改め、現地を踏査して考証への正確を期して書かれているといわれています。

桂の大木

雨滝の滝壺より50mほど手前の左手に、桂の老木があります。江戸時代の記録によれば、幹の周囲が20メートルあり、日本の名木320本のうちに数えられていました。樹齢数百年の老桂樹には神霊が宿るとされ、長寿にあやかると多くの人がお祈りをしたということです。しかし、いつの頃から、落雷により幹が空洞化して、根本から生えた数本が現存しています。

また、鳥取藩士で歌人でもある小林大茂によって、「いつの世に この桂の種生えて 雨の大滝 風かおらん」という歌が詠まれています。



桂の大木

亀が淵の伝説

雨滝村に亀という心の優しい男の子がいました。両親を早くに亡くし、心の悪い義理父に何一つ不平を言わずに働いていましたが、ある年の春、二人が淵の横の山で薪を伐っていたところ、亀が鉈を取り落とし、雪解け水で水かさが増した下の淵に沈んでしまいました。義理父に鉈を拾ってくるように命じられた亀は淵に入

純白の絹糸を懸け流したような美しさからその名がつけました。山の中腹より湧き出る地下水のため、長期の日照りに豪雨にも水量が変わることはなく、清流が絶えることはありません。雄大で男性的な雨滝（本滝）と女性的な布引の滝は好対照になります。

延宝年間（1673～1681年）には、専誉上人が神拝設定した因幡西国三十三ヶ所の二十番札所がこの地に置かれていました。「観音の誓いあらたにましまさば 奈加礼もたえぬ 布引の滝」と御詠歌が詠まれています。なお、一番札所は鳥取市長谷の長谷寺、十八番は谷村峰の観音円城寺、十九番は殿村の観音堂です。

3 管滝

雨滝の前にかかる桂橋を渡り、鉄板の階段を登って、トチ、ケヤキ、ブナなどの原始林の中を800mほど進んだところにある三段の滝です。扇ノ山、河合谷高原を源とした冷水が流れてきます。縦横3m、深さ1mばかりの岩の重箱に清流が溢れ、その水が流れて下の重箱に落ち、また溢れて下の重箱を満しています。こうした数段の重箱が谷の斜面に並んで一つの滝をつくっており、大滝の雄大さとは異なって神秘的な感じがします。

また、滝壺にまつわる哀れな亀の伝説があります。

4 樋滝

雨滝をさらに上流に登った奥、親子滝から200m位進んだところにあります。山の岩盤が急な流れに掘られた様子が樋のように見える、三段になった急流で、目を見張るばかりの見事な滝です。高さ30mほどの滝で、岩の隙間から白い飛沫をあげて落下する、勢いのある滝です。

5 平滝

樋滝の上にある大きな滝です。

6 比丘尼滝

樋滝の手前を右に別れた谷にあり、水量は少ないが、高さのある見事な滝です。小屋尾道（雨滝の右の山の尾根道）を進むと左手に見る事ができます。比丘尼とは何か伝説がありそうな気もする滝です。

7 8 夫婦滝

雨滝と樋滝の中間にあります。雨滝から中国自然歩道を登っていくと、雨滝と樋滝の中間あたり道の左手に二つ並んだ高さ10mほどの滝があります。これは大正10年、岩田知事が踏査した時に、岩田知事の質問に対して案内役をした地元の岸本富蔵氏と北村幾太郎氏の二人が即座に名付けて答えた滝の名であるといわれています。

9 10 親子滝

夫婦滝のすぐ上にある、高さ7mほどの大小の滝です。これも夫婦滝と同様、岸本氏と北村氏の二人が即座に名付けて答えた滝の名であるといわれています。

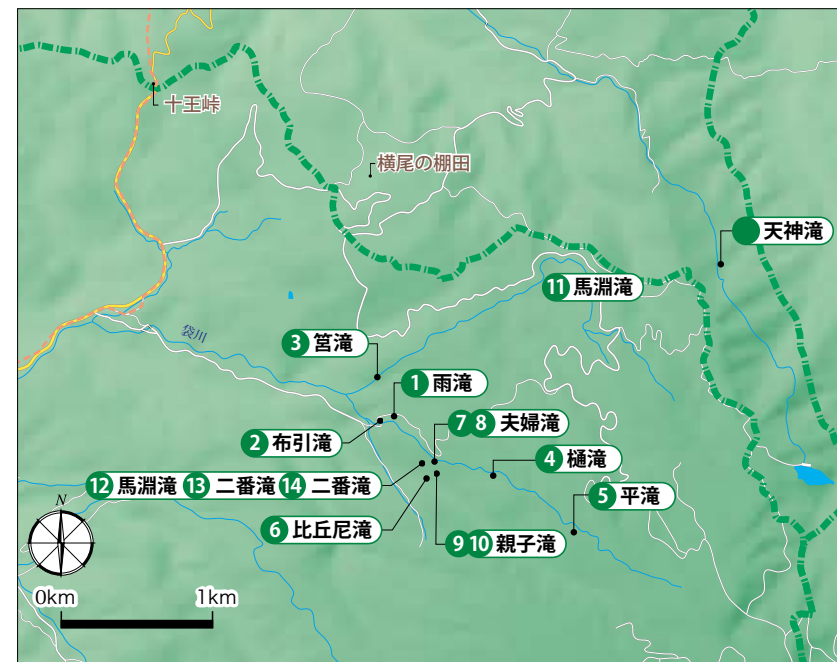
11 馬淵滝

管滝の奥、河合谷高原の下にあります。河合谷長者（鳥越長者ともいう）の息子が乗りまわしていた愛馬が落ちたので、馬淵と名付けられました。この滝の上のあたりに、自然のものなのか、または河合谷長者が造ったものなのかは定かではありませんが、川底一面に不思議な石畳を見ることができます。

12 一番滝・13 二番滝・14 菖蒲谷滝

一番滝、二番滝、菖蒲谷滝とともに、雨滝の右、仏谷の奥にありますが、水量が少なく、目立たない滝です。

雨滝四十八滝位置図▼



全国の四十八滝

赤目四十八滝（三重県名張市）

滝川の渓谷に多くかかる滝の総称。山岳信仰の聖地とされ、赤目は、役行者が修行中に赤い目の牛に乗った不動明王が現れたという伝説に由来する。

りましたが、それきり上がってくることはなく、この滝壺のそばに来ると亀の悲しげな声が聞こえるようになりました。

雨滝伝承

一、雨滝のお不動さんを信仰すると、精神病が治る、商売繁盛など霊験があらたかと伝えられています。二、昔から「雨滝に詣った年の冬は膚が荒れない、滝の霊水が寒さを守って下さる」と信じられ、『美人になる』と伝えられています。



布引の滝



管滝

那智四十八滝（和歌山県東牟婁郡那智勝浦町）

古くから「那智四十八滝回峰寒行」が行われてきた、世界遺産・那智の滝（一の滝）に代表される48の滝の総称。

宇津江四十八滝（岐阜県高山市）

宮川（神通川）の支流、宇津江川にかかる13の滝の総称。滝にまつわる“よそ八（四十八）”の伝説が仏法四十八願にちなむ話として名付けられたともいわれている。

日光四十八滝（栃木県日光市）

華厳の滝に代表される渓谷にかかる滝の総称。七十二滝とも呼ばれるが、百以上あるともいわれている。

鳳鳴四十八滝（宮城県仙台市）

広瀬川の上流にかかる滝の総称。大小の滝が連なって響かせる水音を鳳凰の鳴き声にたとえて名付けられたともいわれている。

有馬四十八滝（兵庫県神戸市）六甲

六甲山の紅葉谷、白石谷にかかる滝の総称。冬は多くの滝が凍結して氷瀑となる。

滝畑四十八滝（大阪府河内長野市）

滝畑ダム奥の渓谷に多数点在する滝の総称。最大規模の光滝は、手前にある光滝寺の寺名はこの滝に由来するといわれています。

住田四十八滝（岩手県住田町）

気仙川に注ぐ大小連なる滝の総称。気仙地方最大の竜灯の滝は落差が25mあり、四十八滝神社が祀られ、寒行が行われていたといわれている。

阿瀬四十八滝（兵庫県豊岡市）

金山峠(760m)から流れる阿瀬川上流部、阿瀬渓谷にかかる滝の総称。

篠見四十八滝（兵庫県篠山市）

丹波の多気アルプスに位置する谷に、始終（しじゅう）8つの滝に水が流れていることから命名。

長尾四十八滝（兵庫県丹波市）

市島町から五大山、愛宕山への登山道にある小さな谷にいくつかある滝の総称。

矢部四十八滝（熊本県上益城郡山都町）

山都町矢部地域にある滝の総称。通潤橋の轟川下流に落ちる五老ヶ滝は落差50mの規模。

藤沢四十八滝（岩手県遠野市）

小友国有林内にある藤沢渓谷にある滝の総称。大小様々な滝が800m程の間に点在している。

行頭四十八滝（兵庫県上郡町）

行頭分校の南にある山地から水を集める渓谷にかかる滝の総称。重なり合った岩の間に溪流が小さな滝をなしている。

小城四十八滝（兵庫県香美町）

矢田川支流の山田川にかかる滝の総称。滝の最上流部に位置するサナの滝は落差が10mほどあり、滝壺の出口はそのまま次の滝に繋がっている。

四十八滝（秋田県北秋田市）

米代川の支流、阿仁川中流域の大滝沢8kmにかかる滝の総称。

四十八滝（秋田県大館市）

長木川の上流の溪流部にある1つの滝の名称。



4. 袋川流域 地名が語る物語



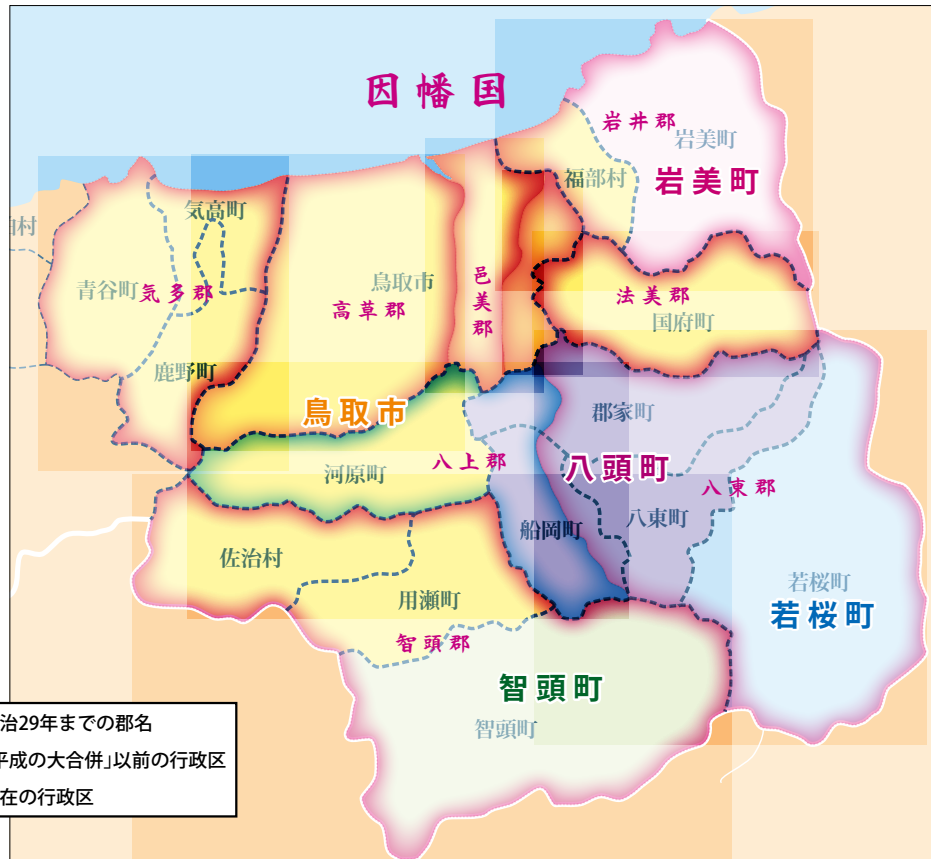
国庁・郡衙の位置図

(1) 因幡国・伯耆国と国庁・郡衙

因幡国は7郡（巨濃郡・法美郡・邑美郡・高草郡・気多郡・八上郡・智頭郡）に分かれ、郡衙がそれぞれの郡に置かれ、国府は法美郡稲葉郷に置かれました。

伯耆国は6郡（河村郡・久米郡・八橋郡・汗入郡・会見郡・日野郡）に分かれ、郡衙がそれぞれの郡に置かれ、国府は久米郡八代郷に置かれました。

(2) 広域地名の伝言～因幡・鳥取・国府～



高草郡	… 明治29年までの郡名
鳥取市	… 「平成の大合併」以前の行政区
鳥取市	… 現在の行政区

伯耆の由来

伯耆国の由来について、『伯耆国風土記』では手摩乳・足摩乳の娘の稲田姫が八頭の蛇に追われて山中に逃げ込み、母が遅れてきたので「母来ませ、母来ませ」と叫んだことが

1 因幡

古くは「稲羽」と書かれ、『古事記』にも「稲羽の白兔」という記述が見られます。この名は当時の政治の中心地、国府が置かれた法美郡稲羽郷に由来し、国の名を因幡と書くようになって、郷名はそのまま残りました。「いなば」の地名は稲葉・稲場・稲庭に由来するという説があり、稲

葉は「稲の葉」、稲場は「刈り稲の寄せ場」、稲庭の庭は平坦地を指し「稲田」を意味し、いずれにしても稲作に関係する地名であると考えられています。

また、『因幡誌』では武内宿禰が下向の折、三韓遠征の幡をこの地に祀られたところから稲葉の字を因幡に改めたと伝え、『岩美郡史』では尺山の西南の狭間という所にある5畝歩ほどの半月形をした田地に稲葉大明神が初めて稲苗を植えた由来によりこの田地を古苗代と呼び、古苗代の地が稲葉の国名の起きた由緒の地であるとも伝えていいます。

2 鳥取

地名の由来は、垂仁天皇の皇子の本牟智和氣御子のために設けられた、水鳥を捕る朝廷の鳥取部が住んでいたことによると伝えられています。かつては千代川、袋川によりこの一帯が広い沼沢地であり、多くの水鳥が生息していたと思われます。

3 国府

奈良・平安・鎌倉時代に因幡国の国府が置かれた地であることに由来します。

(3) 因幡国の三”美” 邑美・法美・岩美

1 邑美

郡名の史料上の初見は神亀3年（726）の『山背国愛宕郡雲下里計帳』（正倉院文書）で「因幡国海郡」と見えます。海郡は邑美郡の異字で、『和名抄』では「於不美」と書かれています。後世に訛ってウハミと呼ばれ、池田家の初めの文書には上美郡と記されましたが、寛文年間に邑美に戻り、ウハミ、ムラミと読まれていました。邑美の北は大海に接していることから、大海や、淡海、すなわち淡水湖に由来すると考えられており、鳥取砂丘のなかの多鯨ヶ池、または砂丘内側の千代川や袋川の下流域に形成されたラグーンに由来するものであるといわれています。

2 法美

法美郡の郡名の由来については、「ほおうみ」にちなむとの説があり、北接する邑美郡に対し「秀邑美」の意からきたと伝えられています。また、『延喜式和名抄』では「波不美」と書かれ、国府もこの中にありましたが、この巨濃郡（近世岩井郡）との境界が移動したり、『和名抄』の郷名が混乱した時期もあったようです。『拾芥抄』には「法味」とも書かれています。

3 岩美

明治29年に邑美・法美・岩井の3郡が合併して岩美郡が成立し、郡名は岩井郡の「岩」と邑美・法美郡の「美」を合わせて命名されました。

ら「母来の国」となり、後に伯耆国になったと伝えていいます。また、『伯耆民談記』には当国の海から白き亀が出現したのを嘉瑞としてよるこび、「母来」から「伯耆」の字に書き改めたと記されていますが、天神川下流にある式内社、波々伎神社によるという説もあります。

郡名の由来

・高草(たかくさ)

『因幡国風土記』によると、名前の由来には解釈が2つあり、1つは野の中の草の背が高いため、その野を郡の名前にしたという説で、2つめは竹草の意で、この場所に竹林があったことに由来するという説があると記されています。

・岩井(いわい)

石井とも書きます。『因幡誌』には本庄に廃井戸があり、これを鳥根水、または岩井の水という所があり、『稲葉民談記』には岩井の水という所があることから、この辺りを岩井というの記載があります。

・八上(やかみ)

「や」は土地、「かみ」は上流をあらわすことから河川の上流域を意味すると、郡内に式内社が多いことから「や神」を指し神々が多い土地を意味するともいわれています。また『古事記』の「稲羽の素戔嗚尊神話」にあらわれる大国主神の妃「稲羽の八上比売」を祀る式内社売沼神社があることから、八上姫にちなむ地名であるとも考えられています。

・八東(はつとう)

八上郡の東に位置することに由来します。

・八頭(やず)

八上・八東郡の「八」と、智頭郡の「頭」をとって命名されました。

(4) 地誌大字、小字 集落地名の伝言



国府町大字の名称

①大茅地区の地名

大茅

大草、大萱とも書きます。屋根をふくカヤ草の茂る地域という説や、大茅山に由来するという説などがあります。

あめだき
雨滝

雨滝集落には古くから著名な雨滝瀑布があります。よって『因幡民談記』や『因幡誌』にも、この滝の名をもって村名としたことが記載されています。『鳥取藩史』の中には旧名として「天瀧」と記されています。

きはら
木原

字のごとく、太古には大木の繁る原っぱであったからと伝承されています。今でも水田整地等の際に、大杉の根がそれぞれのあざ地から掘り出され、また村の神社境内には「夫婦杉」と呼ばれる直径2.7mの大杉があり、伝承を裏づけしている感がありますが、平成16年の台風18号により夫婦杉の片方が倒壊してしまいました。なお、集落の下手、雨滝川を距てたところには元禄14年(1701)に分村した下木原があります。『鳥取藩史』の中には旧名として「木野原」と記されています。

いわいたに
石井谷

因幡の北部、蒲生川・小田川流域の地方はもと巨濃郡といわれていましたが、後に岩井郡となりました。岩井郡は初め石井郡といい、元禄14年(1701)に岩井郡と書き改められたと『鳥取藩史』にあります。石井谷という村名は、昔この村が石井郡へ抜ける谷の入口にあったからと伝承されて

十王峠と地名

十王峠の地藏尊の前に「ケイ東田」と称した小さな田んぼがありました。また大杉谷口川の向いを「塚の本」といい、その右を「塚の向」と字名がついています。この「ケイ東田」や「塚の本」のいわれを知る人は少ないようですが、行人のために一里塚が大杉谷口に作られたので、この地を塚の本と呼び、「ケイ東田」については、この地にケイ東塚があったからといわれていますが、詳しいことはわかっていません。



雨滝集落

います。昔の道筋は分かりませんが、ここから山越えて雨滝に出て十王峠を越すと石井の谷へはそう遠くはないことから、「石井の谷への起点」、それが栃本廃寺等で栄えたこの地方の特性であったのかもしれない。

なお、『鳥取藩史』の中には旧名として「岩井谷」と明記されています。

おおいし
大石

宮の上に大石神社があり、祭神は「御井ノ神」で、開拓神です。この神社の背後に周囲26m、高さ2.5mの巨石があります。この石が村のシンボルとなり信仰の対象となってこの地に神社が建てられ、大石のある村として大石の村名が生まれたのではないかとされています。

とちもと
栃本

旧大茅地区の中心地で、村の近くには、昭和10年に国指定になった栃本廃寺跡があり、東福寺という大寺があったとも伝承されています。また、中世以前には内向山の山腹に酒賀神社を奉還したこともあるといわれ、付近には数個の後期古墳も確認されています。村名の由来については、『日本地名語源辞典』や『因幡郷土史考』では村のシンボルになった栃の木に由来するとし、『酒賀神社古記』では地域の中心を表す土地の本に由来するとし、「栃」は「土地」のあて字であると考えられています。

すがの
菅野

『因幡誌』によると、菅野村には菅野大明神があり、側に宮司一人しか住んでいなかったとあります。栃本より右南の谷奥十四町ほど山の上にあつて、下上地へも十四町ほどの場所にあります。『三代実録』に載っている酒賀神社は、「すがの山の麓にある菅野大明神」のこと。酒賀・須賀ともにすが(すが)の仮字書であることから同じ社を意味しています。

なわしろ
楠城

元禄時代(1688~1704)には「苗代」と書かれていましたが、10数年後の享保元年(1716)の『郷村高辻帳』には「楠城郡、古は苗代村」とあります。また、村にある2箇所の城址や多くの墓石はいずれも楠氏のものであるという伝説から、米の収穫高から付いた「苗代」という名が楠氏ゆかりの地から「楠城」へ改名したのではないかと考えられています。

じっごく
拾石

戦国期には「十黒」と書かれていたようですが、江戸時代の郷村帳高等にはいずれも「拾石」と表記されています。どうして「十黒」から「拾石」になったのか理由は明らかではありませんが、川向こうに豆の木があり、一本から十石とれ



木原の夫婦杉



大石神社



大石神社の巨石



栃本廃寺跡



酒賀神社



楠城(楠の館)



拾石付近



上地の棚田



上荒舟神社

五つの古代国家



山崎城跡のある山



神護集落

たので十石村というようになったという話が伝承されており、収穫の多さなどに由来するのではなかとわれています。

2 成器地区の地名

成器

明治 28 年、組合立小学校の校名が、中国の古典『礼記』王制編の「錦文珠玉は成器にして市に粥がず」を引用して命名されました。成器とは“素晴らしき『うつわ』”の意です。村名はその成器尋常小学校から引用されました。

上地

標高 1310 m の扇ノ山登山口にあたる高原の村は地域の上であることから「上地」、これが「うえち」になり、音の変化や省略によって、「うわち」さらに「わぢ」「わじ」になったとする説や、新田村として下上地が誕生して上地鉱山の採掘も行われていたことから、近隣の山間部に比べて肥沃な土地であることを表し、「上等な土地」から上地の村名が生まれたとする説などがあります。

荒舟

上荒舟にある上荒舟神社の『子守神社縁起』には、小肢谷にある磐根（または普根）の国は修祓の地とされ、未開の荒れた普根の里から「荒舟根」、「荒舟」へ転じたと載せられています。その他にも、この地方に古くからある水葬の習わしから「荒霊葬送の地」が語られるようになったとする説や、「荒畝」の転化で「あらうね」から「あらふね」へとする説、山の形が舟の形に似ているからという説などがあります。

山崎

上地川と雨滝川が合流しているところから、この両川に挟まれた山の先端にある村なので「山崎」というようになったといわれています。また、『岩美郡史』によれば大江広元が荒舟に来て城を構えた折に、ここを山崎と名づけたとも伝えられています。

神護

『因幡誌』には、神護という名は大茅郷を領地した松島神護兵衛からとったという説は間違いであり、最初から神護という地名があり松島氏がその地名をとって神護兵衛としたと書かれています。『因伯地名考』には、かつてはこのあたり一帯を大草郷といい、郷の大半は菅野大明神の社領だったことから、社領に生活する人民、つまり「神戸」が「じんご」になり「かんど」に変わったのではないかとあり、鳥取の「神子谷」が「かごだに」になったように、神社に仕える女性、すなわち「神子」が「かんど」と読まれたことからとも考えられています。『鳥取藩史』には旧名として「神後」と明記されていますが、元禄以後、今の字に改められたと考えられています。

どの殿

「殿」という村名は全国的にも例は多く、鳥取県内でも気高町と船岡町に同名の村があります。この地も村の前に雨滝川が流れ、その上に毛利氏が籠もった山崎城跡がそびえていずれも山崎城に伴う領主や長老の屋敷後等にちなんであるようです。元禄地図には今の山崎橋は 200 m ほど上流にあり、ちょうど城跡の中央直下のあたりに架けられ、村に毛利の重臣たちの屋敷が並んでいたことから自然とこの名が付いたのではないかと考えられています。

なかがわら 中河原

「村の中の川に河原がある」ことから、中河原という村名が生まれたと伝えられています。河原は川筋の曲がった部分の裏側に出来た。川筋が曲がっている場合、水の流れの正面は水勢によって急斜面が作られますが、その裏側には削られた砂礫が積み上げられて河原ができます。中河原地内の東域では、上地川と雨滝川が合流していますが、上地川は北側の山麓を削り裏側に河原を作り、雨滝川は南の山麓を削って裏側に河原を作り、このようにしてできた河原が川のまんに広がっていきました。しかもこの河原は両方の水勢の相殺によって永く消滅することがなかったといわれ、村の象徴的存在であったと考えられています。

まつお 松尾

『因幡誌』によれば、このあたりはもともと手見の里といわれ、吉野も松尾も一つの村でしたが、平安初期に山城国の松尾神社の分霊を勧請して松尾大明神が建てられたことにより、その社地へ吉野から分かれた枝郷が出来て、松尾神社にちなんでこの地を松尾というようになったと伝えられています。松尾神社ははじめ山上にありましたが、地勢が険しく近寄り難かったため後に山下に遷し、地名をとって手見神社と呼ぶようになりました。現在の手見神社は、大正 3 年 3 月 3 日に中河原の無格社中河原神社を合祀し、同 6 年 9 月 20 日には吉野の無格社吉野神社を合祀しています。

よしの 吉野

この地はもともと松尾と一つの村でした。昔、国々の山伏が大和国の金峰山の麓の吉野を通って山に入り、大峰入りの修行をしましたが、役行者が金峰山を拓いて 100 年あまり経ってからは毒蛇が多くて登れなくなり、この大峰入りを国毎ですることになりました。因幡では荒金谷の深山に役行者を勧請して国峰と称し、この村を起点として宇倍山を通り、荒金山に入って大峰入りの修行をしました。その出発点の集落が奈良金峰山（大峰山）の麓の吉野によく似ているので、この村を「吉野」と呼ぶようになったと『因幡誌』にあります。因幡には飛び抜けて高い山がないため、どの山が国峰であったのかは明かではありませんが、巨濃郡荒金谷から推測して大茅山のことではないかと考えられています。



殿集落



旧成器小学校（中河原）



学行院付近（松尾）

ふなやま 船山

新井の前を過ぎた吉野橋の手前があります。村名については、鳥取の地が津波に襲われて国府の里が水に浸かった翌日、新井の折井神社の右手の山に小舟が一艘引っ掛かっていたことから、後にこの地を「舟山」と呼ぶようになったという言い伝えがあります。また、天保 6 年（1835）に新造船の建造を許可されていることから、川は舟や筏を浮かべることのできる流れであったことがわかり、「舟を繋いだ山の村」から「舟山」の地名が生まれたという説もあります。

新井の石舟

神垣神社

清水の井戸

清水の井戸（清泉寺）



峰観音



新井

石舟の古墳は、安徳天皇が壇ノ浦から落ち延びてきたときに随行した、祖母の二位の尼の墓だとする言い伝えがあります。そこから「二位」の名がでて、世を忍んでいた人の名を表沙汰にするのは適切でないということから同じ訓の「新井」に改まったとする説の他、新しい泉が湧いたことを祝福したからという説、新しく居住してきた人々が土地を祝って「新居」とした後に泉が湧き出たことを喜んで「新井」に転化したという説などがあります。

3 谷地区の地名

谷

「谷の出入口の村」という自然的地名ではないかと思われています。大岐谷と小岐谷の合流点が中河原、それから新井・山根・神垣と谷合を下ると、この谷地区から急に視界が開けて広い国府の大平原に出ます。そうした地理的な分岐点を簡明に「谷」と表現したのではないかと考えられています。

山根

自然的地名であり、字義のとおり「山裾にできた村」だから「山根」となったのではないかとされています。

神垣

名前の由来は、二つの神社に囲まれた村であることから付いたといわれています。この地は東西と背後を山で囲まれ、前は袋川（雨滝川）が流れており、村の東側の川上に神垣神社、西側に室神社が祭られています。また、平安時代に疫病が大流行した時に、この地の人々だけは東西両神社に祈願したせいで病魔に苦しむものはなかったことから、「神が垣を造って住民を守った村」と言うようになったという伝承もあります。

清水

古くは「澄水」と書いたようですが、地内の山裾から湧く二箇所の清水によってつけられた名であるといわれています。この「すみみず」が音の変化や省略によって「すんず」となり、後に同義語の「清水」の漢字が当てられたのではないかと考えられています。

岡益

村名の起りは丘陵地形からきているといわれ、「益」を「増す」として「岡が重なり重なったところ」と考えられています。古くは「丘益」と書いたようですが、「丘」では石堂の丘陵に通じ、村の名としては紛らわしいというので「岡」に改められたと『因幡誌』に記されています。

玉鉾

祭神の伊邪那美神に美の象徴である「玉」をあて、大牟遲神（^{おおむちのかみ}大国主命）に国土平定の武の象徴である「鉾」をあてて玉鉾神社といい、村の名も「玉鉾」となったといわれています。ところが神社の方はいつの頃からか略されて“鉾大明神”となりました。または、『万葉集』におさめられている大伴家持の歌にあるように、「玉鉾」が道や里の枕詞として『万葉集』や『古今集』等に多く使われていることに由来して、往古の人々が真っ直ぐな道を「玉鉾のような道」とたとえたことからとも考えられ、さらに、村里の入口に鉾を立てて村の目印にしたことから、鉾の形をした地形からつけられた名であるとする説もあります。

糸谷

昔、村の奥に糸谷山長流寺という寺院があり、村の名前はこの山号の「糸谷」からとったものと伝承されています。糸のように細く長い谷という意では、地形に当てはまらないのではないかと考えられ、山号説が有力視されています。

高岡

『因幡誌』などの文献によると、^{こずてんのう}午頭天王を氏神とした高岡神社は、播州廣嶺神社の御分霊を宝殿ヶ平に勧進し、後醍醐天皇の時代に現地に移したとあります。天王社第一の宮でありその周りの7邑はこの神社の神領であって、古い郷村の記録には村名は書かれていませんでした。高岡神社が鎮座したことから後にその名がついたと考えられているほか、『高岡社考』では、高岡の地名は法美郡の中心部から遠望すると雄大な高い丘（岡）の形をしていることから、宝殿の高い岡の地形が転じて村名になったとし、宝殿と高岡は表裏一体、敬神と景観が一つになった村名であると考察されています。

麻生

村名の起りは明らかではありませんが、一説には、麻の畑作地域だったので、それがそのまま村名になったといわれています。『日本地名語源辞典』にも各地に見られるように「あさふ」が転化した地名であると書かれていますが、その時代や収穫量については分かっていません。

梶原

清水の出村に「梶原」という村があります。清水橋を渡った下手にある戸数四戸の村で、村の誕生は明かではありませんが、平家の落人を追ってきた梶原景時が村人を使って架けさせたという「梶原橋」の話（伝説平家物語）や、中世末に背後の梶原山に築かれていたという山名氏所属の梶原城（『因幡誌』）等から「梶原」の村名が生まれたという話が伝えられています。



岡益の石堂



玉鉾（石山）用水



谷と糸谷の分岐点にある道標



高岡神社



高岡口の道標地蔵

4 宮下地区の地名

みやのした 宮下

宇倍野大字宮下村は稲葉山（因幡山）の麓にあって、宇倍神社の下に位置することから、一の宮の下の村という意から生まれて「宮下」と呼ばれ、国司が赴任して政務を執っていた時代には国府の宮下ともいわれていたということが、『稲葉民談記』、『因幡誌』、『岩美郡史』をはじめ多くの郷土誌に記されています。



美歎水源



美歎の水源



旧美歎水源地水道施設



万葉河原



大伴家持歌碑

みたに 美歎

古くは「三谷」といったようで、『因幡誌』には「三谷村」とあります。「みたに」は「三つの谷」「深い谷」「美しい谷」「御谷」等、色々な思いを込めて名付けられたと思われるが、『延喜式神名帳』（927年成立）の中には既に「美歎神社」として載せられ、『日本三代実録』（901年成立）にも「因幡国美歎神」として取り上げられています。つまり、これらより後に三谷と書くのは筋が合わないことになり、『因幡地名考』では『因幡誌』の三谷村表記は厳密に言えば誤りであることを指摘しています。

さらに、表記については、「三」を美称して「美」にし、谷は「たん」と発音して同音の「歎」を借字して「美歎」となったとする説や、「水谷」が略音して「みたに」になり、「美歎」へ転化したという説などがあります。

ひろせ 広西

「ひろせ」を「広西」と表記する全国でも唯一の地名です。『和名抄』（931年頃成立）には「法美郡広西郷」があげられ、「比呂世」と訓がふってあります。国府川（袋川）の流れが広い瀬となっているところにできた村だから「ひろせ」と呼ばれるようになったと考えられていますが、享保元年（1716）の『郷村高辻帳』には広瀬村とあり、『鳥取藩史』の中には広西の旧名広瀬と明記されているため、いつごろ広瀬から広西に転じたのかなど、広西地名の経緯は明らかになっていません。

まちや 町屋

地名の由来は、『因幡誌』に国司が京都より国府に赴任してきた時の宮市の跡で、そのまま名前が受け継がれてきたとあり、『鳥取県地名辞典』には古代国府の市場町であったことによると書かれています。

また、大正年間に「寺前」から掘り出しされた銅鑿口に「因州法美郡広西郷五日町屋産地福寺 干時明德二癸二酉（＝四癸酉）年六月二十四日」という銘が刻まれていたことから、室町時代初期には現在の町屋付近を五日町屋と称し、寺前付近に地福寺があったこと、中世に広西郷の郷域が西方に拡大して町屋も広西郷に属していたこと、さらに月の五日か五のつく日に市場が開かれていたことなどが推測され、古来から名前が引き継がれ、その後も地方物資交易の中心地であったことが窺い知れます。

ちよう 庁

宇倍野村大字庁村はかつて政治堂があったところで、因幡守の大伴家持が新年の祝歌を詠んだ因幡国庁があったことから「庁」という名前がついたと『岩美郡史』にあり、『鳥取藩史』には旧名が丁で国庁跡であることが書かれているなど、村名が、古代の国庁が置かれていた場所であることが由来して名付けられたことが多くの文献に見ることが出来ます。

おくたに 奥谷

元禄時代に宮下の枝郷として分かれた際に、「一ノ宮の奥の村」から「奥谷」という村名が生まれたと考えられています。集落は村の北側の谷あいだで通称「奥屋敷」と呼んでいるあたりにあり、家数は数軒余りと推定され、また、「谷」は「たん」「だん」とも発音したため、「おくだん」とも呼ばれています。

この谷あいの山道は岩美町方面への近道であったので人の往来が多く、天正8年（1580）6月に羽柴秀吉が鳥取城攻めに進軍してきたのもこの道でした。南広西を通り、法花寺—中郷—宮下を経てこの奥谷を通り、百谷へ抜けたと伝えられています。ちなみに奥谷には奥屋敷・極楽谷・狐塚・改事場・ホラガイ抜け・深谷等の地名が語られています。また、中世には袋川が前通りを流れ、奥谷・岩倉を経て天神川に合流していました。鎌池、河田等の地名が残っているほか、舟頭の塚と呼ばれる土盛の古跡がありました。

ちゆうごう 中郷

昭和47年から54年にかけて鳥取県教育委員会が行った発掘調査によって集落の南西100mの水田中より大規模な因幡国庁の遺構が発見されたことから、この集落がかつての因幡国庁の所在地であり、国の中心地であったという歴史的環境から「中郷」という村名が生まれたといわれています。

こくぶんじ・ほっけじ 国分寺・法花寺

奈良時代、聖武天皇の御代に疫病と天変が相続き政情も落ち着かず、国中に不安と動揺が広がりました。そこで天皇は神仏の御加護にすがることほかに考えられ、天平13年（741年）に国分寺建立の詔を發布し、各国府の所在地に国分寺と国分尼寺を設置させました。因幡に建立された国分寺と法華寺（国分尼寺）の創建当時の姿を伝えるものは礎石を残すのみですが、集落の名前として残ったと伝えられています。

さらに、法華寺の「華」がいつの頃からか「花」に変わりましたが、この点はまだ明らかになっていません。『因幡誌』や『岩美郡史』では「華」を使用し、『稲葉民談記』、『鳥取藩史』では「花」が使われています。太閤検地後から「花」を書きはじめましたが、一般的には古い習慣から「華」も使われ続けたのではないかとされています。また、西方500mの地に新



庁の五輪塔



宇倍神社



舟頭の塚案内板



池田家墓所



因幡国庁跡



国分寺跡



国分尼寺跡



三代寺の石塔群

しい分村「法花寺団地」ができています。

三代寺

村名の由来は明かではなく、『因幡誌』などにも古代に三代寺というお寺があったことによるとしか記されていません。わずかに村の西にある「奥谷」、また村から広西へ抜ける大通りから右に逸れたところに「焼地蔵」という地があり、それらは寺跡と伝承されています。ただ寺跡といわれているだけでその寺が三代寺であったという確証は何もありませんが、私都へ通じる前方の官道は秀吉の鳥取攻めの針路であったといわれているので、そうしたときの兵火と関わりがあるのではないかとされています。

この村には五輪塔や宝篋印塔が村の西域、津ノ井へ続く道路の左手広場に1000体近くも集められていました。かつて村内や田んぼの中、土手にあったものを昭和57年にここへ集めてお祭りするようになったといわれており、また数量の多さからこの地が近隣村々の霊苑のような場所ではなかったかと推察されています。そのことから、聖武天皇が天平9年(737)に国ごとに寺を建立して釈迦如来像並びに両脇侍菩薩の三体を安置し、併せて大般若経を写して納めるように令された際に、因幡では国庁の南にあたるこの地に建てられ、さらに三体寺集落から後に発音の近い「三代寺」へ変わったのではないかとされています。

三郷

殿ダム建設事業によって、拾石・楠城・殿の三集落の15戸が移転をしたことにより、三郷となりました。

稲葉丘

ここにはかつて鳥取歩兵第四十連隊の射撃場があり、戦後しばらくは荒地のままに放置されていたところ、昭和29年8月から国による払い下げが開始され、昭和31年3月19日に設立された財団法人鳥取県住宅公社(昭和40年11月1日からは鳥取県住宅供給公社)により、県最初の模範団地を目ざして造成が開始された場所です。はじめは「岩倉住宅団地(岩倉団地)」と呼ばれ、その後住民の定住が増加するにつれて背後の稲葉山にちなんで「稲葉ヶ丘団地」という愛称が生まれました。次いで昭和59年4月1日、町名・番地の行政上の変更が行われ、「国府町稲葉丘」が正式に決定されました。

分上

奥谷の小字名で、南方の「計天牟」(または化田・血田・仮殿・仮田)と同じように古い地名と思われそうですが、その由来については今のところ明らかではありません。ただし、一説には、「分上」の「分」は「分割」、上は「献上」をあらわし、「分上」は一ノ宮の領田を守るために中央権威に対して献上田を策定した

(実際には収穫物を献上した)土地ではなかったかと考証されています。

雨滝川(袋川)が江戸の初期まで今の池田家墓所の南縁近くと現在の川筋付近とに分かれていた時、分上地区の土地は南の八丁地区と同じように分流に挟まれた中洲状にあたり、肥沃な穀倉地帯で、別名稲島とも呼ばれていました。そのため、一ノ宮の領田に設定され、また一部は皇室領や中央貴族の荘園にも献上されました。このことは分上の東南地区に「祥庄司ヶ瀬」(庄司は荘司。荘園を管理し年貢の徴収等に当たる役職)の地名が残り、また、中世初期に因幡の国司となった土御門氏(村上源氏)が宇倍神社の伊福部氏を圧迫して自領を制定した等の伝承からも窺い知ることができます。

昭和59年4月日から国府町の新しい町名となりました。

新町

新町の中心部の「八丁」周辺は、奥谷宮下土地区画整理事業終了後、昭和59年4月1日から国府町の新しい町として「新町」と改められ、その中心にあおば公園が設けられました。

雨滝川(袋川)が池田家墓所の南縁近くと現在の川筋付近とに分かれていた時、八丁・懸上・鷲尾・四反長のあたりはこの両川筋に挟まれた地であり、地形的に少し高くなっていたため灌漑用水が引きにくく、甑山の方から長い用水井手をつけていたといわれる割には、湧き水もあり、土地は肥沃で広い田んぼが続いていたことから、「八丁」は「八町」であり、八町歩もある広い田んぼのことであったとか、その「町」は距離をあらわす何里・何町の「町」を意味するなどいわれています。なお、この地方を治める八つの役所があったところから「八庁」といったという口碑もありますが、詳しいことは明らかではありません。

新通り

奥谷宮下土地区画整理事業終了に伴い町界・町名が変更された折、昭和43年頃から行政上の慣例になっていた「奥谷(宮下)新通り」を受け継ぐことになり、昭和59年4月1日から正式に「新通り」となりました。「新通り」は町道卯垣桜谷線以西にあって、宝蔵免・河菊・以原・八反田・下鷲尾等を含んだ地域であり、地域一帯の湿地を1~2m埋め立てて県道宮下十六本松線(産業道路)の広い通りや、近代的な明るい家が建ち並び、湿地や草原が広がっていた頃の面影はなくなりつつあります。



▲袋川旧河道想定図

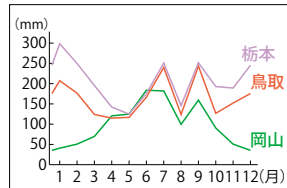


新町の旧袋川の川筋跡



新町のおおば公園付近

5. 袋川 水害との闘いの歴史



月別平均総降水量の年変化
(『国府町史』より)



水害のイメージ
(DVD「雨滝・袋川物語」より)

一般に山陰の気候は裏日本型気候といわれていますが、鳥取気象台では、さらにこれを分類し、平地部を山陰型気候区、山間高冷地を中国山地型気候区として、山陽型気候区に対応させています。平地部の山陰型気候は、梅雨期・台風期のほか、冬期も降水量が多く、ことに冬期は県東部ほど、梅雨期は西部ほど多くなっています。中国山地は標高が高いため相対的に気温が低く、降水量は当然のことながら梅雨期や台風期には非常に多く、年間を通じて少ない月がないほどです。

冬期は北西の季節風に乗った湿潤な極寒波が日本海を渡って来襲し、これが中国山地に遮られて大雪をもたらす、陰鬱な日々が続きます。その降雪も北北西の強い寒波では山雪となり、季節風が弱まるにつれて里雪を降らせず。春先には日本海に発生する低気圧の影響でフェーン現象が起きやすく、大火に見舞われることもありました。6月から9月にかけて日本列島を縦断する梅雨前線や大型台風の到来により、千代川流域内のあちこちで局地的な集中豪雨が発生して洪水をもたらします。

藩政時代から鳥取は度重なる洪水に見舞われてきました。長雨が続きと水が溢れ、溢れた雨水は支流から本流へとすさまじい勢いで河口に流れていきます。しかし、屈曲した河口の溜水は流れず逆流し、しばしば大洪水をもたらします。鳥取城下一帯では、袋川の内外とも千代川河口の閉塞に起因する袋川からの逆流に見舞われ、長時間の氾濫と湛水が近代まで繰返されてきました。

鳥取藩は、洪水の度ごとに堤防を改修してきましたが、根本的な治水政策は見当たらず、人々の被った損害ははかり知れないものでした。

(1) 洪水の記憶を今に伝える本邦随一の古記録

五水記と因溢物語

五水記

『五水記』とは、文禄2年(1593)の高麗水から寛政7年(1795)の乙卯水まで約200年の間に起きた鳥取県内で最も大きかった洪水を5つ選り抜き、記録されたものです。鳥取藩の医師・中本友直なかもとともなおによって寛政8年(1796)に著され、因溢物語と共に後世への教訓となった貴重な記録資料です。



『五水記』原本
(鳥取県立歴史博物館蔵)

因溢物語

『因溢物語』とは、五水の一つである寛政7年(1795)8月に起こった乙卯水と呼ばれる大洪水の様子を記したものです。鳥取藩士・鈴木惟忠すずきのぶただによって寛政8年(1796)9月に書き上げられ、洪水の惨状、藩庁の処置、市民協力の状況や自身の体験により得た洪水時における心得などが記されています。この物語は著者自身の身近に立脚して、溢れるような人間愛に貫き通されているのが特徴的です。

林甚三郎一代水難之図

『林甚三郎一代水難之図』とは、文政12年(1829)から明治26年(1893)頃までの約60年間について、主に鳥取市源太および向国安地先における洪水の記録書です。向国安の住人、林甚三郎によって明治30年8月に著され、災害時における復旧の状況や、物々しく且つ慎重な検見の有様が克明に描出されているほか、洪水の脅威の中で川の恩恵とともに生きた日本の農民の姿をあらわしています。

(2) 藩政・五水記が記す水害の伝言

① 五水の概要

高麗水

文禄2年(1593)癸巳8月に洪水がありました。7月末から太陽を雲霧が覆って雨が止む間なく降り、8月の中頃からは豪雨が続き、水が漲り湧く音は幾多の雷のように聞こえるほどで、波は逆巻いて天に突き上げていました。人々は慌てふためいて大騒ぎとなり、家の屋根に登ったり、山の上へ逃げようとしたましたが、道がなく溺死した人や牛馬も多く、路頭に倒れた死体で道が塞がるほどだったといわれています。

この年、太閤豊臣秀吉は朝鮮征討を行い、国中の壮年や若者は徴募に応じて皆朝鮮へ向い征討に従事していたので、国に残っているのは老人や女性、子供ばかりだったために被害が特に大きく、また、洪水時や復興の作業もはかどらなかつたものと思われます。そのような年に起きた洪水なので、地元の人達はこの洪水のことを「高麗水」と呼ぶようになりました。

遷封水

寛永12年(1635)乙亥8月12日に洪水がありました。7月下旬より雨が降り始めて8月なっても止む間なく降りしきり、北風が激しく吹き荒れ、水が河口から逆流したために河水は捌けられず、城下の外郭をなす袋川の堤に溢れ込んだり堤を壊したりして勢よく周辺へ流れ出しました。城下は水に浸かり、その深さは8尺1丈(約2.43m)を越す場所もありました。水かさが増したのが日暮れだったので、溺死者が200

鳥取の地の宿命・千代川からの逆流

—北西の強風の恐ろしさ—

●千代川は中国山脈の志戸坂峠に源を發して八頭郡の谷々から流れる雨水または降水を集めつつ日本海に注いでいる。

●普段は鳥取城下町に舟運の恵みを与えてくれている。

●しかし、大洪水になると暴れ、奔流は手がつけられない。

●国安あたりの堤防が決壊すると濁流は鳥取の中心部を襲う。

●一度豪雨と共に西北の強風が吹き、波浪が賀露の港口を塞げば、千代川の水はみるみる増水して袋川を逆流し、鳥取城下に溢れた。

●それに加えて因幡川からの奔流が流れ込む。

洪水の恐怖は鳥取の地の宿命である

五水の一覧

- ①高麗水(コウライミス)
文禄2年(1593)8月
- ②遷封水(オクニガエミス)
寛永12年(1635)8月
- ③種稻水(ウヅツケミス)
寛文13年(1673)5月
- ④丁酉水(トリノトシミス)
享保14年(1729)7月
- ⑤乙卯水(ウツノミス)
寛政7年(1795)8月

『五水記』による五水の水量の比較

●寛政の水(乙卯水) < 文禄の水(高麗水) 四、五尺高い

●寛政の水(乙卯水) 三尺高い > 享保の水(丁酉水)

●寛政の水（乙卯水）四尺高い>寛文の水（種稲水）

●寛政の水（乙卯水）=寛永の水（遷封水）

『因溢物語』が記す、洪水時の心得の事

●黒米が濡れたときは、きれいな水で洗いよく水気を切って乾かしておく。大釜でこわ米のように蒸した後、箆を掛けて日に干し、よく乾いたら白に入れてつくと、砕けず味も変わらず精米になる。

●書物が濡れたときは、きれいな水をざっとかけて平らな板の上のせ、さらにその上に厚い板をのせてそれに締め木をかけ、押して水をよく切り、庭に戸板を出してその上に干すのがよい。乾いた後、書巻の紙を竹べらで離すと縮まず破れずによく乾く。

●夜具の着替、蒲団など綿類が濡れたときは、熱湯を注いで書籍のように締木に掛け、板屋根の上に出して天日干しにすること。

●畳や諸道具は洪水時には上げておくのがよい。戸板4枚を違えて並べて縄で括り、下には辛漬桶等を置いて物を乗せておく。水が満ちても床の上に浮き、倒れないので効果があった皆が言う。ただし、戸締まりのよくない家は諸道具を流失しまったので、雨戸などは用いてはならない。

●醤油や味噌桶は辛漬桶3つを桶の廻りに結わいつけておく。桶は浮くので、倒れずに済む。

●洪水の際、船で人を助けるときは艀で押し早く漕いでいくのがよい。竿をさし、人を助けようとして本人が危険に晒された者があったそうなので、竿は使ってはならない。

人ほど出てしまい、あるいは家財を流失して、破産した人が多かったと伝えられています。また、池田光政公と光仲公との国替えから4年目のことであったので、付き従ってきた土族や商人たちは苦勞が大きく、溺死者も多かったようです。また、お国替えの後すぐに起こった洪水であることから、「遷封水」と呼ばれています。

また、田んぼは泥に埋まり、食物をはじめ醤油や薪、油、炭に至るまですべて泥につかり、炊事をしようにもきれいな水がなく、洪水後も飢渴に苦しんだといわれています。

うえつけみず 種稲水

寛文13年(1673)または改元のため延宝癸丑5月14日に洪水がありました。前日からの暴雨はまるで滝を洗い流すようで、たった二日間の雨にも関わらず、水が満ちて勢い溢れ湧く水音は激しい雷鳴のようでした。洪水の出端には北風が激しく吹きまくり、河口付近の流れを邪魔して、さらに水かさが増しました。直接、外郭である袋川の堤防にぶち当たり、堤の低い箇所から水が溢れて城下に流れ込みましたが、最終的に堤は破れたり崩れたりせずに済みました。しかし、城下一面に深さ3~5尺(約0.9~1.5m)の水溜まりができ、堤外は1丈(約3m)ほどにも達しました。堤外では特に袋川の出水が多くて水勢も強くなり、鋳物師橋、鞋町橋(現存せず)、出合橋、船宮の橋も全て流れ落ちました。

また、やっと稲を植え終わったと同時に洪水だったので、田んぼへの被害も大きいものでした。5月の種稲時に起こったので、この洪水は「種稲水」と呼ばれています。

とりとしみず 丁酉水

享保14年(1729)丁酉7月15日に洪水がありました。丁酉に起こった洪水なので、「丁酉水」と呼ばれています。前日から風雨が激しく、河水は水かさが増して横に幅を広くして流れていましたが、この水の勢いは千代川が強く、まず国安村の堤を破り、一文字に若桜橋の向う渡辺源七宅の外屋(ながや)に突き当たって押し流したので、その外屋は若桜橋に横たわり、橋の上流は激しい流れになってたちまち水かさが増し、次に最勝院薬師の堤を破って崩れかけた水勢は矢のように大工町の釜屋の宅につき当たりました。若桜橋も結局力尽きて押し流されたので、智頭橋、鹿野橋、鋳物師橋、出合橋の5橋は一つも残らず流されました。堤も所々破れて城下は満水し、浅いところでは1、2尺(約0.3~0.6m)、水の深いところでは6、7尺(約1.8~2.1m)あり、この年は雨がしばしば降って8月、9月も大水があり、五穀は実らず国中困窮したといわれています。

うとしのみず 乙卯水

寛政7年(1795)乙卯8月29日、降水が逆行して城下に氾濫しました。23日から雨が降りはじめ、ついに28日に袋川が満水し、翌日の朝には川の水かさが増えて堤上を溢れ、惣門内に入っていました。この水は堤内で4、5尺(約1.2~1.5m)から1丈(約3m)を越した場所もあり、城内では南門から北門に通じる道の中央まで注いで、中の門の内門番のいる所は平地から3尺強(約0.9m)あまり、北門の内は5尺(約1.5m)ほどにも及びました。

外郭である袋川の堤は所々破れて、その堤の下にある家屋の多くが壊れました。鹿野橋の堤は平地と同じように打ち崩され、智頭橋向いの浄宗寺の壁が押し流されて智頭橋に横たわると河水は激しさを増して橋を押し流したので、それ以下の鹿野橋、鋳物師橋、出合橋および船宮の橋はすべて流れ落ちましたが、乗船所の下、円山の茶店の上手あたりに止まって海には出ませんでした。一本橋と若桜橋は無事でした。惣門外でも流失した民家は数え切れないほどで、溺れて流れてしまった牛馬犬鶏も多く、溺死者も600人を超える勢いでした。被害総額はおよそ21万石相当と思われ、池田家32万石の3分の2の損失額に及んだといわれています。

2 五水記に記された逸話

生きるも死ぬも二人一緒 ~乙卯水・貞女の鑑“豊”の物語~

本町3丁目の横丁に惣七とその妻・豊の夫婦が住んでいました。惣七は長い間、病床にあり、豊は看病の傍ら手伝い仕事で生計を立てていました。この洪水でも、まず惣七を2階に登らせ自分も上がりましたが、次第に2階にも水が入り込んできた時、偶然助け船がきました。しかし、病気の惣七は船に乗り込むことを拒んだため、船頭は豊だけでも乗せようとしたのですが、豊は惣七を抱いて「生きるも死ぬも二人一緒に」と言ったので、船は漕ぎ去ってしまいました。家は無事で、水が引いた後、二人は他に移り住みましたが、豊の誠実な心根と行動は神にも通じると誰彼ともなく噂が広まりました。

~憐れ・三郎左衛門~ —遷封水・眼前で幼女を溺死させた憐れ—

土族の三郎左衛門は慣れない洪水だったため、とりあえず梁の上に横木を渡して老母と妻子を登らせて自分も登りました。両手で老母と幼女を抱えていましたが、やがて老母がめまいを起こして梁の上から落ちました。三郎左衛門は水中を手探りして片手で老母を梁の上へ引き上げました。しかし、暗い中その騒ぎで幼女も落ちてしまいましたが、幼女を助けようとする老母がまた落ちそうになったため、眼前で幼女を死なせてしまいました。

『五水記』の乙卯水にみる洪水の予兆

●洪水の前日の風は、西北の方向から吹いた。

この地域では、この風のことを沖西といい、この方角から風が吹き雨が降ると、海上から直かに鷲峰山の頂上に応じ、それから高山に注いで、三国の仙である、真桑(まごまご)柳木の仙、駒(こま)遷(せん)沖(おき)の山菅(やまぐさ)の仙、扇(あふ)の仙と注ぐため、智頭、八東の出水は特に多く、これを山沢通気という。山溪から一度に湧き出る水のことを、山津波という。(因州の人は、海水の湧くのを津奈美という)

●洪水の十日前頃から賀露海岸沖の海水が山のように見え、色は赤黒く、その形は晴れた日に眺めた隠岐島のようなだった。

●七月頃より米倉に水蝶と呼ばれる小さな蝶が大発生した。

●湖山池のコイやボラが小川におびただしい数でのぼってきた。

湖水の魚類、即ち、たくさん鯉や鱸(ぼら)の大きいのが湖水から流れ出た。大水がある年は潮汐の満干が多いため、湖水に海水が逆流するので、このような異常なこと起こりやすい。

『五水記』の結論づける洪水への備え

「もしもこれから家を建てるならば、必ず二階を作るのが良い。」

●今度の洪水では溺死者が多かったが、二階に避難して助かったり、幸運にも船で助けられた人も多かった。

大地に刻された洪水の記憶

●地名に残る水越（超）二箇所

八東郡の私部（私部）の水越：文禄2年（1593）8月に起こった高麗水の時に、王越道という小高い山の最も低い所を水が溢れて越えたといわれています。現在でも松の木を植えてその目印となっています。

岡益の水越：高麗水の時に、奥の峠の付近まで水がきたといわれています。

●洪水の水が来たと伝わる二箇所

学行院：高麗水の時に、お堂の上まで水がきたといわれています。

宇倍神社：丁酉水の時に、境内の庭まで水がきたといわれています。

●洪水にまつわる四伝説

溜堀：丁酉水の時に、藤網という相撲取りが堤を破り水の勢いを減らしました。その時河水が流れ込んだ場所に大きな二つの水溜りができたとされています。

船山：洪水の後、山の中腹に小舟が止まっていたといわれています。

楯取り岩：高麗水の時、鹿野町毛無山の八合目あたりにある大岩に船を繋いだと伝えられています。

雨滝：滝の口にお銚子のように突き出た岩石があり、そこから落下する滝口は広さ四丈（約12m）ほどあったところ、丁酉水の時にこの銚子口が崩れ落ち、それ以来水勢がそがれたといわれています。

●川に流された二社二仏

川床から出た地蔵（延命地蔵）：新井と船山の中間の県道沿いにあります。この地蔵はすぐ近くの袋川の改修工事の際、川床から見つかりました。相当磨滅していますが、工事関係者の話によると、その昔この地蔵さんの御加護で九死に一生を得たというので、その報恩と世の人々にも御加護があるようにと現在でも大切に祀られています。

～九死に一生を得た数奇な運命の紋六～

新茶屋にいた夫婦が享保の水（丁酉水）で家の屋根に乗って流されて円山の下まで流された時、風向きが西に変わって家は善久寺の前を流れて円護寺村に漂着し、村民に助けられました。

婦人は妊娠中で臨月だったため円護寺村で男子を無事出産し、その子は紋六と名付けられました。この年、紋六は60歳余になり、また、寛政の水（乙卯水）で妻と娘の3人で家ごと流されましたが、浜坂村の上の小松原の側で船に助け上げられました。

麗水・洪水位跡

- 太鼓御門の石壁（石垣）…この標高まで溢水してきた。
- 八頭郡の私部の「水超」…という小高い山の最も低い所を水が溢れて越えたという。現在でも松の木を植えてその目印としてしている。
- 法美郡の岡益の「水超」
- 「流れ荒神」…高草郡の松上、河内村の山の頂に荒神の祠がある。
高麗水で山奥から流され、山の中腹の樹の枝に掛かっていたのを里人が現在の山頂に安置したもので「流れ荒神」と呼ばれている。

楯取岩伝説 ～高麗水の浸水位を伝える～

鹿野町、毛無山の八合目あたりに「楯取り岩」と呼ばれる独立した巨岩があります。言い伝えでは、文禄2年（1593）8月に起こった高麗水の時に、この石に船を繋いだため、その名がつけられ、現在では楯取明神として奉られています。ただし、楯取と名付けてさらに明神様として崇拝している由来は別にあるのではないかと考えられています。

賀露明神を生土神とする四郎右衛門

寛文13年5月の洪水で高草郡南隈村の百姓一家が皆屋根に乗ったまま流れ、賀露の港口を過ぎて海に出てしまいましたが、その一家は離島（一説に鳥が島）に漂着し、助かりました。婦人は妊娠中で臨月でしたので、島の上で無事に男子を出産し、3日経って賀露港から救助船がきてその一家は故郷に帰ることができました。その子は成人して鳥取に出て大工となり、名前を四郎右衛門と名乗りました。後には香川飛弾の足軽となって、川外の大工町に居住しました。彼が一生、賀露明神を生土神として祭ったのは、離島で生れたためです。この四郎右衛門の孫を惣吉といい、同じく川外の大工町に居住して、大工をしていると伝えられています。

藤網が切り破った水溜まりの堤

安長村湖山街道の南側に深い水溜りが二つありました。里の人たちはこれを留堀と呼んでいました。この洪水で安長村の嵐嘴の堤に水が溢れるのを恐れ、もしも、ここから水が村へ溢れたら安長村の人々は逃げ道失って一人も助からないと思い、藤網という相撲取りがたった一人で嵐嘴の堤を伝っていき、その水溜まりの上手にあたる場所の堤を切落し破りました。それ以後、千代川の流は崩れたので、河水の勢いが多少減ったといわれています。その河水の浸かったところが大きな水溜まりとなりました。後には自然にできた澤沼ようになって水草が生えて魚や亀もいましたが、近年次第に埋められ、現在では以前の大きさの半分になってしまいました。

十二才の時に若桜橋が落ちたのを見た老女

ある老女は、丁酉水は老女が12才の時に起こった洪水で、若桜橋の向う本浄寺の前町に住んでいて、日暮れから父母に助けられて二階に上がったことと、若桜橋が落ちたことはしっかり覚えていると話しています。その他のことは記憶していないけれども、渡辺家の外屋が流れてきて橋に横たわったので、その隣側の民家は地震のように揺れ、水かさもすぐに五、六寸（約15～18cm）も増えたため、今はやむをえないと父母とも念仏を唱えるようにいうので、これは、もうこれで死ぬのだと悲しくなり、河上を見ると、水は渦を巻いて音をたてていました。その勢いは武宮の境内の堤を破り崩し、内外屋を押し壊して、また、上流から小屋が流れてきて、渡辺家の外屋と並んで橋をべたっと塞いだので、すぐに若桜橋を押し流して智頭橋にかかり、これもひとたまりもなく押し流されてしまったと、現在も見ているように覚えていると語りました。



③乙卯水・善政と助け合いの心を伝える 四善政と五つの出来事

「池田治道」治世の時代、藩が施した四善政

- ①洪水の後、困窮していた町民に30日夜から役所の備蓄米を出して飯やお粥の炊き出しを施した。
- ②届け出れば、米を貸すとの号令を出した。
- ③石井郡岩本に備えていた藩の倉米を船で運び込み、安い価格で提供した。
- ④物価を高くした商人を取り締まり、処罰した。



川床から出た地蔵（延命地蔵）

大応寺の聖観音像：浜坂バス停のすぐ近くに曹洞宗の大応寺があります。この寺の大きな聖観音像は、水に流されて近くの川岸の泥の底に埋まっているのを発見され、江戸時代に復元修理されたものです。弘法大師が1000体の仏像を流したことにより「千鉢川」と呼ばれるようになった伝説にふさわしい仏像であると伝えられています。

多居乃上神社：国府平野の中心地、広西にある神社です。『廣西民談記』に、ある洪水の時に川淵に止まっていた小さな祠を祀ったことが神社の由緒であるとする説が記されています。



多居乃上神社

流れ荒神：鳥取市河内にある山の頂の森の中に「流れ荒神」と呼ばれる祠があります。文禄2年（1593）8月に起こった高麗水の時、山奥から荒神の祠が流れ出て、この山の中腹の木の枝に引っ掛かっていたのが見つかり、後に山頂に安置して奉りました。

●救済所・供養塔

天徳寺境内：洪水の後、救済所を設け、炊き出しなどの災害救助をしました。

浜坂の溺死海会塔：乙卯水の洪水供養塔です。江戸時代、千代川の流はこの山すそ近くを流れていたの

で、袋川と合流した流れが近くに見下ろすことができます。乙卯水での溺死者が河口からの水の逆流によって海に流れず、多くの死体がこの付近に積み溜まったといわれています。



浜坂の溺死海会塔



池田治道

若桜橋

池田光政による袋川付け架けに伴って架けられたもので、従来若桜往還は江崎惣門を出て、お弓町通り一本橋を経て往来していたといわれていますが、この橋の新築以後、若桜往還はこの橋を通るようになり、この街道を若桜街道と呼ぶようになったといわれています。



智頭橋



若桜橋下流部に架けた鳥取城大手通りの橋で、智頭、上方への往還道

助け合いの心・五つの出来事

- 1 蓄えの無い者に所々でお粥や水に浸かった米、塩、醤油などの施しをした。
- 2 商人たちは米、塩、醤油など生活必需品を格安で提供した。
- 3 善政に報いようと、町民は率先して堤を修築することを願い出た。
人夫は合計でおよそ 6000 人。
- 4 茶屋秋里屋権兵衛、元魚町松岡屋平右衛門、智頭街道玉屋助右衛門の富商 3 人は、流れ落ちた四橋と損傷の激しかった出合橋を新築した。
- 5 氾濫時、船を持っていた者は堤の内外を乗り廻して遭難している人を救助した。



(3) 藩橋五橋の物語

1 藩橋五橋

袋川に架かる若桜橋、智頭橋、鹿野橋、鋳物師橋、出合橋の 5 橋を藩橋といい、橋の修築は藩の手で行われました。これらの橋は惣門内外の連絡に必要な不可欠なものであり、その流失を防ぐ方法も決まっていた。『鳥取藩史』によると、市中の酒造屋 33 軒に命じて各戸より 3 尺桶 2 本宛を出させ、橋上に置いて水を運び入れ、または、大石を数十個並べ、大綱で橋脚を繋ぐなどといった方法がとられていました。しかし、重りを置いたまま橋が流れていったという記述が『因湊物語』に見られるように、記録的な大洪水の際には、橋の流失は免れませんでした。

2 乙卯水による橋の流失と架け替え事業

町人による橋の架け替え

寛政 7 年 (1795) 8 月の洪水で、智頭橋から出合橋までの 4 橋が流失し、若桜橋が破損した時、当時新興の町人だった秋里屋権兵衛を中心に、松岡屋平左衛門・玉屋助左衛門が橋の新造を願い出ました。このことは『町人旧功書』の三家の条などで確認することができ、秋里屋権兵衛が残した詳細な記録『御橋記録』から、実際に町人側から藩に働きかけている様子が窺い知れます。積極的に事業を進めようとする町人側の姿勢が現れており、部材の調達や職人の選定、橋の仕様やデザインまで、町人側がこと細かに関与していることがわかります。

藩政への貢献とその目的

このように秋里屋が橋の架け替え工事や、米問屋・絹織座といった藩の事業に積極的に関わった目的の一つとしては、町人仲間の中での地位の向上を狙ったものではないかと考えられています。享保 7 年 (1722) 祖父権兵衛の代に秋里村から移住して城下町人となった秋里屋は、町内

での地位はさほど高くなく、古い家筋や光仲入府時から同行してきたといった歴史性に基づく由緒を持たなかったため、藩政への貢献によって“由緒”を築こうとし、その意味で寛政の袋川 5 橋架け替え事業は重要な事業であったとされています。

五橋の完成

まず、短期間での橋の新築は難しいため、各々の橋のあった場所の下流に仮橋を架けて往来ができるようにし、そして翌年の 5 月に智頭橋が完成しました。これは藩主池田治道公が江戸から帰国されるためでした。以前の橋と比べると木材も金物も大きく、この先 20 年は腐ったり壊れたりすることはないといわれ、続いて鹿野橋、鋳物師橋、出合橋も同様に造られました。唯一流失しなかった若桜橋も破損が大きかったので、これも新たに造ることを申し出ました。9 月には 5 橋すべてが完成して秋里屋、松岡屋、玉屋の 3 人は 5 橋の渡り初めを行い、乙卯水では町人による藩橋架け替え工事が見事に執り行われたことが今に伝えられています。

(4) 洪水に備える先人の知恵

1 御用石

洪水時、袋川の橋の上に重しとして並べられた石です。当時は橋が流されないように、橋上に置く重石が用意されていました。石の真中に「御用」と刻まれている大きな石で、100kg 近くあったといわれています。大石の割合数は、若桜橋 15、智頭橋 12、鹿野橋 13、鋳物師橋 14、出合橋 12 と決まっており、藩より供給されていました。

2 注進制度

洪水に備えて袋川の水を監視し、水かさが増える度に報告を義務づけた制度です。初めの頃は各町の見場所によって報告をしていましたが、寛延 2 年 (1749) から智頭橋付近の増水状況をもって一般防水準備の標準としました。

あわせて、町方の土手の受持区域も細かく決められていました。町奉行、町目付等の指揮のもとに、各町から常置の夫役を出し、計 300 人からなる 16 の水防団が結成されていました。夫役のは、土手が決壊した時にその裂口に古畳、土俵などを入れて水を防いだりしました。こうした際に必要な俵、古畳等の供出もそれぞれの町に割当が決められていました。この夫役の者は有事の際いつでも召集できましたが、共同の災厄に従事するというものであり、それに対する給与等は一切ありませんでした。

であり、この橋は他の橋より高く、長さも 15 間 (約 27m) あったといわれています。

鹿野橋

鹿野街道の通り、智頭橋下流部に架けられた橋で、若桜橋、智頭橋同様袋川付け替えに伴い、元和年間に池田光政公によって架けられたものといわれています。



鋳物師橋

鹿野橋の下流部、茶町から鋳物師町に架けられた橋で、伯耆への往還路にあてられていました。当時この橋の下は船着き場となっており、伯耆、出雲、石見、但馬、越前等の帆船が常に繫泊して賑やかであったと伝えられています。



出合橋

材木町より丹後片原町に架かる橋で、袋川筋はこれより先に橋はなく、以前の川筋と出合う辺りに架かっている橋なのでその名がついたと『鳥府志』にあります。





寛政8年(1846)にかけがえられた五橋の位置図

藩橋・流失対策

橋名	尺数	その他流失対策
若桜橋	15	①市中の酒造家33軒より、各戸3尺桶を2本供出してもらい、水を入れて橋上に置く。
智頭橋	12	②大綱で橋杭を繋ぐ。
鹿野橋	13	
鑄物師橋	14	
出合橋	12	

一、出合橋	二、若桜橋	三、鹿野橋	四、鑄物師橋	五、智頭橋
六、出合橋	七、若桜橋	八、鹿野橋	九、鑄物師橋	十、智頭橋
十一、出合橋	十二、若桜橋	十三、鹿野橋	十四、鑄物師橋	十五、智頭橋
十六、出合橋	十七、若桜橋	十八、鹿野橋	十九、鑄物師橋	二十、智頭橋
二十一、出合橋	二十二、若桜橋	二十三、鹿野橋	二十四、鑄物師橋	二十五、智頭橋
二十六、出合橋	二十七、若桜橋	二十八、鹿野橋	二十九、鑄物師橋	三十、智頭橋
三十一、出合橋	三十二、若桜橋	三十三、鹿野橋	三十四、鑄物師橋	三十五、智頭橋
三十六、出合橋	三十七、若桜橋	三十八、鹿野橋	三十九、鑄物師橋	四十、智頭橋
四十一、出合橋	四十二、若桜橋	四十三、鹿野橋	四十四、鑄物師橋	四十五、智頭橋
四十六、出合橋	四十七、若桜橋	四十八、鹿野橋	四十九、鑄物師橋	五十、智頭橋

注進制度

- 一番注進 川床七分
- 二番注進 土手三分
- 三番注進 土手五分
- 四番注進 土手八分

御救船の定め

- 洪水時は御船宮備え付けの御救船を出す。
 - 御救船の水主として15人が選ばれていた。
 - 洪水時は安長の渡し止めが止まらないうちに、御船宮にかけつけ役人の指揮を受ける。
 - 揚屋の罪人は与二郎屋敷に移し本牢の者は□□小屋へ移す。このため一艘の船が前もって準備してあった。
- (寛政九年(1797)七月二十七日 御船手御定)

3 御救船

堤防が決壊しなくても市内所々の浸水は免れないので、それに対する交通や救助には御船手が御船宮備え付けの船を出して働きました。部署は常時定めがあり、随時救助船が出されたと思われます。

(5) 千代川・袋川の水害

[明治時代の主な水害]

1 明治18年(1885)の洪水

山陰地方では6月28日から雨降り続き、7月1日になって東北の風が激しくなり夜半から本格的な暴風雨にかわりました。この暴風雨により、千代川流域では各所で堤防が切れたり橋や家が流され、田畑が土砂に埋まるといった被害が甚大でした。

2 明治26年(1893)の洪水

西日本一帯を襲った台風は、10月14日の夜明け前から次第に風雨が激しくなり、午後2時頃には瞬間風速35メートルを記録しました。夕方になると風力は衰えましたが雨は激しく翌日も降り続き、16日午後2時までの総雨量は350ミリにも達しました。各地で堤防が決壊して浸水は2日間にも及びましたが、救護しようとしても強い風に遮られて舟を通すこともできない状況だったといわれています。

[大正時代の主な水害]

1 大正元年(1912)9月の洪水

9月23日におきた大洪水は、午前2時頃から風雨が更に強くなり、濁流はまず古市新道方面を襲い、勢いによって市街地と富桑方面を襲って、午後2時頃には見渡す限り一面の泥海となりました。千代川の堤防は国安、叶、向国安、下味野で決壊し、行徳方面にも決壊がありました。袋川は寺町から鹿野橋まで3ヶ所で決壊して、新橋、出合橋、川下橋が流失し、若桜橋が浮き上がり、千代川の安長橋(現八千代橋上流に木橋があった)が流失しました。不意打ちの洪水であったため、県下の死者102名、傷者8名、行方不明2名、流失家屋136六戸、土屋57棟、納屋187棟、その他流失323棟、床上浸水9,959戸、床下浸水6,080戸等の被害を受けました。市は3日間の炊出しを行い、吉村徳平氏から白米40石の提供があったので困窮者に米券を交付するなど応急措置をするとともに、市中路上の大掃除、各戸への石灰無料配布などを行い、人手不足のため宇倍野青年団が無料奉仕なども行いました。

2 大正7年(1918)9月の洪水

大正7年9月13日夜中から雨が激しく、翌14日10時には暴風雨となって夜中の洪水となり、16日に至るまでほとんどが水底に没しました。冠水は約2mから4mに

までおよび、国安の堤防が崩れ、美歎の水源地が決壊して、軍隊までもが出動して救援活動にあたりました。鉄道も不通となり、鳥取-浜村間は27日に開通しましたが、鳥取以東の被害が大きく、山陰線の全通は翌月10日頃になりました。袋川の橋も流れて、若桜橋と智頭橋は仮橋が架かりましたが、兩岸に針金入りの綱を渡し、それに小舟をくりつけて、乗る人が綱を手操るという渡しが続きました。

3 大正12年(1923)9月の洪水

千代川改修と新袋川の工事は大正12年度から14年間の継続事業として行われることになりましたが、9月1日の関東大震災による復興という大事業に当面した山本内閣はそちらを緊急課題として千代川改修は年限を延長して一時中止されました。その同じ月の15日、千代川はまたもや氾濫しました。13日から降り続いた雨は15日には北風をともない、午後には千代川・袋川とも最高水位に達し、叶・島・長谷・今在家の堤防が切れて、死者11人、家屋流失及び崩壊57戸、浸水は7,151戸に及び、田畑の被害も甚大でした。その後の市会では千代川・袋川の工事促進と、薬研堀流末の排水方法を講ずることを決議し、大正13年5月の国会議員改選で代議士に当選した由谷義治は、早速千代川改修問題を国会で取り上げ、改修の早期着手とその必要性などについて演説しました。そして15年春には千代川改修協賛会が成立し、11月には鉄橋安長橋(現在はこれに代わり下流に八千代橋が出来ている)間の起工式が現地で行われました。

[昭和時代の主な水害]

1 昭和9年(1934)の洪水

9月12日、南海のパラオ島・トラック付近の海上に発生した台風(室戸台風)は、19日の夜から20日にかけて鳥取地方に180ミリを超える雨をもたらしました。千代川の水位は行徳のあたりで6.5メートルにも達し、21日には大洪水となりました。新袋川の完成のため市街地のお被害は比較的少なめでしたが、全山陰を通じて鉄道路線が未曾有の大混乱をきたしました。

2 昭和34年(1959)の洪水

9月20日頃、マリアナ海上に発生した弱い熱帯低気圧は急速に発達して、22日の昼頃に台風15号となりました。後に「伊勢湾台風」と名付けられたこの台風によって鳥取地域は25日から雨となり、26日午後から風雨が強まり、最大瞬間風速35メートル、雨量301ミリを記録したところもありました。河川の氾濫、堤防決壊、橋の流失、家屋の浸水などの被害が続出し、特に千代川の上流、袋川の氾濫は、鳥取市をはじめとする東部地区に大きな打撃を与えました。

3 昭和36年(1961)の洪水

9月にマーシャル群島付近で発達した台風18号の影響で、14日の夕刻から南東の風が吹き、雨降りとなって16日午後3時前の瞬間最大風速は毎秒44メートルにも達しました。夕方まで降り続いた雨は若桜町で雨量296ミリを記録し、その

千代川・袋川の主な水害年表

文禄2年(1593)8月	高麗水
寛永12年(1635)8月	題詞水
寛文13年(1673)5月	種福水
元禄15年(1702)8月	御船水
享保14年(1729)7月	11雨
天明6年(1786)8月	29雨
寛政7年(1795)8月	29雨
文化13年(1816)閏8月	雨
文政12年(1829)7月	1雨
天保9年(1838)7月	20雨
嘉永3年(1850)9月	風雨
嘉永5年(1852)7月	22雨
慶応2年(1866)8月	7雨
明治18年(1885)7月	1雨
明治26年(1893)10月	10日
大正元年(1912)9月	19日
大正7年(1918)9月	1雨
大正12年(1918)9月	1雨
昭和9年(1934)9月	20日
昭和20年(1945)9月	1雨
昭和34年(1959)9月	1雨
昭和36年(1961)9月	1雨
昭和40年(1965)9月	19日
昭和47年(1972)7月	9日
昭和51年(1976)9月	17日
昭和54年(1979)10月	20日
平成2年(1990)9月	19日
平成10年(1998)10月	8日
平成16年(2004)9月	21日



大正元年の洪水
(出典:『鳥取の災害』鳥取市社会教育事業団発行)



大正7年の洪水
(出典:『鳥取の災害』鳥取市社会教育事業団発行)



大正 12 年の洪水
(出典：『鳥取の災害』鳥取市
社会教育事業団発行)

氾濫区域内の人口比率

日本の川	約 50%
千代川	63%
袋川上流	90%
袋川下流	ほぼ 100%

日本の川の氾濫区域の面積は国土の 10%、そこに 50% が住み 75% の遺産が集中している

弱き者よ、汝の名は人間なり

「空前の大出水により生命財産を流失し、多年努力の集積を一夜のうちに魔水の暴虐に委し、親は子に別れ、子は親を喪いて、天に哭し、地に働するも流水再び死者を蘇生らすなく秋風 徒に浙瀝たるも纏うに衣なく、住むに家なく、喰うに米なし。噫これ何の罪ぞや、弱き者よ、汝の名は人間なり。」

《大正 9 年 9 月 22 日付『鳥取新報』言論欄》



昭和 34 年の洪水
(出典：『鳥取の災害』鳥取市
社会教育事業団発行)

ため河川は急激に増水して氾濫を始めました。この台風では風害も大きく、市内の送電線・電話線も完全に寸断されました。

4 昭和 51 年 (1976) の洪水

9 月 3 日、グアム島南東海上に発生した熱帯低気圧は台風 17 号となり、8 日に降りはじめた雨は 9 日に鳥取で 136 ミリを記録しました。被害は鉄道・農作物に甚大で、道路損壊、堤防決壊、山崩れのほか、市内の浸水地域も多く、鳥取市には災害救助法も適用されました。

5 昭和 54 年 (1979) の洪水

トラック島付近にあった熱帯低気圧が台風 20 号となって 10 月 19 日に上陸し、北上につれて鳥取地方の雨も強まりましたが、午前 9 時をピークに弱まり、千代川水系の水位も減りはじめました。治水の施設が整備され、水防活動も活発になったため、堤防の決壊は免れましたが、灌漑の護岸崩壊が各所に発生しました。

【平成における主な水害】

平成に入ってからは、平成 2 年 9 月の台風 19 号により家屋浸水 135 戸、平成 10 年 10 月には台風 10 号の影響により家屋浸水 121 戸の被害を受けております。特に記憶に新しい平成 16 年 9 月の台風 21 号時には千代川流域内における総雨量は、鳥取 1376 ミリ、智頭 206 ミリ、若桜 1916 ミリ、綾木 2546 ミリに達し、鳥取県下における被害は、死者 1 名、負傷者 7 名、家屋の被害は一部破損 2 戸、浸水 126 戸、非住家被害 1 戸、田畑の被害 14.5ha に及び、千代川流域での家屋被害は 99 戸に及びました。道路被害は 97 ケ所、河川被害は 216 ケ所あり、旧用瀬町と智頭町の境界に位置する市瀬地区においては沿川の採石場の土砂が崩落し、千代川を塞ぎ止める事態も発生しました。

(7) 千代川・袋川の水害との闘いの歴史を伝える塚の碑

1 千代川改修之碑 安長堤防

碑文より

『千代川は因幡平野を潤し、昔は筏や舟便にも利用されて流域住民に恩恵を与えたが、その半面、しばしば氾濫して住民を苦しめた。大正七年の大洪水はとくにその被害が大きく、沿岸一市十七箇町村は結束して連合治水会を組織し、政府に治水策を要望するに至ったが、大正十年には下流の河身変更を中心とする千代川改修期成同盟会に発展し党派をこえた全住民の熱烈な運動が展開されることになった。運動は功を奏して、大正十二年、千代川改修は国の直轄事業として行われることになり、その後さらに曲折はあったが、昭和六年、秋里・江津の水田を掘さくして直線に流す新千代川が通水し、つづいて新袋川も完成して、下流住民は一応水禍の不安から免れることを得、鳥取市の産業もようやく安定した発展へと歩み出すことがで

きるに至った。更に多年の宿願である河口の改修が終れば、千代川の改修はほぼ完成する。

いまや河原町から鳥取港まで改修された千代川を清流は走り、堤防下には美しい市民運動場が生まれ鳥取市勢はその両岸に着実に発展して、荒狂った千代川は昔語りとなろうとしているが、ここに至るまでの先覚者の努力と沿岸住民、とくに鳥取市民の団結による強力な運動の成果が、千代川の流れが絶えないごとく、後々までもたたえつづけられることを念願して、ここに改修記念碑を建立する。時は改修事業が着手されてより満五十年、鳥取市制実施八十五年に当る。

昭和四十九年十月一日

千代川改修記念碑建立実行委員会
会長 鳥取市長 金田裕夫

2 浜坂の溺死海会塔

袋川と千代川とのかつての合流点であった浜坂に、溺死海会塔が建てられています。寛政 7 年 (1795) の乙卯水で亡くなった人々の供養塔で、溺死した人々の遺体がこの前に流れ着き、悲惨な光景が広がっていました。その七回忌法要を営んだ折り、享和元年 (1801) に寺僧規外が建立したものです。高さ約 2m の玄武岩には表面に「溺死海会塔」と刻まれ、両側面と裏面にびっしりと記された碑文は水害の悲惨さを伝え、未然の予防を警告しています。これらは鳥取藩の儒者伊藤惟猷 (左内) の撰文と、筆力雄渾といわれた堀徹 (玄溪) による碑銘といわれています。

また、『鳥府志』には「乙卯洪水供養塚」として碑のイラストとともに紹介されています。

碑文より

『溺死海会塔、在于本州北郭之北、去海数百歩、負都築之山、臨千代之水、廻規外禪師之所建也、寛政乙卯秋八月丙午、本州大水、々深者殆丈、浅者亦不下于数尺、衆民惶恐、登屋陟而避之、当其衝者、大木偃伏、連屋漂流、哀籲之声与波湧、往々葬于魚腹之中、其幸为人所救活者、亦及水帰壑則田無立毛、室如懸馨、夫人自為謀莫違胥頤、頼有司奉命、賑給乏絶、僅得免于餓矣、以余之所聞也、文禄之癸巳、寛文乙亥、其他則寛文癸丑、与享保己酉、皆洪水傷民而民之死于水、莫甚于是歳也、禪師親見之憫焉、誓諸其心、思欲建塔、構宇以追修彼冥福也、乃飛錫東都、募縁多方、歸也則詣官請日、昇平之世、民之殞手非命、唯水之為慘、而乙卯之災尤甚、其幸而免者、皆得浴上恩以保其生矣、独悼沈溺之鬼、弔祭不至、精魂無依、哀籲之声、猶在水浜、慘莫慘焉、凡有人心、無不悽惻、況在仏種、何得忽然、敢請就間地而建石為塔、側構小宇、薦拔供養、以追修彼冥福、官嘉其志、允其所請、今歳辛酉之秋、石塔先成、廻就我父某需勒其事于石、父廻命諸余惟猷、不敏其何敢、亦佳命之不可辞、且深感禪師之慈心、又能可以興起人之慈心也、不敢辞識其所縁爾、余又聞之、禪師幼在草莽、長猶秉鄙事、一朝慨然慕釈氏之道、廻薙髮持戒、清真無欲、隱処一廬、出乞入息、杖鉢之外、無復長物、髣髴于曹溪禪師之風、雖



昭和 36 年の洪水
(出典：『鳥取の災害』鳥取市
社会教育事業団発行)

根本治水の要

「斯く年々歳々水災に依りて、多大の損害を被り、努力の結果を挙げて、洪水の跳梁に委するが如くんば、全くバベルの塔を築くに似。随って積みば随って崩れ、殃を繰り返して改善の途を構ずる事なきは智なりというべからず。何等積極的の治水策を講ずるなく、天然をして暴威を逞うせしめしめ、かくの如き惨禍を招徠したり、・・・吾人はこの際何物を犠牲に供するも、根本的、治水策の確立を鋭意せざるべからず、一時の姑息の治水策に甘んずることなく、百年の大計を策すべき也。」
《大正 9 年 9 月 24 日付『鳥取新報』言論欄》



千代川改修之碑



浜坂の溺死海会塔

6. 袋川の三変遷 鳥取城下の整備と河道改修物語

千代川・袋川の流路の変遷



袋川下流部一帯は沖積層で軟弱地盤であるため、浸食が甚だしく、流路の蛇行は千代川水系の中でも、最も激しかったといわれています。久松山山頂部に木津上された鳥取城は、池田長吉が城主になると中腹に二ノ丸を築き、城池を広げて外濠を拡張しました。次いで池田光政が姫路から国替で城主となると、さらに城下町を拡大する必要が生じました。袋川は、その都度付け替えが行なわれていきました。

(1) 第一期改修：池田長吉による付け替え

慶長6年(1601)関ヶ原で東軍に味方した池田長吉が鳥取城主に封ぜられました。入府した池田長吉は城の拡張と城下の整備を行いました。若桜町惣門(現・市役所)から柳蔵(現・醇風小学校)に至る間の堤防を築き、これに柳を植え、外側に堀をほって、因幡川(袋川)の水を通じました。また、国府町宮ノ下の町外れから奥谷方面に向かって流れていた流れを、同じ宮ノ下から今在家方面に変えて、大杓から市街地に流れ込むように改修したといわれています。

いけながよし 池田長吉

元亀元年(1570)犬山城に生まれ、兄の姫路城主・池田輝政と共に羽柴秀吉に仕えました。天正10年(1582)6月に秀吉の養子となって羽柴姓を称し、その後近江国蓮華寺、佐倉あわせて3万石を領しました。慶長5年(1600)徳川家康の上杉景勝征伐に従い、関ヶ原の戦いでは輝政と共に渡・新加納・岐阜を攻め、さらに近江水口に長東大蔵少輔家正を攻め滅ぼしました。この時家康は長東の蓄えていた金銀財宝を長吉に与えたといわれています。関ヶ原の戦功で鳥取城に封ぜられ、因幡国のうち巨濃(岩升)・邑美・法美・八上の4郡6万石を領有しました。

(2) 第二期改修：池田光政による付け替え

元和3年(1617)、池田光政は42万石の姫路より6万石であった鳥取に移封されたため、因幡・伯耆合わせて32万石の所領を治めるためには城下町を大幅に拡大する必要がありました。そこで、吉方稲平のドント(現・修立小学校の前あたり)から今の玄好町、材木町の境にある出合橋にかけて14~15丁(1.6km)の間、幅7間(12.6m)、深さ3間半(6.3m)の開削を行い、池田長吉の掘った川の外側に新しく川の流れを変えました。池田長吉の作った柳堤より内側は侍屋敷、外側は町人町とし、その中にもまた侍屋敷

と寺院を配置しました。新川堀削工事は農業の妨げにならないように1・2月の農閑期に限って行われ、また、掘り出されたおびただしい土で土手(堤防)が築かれ、それに竹を植えて外郭の要害としました。

いけだみつまさ 池田光政

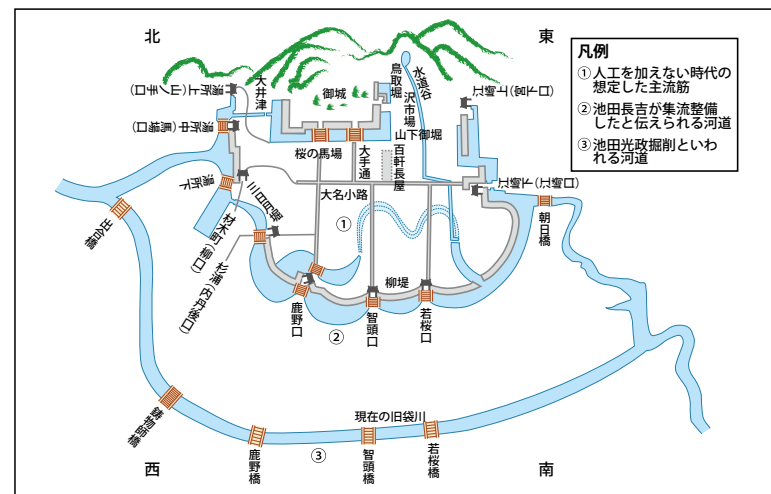
姫路藩42万石を領する姫路藩主・池田利隆の嫡男として慶長14年(1609)岡山城に生まれました。元和2年(1616)利隆の死により8歳で姫路藩主となりましたが、翌年3月、播磨は中国の要地と幼少を理由に因幡・伯耆両国32万石へ転封となり、元和3年(1617)から寛永9年(1632)までの16年間在城しました。光政が初めて鳥取城に入ったのは翌4年3月の10歳の時で、寛永9年に岡山へ転封するまで7回帰国しています。江戸時代初期の名君として名高い人でもあります。この時期の藩政は家老を中心に執行されており、多くの治績をあげたのは岡山城主時代といわれています。お国替で鳥取城主となった従弟・池田光仲の後見的存在でもありました。

やげんぼり 薬研堀

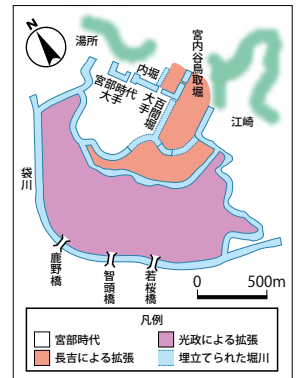
薬研堀とは、薬研の形、すなわちV字形になった底の狭い堀のことをいいます。

池田光政の河身変更によって寺町あたりから江崎方面に切り込んで流れた袋川が遮断され、この古川筋を薬研堀と呼ぶようになりました。なぜ薬研堀といわれるようになったのか、『鳥府志』では、川筋の跡に左右から次第に砂が流れ込むことにより、真ん中の筋のみが深くなって、薬研の形に似ていたことから呼ばれ始めたのではないかと考察しています。

また、その後、池田長吉が掘った若桜町惣門から柳蔵までの堀も薬研堀と呼ばれるようになり、この堀の跡は、昭和29年頃にこの工区の都市計画が完成するまでは、西町あたりの所々に残っていました。



▲鳥取城下町の河道変遷略図(資料:『鳥取県史6』)



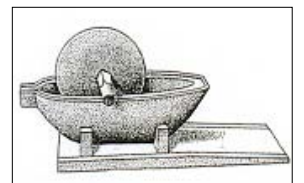
鳥取城下の拡張変遷図(資料:『新修鳥取市史2』)



池田光政

薬研とは

主として漢方の薬種を細粉にする金屋製または硬木製の器具。形は舟形で中が深く窪んでおり、これに薬種を入れて、軸のついた円板状の車輪様のものを転らせて薬種を押しつぶします。



薬研



薬研堀跡



かつての川筋跡

扇状地・暴れ河道を伝える八丁竜の伝説

・**新町**は昔、**八丁**といい、かつて大きな竜が出てきて荒しまわった。
 ・南の方に暴れ込んで、**安田**を作り、**毛田**の皮をむいて血を流したり、**今在家**や**新通り**の周辺に大きな沢を作って住みついた。
 ・そこで八丁の役人が策を講じて竜を追いやり、八丁の周りには、肥沃な土地が広がった。
 ・塩釜を炊いた所には**塩釜神社**を祀り、大きな杵を打ったところを**大杖**と呼び、竜を追い払った吉方を**吉方**といい、それまで家がなかったところに家が建ち始めたので、今在家と呼ぶようになった。

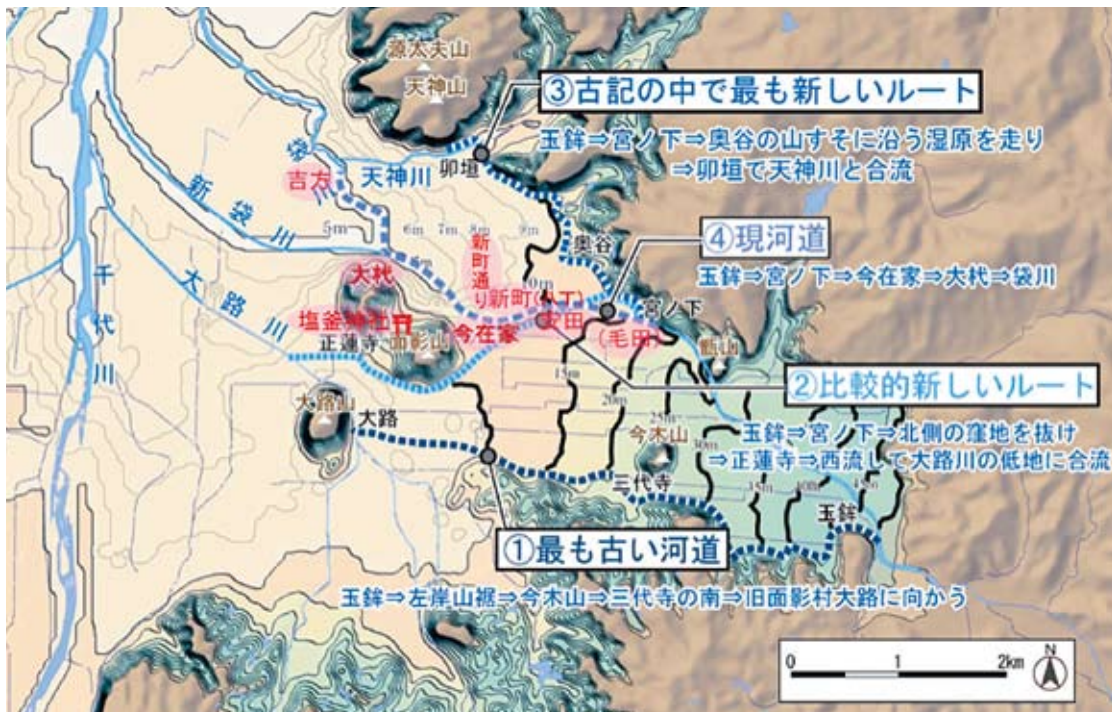
(3) 袋川旧河道跡

①袋川中流域（因幡川）辺りの旧河道跡

袋川は、もともと因幡川（国府川）の下流域の名前でした。
 因幡川は、国府町宮ノ下の町はずれから奥谷方面に流れ、岩倉、卯垣のすぐ前を通り、天神川に合流し、立川を経て、稲葉山の山裾に沿って鳥取城下へと流れていたと伝えられています。現在では宮ノ下の町はずれに流路の跡は見られませんが、昔その川岸であったといわれるところに宝篋印塔が残っており、小さな上屋の中に保存されています。また、奥谷あるいは岩倉あたりに立って田んぼを眺めると、川土手跡と思われる畦が大きくうねるように湾曲し、一定の幅で田んぼが低くなっているところが目につき、かつての袋川の跡ではないかと考えられています。

②城下町辺りの旧河道跡

さらに、城下町中を流れる当時の袋川の流れについて、『鳥府志』にその流路を見ることができます。妙要寺のいと場（箕浦のいと場）の上より葉研堀へ続き、寺町侍屋敷をぐるりと廻って小姓町筋に架かる土橋へ流れ、元大工町の土橋より山伏堀へ出て、江崎、掛出しの土橋の下を流れて御銀札場を迂回し、香河家（日赤病院裏あたり）の庭園の森のところからまた上へ曲がり、学館内で曲がって若桜往還を横切り、侍屋敷を下って新蔵（藩の米蔵。西町愛真幼稚園あたり）の堀からまた上がり、荒尾家の屋敷（愛真幼稚園の向い側西町1丁目の一角）へ入って智頭往還を横切り、荒尾家・福田家の屋敷（西町3丁目の一角）境へ入って、羽田家・唯家（鳥



▲袋川旧河道想定図（赤字は「八丁竜の伝説地」）

取検察庁、西町4丁目の一角）の屋敷の後ろ流れて、柳蔵（醇風小学校のあたり）惣門の内堀へ御蔵沿いに進み、杉浦惣門の前へ出て三日月堀から丹後町（材木町）の堀に出て、最後は今の袋川筋を丸山の方へと流れ出ていくという様子が書かれ、流路が大きく蛇行して流れていたことがわかります。

(4) 城下町の備え

①惣門

曲輪内（城郭内）より町屋街に出入りする門のことです。池田長吉は若桜町惣門から柳倉に至るまで築いた堤の内側に町人を住ませました。藩士は城内に住居を建て、鹿野口、智頭口、若桜口など九つの門を設けて外部との連絡通路としました。左右に塀のある屋根門で、大戸の脇に小さい潜り戸の通路を備え、内に番小屋が設けられていましたが、平時は開放されていました。この九門の内側を「惣門内」ともいいます。

②柳堤

池田長吉により築かれた土手には柳が植えられ、「柳土手」と呼ばれるようになりました。

③桜土手

池田光政により築かれた土手には竹が植えられました。明治に入ってから竹藪が刈られ、桜が植えられました。

④いと場

袋川への降り口のことをいいます。袋川の土手から水辺に通じる石段の通路を設けたもので、20余りのいと場が作られていました。『鳥府志』では「為登」という字が当てられ、鳥取、但馬、丹後の方言で、川べりの洗濯場を意味するといわれています。

洗い物や水汲みのほか、袋川では生活に欠かせない水路として船が利用されていたので、人の乗り降り、荷物の積み降ろしの場としても使われてきました。藩の米蔵に近い場所では特に大きく作られていました。また、いと場以外のところを全て竹藪としたのは、洪水時の越流を防ぐとともに、敵の来襲に備えた防御線を兼ねるためでした。

茶町のいと場は市街地にも近く、足場もよく整っていたので一番よく利用され、屋形船での川遊びや、賀露港とを結ぶ巡航船も発着していました。賀露港からは海産物を積んだ行商の人々が往復し、茶町からは日用雑貨が積み、智頭方面からの木材も筏に組まれて千代川を下り、河口からは人力で袋川をさかのぼって茶町近辺のいと場から陸揚げされたため、材木町、鋳物師町辺りが賑わい、問屋や旅館、料理屋などが多く立ち並んで

九門

宮内口（江崎上）、江崎口（江崎下）、若桜口、智頭口（大手）、鹿野口（柳口）、内丹後口（杉浦）、丹後口（湯所下）、馬場口（湯所中）、山手口（湯所上）



若桜口あたりの市街



柳堤跡



袋川（桜土手）

武者走り

城壁や城の周りの土手の内側に設けられた通路のことをいいます。鳥取城下では袋川の付け替え工事に伴い、袋川の土手内に幅2間（約3.6m）の通路がつけられました。土手内の第一線には寺院、武家屋敷を配備し、その内側から惣門までに町屋を配置して、敵に包囲された場合に本陣と戦場の輸送連絡路となる、兵站線を確保するために備えたものです。

千代川の治水史

約300年前、旧藩時代千代川の洪水を防ぐ重点地域は、八東川より下流域でした。治水事業が最も活発に行われたのは、江戸時代初頭の1600年頃からになります。

千代川の左岸を治める鹿野城主亀井氏は新田開発等の経済的な目的のために、また、右岸側の鳥取藩主池田氏は城下の拡張の目的で、さらには袋川の付け替え等の戦略的な目的のために、治水事業を競って行いました。藩政時代の代表的な堤防や護岸には、胡摩土手・榴堤・鯉口堤、助け土手・松土手などがあり、その中でも胡摩土手はその一部が現存して、今なお治水の機能を保持し続けています。

しかし、江戸時代末期から明治時代には、隔年に近い頻度で洪水が繰り返され、水害は年々増大していったにも関わらず、財政難のために大規模な治水工事は行われませんでした。

こうした状況が続くうちに、大正元年と7年に起こった洪水で千代川周辺の土地は大被害に見舞われ、大正12年、ついに国の直轄事業として抜本的な治水事業が千代川で行われることになりました。その後、昭和3年には袋川の新川開削が始まり、昭和15年に千代川下流の付け替え工事、昭和49年には戦前からの最大の懸案であった、河口付け替え事業が着手されました。このようにして、現在見られるような千代川の姿が形成されてきたのです。

いました。

しかし、昭和27年の鳥取大火以後、袋川の両岸では護岸工事が行われ、いと場は姿を消しました。



▲惣門、柳堤、桜土手、いと場の位置図

(5) 第三期改修：千代川改修計画に伴う付け替え

池田光政により付け替えられた袋川は、川内（鳥取城側）の堤防を高く築くことで、洪水の時には川外に流れをあふれさせ、城下町を守っていました。しかし、明治・大正の時代とともに鳥取市街地の規模は拡大するばかりで、大正元年、同7年、同12年と相次いで起こった洪水で鳥取市は完全に水没し、早急に抜本的な治水対策が必要とされました。大正12年の洪水に端を発し着手され、大正15年（昭和元年）から昭和9年に及んだ大工事によって、鳥取市秋里付近で大きく蛇行していた千代川は、海へ直進する新しい河川に改修されました。

また、千代川の改修計画にあわせて袋川の流れを大木の曲がりから鳥取駅裏・富安・行徳・田島を経て当時の千代川に放流する放水路が計画されましたが、膨張し続ける鳥取の市街化をはばまないよう、水理的条件に加えて都市計画の未来線と調和するようにルートが変更され、現在の新袋川の姿となりました。かつて放水路が新設された時にはこの放水路を袋川と呼び、これにより以前の流路のうち大木から北の袋川を旧袋川と呼ぶようになりました。しかし、平成18年4月より旧袋川はもとの呼称の袋川へ、大木から西進する袋川は新袋川へと呼称が変更されました。

この袋川放水路の工事も大正15年（昭和元年）から昭和9年に及ぶ大工事となり、鳥取市の都市基盤の礎の一つとなりましたが、戦後の鳥取市街地の拡大は当時の予想をはるかに越え、市街地を貫流する川となり、新たな洪水防御の必要性が高まることとなりました。

▼河道変遷の図



(6) 袋川と殿ダム

① 百谷ダム

本陣山および稲葉山に源を発し、立川町五丁目付近で袋川に合流する天神川の上流に位置しています。この天神川流域はほぼ全域にわたって不完全な護岸によって形成され、河川改修はほとんど行われていない状態であったため、台風や豪雨などによる出水に際しては、洪水量の流下能力の不足に加えて合流河川である袋川の流下能力不足のため、たびたび氾濫して多大な被害を及ぼす浸水常習地帯でした。流域のもつ気象や地形等の特性と流域開発の進展状況や経済的見地など様々な問題と見解が論じられ、ダムによる洪水調整によって被害防除を図ることが最適であるとの結論が下されました。洪水調節を行うことと天神川沿いの既成農地の灌漑用水およびその他の用水の補給などの流水の正常な機能の維持と増進を図ることを目的とし、治水ダムとして昭和45年に着工し、昭和49年に完成しました。



袋川付替地



大杵樋門（袋川側）



千代川と新袋川の合流部（古市）



千代川と袋川の合流部（浜坂）



百谷ダム

千代川の河道付け替え事業

昔の千代川は東に大きく蛇行していました。このため、洪水でたびたび堤防が決壊し氾濫しました。これを解消するため、大正15年から千代川の川の流れを付け替える工事が実施され、昭和5年に現在の川のすがたになりました。



千代川の河口付け替え事業

千代川の河口付近は日本海の荒波などの影響で土砂が堆積し、洪水時には川の水が流れず河口付近の水位を押し上げていました。そこで、昭和50年代に河口の付け替え事業が行われ、現在のような姿になっています。

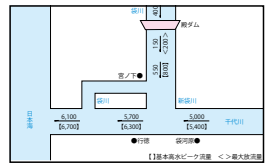


2 殿ダム

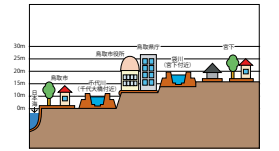
千代川袋川の流域に住む人々が安全で安心して暮らしていくためには、河川の水の流れを適正に管理していく“治水”と、河川の水の効果的な利用を図っていく“利水”という2つの取り組みを、河川本来が持つ自然の環境を維持しながら進めていく必要があります。千代川流域の中心都市である市街地では、昔から何度も洪水による被害を受けており、その度に川の堤防を高くしたり、川の幅を広げたりする対策を講じてきました。また、雨不足の影響で日照りが続き、渇水被害にも幾度となく見舞われてきました。このような状況を受け、千代川・袋川の水を安全に流下させながら、増大する水利用に 대응していくことを目的として殿ダム建設事業に取り組んでいます。

昭和37年から鳥取県による予備調査に着手し、昭和43年に建設省(現・国土交通省)直轄事業として引き継いだ後、昭和60年に実施計画調査開始、平成3年に建設事業着手、平成12年からは本格的に付替道路工事に着手、平成19年にはダム本体工事に着手し、平成23年度の完成を目指しています。

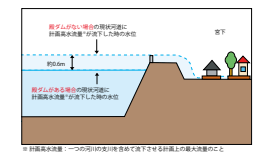
殿ダムはロックフィルダムとして高さ75m、総貯水容量12,400,000m³、有効貯水容量11,200,000m³で洪水調節、工業用水の供給水道水の安定供給、河川環境の保全、水力発電の4つを目的としています。



(図-1) 現在の計画高水流量配分図



(図-2) 鳥取市街地と袋川の高さ関係



(図-3) 殿ダムの治水効果イメージ図



殿ダム完成イメージ図

7. 鳥取城築城と袋川



鳥取城址（三ノ丸跡）

歴代の鳥取城主	
天文14年(1545)	山名豊通築城
元禄6年(1663)	城番・武田高信独立
天正元年(1573)	山名豊国
天正9年(1581)	吉川経家
天正9年(1581)	宮部善祥坊継潤
慶長5年(1600)	池田長吉
元和3年(1617)	池田光政
寛永9年(1632)	池田光仲
明治2年(1869)	池田慶徳にて版籍奉還



鳥取城縄張図



鳥取城門（復元）

(1) 鳥取城の築城

天文14年(1545)に因幡守護の山名誠通が、天神山城の出城として久松山山頂部に築城したのが始まりといわれています。当時、誠通は同族の但馬守護山名祐豊と争い、その来攻を防ぐためにこの城を築き守りを固めました。城が完成して3年後の天文17年(1548)、祐豊の攻撃を受けて天神山城は落城し、誠通も乱戦のなかに陣没しました。

鳥取城

久松山山頂の山上ノ丸と、西麓の山下ノ丸の二つに分かれています。誠通の後は山名祐豊の弟・豊定が入り因幡山名氏15代を継いで16代豊数、17代豊国と天神山城を本拠として、鳥取城には城番として家臣の武田高信が入りましたが、永禄7年(1564)に高信が天神山城を攻撃して当主の豊数が戦死し、天正元年(1573)に豊国は毛利氏に滅ぼされた出雲尼子氏の遺臣・山中幸盛の助けを受けて武田高信を追い、以後鳥取城を本拠としました。この頃になると毛利氏一族の吉川元春の勢力が山陰道を東漸し豊国もその配下に属することになりながら、天正8年(1580)羽柴秀吉の因幡攻めが始まると豊国が降服し、吉川経家が開城した後は城攻めに功のあった宮部善祥坊に与えられ5万石を領しました。しかし、子の兵部少輔が関ヶ原の戦い(1600)で西軍についたため没収され、池田長吉が城主となりました。長吉は山上の住居が不便なため、中腹に二ノ丸を築き堀を広げて外濠を拡張し、元和3年(1617)には池田光政が姫路から国替えで入りました。光政は袋川を南に押し出し、その懐に三重の防御線を構築しました。寛永9年(1632)には岡山から従弟の光仲が入封し、その子孫が明治維新まで続きました。なお天守閣は、豊国が天神山城から移築した三層のものを長吉時代に二層に改修され、元禄5年(1692)落雷によって焼けてしまったと伝えられます。明治維新後は陸軍省の所管となって明治12年に建造物はすべて壊されましたが、山上に天守閣・月見櫓・東井戸跡、西麓に二ノ丸・天球丸・馬場跡などの石塁や石垣が残り、現在残る城跡は長吉造営以後のもので経家が在城時の遺構は不明ですが、戦国争乱期の山城から近世の平山城・平城への移行過程を示すものとして学術的にも貴重とされ、東方の太閤ヶ平(本陣山)を含めて国の史跡に指定されています。

(2) 羽柴秀吉による鳥取城攻め

1 鳥取城開城の悲哀を伝える四山

久松山

鳥取市街地の東北にそびえる山で、山上に鳥取城があったため「城山」とも呼ばれている標高263mの山です。全山深成岩である花崗岩からなり、山勢は急ですが高さはほどよくハイキングなどの好適地となっています。登山路は長田神社口または久松公園から二の丸へ抜ける道、円護寺から雁金山の峰伝いに進む道、樗谿神社から太閤ヶ平・三枚札を経る道など4つのルートがあります。頂上には鳥取城の「詰の城」、すなわち本丸の天守閣跡・月見櫓の跡や古井戸などが残っており、山頂をやや降った辺りには門の跡・枡形なども見ることができます。

丸山

鳥取市久松山の旧鳥取城址の北方の尾根から国道9号を隔て、袋川と円護寺川の合流点南側に位置する標高85mの独立小丘です。山頂には丸山城がありました。山体は久松山と同質の花崗岩の上に第三紀の礫岩が不整合にのっています。山の西南側には採石場があり、西側の崖には天然記念物に指定されている離水海食洞があります。また、山の下には丸山城主であった奈佐日本之助の死を弔って祭ったとされる河童地蔵と、雁金城主であった塩冶周防の墓が建立されています。

雁金山

雁金山はかつて愛宕山と呼ばれていた山で、丸山と久松山との間にあって山頂には雁金尾城と雁金山城が築かれていました。規模は皆程度ですが、丸山の出丸と本城とを連絡する重要な要害でした。羽柴秀吉は播州三木城の兵糧攻めを完了すると因幡に入り、「三木の干殺し、鳥取の渴殺し」といわれる鳥取城の兵糧攻めが行われました。鳥取落城の決め手となったのが雁金山尾根の激戦で、秀吉軍の宮部善祥坊により“道祖のたわ”が落とされ、鳥取本城と雁金山城、丸山城の二つの出城との連絡が切断されてしまいました。道祖のたわは湯所から円護寺へ越える峠で、久松山と天徳寺山との鞍部にあたる所です。ここに宮部善祥坊が陣小屋を構え、溝(空堀)を掘って久松山への尾根治いの糧道を断ち、足下では袋川水路の補給路をも押さえ、この道祖のたわ切りが久松山の兵糧攻めを決定的としました。

本陣山

本陣山の呼称は鳥取城攻撃時に羽柴秀吉がここに本陣を構えたことに始まり、本来の山名に関しては諸説あります。『陰徳太平記』には「本陣を帝釈山に布陣」とあり、『因幡誌』にも本陣山はもとは帝釈山といい、かつて摩尼寺のあったところとして記されています。しかし『鳥府志』



太鼓御門跡

太鼓御門櫓跡

太鼓御門は、三ノ丸入口に位置する城内の重要な櫓門で、中ノ御門を通過して登城した家臣は、次にこの太鼓御門を通過して二ノ丸、三ノ丸の御殿へ上がりました。門の渡櫓は桁行十二間(約22m)、梁行二間半(約4.5m)あり、鳥取城の様子を伝える絵図には向側の石垣へ渡し懸けた御門が描かれています。太鼓御門の渡櫓の上にある大太鼓が昼夜十二時に打たれたと『鳥府志』にあるように、太鼓御門の名は、城の内外に時刻を知らせるための太鼓が置かれていたことに由来するといわれています。また、賀露神社(鳥取市)、名和神社(鳥取市名和町)、美保神社(鳥根県美保関町)には、鳥取城で使われていたという伝承を持つ大太鼓が保存されています。



四山の位置図



久松山

奈佐日本之助の墓



丸山城城主の奈佐日本之助は元但馬奈佐谷の領主であり、但馬地方の秀吉戦に敗れたのち鳥取城主吉川武部少輔経家に仕えてこの城を守りつつ毛利軍から送られてくる兵糧を舟で袋川から雁金岩を経由して鳥取本城に運び城兵数千人の命を保っていました。鳥取本城は奈佐日本之助の巧妙な兵糧輸送により頑強に抵抗を続けていましたが、宮部善祥坊によって唯一の補給路であった雁金岩を奪取され連絡を断たれた本城は飢餓地獄となり、ついに落城しました。雁金の城将塩冶周防もこの山に退き鳥取城あけ渡しの報に日本之助と共にその責を負い、天正9年10月25日この地に無念の涙をのみ自刃しました。山下の辺りに祭られている河童地藏は水に縁のある日本之助のために建てられたものと伝えられ、塩冶周防の墓とともに両雄の忠勇義烈を讃えた慰霊碑が建立されています。

では秀吉が現在の摩尼帝釈山に着陣してその後、現本陣山に移陣したと説明しています。山頂の太閤ヶ平では堀が電波塔の敷地と境し、一段高くなった雑木林の中には本陣跡の平坦面が広がっています。

2 一回目の鳥取城攻略

天正8年(1580)、姫路城にあった羽柴秀吉は戸倉峠を越え、因幡へ進撃して若桜、用瀬、鹿野の諸城を手中に収めて鳥取城の山名豊国を攻めました。降服すれば因幡一国を与える代わりに、しなければ人質にとった娘をはりつけにすると脅したところ、豊国はあっさり降服したので、秀吉は山陰の深い雪を避けるようにして一旦姫路へ軍を引きました。そして、因幡中の穀物を時価の数倍の値段で買い占めはじめました。

天正8年(1581)9月、山名豊国の追放

毛利氏に背き降服した鳥取城では、間もなく山名豊国の家老の森下道誉、中村春続らによって広島毛利氏につくべく謀反が企てられ、9月に豊国を城外へ追放しました。そして毛利軍の山陰道総大将吉川元春に毛利一族の中からしかるべき人物を鳥取城番として派遣するように要請しました。

3 二回目の鳥取城攻め

吉川経家の入城

そこで吉川元春は天正9年(1581)正月、石見国福光城主・吉川経安の嫡男、吉川経家を鳥取城の城将に任じ、経家は3月18日に入城しました。直ちに籠城の準備に取りかかりましたが、時すでに遅く、兵糧米の蓄えも不十分のまま、7月には集結した羽柴秀吉の大軍3万余騎に包囲されました。これを迎える鳥取城防衛軍方は、久松山頂上の本丸に城主・吉川経家、山麓の二ノ丸と三ノ丸には中村春続・森下道誉など山名の遺臣が陣を敷き、出城の雁金城に塩冶周防、丸山城には奈佐日本之助、山県九左衛門、佐々木三郎左衛門らを配し、城兵は百姓・町人を合わせて総勢4000名ほどであったと伝えられています。

羽柴秀吉の久松山包囲作戦と兵糧攻め

城兵の激しい抵抗を予想した羽柴秀吉は、嚴重な包囲網を敷いて兵糧攻めの作戦をとりました。約10丁(1090m)ごとに櫓を設け、櫓には駿馬の武士20人、弓の射手100人、鉄砲100挺ずつ配置し、約5丁(545m)ごとに番所を置き、番所では番士5、60人ずつ入れ替わり夜番と廻り番をしたと『太閤記』に記されています。これらの櫓と番所の前方には杭を打ち並べて柵を造り、湊川(袋川)には網を張って、鳥取城防衛軍を一步も外へ出られないようにしました。包囲線は全長約12kmにもおよんだといわれています。

雁金城の落城と補給路の断絶

吉川経家は吉川元春に兵糧の補給を要請しますが、伯耆の南条元統に阻まれ、毛利輝元、小早川隆景も美作・備中の戦いで経家に援軍を送ることが出来ませんでした。包囲された状態の続く中、鳥取城内では兵糧が次第に尽きて木の根、草の根などありとあらゆるものを食い尽くす様相となった頃、秀吉方の宮部善祥軍が天徳寺から円護寺に越える峠である“道祖のたわ”を強襲したため、本城と雁金城の連絡路が切断され、重要な補給路であった湊川(袋川)水路も失ってしまいました。

天正9年(1581)10月25日開城、吉川経家自決

羽柴秀吉は堀尾吉晴を使者にたて、開城を勧告しました。鳥取城籠城から4ヶ月、毛利からの援軍もなく兵糧もなくなり飢餓状態となった城兵を救うため、経家は自らの命と引き替えに城兵の助命を条件として開城を申し入れ、降服しました。秀吉は浅野長政を遣わして酒肴を贈り籠城の労を慰め、鳥取城では決別の宴が開かれ、経家は翌10月25日に開城して久松山麓真教寺に入り、自刃しました。中村春続や森下道誉らもこれに従い自刃し、鳥取城を巡る攻防戦は終焉を迎えました。

防己尾城址と吉岡将監

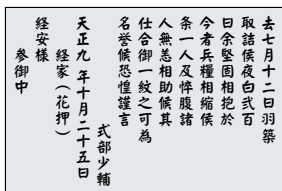
鳥取市福井から金沢の間にある、湖山池に突出した山に防己尾城址があります。天正9年(1581)に羽柴秀吉が鳥取城を包囲した際、毛利氏との後方連絡を断つため水軍に防己尾城攻略を命じましたが、迎え撃った吉岡将監と弟の左近が果敢に戦い、秀吉近習の黄母衣衆を討ち取り、さらには秀吉が功績を誇る千成瓢箪の馬印をも奪取りました。また、情け深い将監は黄母衣衆の死を悼み、六地藏を安置して懇ろに葬ったとも伝えられています。



▲久松山を取り囲む羽柴秀吉の第2次鳥取城攻めの布陣図



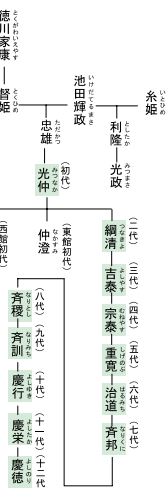
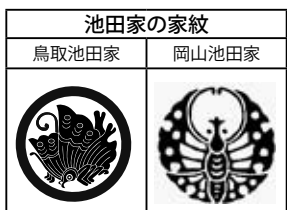
吉川経家像



吉川経家の遺書



池田光仲



池田家の系図

『信長公記』にみる飢餓地獄の様子

「初めのうちは5日に一度、3日に一度鐘をつき、鐘が鳴ると兵士は皆柵ぎわまで出て木草の葉を取り、なかでも稲株はご馳走とし、その後これも尽きると牛馬を食らい、霜露にうたれ、弱き者は餓死際限なし。餓鬼のごとく痩せ衰へたる男女、柵きわへ寄りもだえ、焦がれ、助けてくれと叫び、叫喚の悲しみ哀れなる有様、目も当てられず。

鉄砲をもって打倒し、ようやく息をしている者を、人が集まり刃物を手に手に持って関節を切り、身を取って食べた。身の中でもとりわけ、頭部は味が良いとみえて、頸から上を奪い合った。とにかく、命ほどつれなきものは無い」(『信長公記』)

吉川経家

吉川経家は石見国福光城主・吉川経安の嫡男として天文16年(1547)に生まれ、幼名を千熊丸、通称小太郎といい、のちに式部少輔と称しました。吉川元春の要請のもと鳥取城に入った経家は、決死の覚悟をしていたとみえ自らの首桶を持参していたとも伝えられています。

鳥取城開城の前、経家は父経安や4人の子どもたちに遺書をしたためています。部下の助命を願って深く切腹した経家は、「とっとりの事、夜昼二百日こらへ候。兵糧つきはて候まゝ、我ら一人御用にたち、おのおのをたすけ申し、一門の名をあげ候。そのしあわせものがたり おききあるべく候...」と石見国福光にいた4人の子どもたちに書き残し、本家の吉川広家にあてた遺書には「日本二つの御弓矢境において悴腹に及び候事、末代の名譽たるべく存じ候」とあり、織田信長と毛利氏という「日本二つの弓矢」の正面对決による鳥取城攻防戦での切腹を、大きな名譽と最後に結んでいます。羽柴秀吉は経家の武勇を惜しみ経家のみ助命を試みますが、経家は城将としてそれを拒み、死に臨んで書いた遺書はその清々しい心事を物語り、35歳において潔い見事な最期を遂げたことは武人の鑑として歴史に高く評価されています。

(3) 鳥取藩の藩祖・池田家(岡山とのお国替え)

寛永9年(1632)から明治2年(1869)の廃藩置県までの約240年間、ほぼ江戸時代全期を通じて鳥取城主につき、因幡・伯耆32万石を治めた池田光仲とその子孫12代を鳥取(因州)池田家と呼び、鳥取藩(因州藩)の藩祖としています。

1 池田光仲

池田光仲は寛永7年(1630)6月18日岡山城主池田忠雄の嫡子として江戸に生まれ、幼名を勝五郎といい、父の忠雄がすぐに病死したことにより2歳で家督を継ぎましたが、幕府は因伯32万石への転封を命じました。9

歳で元服して光仲と改名し、12歳の時に百日就国で一度帰城しています。国政は家老の荒尾成利を中心として行われていましたが、紀伊大納言徳川頼宣の娘・茶々姫と結婚して3年後、慶安元年(1648)に19歳で正式に帰国して自から藩政を執行するようになります。藩主親政へと移行させる間、老臣荒尾成利と衝突を繰り返す、ついに承応元年(1652)成利の独断的行為十余条をあげてその責を問い、成利の家老職を罷免しました。隠居するまでの約30年間は全国的にも諸制度が確立した幕藩体制の確立期でもあり、この事件を境に光仲の親政は確立し、二男仲澄を分家して家の永続の基礎などをつくりました。また、光仲は徳川家康の曾孫にあたるため池田家は徳川幕府と深い関係にあり、藩主の名前は時の徳川將軍の名前から一字をもらってつけられています。(例：3代將軍徳川家光→初代藩主池田光仲)

2 池田家の墓所

元禄6年(1693)7月7日藩主池田光仲が鳥取城にて64歳で死去し、選定の結果墓所が奥谷に定められました。以後この地が池田家代々の廟所となり、江戸時代における大名家の葬法や階層別による墓制を伝える極めて貴重な遺跡であるとして、昭和45年に県の指定となり、現在では国の史跡に指定されています。

光仲の埋葬に合わせ、ここに「千岳庵」が建立されました。千岳庵は翌年に伯耆国久米郡定光寺からその末寺の寺号を貰い受けて「清源寺(せいげんじ)」と改められ、池田家の菩提寺である興禅寺の末寺として、明治初年に廃寺となるまで墓所の管理を担っていました。藩主の遺骸は烏帽子、狩衣の装束で柩に納め、まず菩提寺である興禅寺に安置されました。光仲は9日に興禅寺に移され、40日以上寺に安置された後、8月23日に葬儀が執行されています。興禅寺で霊柩を御籠(柩を入れる箱)に移し、定められた葬列で宮下のケデン河原の起龍堂に納められて法要が行われました。歴代の藩主は鳥取で逝去した場合も江戸やその他の地で逝去した場合も必ず奥谷に葬られました。8代斉稷(なりとし)だけは江戸の弘福寺に埋葬され、遺髪だけ鳥取に送られて墓碑が建てられていましたが、昭和5年に遺骨も改葬されました。

歴代藩主の夫人は、文久2年(1862)までは江戸住いを義務づけられて入国が許されなかったため、宗派の関係で他に移された初代・2代・4代の夫人以外は江戸の弘福寺に埋葬されていました。しかし、関東大震災後、昭和5年9月に弘福寺埋葬の墓碑は、奥谷に改葬されています。

初代藩主光仲以後の歴代藩主11代と藩主夫人のほか、東館と西館の当主等も葬られました。現在、合わせて80基近い墓碑が建ち並び、周囲には260基をこえる燈籠が家臣等により供えられています。かつては廟所や廟門、回廊が立ち並んでいたことが古絵図、古写真から偲ばれます。また、藩主墓域に向かう参道両側には、光仲の寵臣・和田三信と光仲の側室、菩提寺住職の墓などもあります。



池田家墓所



清源寺跡



初代光仲公の墓碑



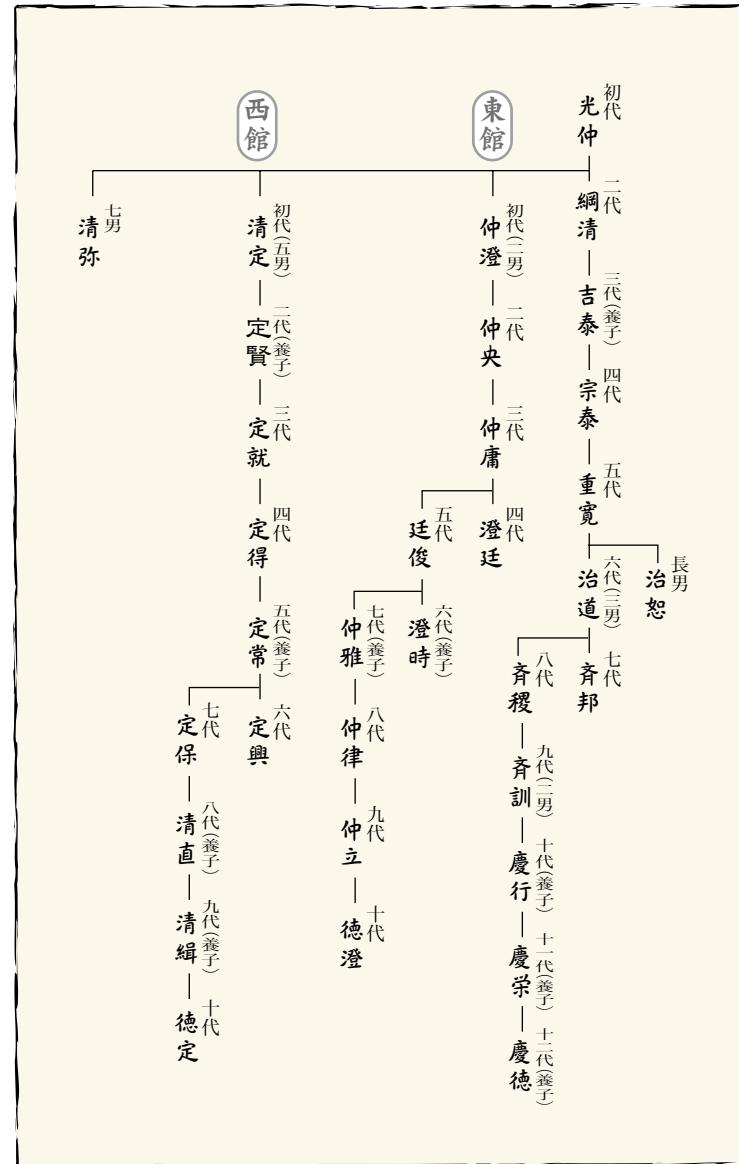
第2代綱清公の墓碑



第3代吉泰公の亀趺

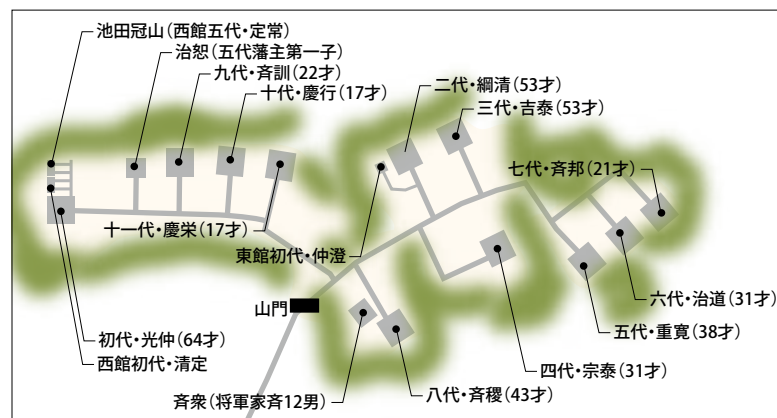


第6代治道公の亀趺



池田家墓所埋葬者系図

3 亀趺



▲池田家墓所配置図 巨をめぐらした土台に三段に重ねた台石を据え、「亀趺(き

ふ)」と呼ばれる神獣を象った台石を載せ、その上に用瀬から運ばれた石の上の部分丸く加工した平たい四角柱の碑が建てられています。高さはおおよそ4.6mにも及び、「亀趺円頭の墓碑」とも呼ばれています。墓碑の全面には法号、裏面には藩主の事績が刻み込まれています。ひとつひとつが異なっている個性的な亀趺の顔立ちを見ることができますが、2代藩主の綱清の墓石のみ亀趺円頭の形式をとっておらず、これは生類憐れみの令に配慮したためともいわれています。

4 松原城

池田家墓所への参道は、当時は両側に松が植えられ美しい並木道であったため、松原と呼んでいたと伝えられています。

5 仁風閣

明治40年5月、時の皇太子殿下(のちの大正天皇)の山陰行啓に際してのご宿として、もと鳥取領主池田仲博侯爵によって扇御殿跡に建てられました。設計は赤坂離宮の設計家として有名な宮廷建築家・片山東熊博士によるものと伝えられ、工部大学校での後輩にあたる鳥取市出身の建築家・橋本平蔵が補佐し、地元の工匠・浜田芳蔵が施工にあたったものであり、フレンチルネサンス様式を基調とする木造二階建ての本格的洋風建築で、中国地方屈指の明治建築として著名です。ペディメントを主要なモチーフにした端正な正面のたたずまいに、屋上の棟飾りや階段室の八角尖頭屋根が変化を与え、背面1・2階吹き放しのベランダは、軽快で美しい構成を示しています。内部は、御座所・謁見所・御食堂の主要室をはじめとして、各室とも室内装飾に意が払われ、マントルピース(暖炉飾り)・カーテンボックス・シャンデリアなどの細部意匠にも見るべきものが多く、殿下御到着の当日には鳥取県下ではじめて電灯が灯されました。「仁風閣」の名は、行啓に随行した東郷平八郎元帥によって命名されたもので、その直筆の額は、2階ホールに現在も掲げられています。

6 最後の藩主 池田慶徳

最後の藩主となった池田慶徳は、11代慶栄が17歳で逝去したことにより、水戸徳川家より迎えられました。15代將軍徳川慶喜とは、同じ年の異母兄になります。慶徳は藩内の改革派を登用して、藩校・尚徳館の拡張や民政の改革、台場の設置、西洋流砲術の採用など軍制の改革を進めました。父である徳川齊昭の尊皇攘夷思想を受け継ぎ、朝廷や諸大名の要請を受けて国政に参加し、將軍家を中心とする「攘夷」の実現を目指して活動しましたが、これにより尊皇攘夷の実現を求める家臣たちと、弟・慶喜が支える幕府との間で苦悩したともいわれています。

『亀趺の謎に迫れ〜池田家墓所の研究〜』鳥取大学教育地域科学部附属中学校1年 廣田瑠子さんのレポート



池田家墓所入口の受付に置かれている廣田さんのレポートはとても興味深い。池田家の亀趺はもちろんのこと、全国にある亀趺の所在についても丹念に調べている。特に亀趺から池田家のお国ぶりを発見し、最後に建てられた11代藩主慶栄の亀趺の顔は、麒麟獅子に似ているというもの。その理由は次の通り。
 ・麒麟獅子による獅子舞は、初代光仲によってはじめられた。
 ・どうして亀趺に反映されるようになったのだろうか？
 ⇒藩をうまく治めていく上で麒麟獅子舞を利用。



亀趺



仁風閣

お乗場

湯所にあった鳥取藩主の乗船場所のことです。

御船宮

鳥取藩主の船がしまわれていた場所です。現在の寿町のみたから保育所のあたりが小さな入江になっていて、そこに御船宮がありました。

御船橋

鳥取藩主の船がしまわれていた御船宮の脇に架かる橋のことです。



池田光仲の墓石

光仲公の墓石に使われるために用瀬から運ばれた石は、高さが約 2.7 m、横幅が約 1.2mある大きなもので、千代川を船で下り、袋川から引き上げられたものと思われています。そして船場から奥谷へは、そりに乗せて引かれました。その様子を見物はしないように通達されていたようですが、御普請手の下役・奥源太郎という人物が、浴衣染の帷子を着て人夫を励ますために唄った木遣歌が面白くて、道中大勢の人が見物しにきて左右に人垣をつくったので、まことに不相当のことであったとして、奥源太郎はお叱りを蒙ったという記録も見えます。

墓が完成したのは翌年の9月1日であり、運ばれてから約1年半の月日が経っていることから、用瀬から運ばれた石は原石のままだったと考えられています。



(4) 鳥取城下と水運

袋川は鳥取城下の要害的な役割りを担っていましたが、その舟運の恵みも大きなものでした。鳥取に運びこまれる物資の多くは、袋川が利用されていました。

①鳥取城への物資補給

奥の中国山脈から伐り出された材木は、筏に組んで千代川を下り、鳥取に入るものは浜坂から袋川に引っぱり上げられました。賀露の河口や上流から魚、薪、青物など、袋川から様々な品が運ばれ、揚げられていたため、袋川筋には材木問屋、魚市場、青物市場なども多く置かれていました。

②藩主が賀露の御茶屋や下屋敷へ向かう交通路

鳥取の歴代の藩主は、賀露に遊びに行くにも、瓦町の下屋敷へ行くにも、袋川から船を出して行き来していました。

③年貢米の運び入れ

藩に納める年貢米のうち千代川筋のものは、高瀬丹で千代川河口まで運ばれ、ここから袋川をさかのぼり、藩蔵に納められました。

④池田光仲の墓標を運ぶ運搬路

初代鳥取藩主・池田光仲公の墓石は、用瀬から袋川を使って墓所まで運んだと伝えられています。

(5) 袋川の二規律

①袋川御法度之覚

袋川の水は水質が良く、飲み水としても使われていました。そのため干ばつが続いて渇水の時期になると、袋川の水質保護を目的として、寛文3年(1663)以降、たびたび御法度が出されました。

- 一、この川での水浴びは子供にいたるまで堅く禁止、牛馬も川へ入れない事
- 一、道筋や川へゴミ捨てることの禁止
- 一、汚らしいものを洗うことを禁止
- 一、川での洗濯を禁止
- 一、肥え船の通行区間の設置

また、袋川ではお盆の15日に燈籠流しが行われていましたが、寛政6年(1794)7月、袋川の水質保護のため、千代川で行うように藩から御法度が出されています。

②池田藩"律"「御追放者御構場所」

袋川払い

追放者は袋川より中に入ってはいけないことが決められていました。「一本橋(吉方)より出合橋場所木戸迄を限り、上は川を越え候共に、立川大橋より天神川を限りとして御城下の方構」

御城下払い

城下に入ってはならない。



▲鳥取城から望む市街

水練り時に川船の妨げを注意するお触れが出た

鳥取藩では武術を非常に奨励していました。その中に水練もあり、水練場が浜坂にありました。しかし、水練をする者は、川を上下する船の妨げにならないように注意するお触れが出されました。

橋上に立ち止まることを禁止するお触れが出た

元禄12年(1699)6月30日、おそらく船の往来に目障りだということで、袋川の橋の上に用なく立ち止まってはいけないという藩のお触れが出されました。

8. 袋川流域 水を求めて先人の血と汗

水道谷

この谷はかつて宮内谷といわれていましたが、谷奥に水道の貯水池が造られてから、いつ頃からか水道谷と呼ばれるようになりました。城下が拡大するにつれて水が不足するようになり、谷の湧き水を集め谷口に水道を設けて備えていましたが、池田光政が入府した頃からはさらに水不足が深刻化し、谷奥に新たに水源池を築きました。



鳥取城の井戸

武家の水道

池田光政は武家のための水道工事を起こし、元和 3 年 (1617) から 15 年をかけ、水道谷に奥水道 (からづつみ池)、中水道 (ひょうたん池)、口水道 (現・長田神社付近) と 3ヶ所の貯水池を設けました。奥水道から中水道に流し、それから口の水道に流し入れ、水道奉行の官舎を置いて水量を調節しながら木管や石樋、土管などを用いて水を通し、伏樋によって一旦御会所の井戸に入れてから武家屋敷一帯に配水し、各所の水溜めの井戸に供給しました。(水道貯水概算は 2万 8,369kl) この 3つの水道は、明治の末期まで補修しながら使用されていました。

(1) 城下町の飲み水

① 武家の飲み水

水道谷の「ひょうたん池」

城下の武家の多くが、水道谷の「ひょうたん池」の水を飲料としていました。惣門内には 20 数ヶ所の井戸があり、水道谷の「ひょうたん池」から木管を経て注ぎこまれていました。



▲城下町の水道井推定位置図(『千代川史』鳥取水道の図を参考に加筆し作成)

袋川

鳥取城下の町民たちは、袋川の水を飲み水、使い水としていました。

袋川の二規律

袋川御法度之覚

袋川の水は水質が良く、飲み水としても使われていました。そのため干ばつが続いて渇水の時期になると、袋川の水質保護を目的として、寛文 3 年 (1663) 以降、たびたび御法度が出されました。

- 一、この川での水浴びは子供にいたるまで堅く禁止、牛馬も川へ入れない事
- 一、道筋や川へゴミ捨てることの禁止
- 一、汚らしいものを洗うことを禁止

- 一、川での洗濯を禁止
- 一、肥え船の通行区間の設置

また、袋川ではお盆の 15 日に燈籠流しが行われていましたが、寛政 6 年 (1794) 7 月、袋川の水質保護のため、千代川で行うように藩から御法度が出されています。



日照り

池田藩「律」 「御追放者御構場所」

袋川払い

追放者は袋川より中に入ってはいけないことが決められていました。「一本橋 (吉方) より出合橋場所木戸迄を限り、上は川を越え候共に、立川大橋より天神川を限りとして御城下の方構」



五郎作

(2) 雨乞いと傘踊り

① 五郎作と雨乞い

江戸時代末期の大旱魃の時、農夫の五郎作というおじいさんが、三日三晩菅笠を振り回して踊り、雨乞いの祈願を行いました。願いが天に通じたのか、三日目の夜に大雨が降りましたが、踊り疲れたのか、病を得た五郎作は数日後に帰らぬ人となってしまいました。村人は悲しみ、その霊を慰め鎮めるため、お盆に五郎作じいさんの踊りを真似て菅笠を手に踊るようになったと伝えられています。



五郎作を偲び踊る村人たち

② 山本徳次郎と傘踊り

明治 29 年頃、当時の若者たちの間で退廃的な風潮が高まっていたのを心配した鳥取市高岡の山本徳次郎は、賭博に代わる娯楽はないものかと思案し、その 10 年後、菅笠を使った踊りを長柄の傘に換え、振り子に剣舞の型を取り入れて現在の勇壮闊達な踊りを考案しました。揃い単衣に手甲脚絆と白鉢巻、白たすき姿で、100 個もの小鈴をつけて赤、白、青、金、銀と美しく彩られた長柄の傘を唄に合わせてリズムよく振り回すこの踊りは、この地区の青年たちに受け継がれ「因幡の傘踊り」といわれるまでになりました。また、この地区だけでなく因幡地方が誇る郷土芸能として伝承され、昭和 49 年には鳥取県の無形民俗文化財として指定を受け、今では世界でも高い評価を得る全国有数の伝統芸能となっています。



山本徳次郎



因幡の傘踊り発祥の地



山本徳次郎翁之碑

(3) 水道水源を求めて

水一杯もタダでは飲めぬ

鳥取市の飲料水は武家屋敷用の水道と通常井戸、袋川に頼ったまま、旧藩時代からほとんど進歩なく明治末まで及びました。大正期には井戸の数

袋川の水は飲料に適す（鳥取藩史）

「袋川は雨滝の奥にその源を發し、山間の岩石の間を奔流して、法美の沃地に來り、緩く鳥取の市街を廻るなれば、その水質極めて良好、清冽にしてすこぶる飲料に適す」（『鳥取藩史』）



美歎水源地堰堤
（現在砂防堰堤に改良）



美歎堰堤碑



美歎水源



大正7年洪水で決壊した美歎水源地（『千代川史』より）

2600と各所に井戸が掘られました。沼地である城下からは良好の飲料水が湧き出ず、清水を売り歩く商売もありました。直径30cm、深さ60cm位の桶1杯が約2銭であったといわれています。

(4) 美歎水源物語

そのため、鳥取の水道のための水源地については、明治30年代後半よりさまざまな検討が行なわれてきました。

① 田中信慶の多鯨ヶ池水源地案

明治36年8月、鳥取市藪片原の開業医・田中信慶は、私費を投じて多鯨ヶ池・鳥取市間の地形地質を調査測量し、水道敷設の計画書を市に提出しました。多鯨ヶ池を水源地として、久松山の麓に配水池を設け、鳥取市とその付近に給水する案です。結果的には多鯨ヶ池の水位が低いことや高額な工事費のため立ち消えになりましたが、上水道構想をまとめた最初のものでした。

② 小林柏次郎の大茅川案

明治41年7月、鳥取市出身の工学士・小林柏次郎は自ら実地を踏査し、10月10日に水道敷設の設計書を市に寄贈しました。対象水源は多鯨ヶ池、樗谿・小西谷・円護寺等付近の溪谷および千代川・雨滝川（神垣付近）の3ヶ所でしたが、この場合も多鯨ヶ池は水位の点で、樗谿等は水量の点で実施が危ぶまれました。さらに袋川支流（大茅川）を水源と定めて、神垣付近で堰き止める案が浮上したところ、これを聞いた地元の人々から用水期に干害を受けることを理由に猛反対を受けました。

③ 三田善太郎の美歎水源地案

明治44年8月、当時の藤岡市長は理学士・三田善太郎に委嘱し、新しい候補地の選定に入りました。水質、工費、維持費を検討の末、翌年2月24日の市会において水源地を美歎地内とする案が全会一致で承認されました。6月には内務省の認可があり、大正元年に着工して、同4年9月に通水を開始しました。10月には竣工式が行われ、山陰地方における近代水道第1号施設となりました。

④ 水源地の決壊

大正7年9月14日、鳥取地方を空前の大雨が襲いました。貯水池は刻々に増水し、午後八時頃には堰堤55mの上を溢れ、根底から崩れ落ち、池の溜水はたちまち一大奔流となって美歎集落に殺到しました。民家10戸と土蔵5棟を押し流し、死者8人を出す大災害を引き起こし、近代水道設備を誇る水源地が、わずか3年足らずで台風の猛威の前に崩壊しました。

⑤ 水源地復旧と美歎砂防堰堤

大正8年、崩壊した水源地はコンクリート造りの強固な堰堤に改修することとなり、3年後の大正11年6月28日に竣工して、市民の水道使用量は竣工前の約1.5倍と大幅に増えました。しかし、再生して約50年が経過した頃、堰堤の老朽化と人口の増加に伴い他の水源地が建設されたことで、昭和53年4月1日に貯水を放流して全施設の休止となりました。その後、歴史的に価値と周辺環境の良さから、地域住民の憩いの場として再利用する構想が生まれ、補強工事を行い、砂防堰堤へと生まれ変わりました。

(5) 袋川と用水

① 石山用水（玉鉾用水）

石山用水（石山堰）は袋川が奥部から平野部に流れ出す首根っこのところにあり、国府平野の南側半分をこの用水で灌漑しています。『在方資料』の記録から江戸時代に設けられたことが推定でき、文化6年（1809）の旱天時には、下流にある乙・樋（日）野（現在の宮下）両堰の関係者からの要請により袋川下流部へ水を送るため、上流に設けられた堰を三尺幅に切る「通し水（三尺落し）」が行われています。石山の名は堰の西側にある石山（124.1m）に由来し、また、石山の麓で堰を管理してきた玉鉾村に因んで玉鉾用水とも呼ばれています。

取水樋門を通った用水は、すぐに背戸川用水と前川用水の幹線に2分され、大路川までの国府平野を潤しています。しかし、水量は十分ではなく、各地区では、それぞれ袋川からの取水樋門を通して不足分を補ってきました。石山堰より下流の袋川左岸に設けられた堰（樋門）は上流から下河原（麻生地内）・笹井（広西）・万水（町屋）・町屋・中郷などがあり、笹井以下の4ヶ所から取水された用水は、今在家方面に流下したあと再び袋川に排水されます。

② 京ヶ原用水

袋川の上流には支流の一つとして扇ノ山を源とする上地川があります。明治期に入ると農業拡大の対象が山林原野や耕作不適地（限界地）の開墾に向けられるようになり、慶応年間（1865~67）頃に楠城の山本清次郎、上地の谷口と左衛門らの手によって京ヶ原の原野11町2反3畝8歩の土地が開墾されました。『空』とも呼ばれる京ヶ原の標高300~600mにある棚田20haに灌水するため、標高600~700mあたりの上地川上流部に取水口が設けられて井手が堀削され、急峻山腹に沿って約3.9kmを導水しているこの用水路のことを、地元の人々は「京ヶ原井手」、開墾者の名を冠して「清次郎井手」、あるいは通称“きやあばらいで”とも呼んでいました。

上地川の上流部には、川を挟んで南北の山地に何本もの井手が設けられ、かつての開墾の跡をたどることができ、この地域には主なものだけでも6本の井手（京ヶ原・下京ヶ原・ダワホー・菅町・向井手・伊勢路）が残り、そのうち



石山用水



石山用水取水堰



記念碑



京ヶ原用水



京ヶ原用水看板



京ヶ原棚田

津ノ井用水

天正年間(1573~1591)、奥谷の比久尼城主・福田新三郎光信は、法美郡津井郷(現・鳥取市津ノ井)に水が乏しくばつが多いことを嘆き、津ノ井郷と八上郡賀茂荘の境の谷あいを切り抜き、下峰寺地区の私都川に堰を造って分水したのが津ノ井用水路です。用水路の堀割り部分を現在「堀越」と呼んでいます。

しかし、私都川の水量はあまり豊富ではなく、田植え時期に下流の村の水田は水不足になることがあり、しばしば水争いが起こりました。文化9年(1812)には、昼間は津井郷へ、夜は西門尾と稲荷村に水を送るように取り決められましたが、昭和8年の干ばつの時にも水の争奪が行われました。紛争が行われないように水利組合規約が結ばれ、現在でもそれが守られています。

津ノ井のトンネル水路

鳥取市津ノ井地区には大正期に約25ha(45農家)の水田がありましたが、当時、地主で津ノ井村の村長だった松田平蔵はこの地区の深刻な水不足問題を解消するため、三代寺から杉崎に流下する前川用水の一部を途中の治三郎山麓にトンネルを掘って直接導水する計画を立てました。大正3年に県の事業認可を得ると、水を有効利用するための水路計画づくりに着手し、翌年12月に完成したトンネルの長さは約2km、現在の出入り口の大きさは高さ・幅とも1mほどでU字溝を逆さにかぶせて使っています。内部はこれより少し狭く壁面は丸石積み、天井には台形ブロック3個が組み合わせてあるといわれ、トンネル掘りには専門の職人が当たりましたが、掘った土や資材の運搬には地元の農家の人たちが協力し、用水は100mほど下流にある溜め池(防火用水兼用。宮田池ともいう)に一度貯えられてから水田に分配されています。地元では平蔵の功績に感謝し、餘戸地内の溜め池横に昭和44年「彰徳 松田平蔵碑」を建て、さらに平成11年にはその由来を記した「松田平蔵翁頌徳碑」を併置しました。

京ヶ原、下京ヶ原、菅町の3本は現在でも使用されています。

③ダワホー井手

『岩美郡史』によると、栃本村の森原利助と清水壽一郎が安政年中(1854~59)に栃本村字ダワホーの原野2町3反9畝26歩を京ヶ原より10年ほど早く開墾しています。ダワホーとは「大望」の訛りではないかといわれ、近くの木原に「大望井手」の名も残っています。ダワホーは袋川の支流大石川の合流地点にある栃本から川沿いに西へ約3kmほど入った大石の近くにあり、ダワホー新田には大石をはじめ栃本からも出作に来ていたようですが、かつての水田はスギ林に姿を変え、現在は溜め池とダワホー(ダーホー)井手の跡が当時の面影を残すのみとなりました。ダワホー井手の取水口は京ヶ原井手の取水口より直線距離にして約300m、標高差にして80mほど下流にあり、上地川の「山ノ神さん」(地名)で川を堰止め、折谷・牛野・菅野を通して延々15km、末端は楠城にまで達していたといわれています。

(6) 水力発電

①荒舟発電所

袋川上流の上地川は落差の大きい激流で、早くから水力発電の適地として着目され、岡益の木村安蔵はここに発電所を設けることにしました。明治40年の春、上地橋下流から上地川の水を取り入れ、上荒舟まで1450mの導水路によって72.7mの有効落差を得た水力により、出力100kwの発電所として完成しました。

境・鳥取間の山陰線開通を祝って5月17日に皇太子(後の大正天皇)が山陰行啓されたのを記念し、上荒舟で起こされた電気によって、宿泊所の仁風閣をはじめ市内86戸に初めて点灯されました。明治44年になると八頭と千代川上流の八頭奥地に大型発電所が建設されましたが、明治の黎明期に上荒舟発電所が果たした役割は大きいものでした。

その後、改修工事によって導水路延長1546m、出力は240kwと大幅に上げられ、開設以来100年の歳月を経て今なお発電を続けながら、地域の文化と産業の発展に貢献しています。

②拾石発電所(跡)

農作業用の電力を確保することを目的として、宇倍野と大成両農業協同組合の共同事業で小水力発電所を建設することが計画され、昭和35年3月に竣工しました。楠城集落より少し上流の雨滝川を堰き止め、水路を拾石集落の西のはずれの不動坂近くから取り、落差31.6m、発電量195kwと、県下の小水力発電所の中でも高い能力をもっていました。はじめ農業用に利用するためにつくられた電力は、その後、大成地区の防犯灯として使われました。

③雨滝の発電所(跡)

雨滝地区に水力発電所を起して各戸に送電する計画が持ち上がり、共同自家用電気工事が行われ、大正11年の春頃に各戸に電灯がとまりました。しかし、10ボルトの弱い発電機では、電灯の明るさが弱く、電球の中のタンソ線が赤く見えるだけで、いつの頃から焼火箸という名が付けられ、大雪の夜には水路に雪が流れ込んで発電機が止まり、消灯することも珍しくありませんでした。悪条件下の工事は報いられることなく、大正14年の大火災によってこの電気工事は終焉を迎えましたが、地元の人々の協力によって文化生活を築く電灯が他の村々に先がけて行われた画期的な事業であったと伝えられています。

(7) 袋川と水の風物詩

①上地の棚田

県内でも標高の高いところにある上地地区の棚田では、近年、農業従事者の減少に伴い田畑と用水路の維持が困難になり、耕作放棄地が増加していました。そこでこの歴史的な用水路と棚田に対し、平成15年に有志によって「プロジェクト京ヶ原実行委員会」が立ち上げられました。ボランティアと共に棚田と水路を保全に努め、酒米を栽培して新しい日本酒を特産品として作り上げて中山間地域の農村活性化につなげるといった取り組みが行われています。

②神護の甘茶畑

平成5年より神護地区で栽培され、特産品となっています。直射日光に当たると葉が赤く変色してしまい、雨にも弱いということで、大切に育てられています。甘露を注いで産湯とした故事にならい、古くからお釈迦様の誕生祝いの灌仏会の際に、仏像に注ぐものとして用いられたり、飲まれたりしてきました。山紫陽花の変種の植物で、紫陽花の花によく似た淡い紫色から淡い紅色に変わる花を6月頃に咲かせます。葉は乾燥させると甘み成分が増し、甘さはあっても低カロリーのため、胃腸にやさしい健康飲料となります。

③清水の井戸

国府町清水地内の山裾から、清泉寺内と2箇所湧き出しています。「清水の井戸」と「清泉寺の清水の井戸」の湧き出し口には屋根がつけられ、冬は温かく夏は冷たいといわれる清澄な水を湛えています。「清水(すんず)」の地名はこの湧き水に由来し、「澄水(すみみず)」が訛転や省略によって「すみず」、「すんず」となり、後に同義語の「清水」の漢字が当てられたのではないかと考えられています。

④七宝水

稲葉山の中腹から湧き出ている水で、病気などにご利益のある霊験あら



津ノ井のトンネル水路



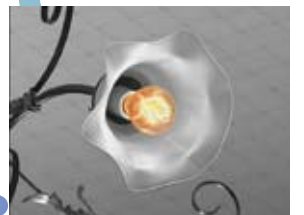
荒舟発電所

仁風閣

明治40年5月、時の皇太子殿下(のちの大正天皇)の山陰行啓に際しての宿舎として、旧鳥取藩主池田仲博侯爵によって鳥取城跡の扇御殿跡に建てられました。フレンチルネサンス様式を基調とする木造二階建ての本格的洋風建築で、殿下御到着の当日には鳥取県下で初めて電灯が灯されました。行啓に随行した東郷平八郎元帥によって「仁風閣」と命名され、中国地方屈指の明治建築として、昭和48年国の重要文化財に指定されています。



仁風閣



仁風閣の電灯



清酒 京ヶ原

たかな水と伝承されています。「七宝水」という名称は、昔、稲葉山にあったと伝えられる七宝神社の名に由来するといわれ、但馬へ向う旅人の喉を潤してきたと考えられています。また、現在は宇倍神社の手水鉢のお清め水としても使われています。

5 神護地区の水車

山間地の風景が失われ地域らしさが埋没しつつある状況を憂慮し、神護地区では住民が主体となって、昔懐かしい水車を地域のシンボルとして復活させる計画が立ち上がりました。かつての神護川沿いには多いときで3基の水車が設置され、脱穀等に活用されてきました。河川改修工事によって新たに整備された「国府神護ふるさと村」(仮称)の一角に設けられ、神護川から新しく引き込んだ専用の水路で水車を回し、脱穀などの動力として使用します。地区内で産出されたマツ材を活用している車輪部分は、直径2.8m、幅0.75mあり、実用水車としては県内で最大級といわれています。平成17年には完成した水車小屋でついた新米(水車米)を県知事へ贈呈されました。



神護の甘茶



神護地区の水車



清水の井戸 (清泉寺)



七宝水

6 水辺の楽校 (谷広場・桜づつみ公園)

『水辺の楽校』とは、川の持つ魅力を生かした身近な遊び・自然体験の場として川を有効利用するために、国土交通省が平成9年から全国で整備を行なっているものです。袋川には谷地区と町屋地区の2箇所にて設けられています。谷にある「谷広場」は国府東小学校に隣接し、7,500㎡の広場内には古墳や滝などをイメージしたモニュメントが置かれ、国府中学校、宮下小学校に近い町屋の「桜づつみ公園」は10,000㎡の広さがあり、大伴家持をはじめとする万葉の里にちなんだ歌碑が建てられています。水辺に近づきやすく、水遊びや散歩、水生生物観察、釣りなどを楽しむことができ、豊かな自然を背景に、子どもたちが親しみをもって川と触れあえる河川空間となっています。

7 水とのふれあい広場

標高1100mの河合谷高原の中ほどにあり、麓には雨滝、牧場近くには天神池、これより先は河合谷大根畑やブナ林などがあります。公園内の滝から流れる水は扇ノ山の伏流水で、四季を通じ水温と水量が変わることはありません。岩場の滝から流れ落ちた水をすぐ近くで触れることができ、東屋やベンチなどが整備された清涼感のある公園です。

8 せせらぎ広場

袋川の上流、上地川の京ヶ原用水路取水堰の近く標高約700mの位置にあります。上地川は扇ノ山から流れでて袋川に注いでいます。大自然に囲まれて、涼風に吹かれつつ川のせせらぎを聞きながら過ごせる公園です。



水辺の楽校 (桜づつみ公園)



水とのふれあい広場



せせらぎ広場

9. 袋川流域に華開く歴史・伝承

伊福部氏系図

この『伊福部氏系図』は、明治初期まで宇倍神社の神職を代々務めた伊福部家に伝えられていたもので、奈良時代、延暦3年(784)に因幡国の豪族・伊福部富成が編纂した『因幡国伊福部臣古志』に、明治までの歴代当主を書き加えていったものです。系図上の結び付けには疑問点も出されていますが、古代の氏族研究において大変貴重な資料とされています。大己貴命を祖として、第16代の伊其和斯彦宿禰が成務天皇の御代に因幡国造となり、第20代が伊福部臣の始祖、第26代の都牟自臣が水依評(のちの「郡」)の督(長官)に任じられ、第36代の助茂臣が初代神主を務めたことなどが書き記されています。



(鳥取県立博物館(複製) 26代都牟自の項)



宇倍神社



宇倍神社の亀紋

(1) 伊福部氏と宇倍神社

① 伊福部氏と金属伝承

伊福部氏は、古代因幡国法美郡を中心とした地域の有力な豪族であり、しばしば因幡国造に任ぜられたとの伝承をもつ家柄です。伊福吉部、五百木部とも書かれ、「いふくべ・いふきべ・いほきべ」などと読まれています。その職務や名の由来として、笛を吹く部、景行天皇の皇子五百木之入日子命の御名代、天皇の御前の煮炊きをする職などいくつかの説があり、“気を変化させる力”を持ち「気をつむじ風に変化させるが故に気吹部の性を賜った」として『伊福部氏系図』では第20代の若子臣を気吹部臣(伊福部臣)氏の始めと位置づけています。また、伊福部氏の分布が鉱山地帯に多く、初期の製鉄法であるたたら製鉄は製鉄反応に空気を送り込んでつくれるため、風を司る伊福部氏は鉄鋼の精錬に従事していた氏族ともいわれています。そして宇倍神社の神職は、古来より明治の初めまで伊福部家が務めていました。

② 宇倍神社

宇倍神社は孝徳天皇の御代、大化4年(648)の創建と伝えられています。360歳あまり生きてと伝えられる武内宿禰命を祭神とし、『延喜式』には県下唯一の名神大社と記され、また因幡の国一ノ宮の称号を得る格式高い神社です。明治32年には全国の神社で初めて武内宿禰の像と宇倍神社が五円紙幣に載せられました。その後も五円紙幣や一円紙幣の図柄となったことから、長生きの神様、お金にご縁のある神社として人気の高い神社です。

宇倍神社の亀

宇倍神社の家紋は亀崩といわれるもので、神仙思想と長寿延命のたとえにより、あるいは祭神武内宿禰終焉の地である亀金山にちなみ、苔のはえた長寿の蓑亀が紋となっています。江戸時代には、旗本のうち八家がこれを家紋としていたようです。亀紋は毛の有無によって区別され、総毛のみの亀、亀の文字を図案化した亀の字崩紋が知られています。

③ 武内宿禰

記紀によれば孝元天皇の曾孫にあたり、第12代景行天皇より成務・仲哀・応神・仁徳の5朝に仕え、蝦夷地の視察、新羅との戦い、忍熊皇子ら

の討伐などに活躍したと伝えられる、大和朝廷初期の伝説上の人物です。成務帝の時に、政務を補佐する「大臣」に初めて任命され、また、真偽を問う盟神探湯を成功させた人でもあります。蘇我・葛城・巨勢・平群などの諸氏の祖先ともいわれています。

④ 双履石

亀金、亀金丘、亀金山と呼ばれている本殿の裏に見える小高い丘の上に、木柵に囲まれた2個の石があります。武内宿禰が仁徳天皇55年3月に因幡国の亀金丘にて、両方の靴(双履)を残して齢360余歳でお隠れになったと伝えられ、長寿・武内宿禰の昇天の地として、その霊跡と伝わる石は双履石と呼ばれています。

④ 宇倍神社の麒麟獅子舞

毎年4月21日の例祭には、池田光仲公により創始されたといわれる県指定の無形文化財「麒麟獅子舞」が神前に奉納されます。獅子頭は因幡地方特有の一本角で、猩猩が先導する中、笛、鉦、太鼓の単調な調べに合わせて朱色の布を纏った獅子が厳粛に舞い踊ります。

宇倍神社御幸祭祭具は、例大祭にあたり、御神事並びに祭礼行事として伝承されている大名行列に使用されるもので、御神輿の他23点あります。境内に建設された収蔵庫(徽古館)に保管されています。明治年間、調製された大神輿をはじめ、県指定文化財の獅子舞に使用される江戸時代彫刻の獅子頭・猩猩・楽器あるいは檜谿神社から譲り受けた祭具・武具も多数あり、また正徳4年(1714)寄進の銘ある旧池田藩主・藩士による鉦、平鉦、大鳥毛、長槍等も合わせて保管されています。

鳥取市国府町の獅子頭

国府町には現在、宇倍神社、美歎神社、室神社、多居乃上神社、栃本神社、岡益および上麻生の稲荷神社に7つの獅子頭があるといわれています。中でも、岡益の稲荷神社に奉納される頭は、県内で最も古く室町時代、16世紀頃のものとして推定されています。作者は不明ですが、長さ53cm、幅35cmと大型の木造頭です。塗りは鎌倉時代以後のものといわれ、当地方の麒麟獅子頭はほとんどが金色に塗られている中、漆の朱塗りで彫り方は小細工せず大きな目と円みを帯びた大きな鼻や口の端の隆起が自然で優美な印象を受けます。県の指定保護文化財に指定された後は岡益公民館に移され保管されています。



宇倍神社の麒麟獅子舞

(2) 伊福吉部徳足比売と古代の文化

① 伊福吉部徳足比売の墓跡

無量光寺裏山の岩常山の中腹に、伊福吉部徳足比売の墓跡があります。徳足比売は豪族・伊福吉部氏の娘で、宮中に貢進して文武天皇に使えていた采女(女官)であったと考えられています。

直径約26cmの鉢形をした青銅製の骨壺の上面には、放射状に16行、108文字が刻まれ、埋葬の由来を書き表しています。それによると、徳足比売は先帝文武天皇の御代、慶雲4年(707)2月25日に従七位下の位を賜り、和銅元年(708)7月に大和の地で亡くなって、同3年の10月に火葬されて翌月13日に故郷の因幡の国に送られ、この地に葬られたということです。

これは我が国で行われた火葬法の歴史を知る上で貴重な遺構として、墓跡は大正13年12月9日に史跡として、骨蔵器は昭和30年2月2日に重要文化財として国の指定を受けました。



伊福吉部徳足比売



伊福吉部徳足比売の墓跡

骨臓器に刻まれた 108 文字

因幡国法美郡
伊福吉部徳足
比売臣
藤原大宮御宇大行
天皇御世慶雲四年
歳次丁未春二月二
十五日從七位下被賜
仕奉矣
和銅元年歳次戊申
秋七月一日卒也
三年康(庚)戌冬十月
火葬即殯此処故
未代君等不応崩
壊
上件如前故謹録碑
和銅三年十一月十三日己未



伊福吉部徳足比売の骨蔵器
(東京国立博物館蔵)

因幡国の三人の采女

采女は、天皇に仕えた後宮女官の一つで、主に食事のことに携わりました。朝廷に地方豪族の子女、姉妹を采女として貢上する歴史は古く、因幡国では、伊福吉部徳足比売を含め三人の采女が知られています。桓武天皇の寵愛を受けた因幡国高草郡の采女・因幡国造清成女は、地方豪族の娘で貴族官僚へ出世した典型として正四位まで昇進し、その一族は一国の祭りを主宰する国造になりました。もう一人は因幡国八上郡の采女で、安貴主との恋のため不敬の罪をせせられ郷里の因幡へかえされたことが『万葉集』の歌によって知られています。

2 岡益の石堂

凝灰石の切石を利用した石造構築物で、6m四方の羽目石を並べた基壇の上に、高さ約2m、厚さ約0.4m前後の壁石で囲った石室が造られ、その中央にエンタシス形式の高さ1.7mの円柱が立てられています。その上に載るマス形の中台の下部には古代ギリシャ文化の影響を受けた忍冬うずまき蓮弁による浮彫りが施され、大陸的色彩の強い7世紀頃の建造物と推定されています。『勝見名蹟志』には石堂の由来や寛文2年(1662)の大地震で倒壊したことが記され、『因幡誌』では図示しながら規模・形状と当時の様子を伝え、再三の地震による損壊の程度や石堂に関する口碑などについても記されています。

地元では古くからいくつかの言い伝えがあり、一説には、安徳天皇の御陵墓と伝えられ、明治29年に安徳天皇御陵墓参考地として指定を受けました。石堂の背後にあるおびたしい数の五輪石堂は、天皇につき従った平氏一門の墓とも伝えられています。また一説には、武内宿禰の御廟といわれ、他にも岡益廃寺の塔跡などが考察されています。

3 岡益廃寺

石堂の森にあり、昭和初期に古瓦や礎石が見つかったことから、寺跡として認められるようになりました。川原寺に類似した軒瓦の出土により7世紀末～8世紀初頭に創建され、8世紀前半に講堂が整備されて盛期を迎え、9世紀以降に廃絶したものと考察されています。

石堂から西へ約6mの位置から掘り込み地業の跡が検出され、金堂跡と考えられています。金堂と石堂は中軸線を揃え、また金堂から約7m北側では講堂と思われる掘立柱建物跡が見つかり、回廊状の遺構が取り付くなど、石堂は、変形の法起寺式伽藍の塔であった可能性も示唆されています。

4 梶山古墳

7世紀頃に築造されたといわれる日本最古の方形壇を持つ変形八角形古墳で、昭和53年に彩色壁画が発見され、奈良県明日香村の高松塚古墳に次ぐものとして高く評価されています。凝灰岩を切石した横穴式石室の玄室奥壁には長さ53cmの魚、三角文、同心円文、曲線文等が描かれています。魚は鮭か鯉と考えられ、鮭は亡くなった人がもう一度生き返り生前の姿を見せて欲しい気持ち、鯉は滝を登ると龍にかわるという中国の「龍門の鯉」伝承に由来するとの説があります。魚をモチーフにした壁画は全国的にも珍しく、大陸文化の影響が強うかがえます。昭和54年に国の史跡に指定されました。

5 石舟古墳

6世紀後半から7世紀前半頃に造られた直径約10mの円墳と推定され、横穴石室の玄室に凝灰岩をくり貫いた家形石棺が安置されています。

石棺の蓋は2枚ありましたが現在は1枚だけ乗せられており、上の方が扁平な屋根型に加工され、横には方形の把手が造られています。安徳天皇が岡益へ落ち延びてきた伝説にちなみ、祖母で平清盛の妻・二位の尼の墓との伝承も残されています。

6 姫塚

美敷地区の東側丘陵の西斜面にあり、古くから知られている遺跡で『因幡誌』には「一丘」「窟」「五尺ばかりの切石」などあったことが記され、7世紀ごろの古墳と推測されています。塚の名前は、美敷の古名「姫村」または「み姫村」にちなんで名づけられたのではないかともいわれています。現在は奥壁と側壁の一部が残るのみですが、奥壁は凝灰岩製の一つの石を加工して袖を削り出し、床部は幅2.1m、奥行0.6m規模の長楕円形に整えられ、この床部に遺体を安置したと考えられています。

(3) 因幡国府と古代の国づくり

1 因幡国庁跡

国府・国庁とは律令制下の官庁が置かれた場所のことです。国毎に交通の要衝を占めた約900m²の条坊制の市街地を形成して周囲に土塁を巡らし、国分寺や総社などを近傍に設けられました。詳しい年代は明らかになっていませんが、一般的には大化2年(646)の勅が国司制度の始まりといわれ、諸国の国府はこの頃に設立されたものと考えられています。

因幡の国府は、『因幡民談記』や『因幡誌』などに地名の由来や平らな土地、一の宮や国分寺跡が近くにあることから「庁」のあたりにあったと記され、その存在は知られていましたが、昭和47年から52年までの発掘調査によって明確になりました。国庁跡は中郷および安田地区の水田下で発見され、正殿跡、後殿跡、南門跡などが確認されています。国庁域は東西約150m、南北213mの面積約32,000m²が国の史跡に指定され、その中心部分については史跡公園として整備し、正殿跡、後殿跡、南門跡の掘立柱跡には円柱等が埋められ、市民の憩いの場として生まれ変わりました。

2 国分寺跡

国分寺は、天平13年(741)に聖武天皇が鎮護国家を祈念して国毎に建立された勅願寺です。国分寺縁起によれば、寺域二町四方(215m²)寺領壱田一千町を領し、七堂伽藍にして七重の塔を配し、本尊は行基作の薬師如来木像であったと伝えられています。因幡国分寺は、現在の国分寺地区内のほとんどがその寺域と考えられ、南方の水田から見つかった塔の礎石が国分禅寺境内に置かれています。発掘調査により南大門跡、塔跡が確認され、金堂は細男神社境内辺りと推論されています。

史誌に描かれた石堂

・『稲葉民談記』(1688年):小泉雄賢著

「…堂ノ内ニハ高サ五、六尺マワリ一抱バカリノ五輪塔アリ、又一尺五寸四方ニキリタル石ニツアリ」と石堂が初めて記録に現れている。

・『勝見名蹟志』(1752年):上野忠親著

「亭ガ見タルハ石ノ柱ナリ」と、前方の阿弥陀堂や寸法入りの見取り図を掲載し、大地震で全て倒れた話や武内宿禰の御廟または安徳天皇の御陵との里人の言い伝えを記録している。

・『因幡誌』(1795年):安部恭庵著

「其上ノ一重ハ二間四方、高サ一尺二寸、厚サ上面二尺三寸、但シ重ネ石ニテ築廻シ、其中ヲ土小石ニテ詰め合セ、如何ニモ平ニ製造シテ、其中位ニ長六尺余ノ無縫塔ヲ安ズ」と

石堂の基壇の築成状況や、安徳天皇因幡潜行の伝承等を紹介している。

・『稲葉佳景 無駄安留記』(1858年):逸處米質著

石堂背後に寺跡と記し、周辺に辻堂や鐘が描かれている。

エンタシス

円柱の柱身の胴部につけられたふくらみのことです。ギリシャ・ローマ・ルネサンス建築の外部の柱に用いられ、寸胴な柱を並べると背景色によって中央部がへこんで見えるという錯覚を避けるため、胴部にふくらみをもたせることによって柱をまっすぐに見せる効果があります。このエンタシス式の柱を使った建物には、ギリシャのバルテノン神殿や法隆寺の中門などが有名です。



岡益の石堂



石柱（複製：因幡万葉歴史館）



梶山古墳



梶山古墳石室
（複製：因幡万葉歴史館）



梶山古墳石室色彩壁画
（複製：因幡万葉歴史館）



石舟古墳



姫塚

3 国分尼寺跡

国分尼寺は、聖武天皇の勅願によって国分寺とあわせて全国に建立された尼寺です。正式には法華滅罪之寺といい、法華寺とも呼ばれています。因幡法華寺は、国分寺地区から東側約600mのところから法花寺地区があり、地名と水田の中より出た礎石によってこの地が寺地であると想定されます。法花寺地区東南端、今木山の西の麓に立つ「南無妙法蓮華經」の題目石の下に「日常上人産湯の井戸」といわれる泉があり、その左上の狭い平地に水溜めを彫った縦長の石が置かれています。これが現存する唯一の法華寺の礎石と伝えられ、『因幡誌』にある石の見取図ともほぼ一致しています。

4 万葉の河原

『岩美郡史』に「因幡山の南麓を流れる川を因幡川という」という記述があり、甕山付近の河原を「万葉河原」と呼び、その下流を「ケデン河原」と呼んでいます。この辺りには、国分跡として大伴家持の歌碑のある「庁」や「中郷」「国分寺」「法花寺」と呼ばれる村があり、昔から多くの伝説などと共に、集落の興亡が語り継がれているのです。

「ケデン河原」と呼ばれている辺りは、武内宿禰が因幡国遠征のとき、先住のケデン族を制圧した所と言い伝えられ、ケデンというのは「血田」という地名とされ、あるいは「計天牟」「毛田」「仮田」「仮殿」とも記されています。

奈良時代や平安時代には因幡にも都に勝るとも劣らない文化の香りが満ち溢れ、早春になると残雪のある稲葉山に斑鳩や鶯の鳴き声が響き、緑濃くなる頃ホトトギスやカッコウの鳴き声がこだまし、稲葉山の裾に広がる広野に扇ノ山から流れ下る袋川の水は豊かに清く、土地の人々の沐浴の姿が叙情をかき立て、因幡一の宮に信心深い参詣の人や国分寺・国分尼寺詣での善男善女の姿を水面に浮かべて、万葉の趣を奏でながら流れていた在りし日の浪漫が感じられます。河原は水辺の楽校として整備され、因幡の国にちなんだ万葉和歌の石碑などが置かれています。

(4) 大伴家持と万葉の里

1 大伴家持と万葉集

『万葉集』とは、仁徳天皇から天平宝字3年(759)まで長歌・短歌・施頭歌など4516首を収録した全20巻の歌集です。作品の時代は通常4期に分けられ、撰者については諸説あって詳しくはわかりませんが、現在の型に近いものに編集したのは大伴家持であると考えられています。作者は天皇から貴族、武士、農民に至るまで多岐にわたり、地域も全国各地に広がっています。額田王や山部赤人、柿本人麻呂、山上憶良など多くの歌人が個人の目覚めと自然の風物を素朴に、且つ大らかに歌い上げています

が、その他にも旅の歌・恋愛の歌・宴会の歌・親子の愛情をあらわす歌・死者を弔う歌などがあります。

大伴家持は養老2年(718)頃に大伴旅人の子として生まれ、衰えつつあった大伴氏の首長として種々困難に遭遇し、藤原氏との対立派貴族の抗争の中にありました。生涯に6度の地方長官を経験し、最初は越中守(29歳)、次に因幡守(41歳)、薩摩守(47歳)、相模守(57歳)、伊勢守(59歳)、最後に陸奥按察使鎮守將軍(65歳)として赴任しています。因幡守に任じられたのは、時の淳仁天皇つまり大炊王を廃して別の王を擁立しようとした橘奈良麻呂のクーデター計画が失敗し、この企てに大伴家持が加担したとして藤原仲麻呂らによって行われた左遷人事であったといわれています。

2 因幡赴任時代

天平宝字2年(758)6月に因幡国守に遷任され、赴任してきました。同年8月1日に孝謙天皇が大炊王に譲位して第47代淳仁天皇として即位され、年が明けた天平宝字3年正月元日の朝賀の日に、家持は雪が降り積もる因幡国庁において新年を寿ぎ天皇を讃える歌を詠んでいます。

新しき年のはじめの初春の 今日降る雪の いや重け吉事

そしてこの歌を『万葉集』20巻全4516首の最後を飾る歌としました。また、家持が因幡国で詠んだ唯一の歌ともいわれています。

3 富山(高岡)の万葉の里

天平10年(738)に初めて内舎人として朝廷に出仕し、その後、従五位下に叙せられて天平18年(746)3月には宮内少輔となり、同年6月に越中守に任じられました。8月に着任してから、天平勝宝3年(751)7月に少納言となって帰京するまでの5年間、越中国に在任し、通常国守としての任務のほか、東大寺の寺田占定などの任がありました。この越中国赴任には、当時の最高権力者である橘諸兄が新興貴族の藤原氏を抑える布石として要地に派遣した栄転であるとする説と、左遷であるとする説があります。

越中国守の居館は二上山を背にし、射水川に臨む高台にあり、奈呉海・三島野・石瀬野を隔てて立山連峰を望むことができます。家持はここで四季折々の風物を歌題とし、漢詩文を基盤とした歌を詠みますが、次第に四季の風物を素材として、自分の思いを歌う王朝和歌的な歌に近づいていきます。『万葉集』で確認できる27年間の歌歴と470余首のうち、越中時代5年間の歌数が223首を占めます。それ以前の14年間は158首、以後の8年間は92首です。その関係で越中は畿内の万葉故地となり、さらに越中万葉歌325首と越中国の歌4首、能登国の歌3首は、越中の古代を知ろうえでのかけがえのない史料ともなっています。また、家持にとって越中国



因幡国庁跡



国分寺跡の礎石



国分尼寺(法華寺)跡の礎石



法花寺門礎(『因幡誌』)



日常上人産湯の井戸



万葉の河原



万葉の河原の歌碑



大伴家持



大友家持の歌碑



大友家持の歌碑 (側面:原文)

大友家持の歌碑

天平宝字三年春正月
一日於因幡国斤賜饗國
郡司等之宴歌一首
新年之始乃波都波流能
家布敷流由伎能伊夜之
家奈其騰
右一首守大伴宿禰家持
作之

あたらしき
としのはじめの
はつはるの
けふふるゆきの
いやしげよこと

赴任時代は、歌人としての表現力が大きく飛躍した上に、歌風にも著しい変化が生まれ、歌人として新しい境地を開いた時代といわれています。

4 在原行平といなば山

二人の姫と過ごした因幡赴任時代

斉衡2年(855)、在原行平は因幡の国の国守を命ぜられ単身赴任する

越中赴任時代と因幡赴任時代の比較

	越中国赴任時代	因幡国赴任時代
『続日本紀』の記述	壬寅、以従五位下石川朝臣名人、為内蔵頭。従五位下引田朝臣虫麻呂、為木工頭。従五位下物部依羅朝臣人會、為信濃守。従五位下藤原朝臣宿奈麻呂、為越前守。従五位下大伴宿禰家持、為越中守。	丙辰、以従四位上佐伯宿禰毛人、為常陸守。参議従三位文屋真人智努、為出雲守。従五位上大伴宿禰家持、為因幡守。
遷任年	天平18年(746)6月21日	天平宝字2年(758)6月16日
年齢	29歳	41歳
退任年	勝宝3年(751)	天平宝字6年(762)1月
赴任期間	5年間	4年間
役職	越中守	因幡守
位	従五位下 従五位上に昇叙(勝宝1年(749)4月1日)	従五位上
歌数	223首	1首
詠歌	天平18年(746)9月、弟書持死去による哀傷歌。 勝宝元年(749)5月、「陸奥国より黄金出せる詔書を賀す歌」。 勝宝元年(749)7月、七夕の歌。 勝宝2年(750)3月、春苑桃李の歌。他多数	天平宝字3年(759)1月1日、因幡国の庁にして、国郡の司等に饗を賜ふ宴の歌一首 「新しき 年のはじめの 初春の 今日降る雪の いや重げ吉事」 (万葉集巻末の歌)
	万葉集17巻以降家持の歌が主体となった歌日記となり、宴の場や友人達と季節折々の風情や心情を詠った歌など数多く作る。	淳仁天皇即位後の初朝賀の日、因幡国庁にて天皇を讃える歌を詠み、それを万葉集を締めくくる最後の歌とする。

途中、須磨の浦で潮汲む美しい姉妹の松風・村雨を見染め、同行させました。百人一首の16番歌として知られる稲葉山を詠った歌は、因幡国へ出発する前に都で妻との別れを惜しんで歌ったものとする説と、松風・村雨姉妹と4年間稲葉山の麓で過ごした日々と二人を残して帰任する際の別れを惜しんで詠んだ歌とする説があります。

在原行平の塚

稲葉山から上野へ抜ける山道を進み、しいたけ団地を過ぎた小丘の雑木林の中に「在原行平の墓」と伝承されている塚があり、宝篋印塔が建てられています。しかし、行平は寛平5年(895)に京都で亡くなっており、この塚は因幡にいた行平を懐かしく思った土地の人たちが造ったものと思われる。

(5) 国府の三堂

1 茅ん堂



下木原の北を流れる袋川を渡り、岩美町に通じる鶏冠尾峠の坂の下にある小さなお堂を「茅ん堂」と呼び、地藏様をご本尊として祭られています。古くから耳の病にあらたかなご利益があるといわれ、因幡一円はもとより遠く但馬からの参拝者も多かったといわれています。堂内に紐でかけ渡されている大小300個ばかりの穴のあいた石は、耳の悪かった人が願いの叶った時に持ち寄ったものです。

名前の由来は3つ説があり、一つ目は大昔に堂を建てたとき、裏山の茅で屋根を葺いたからというもの。二つ目はこの山に大きなカヤの木があり、この木一本で堂が建てられたからというもの。三つ目はこの地藏堂の裏山一帯に茅が生い茂っていた中に、一本だけ天にも届きそうな大きい茅が生えていて、ある年の大嵐で大茅が倒れ、穂先は栃木に届き、胴はこのお堂の前で遭を塞いでいたのでこれを取り除きましたが、大きな胴体はこの堂の前に残されたからというもの。栃木地内には「穂先」という小字名も残っています。

一方、このお地藏さんは子ども達と遊ぶのが大好きで、鶏冠尾峠を越えた外邑のお地藏さまとも仲が良く、外邑が火事になったときには駆けつけ



在原行平



在原行平の歌碑

たらわかれ いなばの山の 峰におふる まつとしきかば 今降りこむ

在原行平



在原行平の塚

松風・村雨の墓

在原行平が都へ去った後、松風・村雨の姉妹は行平と過ごした稲葉山での思い出だけを生き甲斐にして岩美郡福部村左近の村で人目を避けて暮らし、死後、別れを悲しんだ稲葉山に二人の墓が造られ、行平塚の近くに「松風・村雨の墓」が並んでたと伝えられています。



茅ん堂



学行院

薬師三尊について

薬師三尊とは、中央に薬師如来、両側の脇侍に日光菩薩と月光菩薩を配した安置形式のひとつです。薬師如来は当方瑠璃光世界の救主で、人間の病を治し、災いから救うといわれています。

学行院の薬師如来像は高さ約1.22m、檜の寄木造りの漆箔像で、金箔が所々に残っています。両脇像は座高約99cm、本像と同時に製作されたと思われ、同じく檜の漆箔像になり、行基の作と伝えられていますが、藤原時代末期のものとも考察されています。特に流麗な蓮華八重座と呼ばれる台座が残り、またこの時期の作品が三尊現存することは大変貴重なことであり、大正9年に国の重要文化財に指定されています。

国司の薬師信仰

国司の薬師信仰は、単に個人的な病気を祈願するだけではなく飢饉、病氣、怨霊による災いなどを鎮めてくれることを願うもので、8世紀の半ばに平城京に新薬師寺が建立され、地方には国分寺を通じて広まりました。因幡国にも土薬師堂（学行院薬師三尊像）などがあり、庶民にまで広がっていたことがうかがえます。

て必死に消化に努め、その時の火傷痕が今でも顔や胸に残されており、人のためにわが身も忘れて尽してくださる慈悲深いお地蔵さんだといわれています。

2 つちんどう (土ん堂) (学行院)

慶長6年(1601)鳥取城主・池田長吉は、吉野にある正覚院という草庵が希代の霊仏であることを知り、これに寺領五石を下賜しました。それまで秘かにこの霊仏を祭っていた覚行という修験者はこれに感激して同じ吉野の富農である紹慶とはかり、小堂を建てて薬師如来とその他を安置しました。これが「土ん堂」と呼ばれる学行院の前身です。その後、覚行の孫にあたる覚蔵坊が寛文8年(1668)に寺を再建しました。

また、「むかし吉野に花慶山光良寺という寺があって七堂伽藍がいらかを並べ、千体仏が金色に輝き大峽川(大茅川)の鮎もその光を恐れて上らなかつた。しかし、寺は中世の戦乱により焼失したが本尊の仏体は残り、土堂薬師として永く崇敬された」という伝承もあります。

3 おかますのいしんどう (岡益の石堂) (p.84 参照)

7世紀頃建造されたとされる石造構築物で、6m四方の羽目石を並べた基壇の上に、高さ約2m、厚さ約0.4m前後の壁石で囲った石室が造られ、その中央にエンタシス形式の高さ1.7mの円柱が立てられています。安徳天皇の宇倍野陵墓参考地に指定されています。

(6) 袋川流域の祈り

1 流域の主な神社

[獅子頭が現存する神社]

宇倍神社 (p.82 参照)

因幡一ノ宮。毎年4月21日の例祭に麒麟獅子舞が奉納されます。

たこのうえ 多居乃上神社

延喜式内社であり、『三代実録』には貞観15年(873)の条に「正五位下を授く」と書かれています。国府平野の中心地に鎮座し、因幡国庁跡から約1kmの距離にあります。近くに今木山や梶山古墳、岡益石堂等のあることが根拠となり、渡来人集団の祀った神とする説が生まれています。しかし一方、『廣西民談記』には、ある洪水時に多胡川淵に小さな祠が止まり、一段高い地に多胡大明神とあって祀ったことから多居乃上と社号を奉ったと書かれています。また『稲場民談記』には「この氏子章魚を食わず、もし食えば祟をなす」とあります。なお、春祭には麒麟獅子舞が奉納されます。

みたに 美敷神社

延喜式内社であり、『三代実録』によると貞観16年(874)に従五位上を授いています。平時範の日記『時範記』には、惣社と宇倍神社に参拝のあと坂本社・三島社・賀露社・服部社とあわせて美敷社を巡拝したことが記されています。古くは屋敷鳴(奥三谷)に祀られていたところ人口増加によって金内に移り、さらに現鎮座地へ移転してきたといわれています。

また、祭神の一人、市杵島姫命は美敷の空が滝に鎮座していた無格社滝神社の水の神ですが、後に美敷神社に合祀されました。

むろ 室神社

神垣地区にある下の神社で、安産の守護神や酒の神として崇敬があつく、高倉天皇が承安年中(1171~75)に難産に苦しむ者のために駿河国富士権現を勧請したと伝えられ、それ以来出産のために死亡する者がなくなつたとわれています。4月の例祭には麒麟獅子舞が奉納されます。

とちもと 栃本神社

大石川の右岸の雑木林の中に鎮座する小さな神社です。祭神は菅原道真公で、古くから天満宮と呼ばれ、国府町内では他に山崎神社と今木神社の三社で祭られています。毎年4月25日に近い日曜日に麒麟獅子舞が奉納されます。

[国づくりにまつわる神を祭神とする神社]

さおと 細男神社

国分寺地区の東南隅の同じ平地内に鎮座し、因幡国分寺の寺域内でもあり、この神社と国分寺の建立についてその歴史背景など多くの問題が推論されています。祭神は少名毘古那神で、大国主神とともに国造りに奔走された神であり、身体は小さいけれども敏捷で忍耐力に富んでいたことから「細男」、その転化によって「さおと」と命名されたものと思われる。

しらひげ 白髭神社

伝承によれば滋賀県甲賀郡北仙村大字三大寺より勧請して当三代寺に遷宮したといわれています。ただし、「三代寺」の地名はすでにあつたと思われ、また、猿田毘古神を祭神とするのは、一説には、古代、大陸からすぐれた新羅系の人々が日本各地に渡ってきてこの神を祭つたといわれています。それらの子孫が宇倍神社の真南にあたるこの地に神社を造営し、この両社を結ぶ線を条里制の基礎として国府の町づくりに参画したとも考えられています。

たちばなのゆきひろ 橋行平と因幡堂縁起

京都高辻烏丸にある平等寺の縁起によると、村上天皇の御代に橋行平は因幡一ノ宮の宇倍神社へ参拝し、そこで病に倒れた時の夢のお告げにより、因幡国賀露津の海の中から薬師如来像を引き上げました。行平はこの仏像を因幡に安置して都へ戻りましたが、仏像は行平の後を追うように都の邸宅に飛来し、そこで長保五年(1003)年に平等寺を建立して仏像を安置しました。行平は因幡国守も務め、その関係から因幡堂とも呼ばれています。



宇倍神社



麒麟獅子舞



多居乃上神社



美敷神社



室神社

因幡西国三十三ヶ所観音霊場

観音巡礼は、その昔奈良の長谷寺で急死した徳道上人が閻魔大王に会い、三十三ヶ所の観音霊場巡礼を約束をして二日後甦生したことに始まるといわれます。因幡地方では延宝・嘉永・安政年代の3回、因幡西国三十三ヶ所の観音霊場が定められ、国府の地でも観音堂が選ばれました。

延宝年間(1673~81)...

専誉上人設定。谷の峰の観音が十八番、殿の観音堂が十九番、雨滝の観音堂が二十番(布引の滝に向かって建てられていたと思われる)。

■御詠歌

観音の誓いあらたにましまさば
ながれもたえぬ布引の滝

嘉永年間(1848~54)...

求西翁(くさいおう)設定。宇治(岩美町)長安寺が十番、熊野山聚財寺が十一番、谷の峰の観音が十二番。

■御詠歌

尊とさや誓いは同じ御熊野の
那智の御山にふるる雨滝

安政年間(1854~60)...

普含寺の観音が十一番、谷の峰の観音が十二番。

かみおそう 上麻生神社

樹齢数百年と思われるモチの木や、ムクの巨木、杉の林に囲まれ、古くからこの辺りの中心的存在であったことがうかがわれます。室町時代に高岡神社と合併して神事が行われ、この地がお旅所となって賑わったと社誌に記されています。祭神は高岡神社と同じ須佐之男命で、昭和25年に上麻生神社として分離独立し現在に至っています。

たまほこ 玉鉾神社

南に石山を背にして袋川を臨み、本殿に接してムクや銀杏の大木が伸び上がっています。かつては「鉾大名神」と呼ばれ、社名の由来が古代に神器と崇められていた玉と鉾によることや、国府平野の東端に位置して清冽な水に恵まれていたことなどから、古くから尊崇されていた神社であると考えられています。近くの二社と一緒に盛大な神輿渡御の神事が行われたこともあって、そのところは三興と呼ばれています。明治7年に鉾大明神を玉鉾神社と改称し、大正8年には水の神様として信仰されていた河原谷神社を合祀しました。

いとたに 糸谷神社

拝殿の横は昼でも暗いほどの杉の大木で覆われ、特に右側には大人で三抱えもあると思われる杉の巨木が立っています。『因幡志』によると、古くは三王七者権現と呼ばれていました。

たかおか 高岡神社

古くから「牛頭天王」と呼ばれ、播州(兵庫県)の広嶺神社の御分霊を奉祀したといわれています。はじめは高岡、宝殿ヶ平に鎮座していましたが、後醍醐天皇の元亨2年(1322)(『鳥取県神社誌』)に現在地に移し奉り、(『因幡志』では正和3年(1314))牛頭天王は国中の天王社中第一の宮として崇敬を集めました。ツバキ・タブなどの社叢は昭和34年に県の天然記念物に指定されました。

おおた 太田神社

岡益と清水の中ほどの山麓に鎮座し、古くは太田大明神、太多羅大明神とも呼ばれ、甕山をモッコで担いで置いてきたとされる神様でもあります。毎年近くの三社と合同して神輿渡御の神事を執行しており、その旧地を水越(三興)といいます。清水神社と谷村神社を合祀し、本殿右側には見事な彫刻が施された旧社殿が厳かに保存されています。

たかほこ 高鉾神社

山根橋を渡り清水・岡益へ延びる通りのそばの鬱蒼たる木立の中にあり、境内には樹齢数百年にも及ぶタモの老樹が四方に枝を広げていま

す。古くから高鉾大明神と呼ばれ、また境内にある山根神社は、明治元年に集落の背後にある高い山あいからこの地に移されたと記されています。1m四方の神殿は正面の角座の格子の上に神鏡がかかり、その上に高鉾神社と墨書されていて四角の龍神と左右前の三面にある瑞雲・松亀・鶴・武神・寿老人などの彫刻は精巧を極めています。

こうがけ 神垣神社

神垣地区にある下の神社で、東のはずれから山すその道を東に向って約500m進み、田んぼの中の道を伝うと神社の前に出ます。不思議なことに鳥居がなく、60段ほど石段を上りきると神殿と拝殿があり、その下に籠り堂があります。神殿の牡丹や唐獅子、龍などの彫刻からは時代を経た重々しさが感じられます。

てみ 手見神社

雨滝街道の神護入り口下手の山沿いに鎮座していた須佐之男命を祭神とする神社でしたが、平成14年6月に酒賀神社に合祀されました。

とのむら 殿村神社

雨滝街道の神護入り口下手の山沿いに鎮座していた須佐之男命を祭神とする神社でしたが、平成14年6月に酒賀神社に合祀されました。

かんご 神護神社

創立年代、沿革とも明かではなく、古くから武王大明神、聖大明神・緑大明神と呼ばれていましたが、明治7年に神護神社と改められました。

神護地区を見下ろす小高い山腹に建ち、昔、松島神護兵衛という神主がこの地で大茅郷の一ノ宮、酒賀神社の社領を治めていたという言い伝えが残り、中世から戦国時代の記録にも神護神主と記されています。

旧暦2月9日の御禊の祭には、神護の男が櫛をかつぎ、本殿から古い御幣をいただいて太鼓をうちながら当番の宿の家まで行列するという神事が、今も受け継がれています。

かみあらふね 上荒舟神社

上荒舟地区の舗装道路を上がり、字「宮の後」の杉木立の中に鎮座しています。切り石の石段を上ると参道も切石畳の200坪程度の境内ですが、この中に鳥居・献燈・本殿・神楽殿が巧みに配置されています。特に本殿の奥に位置する2m²ほどの厨子は他の神社では見ることでないものであり、また拝殿には俳句の額が掛かっています。祭神は須佐之男命と稲田姫命ですが、古くから子守権現とも赤松大明神とも称されていたことから、正徳年中(1711~16)に3代藩主吉泰公が男子がないことを憂い、この社に祈願したところ靈験著しく宗泰公の誕生をみたと



高岡神社



太田神社



太田神社の常夜燈と六地藏



高鉾神社



神垣神社



神護神社



上荒舟神社



上荒舟神社の額



楠城神社



木原神社



木原神社の夫婦杉



酒賀神社

して、藩では米三石を永久に寄進することになったといわれています。明治7年に上荒舟神社と改称されましたが、鳥居にはもとの両神社の額が掛けられています。

なわしろ
楠城神社

約120段の急な石段を登ると拝殿があり、その後方に5m四方のサヤ堂が渡り廊下で繋がれ、堅木で造られた厨子と流れ造りの神殿が建っています。古くは三元荒神と唱えられていましたが、明治7年に楠城神社と改称されました。地元では八幡さんと荒神さんとの合祀と言いつられており、また別に龍王さんと呼ばれる神社も祭られているといわれています。

いわだに
石井谷神社

本殿も神楽殿も集落を背に南方を向いて建てられています。なぜこのように建っているのかは明らかではありませんが、『鳥取県神社誌』によると、境内にあった松の老木と朴の大木が枯れたため切り倒した時、この朴が有名であったので朴の木大明神と呼んで尊崇したとあります。このため集落では朴の用具は使わず、下駄の歯に朴を使うのが流行したときも大明神を足下にすることを嫌って使うことはなかったといわれています。

きはら
木原神社

「熊野三社権現」を勧請していたので古くは熊野大神宮と呼ばれていましたが、明治7年に今の名に改称しました。境内はさほど広くありませんが、石段に河原石を敷き詰め、拝殿前には大きな夫婦杉が厳かな雰囲気を作っています。根元の太さは約8m、高さは約40mあると思われそうですが、昭和34年の伊勢湾台風によって老樹の上部が折れたため、雨露を防ぐために銅板をあてて枯れるのを防いでいましたが、平成16年の台風18号により二本のうち一本が途中から折れてしまいました。また、9月15日の祭の日はこの社頭に立てられる大幟は他に類を見ないものです。神社下にある古さびされたお堂が「神人共楽」の面影をしのばせ、下木原の「茅ん堂」とともに歴史の重さをたたえています。

すが
酒賀神社

栃本と上地集落の中間、人里離れた閑寂な丘の上であり、『因幡誌』によると「すがの山の麓にある菅野大明神」のことであると書かれています。大草郷十二ヶ村の氏神として郷中一ノ宮と呼ばれ、創建は不明です。

が、貞観3年(861)に従五位下、後に正五位を授けられています。天保10年(1839)に改築され、本殿は千鳥破風のある権現造りで、正面の桁の上の龍や両側の酒天童子の彫刻は精巧で見事です。社名のように酒の神とも、禍をはらい、心清々しい神であるので須賀の神ともいわれています。

また、源平争乱にまつわる秘話が残されています。

平家滅亡後、二位の尼がこの地を訪われ、三種の神器をこの宮に託されましたが、宝暦年間(1751~64)に雲州の神官門脇好井というものが「この宮におけば火災盗難のおそれがあるので出雲大社に保管するのが安全である」といって持ち帰り、代わりに神器を模写した三幅を寄進したというものです。しかし、これもその後文政9年(1826)の火災により焼失してしまったと伝えられています。

平成14年6月、殿村神社および捨石神社は殿ダム建設により酒賀神社に合祀されました。

【土地や農業、生活にまつわる神を祭神とする神社】

おりい
折井神社

延喜式内社であり、大同年間(806~810)に京都の葛野にある松尾大社の分霊を勧請したと伝えられ、古くは松尾大明神といいました。当初山の上にあったのを近世になって下に移し、地名をとって名付けられました。手見山とは現社地の後背にある477mの山のことで、ただし古宮の位置や現地への遷座の時期はわかっていません。大正3年に中河原神社、同6年に吉野神社を合祀して松尾・吉野・中河三カ集落の氏神となりました。なお、京都の松尾大社が全国の酒の神の本社であることから、因幡・但馬の酒造家から尊崇を集め、現在も12月上旬仕込みの時期には因幡の全酒造場を巡り浄めているということです。

ちらぶね
荒舟神社

祭神は「うけもちの神」といい、伊勢神宮の外宮の祭神と同じ農業神です。古くは妙見大明神と呼ばれていました。国府町内で保食神を祭る唯一の社であり、この地区の耕地が比較的少なく、農産物に乏しいところから、この神を祭り豊饒な土地柄にかえようという悲願に基づくものと考えられています。

もりたに
森谷神社

上土地地区に入って100mほどのわずかばかりの平地の上であり、切妻造りの妻入で正面一間半(3m弱)ばかりの小さな神社です。社域が小字名森谷であるため「森谷さん」と呼ばれてきました。明治5年の神社令により廃社されて酒賀神社に合祀されましたが、地域住民の懇望によって新社殿が旧社地に造営されました。昭和13年の大火で一時酒賀神



酒賀神社



折井神社



森谷神社

社に再祀されましたが、再興されて今もこの地に鎮座しています。

あめだき 雨滝神社

ブナの原始林に囲まれたやや高いところに神殿があり、古くは「妙見宮」と呼ばれていました。祭神の月読神は天照大神の弟神であり、夜を治める神で百姓の神です。厨子が朴の木で造られているため、雨滝地区では昔から朴歯の下駄を履かなかったといわれています。社殿の下方にある観音堂の厨子の中には端麗な観音像が祭られ、因幡西国三十三ヶ所観音霊場の札所でした。



雨滝神社



稲葉神社



拾石神社



大石神社



大石神社の大石

いなほ 稲葉神社

立川大橋の東、天神川の左岸に古くから稲葉大明神と呼ばれた稲葉神社があります。稲葉山の峰を眺望できる位置にあり、因幡天ともいわれ、稲荷神にして五穀の守護神である倉稲魂神を祭神としています。『因幡誌』には武内宿禰が三韓遠征の幡をこの地に祀り、その由緒によって国名の稲葉の字を因幡に改めたとあり、また『岩美郡史』では稲葉大明神が田地に初めて稲苗を植えた由来により、この古苗代と呼ばれるようになった場所が稲葉の国名の起きた由緒の地だとも伝え、この神社は因幡の国名の由来と由緒を物語っています。

[水にまつわる神を祭神とする神社]

じっこく 拾石神社

農協の発電所の右手の、巨岩の間の小さな両の中に鏡座し、古くは滝神と呼ばれていました。祭神を罔象女命として水の守護神を祭ったのは、この神社が拾石集落を水難から救った大きな機縁があったためと考えられています。平成14年6月、酒賀神社に合祀されました。

おおいし 大石神社

杉の木立の中にある祠の後ろに高さ2.5m、周囲26mの大石があり、この巨石の下から清水が湧き、境内に流れ出ています。祭神の御井神(みいのかみ)は、大国主神と八上比売の間に生まれた開拓神です。昔は自然崇拝の習慣があり巨大な石や泉の源流などを神聖視したことからこの地に神社を創建したのと思われ、この縁由によって大字名が大石となったといわれています。

[応神天皇をまつる神社]

わし 上地神社

上上地地区の中ほどから急な坂道を100mほど登った杉木立の中にあり、海拔500mほどの高地にある神社です。祭神の応神天皇は仲哀天皇と神宮皇后の皇子で、武内宿禰の養育をうけて成長した天皇といわれ

ています。

大きな狛犬が配置された境内は広く、神殿は流造で、拜殿は8m四方の建物になっています。昭和13年春の大火災でこの山上の神社も焼けてしまいましたが、再び立派な社殿や神域をみることができます。

[天神様をまつる神社]

やまさき 山崎神社(天満宮)

上地川の左岸、天神に鎮座し、菅原道真公を祭る神社です。古くから天神と称えていましたが明治7年に山崎神社と改称されました。国府町内で菅原道真公を祭る神社は、栃本の栃本神社と、法花寺の今木神社の三社のみでしたが、今木神社は多居乃上神社に合祀されています。



山崎神社(天満宮)



普含寺

②流域の主な仏閣

ふがんじ 普含寺

天正4年の開基で、楠城山本六郎左衛門は自ら田地・畑を寄進し、秀山利旭大和尚を開山として迎えて東山山麓に普含寺を開きました。それから約100年後、この地に移転しました。また、大梵鐘が第二次世界大戦に供出のままなくなっていたので、開創四〇〇年を記念して再鑄造し、昭和51年に撞初式を行いました。普含寺の紋は池田家と同じアゲハの蝶であり、鳥取藩主池田家の位牌一基と、分家西館池田家の一基が伝えられています。

せいせんじ 清泉寺

臨済宗妙心寺派に属し、開基高木氏の支援を得て再住妙心達源大和尚により寛永12年(1635)頃、清水の地に創立されました。境内にある胴回り3.65mの大公孫樹は樹齢300年以上といわれ、また冬は温かく夏は冷たい泉が湧出して格好の飲料水とされています。地福寺が廃寺になった折に中世の地名や交易を示唆する銅鐸口が一時所蔵されていました。

ちやうつうじ 長通寺

長通律師が開創し元和元年(1615)頃に秀岩と称する留守居僧が再興して曹洞宗長通寺と改めたとも、山中鹿之助の焼打ちにより伽藍を焼失したため岡益の奥地、奥土居に再建して万松山長通寺としたとも伝えられています。住職の牛尾得明師は伝説化されていた広大な石堂に着目して研究調査をした結果、安徳天皇御陵墓と断定し、安徳天皇御陵参考地としての認可を得たため、これを機に永劫に御陵墓をお守りするため寺を奥土居の地より現在の岡益の地に移転しました。また、前庭には志賀直哉が石堂を訪ねた際に書き残した「妙」の字が岡田美子の讃歌とともに石碑に刻まれています。



清泉寺



長通寺



無量光寺

むりょうこうじ
無量光寺

国造の伊福吉部第45代宿禰時任という人が後醍醐天皇を隠岐島より遷幸のみぎり因幡路よりこれに供奉して都にのぼり、その後仏道に帰依して弥陀王大夫侍従入道と称し、今の宮下の地に仏堂を建立して岩常寺といい、地方教化の聖地としたと伝えられています。江戸時代に入ると寺門を一新して浄土宗門に帰属し、総本山知恩院の門末として従来の岩常寺の寺名を山号に替え、本尊阿弥陀仏を勧請安置して無量光寺と改称しました。本堂横から裏山を400mほど登ったところに福吉部徳足比売の墓跡があります。



伊福吉部徳足比売の墓跡

しょううんじ
正雲寺

町屋にある曹洞宗の寺で、「慶長三戌年十月二十四日 開基龍峯正雲居士没」とあるので慶長以前に開創せられたものと思われる。以後天徳寺第4世寒雄寿仙大和尚を開山となし、約400年の間天徳寺末寺として法燈が受け継がれてきました。



龍吟寺

りゅうきんじ
龍吟寺

『真教寺中興記』によると昔は天台真言の霊場として名高く地皆山黄金寺といわれ、伽藍の跡は現在も残っていますが、正徳元年(1711)本寺鳥取市戎町真教寺の火災により寺院の重要書類が焼失したため、その経緯は詳らかではありません。古い建物は慶応4年に改築され、以来118年の歳月を経て昭和61年に新しい堂宇が建立されました。



国分寺

こくぶんじ
国分寺

聖武天皇の御代諸国に国分寺が建立され、因幡の国でも国庁にほど近い国分寺地区一帯に広大な寺域をもつ国分寺の堂塔伽藍がそびえていましたが、戦国の動乱期に国府の野は灰燼となりました。現存する本尊薬師如来像は信心深い住民達の手で護持されて難を免がれ、一草庵の中に安置奉祭されていました。江戸時代の藩主池田公は深く仏法に帰依され、延宝年間(1673~81)に京洛宇治黄檗山の僧活禅和尚が最勝山国分寺として堂宇を再建しました。一二神将を随えた本尊仏の薬師如来坐像は行基の作と伝えられています。



国分寺の礎石

てんとくじ
天徳寺

湯所にある曹洞宗の寺で、『因幡誌』によれば岩井郡湯山村にあった湯泉鎮守の薬師堂本尊が移されたとし、『鳥取市史』には天文年間に中原久忠という人の発願で湯山にあった寺を当地に移したと記されています。近世中期には邑美・八上・法美・高草・岩井・知頭の各郡で21ヶ寺の末寺を持ち、讓伝寺末の代表的寺院であったといわれ、また寛政

7年(1795)の洪水時には境内に救済所が設けられ、炊き出しなどの災害援助が行われたと伝えられています。

くまのさんじゆざいじ
熊野山聚財寺十一番札所

雨滝地区東南、雨滝神社社殿の下方にあり、観音堂の厨子の中には端麗な観音像が祭られています。嘉永年代(1848~54)に因幡西国三十三ヶ所の観音霊場の第十一番札所に定められました。御詠歌は「尊とさや誓いは同じ御熊野の那智の御山にふるる雨滝」です。観音様の縁日は6月17日、7月10・17日で、この日の晩には村中が観音参りで賑わい若者達の踊りが夜通し続き、特に7月10日は一回の参拜で続けて参拜したのと同じ御利益があるとされ、四万六千日とも呼ばれました。



熊野山聚財寺十一番札所

[四廃寺跡]

おかますはいじあと
岡益廃寺跡

石堂所在の森にあり、昭和の始め頃から石堂の隣接地で古瓦や礎石が見つかったことから、寺跡として認められるようになりました。石堂背後の林の中で掘り込み地業の跡が検出され、この金堂跡と思われるところの北辺から約7m北側では掘立柱建物跡が見つかり、講堂跡ではないかと考えられています。石堂が金堂跡のすぐ東に位置しているため発掘調査はできていませんが、塔跡の可能性も示唆されています。これらの調査の結果から、岡益廃寺は7世紀末~8世紀初頭に創建され、8世紀前半に講堂が整備され盛期を迎えて9世紀代に廃絶したものと考察されています。



源門寺廃寺の塔心礎

げんもんじはいじあと
源門寺廃寺跡

中河原に源門寺という寺の名前は残っていますが、詳しいことは分かっていません。現在、源門寺の心礎といわれる遺構は、元の位置より80mほど下流にある妙見堂の前に移動されていますが、旧位置は、袋川上流右岸に当たる中河原字源門寺谷口になります。山が川にせまり大きな平地は見られない土地であり、心礎の旧位置も山ぎわに幅30mほど小平地が見られるのみで、七堂伽藍の可能性はなく、塔を重要施設とした特異な仏教施設だったのではないかと考えられています。

心礎規模は、長径1.7mほどの自然石に径47cm、深さ15cmの柱孔が穿たれ、径73cmほどの円形柱座が浮刻されていて舍利孔はありません。また、旧場所での一個の須恵器が収集されています。平底を思わせる長頸壺(瓶)であり、形状から平安初頭のものとして推定される唯一の資料となっています。

とうがつばはいじあと
等ヶ坪廃寺跡

袋川左岸の玉鉾地区西端、上ノ山の裾部沖積地上に位置し、氾濫時の

妙見堂

当初は源門寺と同じく中河原地区上手の寺屋敷という場所にありました。「妙見さん」と呼び親しまれ、現在は青年婦人会館としても使用されています。源門寺との関わりはわかっていますが、堂内には古色の小さい阿弥陀仏が祀られており、この堂は源門寺の塔頭であったと推測されています。堂の前には寺屋敷から移されたといわれている宝篋印塔や五輪塔、源門寺の礎石等が置かれています。



妙見堂



等ヶ坪廃寺跡

直撃を受けない安定した場所にあります。瓦・鷗尾・礎石等が出土し、堂塔に直接結びつく礎石数個の発見がありました。出土した瓦類の内、軒丸瓦の系統が奈良県の川原寺に繋がり、また鷗尾は白鳳期の特徴をあらわし、等ヶ坪廃寺が白鳳期に創建され畿内文化と深い関わりがあったことを示唆する貴重な資料となっています。穀倉地帯法美平野の東端という高燥な位置からして、法美郡にあって当時最も重要な寺院であり、郡司級の在地豪族の造営された郡寺「法美寺」ではないかとも推察されています。

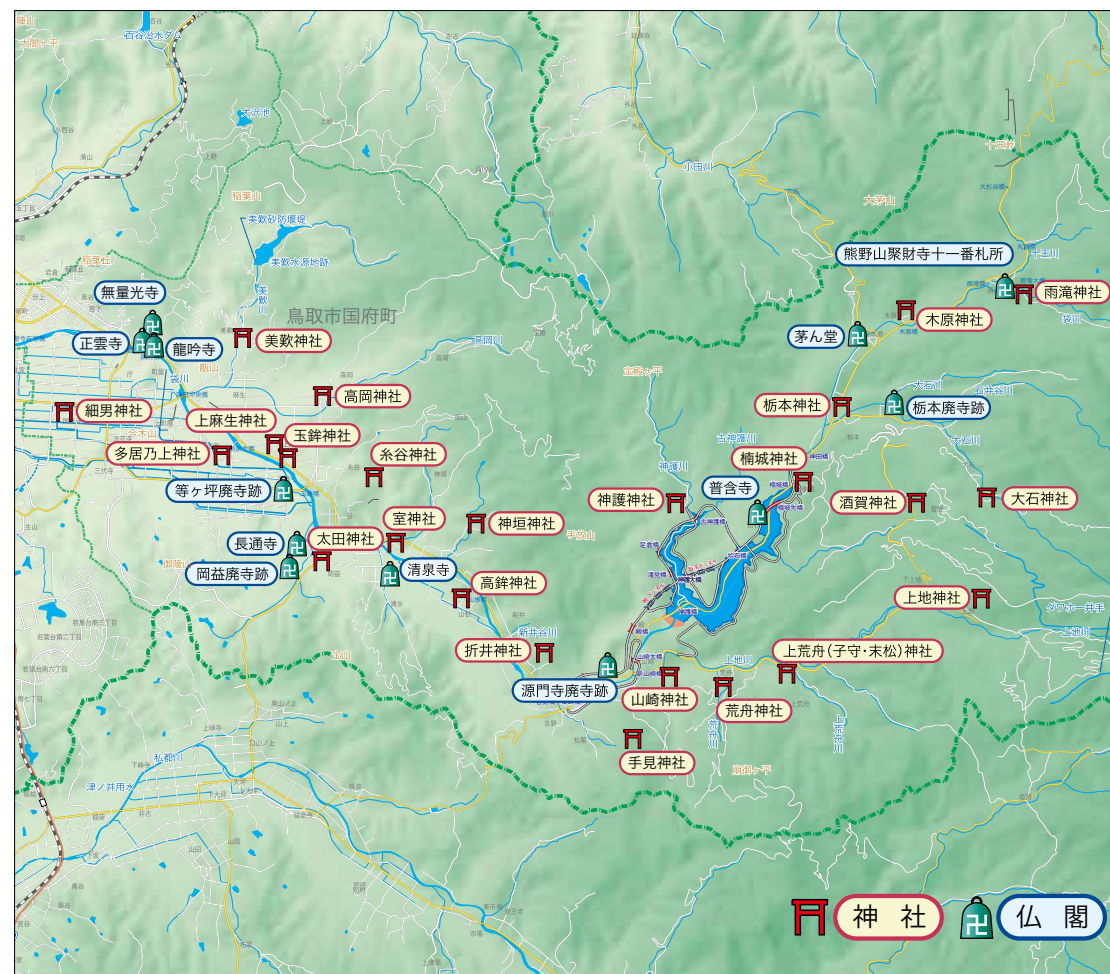
**とちもとほいじあと
栃本廃寺跡**

二つの塔心礎が残る貴重な寺跡として、昭和10年に塔跡が国の史跡に指定されました。古代因幡国の国府からおよそ14km山間部へ入った栃本の集落より、奥の谷あいには拓かれた狭い平地にあり、大石川の右岸に立地します。塔の北寄りに、明治時代まで水田中に土壇状の方形の高まりがあったと伝えられていること、さらに約27m離れて2個の心柱の礎石が存在することや、地名に塔ノ垣・下塔ノ垣が残っていることから、瓦の出土はないものの、かつてこの地に寺院が建っていたと考えられていました。

また、この寺院の性格については、7世紀末に因幡国が銅鉾を献じたとする『続日本紀』の記事や、位置がかつて銅を生産した岩美町荒金に近いことから、法美郡の有力郷族・伊福吉部氏に関連した寺院であるとの説と、僧侶の修業や信仰本位に形成された山寺ではないかとの説があります。



栃本廃寺東心礎



▲神社・仏閣の位置図

10. 袋川流域 誇り高き歌人たちの里

(1) 万葉の里・因幡国府の詠歌

① 万葉の里・国府を伝える二歌碑 おおもとのやかもち 大伴家持

碑文の前書きに「天平宝字三年春正月一日、因幡国庁に於て饗を国郡の司等に賜ふ宴の歌一首」とあるように、この歌は前年に因幡国守として当地に赴いた大伴家持が、天平宝字3年(759)1月1日に国内の官吏を集めて祝賀の式を執り行い、続けて催された宴の席上に詠み上げたものです。淳仁天皇即位後の初朝賀の日にもあたり、「新年の元旦の今日、豊作の予兆である大雪が降り、この汚れない雪のように、よい事が次々と降り積もりますように」と因幡国庁にて天皇を讃える歌を詠み、『万葉集』を締めくくる4516首目の最後の歌としました。現在残されている資料の中で、因幡国赴任中に家持が詠んだ唯一の歌といわれています。

読み人知らず

『万葉集』巻十の中に収められている一首ですが、詠み手はわかりません。原歌では「今城」ですが、今木山のことでないかと考えられています。散る藤の花を惜しむかのように、今木山の方へ飛んでゆくほととぎすを見ているといった情景が偲ばれます。今木山が庁から近いため、川上貞夫氏の提唱により、昭和34年12月21日に佐佐木博士の奉賛歌碑建立と同時に除幕式が行われました。

② 万葉の里に華開く文化の香り おおもとのさかのうえのいらつめ 大伴坂上郎女

五鈴橋のたもと等ヶ坪廃寺の礎石の横に昭和44年6月、歌碑が建立されました。『古今和歌六帖』第四巻に収められている歌で、大伴坂上郎女は大伴家持の父・大伴旅人の妹で家持の叔母にあたり、また、娘を家持に嫁がせているので義母にもあたります。「家持はいま、面影山のほとりどどのように暮らしているのでしょうか。私は毎日なつかしく思い暮らしているけれど、その姿を見ることはできない。気がかりなことです。」と、因幡国の国守に赴任している家持のことを想って詠った歌であるといわれています。

歌の道にも格別に知識が深く、『万葉集』の中には長歌6、短歌77、旋頭歌1を載せ、女流歌人の作としては一番多く、家持を助け、『万葉



大伴家持歌碑

大伴家持

新しき年のはじめの初春の
今日降る雪のいや重げ吉事



読み人知らずの歌碑

読み人知らず

藤波の散らまく惜しみほほととぎす
今木の丘を鳴きて越ゆなり



大伴坂上郎女の歌碑

大伴坂上郎女

わがせこが面影山のさかまに
われのみこひて見ぬはねたしも

集』編纂の一端を担った功績は大きかったのではないかとされています。

ありわらのゆきむら 在原行平

中納言在原行平は平城天皇を祖父にもち、六歌仙・三十六歌仙の一人である在原業平の異母兄にあたります。在原氏一門の学問所として奨学院を建て、また後世、謡曲「松風」の題材の一つにもなりました。大伴家持の歌碑の近く、駐車場の隅に大きな自然石を用いた歌碑が、平成9年11月に建立されています。また、稲葉山には土地の人たちが行平を偲んで造ったと考えられている「在原行平の塚」があります。

ふじわらのとしゆき 藤原敏行

『古今和歌集』第四巻に収められている歌で、藤原敏行は陽成天皇の元慶2年(878)に因幡国守となりました。三十六歌仙の一人に数えられ、書道の名手として知られています。

たいらのすけたか 平祐拳

三条天皇の長和4年(1015)頃関白藤原道長の家司として知られ、「いなば」と「面影山」が見られるこの歌は『夫木和歌抄』第二十巻に収められています。

ふじわらのていか 藤原定家

平安時代最後の年である建久2年(1191)2月に因幡国の権介に任ぜられ、やや遅れて因幡に赴任したといわれています。『千載集』の選者・藤原俊成の子で、元久2年(1205)に成立した『新古今和歌集』の選者の一人であり、この歌は第十一巻の中に収められています。

あきのおおきみ 安貴王の歌

遠妻のここにあらねば
玉ぼこの道をた遠み
思ふそら安けくなくに
嘆くそら安からぬものを
み空ゆく雲にもがも
高飛ぶ鳥にもがも
明日行きて妹に言ひ
吾がために妹も事なく
妹がため吾も事なく
今も見る如たぐひてもがも

『万葉集』第四巻に収められている長歌で、安貴王は養老末年、藤原麻呂の妻とされる因幡国の八上の采女と婚したことで不敬の罪に問われ引き離されたため、それを悲しんでふと作った歌といわれています。



在原行平の塚

在原行平

立ちわかれ いなばの山の峰におふる
まつとしきかば今帰りこむ

秋来ぬと眼にはさやかに見えねども
風の音にぞ驚かれぬる

藤原敏行

いなばよとわましものを恋ひ偲び
忘れがたきおもかげの山

忘れなむまつとな告げそなかなかに
いなばの山の峰の秋風

平祐拳

藤原定家



藤原定家の歌碑

これもまた わすれじ物を たちかえり
いなばの山の 秋の夕暮れ

藤原定家



権中納言経平歌碑



前大納言為氏歌碑

因幡川 否とし遂に言ひ果ては

流れて世にも住まじとぞ思ふ

藤原兼輔

春やとき花やおそきと聞きわかむ
うぐいすだにも鳴かずもあるかな

藤原言直

なきすてていなばの山のほととぎす
なほ立ちかへりまつとしらなん

藤原経平

かひなしやいなばの山のまつとても
又かえりこむむかしならねば

二条為氏

宮こ人 待つとしきかば ことづてよ
ひとりいなばの 峰の嵐に

伏見院



伏見院歌碑

ふじわらのかねすけ
藤原兼輔

紫式部の曾祖父にあたり、『源氏物語』に登場する「人の親の心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」と子を思う親心を詠んだ歌は、兼輔が醍醐天皇の更衣となった娘・桑子の身を案じて詠んだものともいわれています。紀貫之ら延喜朝の歌人達の庇護者であり、賀茂川の堤に風流な邸宅を構えていたため、「堤中納言」と呼ばれました。また、三十六歌仙の一人で百人一首の二十七番歌に選出されています。この歌は『古今和歌六帖』第三巻に収められています。

ふじわらのことなお
藤原言直

藤原北家・右大臣内麻呂の曾孫にあたり、醍醐天皇の昌泰3年(900)、因幡国の掾(国司の三等官)に任ぜられました。

ふじわらのつねひら
藤原経平

平安時代後期、後三条・白河両天皇に典侍として仕えた経子の父であり、藤原北家の歌人と伝えられています。

にじょうたけうじ
二条為氏

藤原為家の子であり、和歌の家・二条家の祖といわれています。歌風は保守的で、鎌倉時代に編纂された勅撰和歌集『続拾遺和歌集』の撰者としても知られています。

ふしみてんのう ふしみいん
伏見天皇(伏見院)

第92代天皇。建治元年(1275)大覚寺統の後宇多天皇の皇太子となり、弘安10年(1287)踐祚、両統が交互に皇位につく例を開き、讓位後も、後伏見天皇から花園天皇の代まで院政をとりました。和歌・書に優れ、京極為兼を重んじて歌壇に清新の気を注いだといわれています。

③ 郷土の誇り文学の灯
あべのこれちか
安陪惟親

享保19年(1734)に鳥取の今村屋と称した町人の子に生まれ、恭庵(きょうあん)または魚声閣李山とも号しました。幼くして両親を失い、京都に出て医術習得の傍ら和歌俳諧を研究して天明6年(1786)頃に帰国し、町医者を経て藩医となりました。『稲葉民談記』以来の史誌の変遷から、古文書の読解、現地踏査等を自ら行い、寛政7年(1795)に『因幡誌』を完成させました。この句碑は宝珠院墓地にあり、文化5年(1808)に建立されました。

こいずみゆうけん
小泉友賢

備前藩の藩医小泉家に生まれ、寛永9年(1632)のお国替え時に父に従って鳥取に移住しました。京都、江戸にて朱子学や医学を学び、帰国後31歳で藩医に招かれましたが病身となって退いた後、20年にわたって因幡国中の名所旧跡等を訪ね、古老から口碑や伝説を聞いた記録などを分類し、『稲葉民談記』を著しました。「白水先生碑」は元禄6年(1693)頃建立され、摩尼寺の階段下にあります。

ささきのぶつな
佐佐木信綱

明治5年三重県鈴鹿市に生まれ、歌人として多くの現代歌人を指導し育てるとともに、万葉学者としても著名で、昭和12年には国文学者として第一回の文化勲章を授与されました。この歌碑は大伴家持の千二百年祭(昭和34年)にあたり、家持の顕彰碑に並べて建立されました。天平宝字の昔を偲ぶ87歳の歌人の心情が、三一音の中に惻々と流れていると讃えられています。

おさきほうさい
尾崎放哉

明治18年、鳥取市に生まれ鳥取一中・一高・東大法科を卒業して保険会社に勤務していましたが、大正12年に社会奉仕に徹した無一物の生活に入り、その後寺などを転々としながら放浪の生活をはじめました。中学3年生時に作った俳句が西高校校友会雑誌『鳥城』に掲載されています。

自由律俳句が生んだ天才詩人と呼ばれ、この句碑は興禅寺山門の右手にある丸形の川石に、荻原井泉水の筆で刻まれています。

のむらあいせい
野村愛正

明治24年鳥取市国府町楠城に生まれ、本名は愛正。鳥取中学(現・鳥取西高)在学中から小説を発表しており、鳥取新報社の記者となったのちに上京し、大正6年に大阪朝日新聞の懸賞小説に応募した『明ゆく路』が第一位に選ばれ、大正後期から昭和初期を中心として短編や長編小説を数多く発表しました。初の児童向けとして出版された『三国志物語』は三国志作家からも推薦されるほどの幻の傑作といわれ、また、『泉は放射線に流れる』では生地楠城を舞台にして封建性の中に喜怒哀楽を綴り上げています。愛正の作品は自然主義的な手法であらゆる社会の姿を描きながら、その中に人類愛の理想を色濃く滲ませる点で、他の通俗作家の追随を許さざるものがあるなどと評されています。また、俳句の嗜みも深く、牛身と号しました。83歳の生涯を終えた翌年の昭和50年、楠城地区の入り口に「野村愛正文学碑」が建てられました。

返るのも 卯花月の 袂かな

うのはなつき

たもと

ふる雪の いやしげ吉事ここに

うたひあげけむことほぎの歌

安陪李山

佐佐木信綱 齢八十七



佐佐木信綱 歌碑

はるの山のうしろからけむりが出だした

尾崎放哉



野村愛正文学碑

おかだよしこ
岡田美子

明治35年西伯郡御来屋に生まれ、国府町谷の岡田家へ嫁いできました。早くから文学に志し、国府町の人や自然を愛して繊細な詩や戯曲、小説などの多くの作品を書き上げました。終戦後は『女人文芸』を創刊し、鳥取文壇の中心となって活躍しました。「こだまして...」の句碑は玉鉦橋のたもとに建立されています。

また、長通寺にある志賀直哉文学碑「妙」の右側面に、志賀直哉に同行して詠んだ歌が刻まれています。

志賀直哉は、明治16年宮城県石巻市に生まれ、学習院時代からの友人・武者小路実篤らとともに文芸雑誌『白樺』を創刊しました。唯一の長編小説『暗夜行路』には、因伯大山頂上からの展望描写や、大山寺風物の鮮明な写生文などが書かれています。昭和31年10月に鳥取を訪れ、この地に激賞して「妙」の色紙を書き残しました。また、川上貞夫氏の案内で岡田美子とともに岡益の石堂を見学し、長い黙想の上「——格調が高いね」と一言洩らしたといわれています。

たにぐちろうがい
谷口雲崖

明治36年生まれ。俳句は松本たかしを経て高浜虚子に師事し、高野素十などの指導も受け、帰郷後は鳥取一中（現・鳥取西高）に勤務となって鳥取ホトトギスの会に迎えられ、昭和22年にはのちに鳥取の有力な俳句雑誌となる俳誌『踏青』を創刊しました。左記「乱礁の～」の句碑は昭和41年、富浦海岸に建立され「古里の～」ています。

(2) 鳥取砂丘の句碑・歌碑

もりかわさようすい
① 森川暁水 句碑

大阪生まれ。山本梅史、高浜虚子に師事して『ホトトギス』『泉』の同人として活躍し、大阪を代表する俳人として根強い支持がありました。昭和12年9月松江、三朝などの山陰旅行の途中に鳥取砂丘に立ち寄った際に詠んだ句で、それから30年余り経った昭和44年10月、国民宿舍砂丘荘（現在閉鎖）の正面玄関斜め前に建立されました。

たかはまきよし
② 高浜虚子 句碑

松山市生まれ。正岡子規に師事して俳句をはじめ、俳誌『ホトトギス』を主宰し、俳句だけでなく和歌、散文などを加え“ホトトギス王国”の基盤を築き上げました。この句は昭和7年10月に鳥取砂丘で催された大吟行句会で詠んだ時の作品で、同行した俳人たちの作品も傑作揃いだったため鳥取砂丘は一躍俳壇の注目を浴びることになりました。昭和39年10月に鳥取ホトトギス会の働きかけで句碑が建立されました。

えだのとよあき
③ 枝野登代秋 歌碑

鳥根県松江市生まれ。大正7年に中原綾子、生田蝶介に師事して短歌を始め、昭和2年に鳥取市に移住して「鳥取短歌会」を結成し、現在も発行されている歌誌『情脈』を創刊、主宰しました。短歌一筋の生涯を歩み、鳥取における現代短歌の普及向上と短歌人口の底辺拡張に努めました。この歌碑は、300号発行の記念事業として昭和33年に鳥取市浜坂の十六松公園に建立されましたが、砂丘文学広場設立にともない現在の鳥取砂丘こどもの国の入口向かいに移されました。

ありしまたけお
④ 有島武郎 歌碑

東京生まれ。『白樺』派として大正文学の傑作を数多く残しました。大正12年4月、水脈社主催の自由大学講座の講師として来鳥した際、鳥取砂丘に案内されて詠んだ歌です。それから1ヶ月余り経った6月9日、信州軽井沢の別荘で『婦人公論』の記者・波多野秋子と情死を遂げたため、この事件の後、この歌によって鳥取砂丘は一躍有名になったといわれています。文字は有島の妹・山本愛子の筆で、昭和34年4月に鳥取文化財協会によって建立されました。

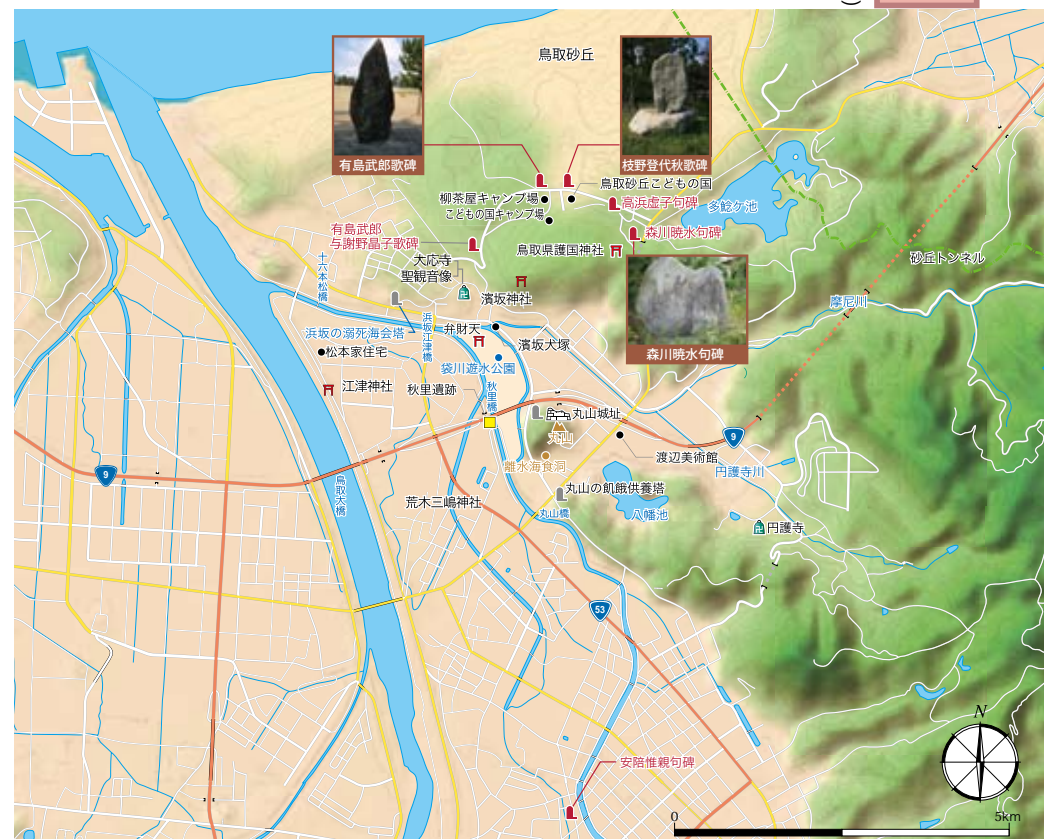


高浜虚子 句碑

高浜虚子 (1874~1959)
砂丘をいくつか越えしが波音の
まらかにきこえて海また見えず

えだのとよあき
枝野登代秋 (1904~1968)

秋風や 浜坂砂丘 少し行く



▲鳥取砂丘句碑・歌碑の位置図

りんどうを胸にかぎりて 山路行く
七十四才の直哉美し

岡田美子

こだまして 何やらたのし冬の空

岡田美子



志賀直哉文学碑



岡田美子句碑



谷口雲崖句碑

乱礁の 波やや荒き 遊び船

谷口雲崖

古里の 山の放らし 初鳥

谷口雲崖

月荒き 砂丘は古邑 うづむとや

森川暁水 (1901~1976)

浜坂の遠き砂丘の中にして
さびしき我を見てけるかも



有島武郎歌碑

砂丘踏みさびしき夢に手かれる
われと覚えて涙ながるる

与謝野晶子 (1878~1942)



有島武郎・与謝野晶子 歌碑



岡野貞一歌碑



岡野貞一

5 有島武郎・与謝野晶子 歌碑

大阪生まれ。明治・大正・昭和を短歌とともに生き、“情熱の歌人”とも呼ばれました。有島武郎と深い親交があり、昭和5年5月25日に夫の与謝野寛（鉄幹）と砂丘を訪れ、死を覚悟するほどの侘びしい自己を見出した友人への鎮魂歌として詠んだ歌です。歌碑は鳥取砂丘の西の端『武郎晶子侘涙の地』に建立され、有島の「浜坂の...」の歌とともに刻まれています。

(3) 童謡・唱歌の故郷

日本の近代音楽の基礎を築いた岡野貞一、田村虎蔵、永井幸次という3人の偉大な音楽家の出身地が県東部の鳥取市と岩美町であることから、鳥取県は「童謡・唱歌の故郷」と言われています。

1 岡野貞一

明治11年(1878)鳥取市古市生まれ。吉方町、西町と少年時代を過ごし、近所に住んでいた四歳年長の永井幸次の影響で音楽を志し、東京音楽学校へ入学。卒業したあとも教師として同校に在職し、大正12年(1923)に文部省唱歌の作曲委員に任命されて、今もお歌い続けられている「故郷」「紅葉」などの名曲を数多く作曲しました。その中でも「故郷」は、生まれ故郷の鳥取の情景を思い起こしながら、作られた曲ではないでしょうか。

鳥取市久松公園、修立小学校校庭、鹿野街道沿いなどに歌碑が建立されています。

- 代表作…故郷、春の小川、春が来た、朧月夜、紅葉、桃太郎など

「故郷」の歌詞

ふるさと 故郷

一、 虎追いしかの山
小ぶな釣りしかの川
夢は今もめどりて
忘れがたき 故郷

二、 つかにはいます 父母
雨に風になつて 友がき
思ひいづる 故郷

三、 こころざしをばたして
山はあいき 帰らん
故郷

高野貞一 作詞



故郷の作詞者 高野貞一について

明治9年(1876)長野県中野市生まれ。「故郷」の詩は、故郷(長野県の山間の村)の情景を思い描きながら作ったと言われています。一番は故郷の自然を、二番は故郷の人々を、三番は自分と故郷の関わりを詠むという構成です。

2 田村虎蔵

明治6年(1873)岩美町馬場生まれ。東京音楽学校(現・東京芸術大学音楽学部)卒業し、東京高等師範学校附属小学校に在職している頃より、おとぎ話や神話などを題材とした子ども向け唱歌の名曲を数多く作曲。これらの歌は言文一致唱歌とよばれ、当時の小学校教師や子ども達から歓迎されて、その多くは、現在まで愛唱され続けています。また、子ども向けの歌意外に、芸術性の高い歌曲(「青葉の笛」など)も数多く作曲しています。

- 代表作…大こくさま、きんたろう、はなさかじじい、一寸法師、虫の楽隊など

3 永井幸次

明治7年(1874)鳥取市西町生まれ。東京音楽学校を卒業後、静岡県師範学校、鳥取県師範学校、旧制・鳥取第一中学校、鳥取高等女学校などの教師を歴任したのち、関西地区の学校で合唱やオルガンの指導を行うからわら、外国の音楽教科書を研究し、また、自ら多数の音楽教科書を編纂しました。大正4年(1916)に私財を投げ打って、関西最初の音楽学校である大阪音楽大学(現・大阪音楽大学)を創立し、亡くなるまでの50年間を学長として在任しました。現在、関西地区の音楽界で指導的な立場にある人の大半は、何らかの形で永井幸次の教えを受けており、関西音楽界の父として、いまなお、多くの人々から敬愛されています。

- 代表作…上下の白(女性合唱曲)、五一じいさん、ささ舟、飛行機、希望など

文部省唱歌とは

明治43年(1910)以降、文部省によって『尋常小学讀本唱歌』という音楽教科書が編集・発行されたため、そこに収録されている唱歌は文部省唱歌と呼ばれました。文部省唱歌は、詩も曲も全て日本人による新作で、現在でも歌い継がれている名曲の多くは(故郷、紅葉、春の小川、春が来た、朧月夜等)は岡野貞一の作曲によるものです。



田村虎蔵



永井幸次

11. 袋川流域 民話・伝承が伝えるメッセージ



いなばの白兔



八上姫



白兔神社



お種



多鯨ヶ池

(1) いなばの白兔

大国主神にはたくさんの兄弟の神々がいました。若い頃は穴牟遲(おなむち)といい、ある日、兄弟の神々は因幡の八上姫(やかみ)に求婚しようと、穴牟遲に荷物を担がせて因幡へやってきました。気多の岬に着いたとき、毛皮を脱いだ裸の兔が横たわっていたので、「海水を浴び風に当たって横になっているといい」と言いました。兔が言われた通りにすると、風に吹かれた皮膚は乾燥してひび割れ、塩分が傷にしみ、その激しい痛みで兔は泣き伏してしまいました。

そこへ穴牟遲が遅れてやってきて、兔に泣いている理由を尋ねました。兔は、隠岐の島から本土に渡りたくて海の鰐鯨に一族の数の競争を持ちかけ、鰐鯨一族全員を並べてその上を数えるように渡って地面に下りようとしたとき、だましたことを言うと最後の鰐鯨が噛みついてきて兔の毛皮の着物を剥ぎ取ってしまったこと、その後に通るかかった大勢の神様の忠告通りにしてみたら傷がひどくなってしまったことを話しました。

これを聞いた穴牟遲は、「今すぐ河口に行って真水で体を洗い、そのまま河口の蒲(がま)の花粉を採って敷き散らした上に寝転がれば、おまえの体はもとの肌に戻るよ」と兔に教えました。その通りにしたところ、兔の体はもと通りになりました。これが因幡の白兔です。その後、白兔は、八上姫を妻にすることができるのは穴牟遲だと予言しました。

(2) 多鯨ヶ池伝説

① お種三題

1. 宮下に稲常の長者が住んでいました。この長者にお種というかわいい一人娘がおり、糸谷村の長流寺五重塔の竣工式に出掛けた折、お種は青年僧を一目見るなり胸をふるわせ、思い悩むようになってしまいました。心配した両親は摩尼山の名僧のもとへ連れて行ったところ、お種の姿はみるみるうちに蛇の姿にかわり、背後の池(多鯨ヶ池)に消えてしまい、稲常長老の家も次第に衰えてしまいました。

2. 宮下の伊藤土屋という長者の家に福部村細川からお種という使用人が住み込んでいました。ある秋の夜、柿の話をするとお種どこからかおいしい柿を持ってきました。不思議に思って使用人3人が後をつけたところ、お種は浜坂砂丘の池を蛇体になって泳ぎ、中の島の柿の木から熟れ

た柿の実を水の上に落とし始めました。その姿を見られたお種は池の底に沈んで長く池の主となり、それからこの池を“多鯨ヶ池”というようになりました。

3. 宮下の分限者にお種という老婆がいました。信心深く朝晩神仏を祈って暮らし、特に伊藤長者の使用人お種の話聞いてこれを慰めようと思いい、毎年多鯨ヶ池にお参りに行っていました。年が経ち、老婆は腰が曲がり歩行も困難になったので、今年で最後のお参りと池の岸辺に立って祈ると、不思議にも風が吹き、池水一面に五色のさざ波が広がり池の中央に水が奔騰して老婆の祈りに応えてくれました。

(3) 相撲発祥の地 丸山

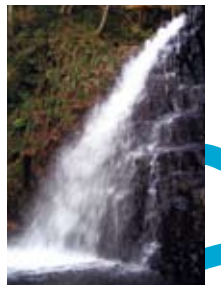
標高40mの低い丘ですが、国技の相撲発祥に関わる山です。野見宿禰(のみのすくね)を祭神とする大野見宿禰命神社地で、「徳尾の森」とも呼ばれています。野見宿禰(のみのすくね)といえば相撲の始祖であり、大和国当麻村(たいまむら)の当麻蹶早(たいまのけはや)の相撲の相手として出雲国の野見宿禰(のみのすくね)が選ばれ試合に臨んだところ、野見宿禰(のみのすくね)が勝利し、垂仁天皇は蹶早(のみのすくね)の領地を召し上げて宿禰(のみのすくね)に与えました。その地こそが徳尾の地であり、野見宿禰(のみのすくね)がこの地の当初の領主となったので神として祭ったといわれています。また、野見宿禰(のみのすくね)は埴輪を始めて造った人ともいわれ、土師連(はじのむらじ)の始祖ともいわれています。なお、モチノキの深い森となっている社叢は国の天然記念物に指定されています。

(4) 袋川流域に残る主な民話・伝説 (109 ページの位置図を参照)

① 雨滝の伝説

亀が淵伝説<管滝>

雨滝村に亀という心の優しい男の子がいました。両親を早くに亡くし、心の悪い義理父に何一つ不平を言わずに働いていましたが、ある年の春、二人が淵の横の山で薪を伐っていたところ、亀が鉈を取り落とし、雪解け水で水かさが増した下の淵に沈んでしまいました。義理父に鉈を拾ってくるように命じられた亀は淵に入りましたが、それきり上がってくることはなく、この滝壺のそばに来ると亀の悲しげな声が聞こえるようになりました。



管滝

シラジラババアのたたり伝説<七曲城址>

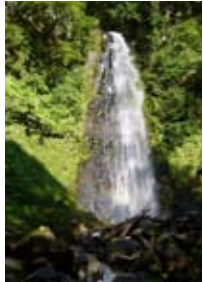
雨滝に向かって左の険阻な山を城坂山といい、この山上に七曲り城がありました。羽柴秀吉が天正8年(1580)11月にこの城を攻め、寒気と食糧不足のため力尽きた武将以下全員が28日に自決しました。その時の城主の年老いた母親が怨霊となって、毎年11月28日には大嵐や大吹



七曲城



雨滝川



雨滝



雨滝の不動明王像



雨滝付近の山々



雨滝の愛宕神社

雪を起こしたり、山人に大きな石を転がして害を加えるなどの事故があったため、この日は天気が悪くても山の近くに出掛ける者はなく、この怨霊を「シラジラババア」といって恐れていました。

羽柴秀吉の貂の皮瀧伝説<雨滝川>

羽柴秀吉が七曲り城攻めを目前にして、雨滝川(袋川)中の大きくて平らな岩上で休憩していたとき、秘蔵の貂の皮袋に入れた南蛮渡来の香を取り出そうとして、深い瀧の中に落としてしまいました。その後何年もこの瀧の上を通ると良い香りがし、この瀧を貂の皮瀧と呼ぶようになりました。

雨滝の伝承<雨滝>

雨滝のお不動さんを信仰すると、精神病が治る、商売繁盛など霊験があらたかと伝えられているほか、昔から「雨滝に詣った年の冬は膚が荒れない、滝の霊水が寒さを守って下さる」と信じられ、『美人になる』といわれています。

桜田門の扉に使われた大榎の木伝説<雨滝の木材>

雨滝の深山は原始林のように榎やブナ、桜、朴などの大木が茂り、その中でも一段と大きな榎の木がありました。城普請の際に直径が4m以上あったといわれるこの木が切り出され、大雨の時に雨滝川(袋川)を流して城に運びましたが、城普請には使わず、江戸城内の桜田門(桔梗の門)の扉に使われたということです。

だじょうごんの坂<雨滝>

雨滝集落から雨滝に行く途中にある急な坂道のことを、地元では「だじょうごんの坂」と呼んでいます。「だじょうごん」とは暦の吉凶を司る八神の大將軍のことで、太白(金星)の精であり、この神の方向は3年塞がるとされて忌み嫌われていたため、暦学の方位と急な坂道の地形を重ねて、この坂より先への立ち入りを避けていました。

蛇山城の伝説<雨滝の愛宕山>

雨滝の愛宕神社が鎮座する山には戦国時代に山崎の毛利氏の出城があり、山の名を蛇山といたので蛇山城と呼ばれました。城は南東に面して建っていたらしく、下の田んぼの名を浄禪(城前)、山すその道を浄禪山川、道の下を流れている川を山川(ホーキ)、山川と対照して広い田んぼの中に走る真っ直ぐな道をなわてとよみました。

②十王峠伝説

冥府への入り口伝説<十王峠>

十王とはこの世でおかした罪を裁く、しんこう秦しんこう大王(不動明王)・しんこう初江王(釈迦如来)・そうてい宗帝王(文殊菩薩)・ごかん五官王(普賢菩薩)・えんま閻魔王(地藏菩薩)・へんじょう変成王(弥勒菩薩)・たいざん泰山王(薬師如来)・びょうどう平等王(観音菩薩)・とし都市王(勢至菩薩)・ごどうてんりん五道転輪王(阿弥陀如来)の十人の王たちのことであり、この峠があこの世の入口と信じられていました。

ケイ東塚の哀話<十王峠>

十王峠を越えて銀山村へ向かう道沿いに酒屋がありましたが、ある冬、雪が家を押しつぶして一家の人々は残らず圧死してしまいました。その主人に“ケイ東”と法名がつけられたので、弔われたこの塚を「ケイ東塚」と呼びました。

太閤の一口水<十王峠>

銀山村より登って十王峠の峰の右、道ばたの平地に清水が湧き出しています。羽柴秀吉が城攻めのためにこの峠を越そうとした際、炎暑で武將達が喉を乾かしていたので、秀吉が鎗の石突きを地に突き通したところ、そこから水が湧き出しました。その後、銀山が繁昌の時にここに鉛座を建てたので、鉛座清水ともいわれました。

③湖山池誕生伝説

長者伝説<湖山池>

かつて湖山池は池ではなく、長者所有の田地でした。ある年の田植の時、一日で植え終えることができなかったので、金の団扇を持って夕陽に向かって三度招いたところ、山に入ろうとしていた太陽が3段ほど昇り、無事に田植を終えることができました。次の年も金の団扇で仰いだところ、ついに天罰が降り、田地はたちまち湖水へと変わって跡形もなくなってしまうました。

④稲葉山伝説

松風・村雨の伝説<在原行平の塚>

在原行平が須磨の浦で見初めた美しい姉妹の松風・村雨は、行平が因幡国守を務めていた間、稲葉山の麓にて楽しく過ごしていましたが、行平が任期を終えて都へ戻った後は思い出だけを生き甲斐にして岩美郡福部村左近の村で人目を避けて暮らしました。死後、別れを悲しんだ稲葉山に2人の墓が造られ、稲葉山の老松の根本には「在原行平の塚」といわれる宝篋印塔が建ち、近くに「松風・村雨の墓」が並んでいたといえます。



十王峠



十王峠の地藏堂

和泉式部の誕生

治安(1021)の頃、大江貞基が因幡国守となりこの観音を深く信仰しました。そして祈願の子どもが生まれ、この女の子が和歌の聞き高い和泉式部です。

尊像の霊験

元暦(1184)の頃、源平の戦いによってこの寺の伽藍も坊舎もことごとく焼けてしまいましたが、この尊像が本堂の西側の“薬師ヶ平”の大木の根元に移っていました。国内外の人がお参りに訪れて難病苦悩を折り福寿増長を願い、一つとして叶わないものはなかったほどでした。



湖山池



在原行平の塚

御慈悲の巨石

永享年中(1439・40)に流行病で多くの人が亡くなる中、観音を信仰する貧しい娘は元気なままで、観音の導きによって結婚することもでき、子宝にも恵まれました。ある日袋川の水が溢れて橋もろとも流されましたが、身体が岸へ近づいて大石に流れ寄せられ、岸に這い上がることができました。後ろを振り返ると大石は消えていました。



船山



新町の旧河道跡



八丁の竜伝説地

5 面影山伝説

長慶院法皇の伝説<面影山>

南北朝時代、南朝側の長慶院法皇が蒲生峠を越えて潜幸され、この地で崩御されました。

八百比丘尼の伝説<面影山>

大路山のネズミに招待された老女は出された人魚の肉を持ち帰り、これを食べた女の子が800年近くも生き、面影山山頂付近の平地に屋敷を建てて住んでいました。

6 地名伝説

舟山伝説<船山>

あるとき大津波が起こり、賀露の浜から鳥取の町を一飲みにして国府の里におし寄せました。一ノ宮の社の庭まで水が届き、岡益の奥では溢れた水が私都方面に流れ出し、松尾の土堂薬師のお堂の上にまで水がきました。このことから岡益の奥を「水越」というようになり、一ノ宮の広庭と水越と薬師堂の高さが同じだと語られるようになりました。津波が引いたあと、新井村の氏神様の右側の山の中腹に津波で打ち上げられた一艘の小舟が止まっていて、のちにこの地は「舟山」と名づけられました。

八丁の竜の伝説<新町>

新町は昔、八丁といい、かつては大きな竜が出てきて荒らしまわり、南の方にあばれ込んで安田渕を作ったり、毛田の皮をむいて血を流したり、今在家や新通りの周辺に大きな沢を作って住みつくようになりました。そこで八丁の役人が策を講じて竜を追いやり、八丁の周りは肥沃な土地が広がり栄えました。その後、塩釜をたいた所には塩釜神社を祭り、大きな杵を打ったところを大杵と呼び、竜を追っばらった吉方を吉方といい、それまで家がなかったところに家が建ち始めたので今在家と呼ぶようになりました。

羽柴秀吉の大笑い伝説<笑い道と加藤橋>

羽柴秀吉が城攻めを行っていた折、私都の市場城を攻め落とすため三代寺より峰寺へ山越えをする途中で一服し、市場城を眺めながら余裕の大笑いをしたといわれ、それ以来この道は「笑い道」と呼ばれています。そして、峰寺の前の小川に加藤清正に命じて土橋を架けさせたため、この橋は加藤橋と呼ばれています。また、この道は後醍醐天皇が隠岐島から京都へお帰りになる時に通った道だともいわれています。

太多羅大明神のモッコ伝説<甑山>

岡益の太田神社の太多羅大明神が近くの山をモッコで担いで歩いていたときに、担ぎ棒が折れて担いでいた山を置き去りにしました。これが甑山だといわれています。

7 武内宿禰伝説

武内宿禰の甑伝説<甑山>

武内宿禰が因幡の国に入ったときに、高草の鍋山に鍋をすえ、この山に甑(蒸し器)を置いて飯を炊いたといわれています。

武内宿禰双履石伝説<宇倍神社>

360歳余も生きた武内宿禰が本殿裏の小高い丘の上に双履を残してお隠れになりました。

武内宿禰と血田伝説<ケデン河原>

「ケデン河原」と呼ばれている辺りは、武内宿禰が因幡国遠征のときに、先住のケデン族を制圧したといわれている所です。ケデンというのは「血田」という地名とされています。または、「計天牟」・「毛田」・「仮田」・「仮殿」とも書かれています。

8 安徳天皇伝説

三種の神器の伝説<酒賀神社>

安徳天皇と落ち延びてきた二位の尼が三種の神器をこの宮に託されましたが、江戸時代に雲州の神官門脇好井が出雲へ持ち帰り、代わりに神器を模した三幅を寄進しました。

ご崩御地の伝説<崩御ヶ平>

安徳天皇一行が因幡の国に落ち延びてきてからのち、瓢箪山に暮らして荒舟の山奥の見晴らしのよいところへお連れしたところ、急に気分が悪くなって崩御されたことから、この場所は崩御ヶ平と呼ばれるようになりました。

二位の尼の伝説<新井の石舟古墳>

安徳天皇の祖母、二位の尼が亡くなり、泉が谷の石舟に葬られました。二位の尼の墓所があるところからこの地を「二位」と読んでいましたが、後に「新井」と改められました。

梶原橋伝説<谷>

源氏の梶原平三景時が平家一門の滅亡をいち早く調査し源頼朝に報告するため、壇ノ浦から石見・出雲・伯耆と浦伝いに谷村までやってきま



甑山



太田神社



ケデン河原



酒賀神社



新井の石舟



岡益の石堂



御陵山



甑山

海の守り

但馬の船頭の多くが観音を信仰し、暴風雨となって生死紙一重の危険に出会った時にひたむきに名号を唱え続けると、いつでも波は静まり船はいつの間にか港へ入っていたといいます。



霊山と面影山



茅ん堂

した。しかし、風雨が激しく袋川の水が溢れ、横切ることができませんでした。そこで景時は近在の村人に木材を出させて船筏に組み、やっとのことで人馬とも渡ることができました。その後、この場所にできた橋を梶原橋といいました。

安徳天皇ご陵墓伝説<御陵山・岡益の石堂>

壇ノ浦から岡益の里へ落ち延びてきた安徳天皇は、文治3年(1187)8月13日に御年10歳にして崩御されました。お仕えしていた人々は悲しみながら冬頃から翌年秋までかかって縦一丈六尺、六間四面の石堂を建立し、その中心に石棺を置いて御骨を納めました。ここを西の「帝石堂」と名づけて安徳天皇のご霊場とし、石堂のある山を御陵山と呼びました。

9 恵心僧都伝説

光る杉と恵心僧都の伝説<雲山>

恵心僧都が巡錫の折に正蓮寺に止宿された時、蜘蛛山(現在の雲山)にあった本願寺の門前を通りかかると、杉並木の中の一本が不思議な光りを放っていることに気づき、村の長に頼んで譲り受け、その木で「毘沙門」、「吉祥」尊、「禅武帝」を手刻し、この三尊を正蓮寺に安置しました。この三尊はその後の兵火の難も免れ、鳥取藩の家老荒尾志摩が寺跡に護国山多聞寺を建てて祭り、明治維新後は修験山内家がこれを引継ぎ、祠に納めて祭っていると伝えられています。

立岩大権現の伝説<雲山>

恵心僧都が蜘蛛山に立ち寄られた時、法華経を一石に一字宛書いて経塚を造り、封土の上に2、30mにも及ぶような大きな石碑を建てました。風雪に晒されて現在見られる姿になりましたが、頂上付近の立岩がそれです。ここに大権現が祭られ、航海安全だけでなく脳の病気にもよく効くといわれました。尾根の中央から北方に突き出している峰は「慈雲山」と呼ばれ、この頂上に「七人籠」と呼ばれる籠り堂がありました。大杵村落では昔から村に重病人が出ると必ず七人交代で籠り堂に集まり、前庭に篝火を焚いて隠岐島の燃火神社に向かって平癒を祈願する習わしがありました。ここから尾根伝いの逆を南の方へおよそ5、60m進むと林の中に中型の円墳があり、「雲塚」や「雲山塚」と呼ばれています。

10 地藏伝説

子ども好きなお地藏様の伝説<茅ん堂>

お地藏様は村の子どもたちと遊ぶのが大好きでした。夏になると、堂の前の小川と一緒に水浴びを楽しんでいました。お地藏様は子どもたちが小川の上手まで運んで流してくれるのが大好きでした。鶏冠尾峠を越え

た殿村(外邑)にいる仲良しのお地藏様は田んぼの畦道に一人ぼっちで立っていたので、よく一緒に遊んでいました。外邑が火事に見舞われたとき、茅ん堂のお地藏様は峠を越えて仲良しのお地藏様を助けに行き、必死に消火につとめました。

袈裟懸けに斬られた地藏伝説<桜谷の六地藏>

桜谷から今在家へ行く道筋に六地藏が並んでいます。その近所で縁が実らず流産して亡くなった娘の呪いのような「はよ戻って来いよー」という声が、婚礼の列が通るたびに今在家へつながる道に架かっている“おおかみ橋”の下から聞こえ、それを聞いた者は必ず縁が切れて帰ってきたといわれたため、嫁入りや婿入り時にこの道を通るのは忌み嫌われていました。ある時、通りかかった武士が声を頼りに斬りつけたところ、六地藏の一体が肩口から袈裟懸けに斬られ、腕が切り落とされています。

11 河童伝説

饅頭を食った河童伝説<千代川の河童>

江津村のある家で妻が亡くなり、後妻をもらいました。先妻には男の子が一人おり、後妻はその子が憎くてたまりませんでした。6月15日の危日を逆に使えば良いと考えた後妻は、かま焼き饅頭を竹の皮に包んで、継子に持たせて川に行かせました。男の子が川縁にいと河童があらわれて相撲を取って遊び、一番大きな鍋焼きの饅頭を食べた途端に血を吐いて死んでしまいました。これを見た男の子は急いで家に帰り、元気な姿で戻ってきたので継母は荷物を纏めて家を出て行きました。

河童のタタリ伝説<千代川の河童>

鳥取城下から少し離れた所に、嘉平という田舎相撲の相撲取りがいました。息子の正吉は親ゆずりの豪胆で力持ちの少年でした。千代川で泳いでいた正吉が何かに足をひっかかれたある夏の日の夜、なぜか川へ行って泳ぐと河童に出合いました。正吉と河童の川太郎は相撲をとり、正吉は次々と現れる河童達を岩へぶん投げました。父の嘉平は夜中に正吉がいないことに気がつき、川端で正気を失って一人で相撲をとっている正吉を見つけました。正吉は摩尼寺の住職の祈祷によって、死んだ河童を懇ろに弔い、加持祈祷を続けることを約束して、この河童のタタリから逃れられました。

古市の河童伝説<千代川の河童>

鳥取城下での用件を終えて今町から富安を経て古市の近くまで戻っている途中に呼び止められ、タルと手紙を国安の間屋の主人に手渡してほしいと頼まれました。気になって中を見てみると、タルの中には人間の尻

大蛇の慈悲心

智頭郡で木地産業をする者が足をすべらせて谷底へ落ちてしまったところ、気がついてみると大蛇の首にまたがっていました。大蛇は木地屋を首に乗せたまま元の所へ戻してくれ、菩薩の光明は大蛇の体にまで透っていました。

盗賊のざんげ

巡礼一人が夕方、普門品(観音菩薩が衆生済度の道をのべられた仏典)唱えながら但馬の方へむけて十王峠を越していた時、盗賊に襲われ、普門品を盾にして立ち向かうと、盗賊は血を吐いて倒れてしまいました。やがてこの盗賊達は懺悔して発心し、巡礼にしたがって観音信仰に入っていました。

情けの道連れ

庁の百姓が主の夫役となって江戸勤番となり、悪い遊びを覚えて座敷牢に入れられてしまいました。許された後に故郷の観音を思い出して一心に普門品を暗じていると、突然見知らぬ僧があらわれて庁の自分の家の前まで導いてくれました。

水神さまへのお供え

千代川の川筋にいつとき沢山の河童が棲みつき、田畑を荒らしたり川遊びを楽しんでいる子どもたちにも危害を加えるようになりました。川筋の村の人々は河童が姿をあらわすようになると、「初なりのナスやキュウリを水神様に供える」といって川に流すことが風習となり、6月15日には、「なべ焼き」や「かま焼き」といって、中にアズキ餡を入れた小麦饅頭を家庭で作って川に流す習慣ができました。河童が人に憑くと「尻っ子」を抜かれるだけではなく、魂も一緒に抜き去るといわれています。

江津村でも6月15日を「危日」と呼び、饅頭を焼いて神仏に供え、供えた饅頭を川に流すと、それを川の河童たちが食べて、川で遊ぶ子どもたちの尻っ子を抜かないといえられていました。

観音のみちびき

享保14年(1729)美歎の高名な百姓伝兵衛は男を鳥取へ使いに出しました。日が暮れた時、身の丈が2mもある山伏があらわれてその男を拉致しようとしたところ、谷の観音の使いだと言う若い女性があらわれ、髪元結を抜いて男の手に握らせて歩き出しました。しばらくすると男は目がくらみ、村の入口、助五郎家の前で気絶してしまい、物音に驚いた助五郎の家の老が介抱して、男はやっと正気にかえりました。主人の伝兵衛は観音にお礼に参り、「宝前のワニ」にして献上しました。

桂蔵坊キツネの伝説 < 中坂神社 >

久松山にはキツネが多く住み、桂蔵坊の一家も城が天神山から移ってくる前からここに住んでいました。山の様子を知り尽くし、足も速く、江戸まで3日3晩で往復できたので、殿様の急ぎの用事や秘密の便りを運ぶのは桂蔵坊の役目でした。ある日、播磨国の三日月村辺りを通りかかると焼きネズミをエサにキツネとりの罾が仕掛けられており、帰り道に桂蔵坊はついに我慢ができずに罾にかかってしまいました。



鳥取城



宇倍神社

っ子がいっぱい詰め込まれていて、この男の尻っ子を抜くと千尻っ子になるところでした。男はあの老人が古市の河童だったと気づき悔しがりましたが、後の祭りでした。

河童の智慧伝説 < 千代川の河童 >

吉成一带にはたくさんのよどんだ淵が点在し、河童の棲家となっていました。馬を引っ張り込んで尻子を抜いていた河童は近くの村に住む佐兵衛の駿馬に負け、宝物の光る玉を取られてしまいました。一年後に佐兵衛に男の子が生まれ、光る玉が入った箱を背負うと歩けるような気がすると言われた夫婦が箱を背負わせると、男の子は歩き始めて千代川の淵に飛びこみ、玉を取り返したという笑い声が川の中から聞こえてきました。

酒好き市助の伝説 < 千代川の河童 >

千代川に近いある村に住んでいた市助のただ一つの楽しみは、チビリチビリとお酒を飲むことでした。市助が夏の夜釣りに出掛けた時に酔いが回って寝込んでしまうと、河童がお酒を飲んでしまいました。それ以来、お詫びに市助が川魚をビクに入ると、続けて河童が何匹もビクに投げ込んでくれ、川漁に出ると必ず大漁になりました。市助も川漁に出ると先ず川岸にたたずんで徳利のお酒を川の中にたらしあげました。

12 キツネにまつわる伝説

キツネのあだうち伝説 < 神垣 >

神垣村に源兵衛という百姓が住んでいました。畑に行ってみると、キツネが一匹気持ちよさそうに昼寝をしていたので、小石を投げて脅かしました。家に帰ると裏口の向こうでキツネが遊んでおり、葉っぱに水溜まりのアオミドロをかけると大ふろしきになり、小さな竹は日笠に、キツネは美しい娘に化けました。その夜、訪ねてきた自分の娘を化けたキツネと勘違いしてひどい目にあわせてしまい、自分がキツネにだまされていたことをようやく悟りました。

8 峰の観音様の伝説 < 谷の観音 >

因幡西国十二番札所であり、ご本尊の千手観音菩薩は、寺の縁起によれば聖武天皇が光明皇后の御安産祈願のため行基に仏像を彫らせ、その一つを伝教大師(最澄)が比叡山からこの地に移したものと伝えられています。「谷の観音さん」として親しまれ、和泉式部の誕生にまつわる話など観音様の霊験あらたかな伝説が多く伝わり、厚い信仰を集めていました。

13 犬塚にまつわる伝説

早鐘の犬の伝説 < 犬塚 >

因幡の国分寺と法華寺のどちらかに、食事時になると決まって一匹の犬が姿を見せるようになりました。昼時になると、鐘が早く鳴る方の寺に行ってお馳走をもらっていたため、ある日、国分寺の坊主が法華寺の尼僧にいたずら話をもちかけて、両方の寺の鐘を同時に鳴らしてみました。犬は右往左往の末、ついに力尽きて息絶えてしまいました。それを見ていた村人は可哀相に思い、犬が倒れた道ばたに石の塚を建てて懇ろに弔いました。

犬橋の伝説 < 浜坂犬塚 >

摩尼川が袋川に合流する浜坂村は但馬へ向かう人や旅人の往来が多く、摩尼川に架かっている丸太の一本橋を渡るのに難渋している様子を見て、村のある男がこの丸太橋を渡り易いものにして考えました。犬に竹筒を下げ毎日橋のたもとに通い、犬の愛らしさに往来者は少しずつ募金をしてくれました。こうして男が名付けた「犬橋」が完成し、その後、犬は橋の近くに葬られ、現代移転はしましたが「犬塚」は今でも顕彰されています。

14 恩返し伝説

うなぎ橋の伝説 < 中町 >

鳥取の中町の東側は鰻町といい、鰻がたくさん棲息していたため、ここに架かっていた橋を「うなぎばし」と呼んでいました。この橋に一人の坊主が通りかかったとき、子どもたちが釣った鰻を買い取り、元の橋の下に放してやりました。それから三年後、坊主が再び橋のたもとに差し掛かったところ、袋川が氾濫しうなぎ橋は流されていましたが、突然大きな鰻があらわれ丸太橋のように川に体を浮かべると、坊主を向こう岸へ渡してくれました。それからは、うなぎ橋の近くで鰻を獲ったり食べたりすることはなくなりました。

蟹の恩返し < 久松山麓の城下 >

池田藩主の頃の城下町に大きな分限者の屋敷があり、泉水池には久松山の麓からの水が引かれ、毎朝その家の娘が仏様に供えたご飯をエサとして池に投げ込み、たくさんの赤蟹子(沢蟹)を飼育していました。ある日、久松山に棲息していたオスの大蛇が若い男に化身して求婚し、娘を隠した泉水池上の松の木に吊された櫃めがけてスルスルと上り始めたところ、泉水池の中の赤蟹子たちが一斉に両方の蟹鉗を突き上げて大蛇を撃退し、娘を助けました。



峰の観音



峰の観音の石門

谷地区に、「観音妙智力 能救世間苦」と彫られた石門があります。これは、京都清水寺の大僧正・大西良慶氏の筆によるもので、昭和5年に建てられました。この石門をくぐり山道を登ると、頂上近くの観音堂が見えてきます。



犬塚



浜坂の犬塚



神垣(至る神垣神社)



うなぎ橋の伝説



鳥取城下

袋川と報恩慈悲の話

袋川流域には、助けたウナギに乗って川を渡った話や、橋の架け替えを手伝った犬の話のほか、蟹の恩返しの話、千代川の漁師と河童の話、谷観音の慈悲の話など、報恩慈悲の話は枚挙にいとまがありません。袋川は暴れ川ではありますが、流域の人々、川に住む生き物たちそして袋川の精霊が、互いに助け合い、恩返しをし、恵みを分かち合いながら暮らす。その源の水の流れでもあるのです。



千代川



栃本付近

鶴の恩返し伝説<江津>

ある年の大晦日、江津の老人が米を買いに出掛けたところ、子どもたちが鶴をいじめていました。老人は持っていたお金と交換して鶴を逃がしてやると、夜になって若い娘が訪ねてきました。娘は食事の支度をしてくれ、老人の取ってきた千年カズラを糸にきれいな布を一反織り上げました。その後、布を売するために娘が城下町へ行ったきり戻ってこないことを心配していると、箱膳の上に鶴の羽3本とお金がたくさん置いてありました。

亀女房の伝説<浜坂>

浜坂村の甚助が浜湯山の浜辺で流木拾いをしていたとき、誕生したばかりの小亀を海の中へ放してあげたところ、大きな海亀が訪ねてきて甚助を竜神様のもとへ連れて行きました。甚助は竜神様の妹嫁を嫁にもらい、浜坂で暮らし始めてから水浴びを覗かないという約束を破ってしまったため、亀だった女房は2人の子どもと小箱を残し、末子を連れて出て行ってしまいました。甚助はさらに約束を破って小箱を開けてしまうと白い煙が立ち上り、屋根や衣服がボロボロになっていました。その後、美しい光が海辺にあらわれた翌日、海岸で遊んでいた2人のこどもの姿が消え、甚助の姿も消えてしまいました。

鯉の恩返し伝説<千代川河口付近>

千代川の河口に近いある村に、一人の貧しい若者が住んでいました。若者はなげなしのお金を出して子どもたちがいじめていた鯉を買いました。数日後、若い女の人が訪ねてきてそのうちお嫁になりました。決して台所は覗かないという約束を破って盗み見ると、一匹の鯉が尾ひれを動かしながら米をといでおり、夕食が出来上がった後、鯉の化身だった嫁は出て行ってしまいました。

15 頓知伝説

狂歌の徳伝説<栃本>

高麗水をはじめとする水害で年貢が滞った時、栃本村にいた知恵のある老人が一首したため代官に差し出しました。池田備中守長吉はそれを読み、老人の狂歌に感じて年貢を免じるよう代官に言い渡しました。

雨滝の伊平の知恵<宇倍神社>

ある日、若殿が領地を檢分するので、物知りによく知恵のまわる雨滝村の伊平という老人が案内役選ばれました。宇倍神社の前に来たとき、茶目気多い殿様がこの寺の名前を尋ねると、伊平は“一宮山・長命寺”と答えました。さらに次々と絶妙に答える伊平の博学に殿様は感心し、引出物を下されました。

16 うっかりした昔話

大庄屋が買った馬<楠城>

楠城村の田淵甚左衛門は、宝永2年(1705)鳥取藩主より大庄屋に任ぜられました。この大庄屋の自慢の一つは良い馬を持っていることでしたが、馬が年をとったので若い馬と取り換えることにし、伯耆の大山の馬市に出掛けました。新しく馬を買って帰ってきたところ、それは売った自分の馬でした。

神護村の正月の昔話<神護>

雪深い片田舎の冬ごもりはよその村との関わりもなく、神護村では毎日をのんびりと過ごしていました。そんなある日、明日は正月と村人は連れだって鳥取へ買物に出かける途中、神垣の村を通ると数人揃って各家を次々に回っている姿を見ました。目礼かかと思っていたところ、年頭回りをしていることを聞き、神護の暦はいつの間にか一日遅れていたことに気がつきました。



宇倍神社

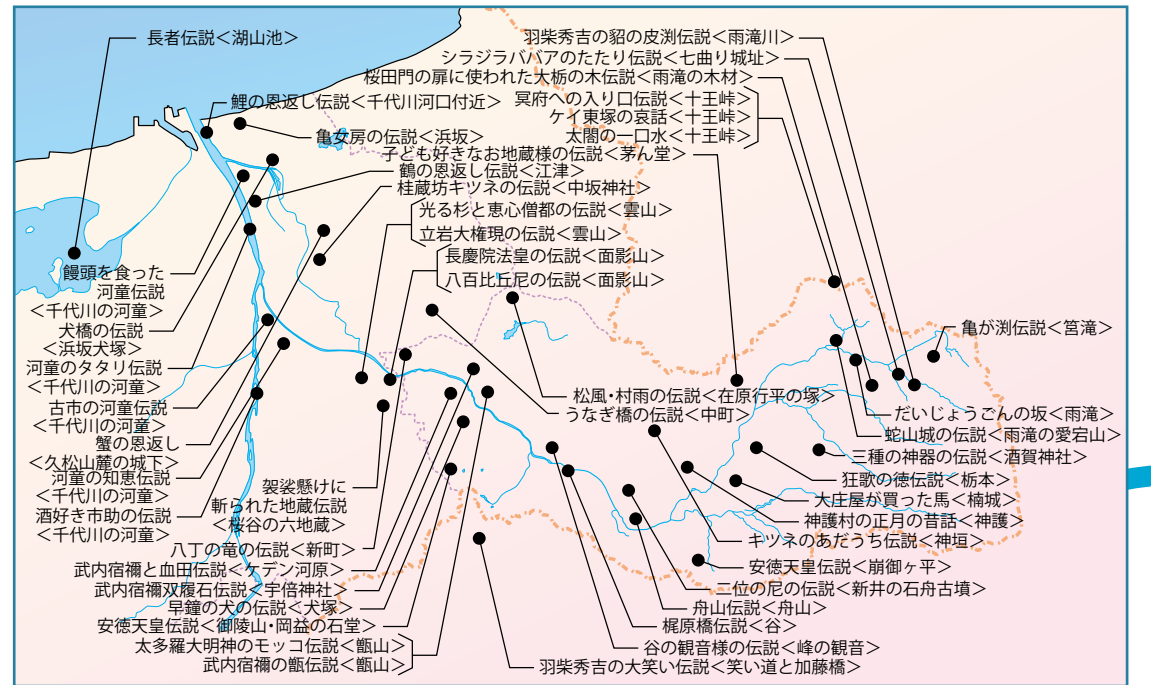


楠城付近



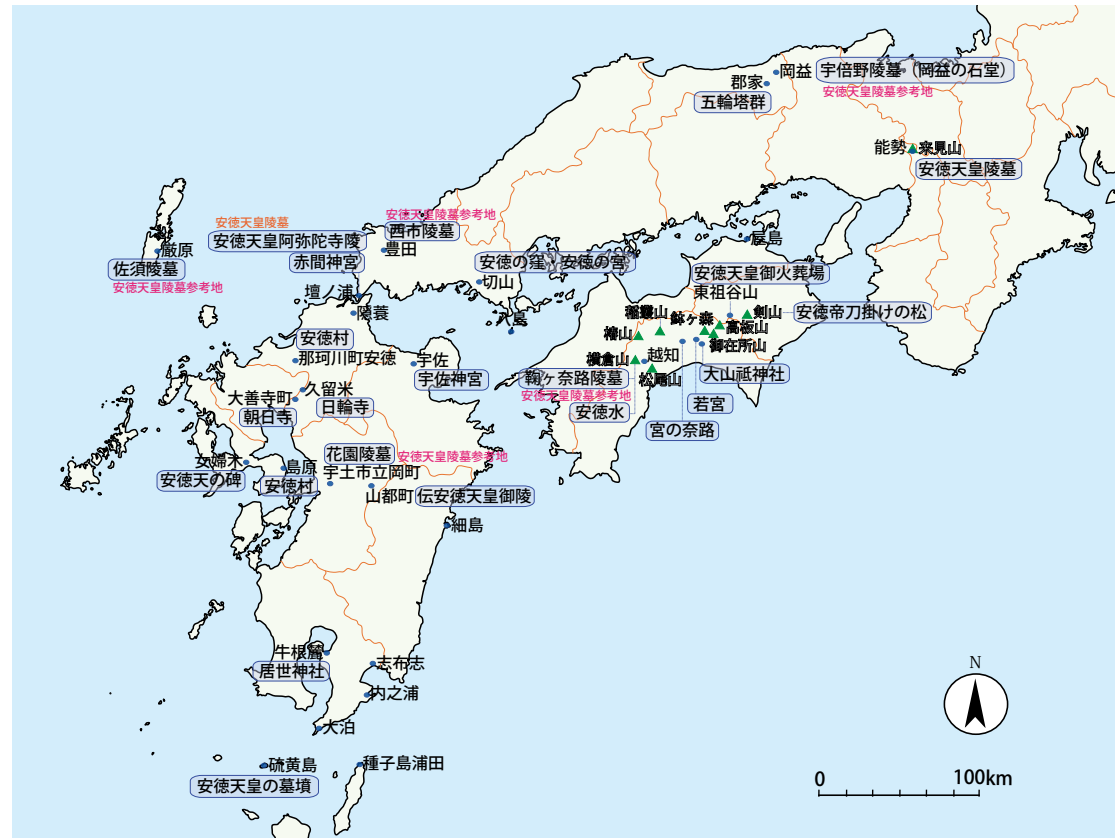
神護集落

▼ 袋川流域の主な民話・伝説の位置図



主な潜幸伝説地

平国盛が奉じて四国へ落ちのびたとして、徳島県や高知県には刀掛けの松や火葬場と伝えられる場所が数多く残り、横倉山にある鞠ヶ奈路陵墓は陵墓参考地の指定をうけています。その他にも平資盛とともに壇ノ浦から八島、細島、志布志、内ノ浦、種子島浦田、大泊を経て鹿児島島の硫黄島へ渡ったとする説、長崎県の対馬に逃げて宗氏の祖・宗知宗になったとする説など、中国、四国、九州地方を中心に20箇所以上の伝承地が存在し、今もなお大切に語り継がれています。



▲安徳天皇の主な潜幸伝説地

梶原橋伝説

源氏の梶原平三景時が平家一門の滅亡をいち早く調査し源頼朝に報告するため、壇ノ浦から石見・出雲・伯耆と浦伝いに谷村までやってきました。しかし、風雨が激しく袋川の水が溢れ、横切ることができませんでした。そこで景時は近在の村人に

(5) 袋川流域にも伝わる安徳天皇伝説

①安徳天皇

第81代の天皇の安徳天皇は、治承2年(1178)に高倉天皇の第1皇子として生まれ、母は平清盛の娘・建礼門院徳子、名を言仁といい、治承4年(1180)に2歳で即位しました。寿永2年(1183)、源義仲の入京の際に平氏に擁せられて西海に落ち、文治元年(1185)3月24日長門壇ノ浦での戦いにおいて平家軍の敗北が強くなると、祖母の平時子(二位の尼)に抱かれて三種の神器と平家一門とともに入水しました。山口県下関市赤間神宮隣の阿弥陀寺陵が陵墓とされていますが、安徳天皇は壇ノ浦で入水せず、平氏の残党と地方に落ち延びたとする伝説が各地に残されています。

②因州の安徳天皇と岡益の長通寺

壇ノ浦から賀露港へ

壇ノ浦の合戦の折、新中納言知盛の代官で長門の国の住人・紀伊刑部大夫道祐は、密かに用意していた小舟に安徳天皇や二位の尼を急いで移し乗せ、三の島に向けて落としました。それを見ていた越中次郎兵衛盛次は、舟の舳先に躍り出て天皇と二位の尼が入水したと大声で

叫び、平家方の兵士たちは後を追うように相次いで海中深くに身を投じました。

しかし、越中次郎兵衛盛次と伊賀平内左衛門家長は、水を潜って流れて行く舟に這い上がり、帝を乗せた小舟を追いました。風の吹くままに落ちてゆくと、舟は壇ノ浦の西から遥かに北上して何日も日本海を漂い、ついに隠岐の島の岩崎の浦へと流れ着きましたが、暴風雨によって波が荒れ上陸することはできませんでした。盛次と家長は願い出て宝剣を賜り、荒れ狂う海中に投げながら竜王に祈願すると、暗雲が去って晴れわたり、波も静かになりました。そうして小舟を南へ向けて漕ぎ進むと、やがて因幡の国賀露の浦へとたどり着きました。

岡益から瓢箪山へ

小舟を降りた一行は、通りかかった一人の僧侶によって因幡の国にたどり着いたことを知りました。その僧侶は岡益の里にある光良院の宗源和尚でした。一行はその和尚に事の次第を申し述べてよい隠れ家を探してほしいと頼み、和尚はひとまず岡益の草庵へと案内しました。帝が光良院に到着して最初に足を洗われた池を「帝池」といいます。それから間もなくして源氏の梶原景時の橋騒ぎが伝わり、危険を感じた一行は岡益より南の谷にある郡家の峰寺まで落ちていきました。それより岡益を通過して峰寺越しをする道を「通り谷」と名付け、お忍びになっていた岡益の跡を「西の宮」と呼びました。

源氏の追手や人の噂を気にせず安んじて生活できる場所を求めて、次の日はさらに奥山へ向かいました。用心深く夜に山道を進み、帝は盛次や家臣の背に背負われて登り、二位の尼や女官たちは、慣れない道に苦勞しながら登っているなかで早くも夜が明けてしまい、ここを「明辺」というようになりました。袋の口を結んだような絶好の隠れ場所といわれた目的の瓢箪山に着くと間もなく、そこに「黒木の御所」を造営しました。

安徳帝の崩御と長通寺

帝一行が瓢箪山に落ち着かれて3年目の秋、帝の心を慰めようとして荒舟の山奥の見晴らしのよいところへお連れして秋の景色を眺めていたところ、帝の気分が急に悪くなって苦しみ始め、やがて「水一つ」と言われて崩御されました。二位の尼が差し上げた水の滴りからできた小さな池のことを「帝池」または「平家池」と呼んでいます。また、秘かに隠れ住んだ地を「私都」といいました。亡骸を光良院に移し、宗源和尚は比叡山の般若寺にいた長通律師を急ぎ招いて葬儀を執り行いました。文治3年(1187)8月13日、帝の御年10歳と伝えられています。光良院はこのとき「長通寺」と改称して、そこに御位牌を安置することになりました。帝の柩を曳いたところを「梵字ヶ平」、

木材を出させて船筏に組み、やっつこと人馬とも渡ることができました。その後、この場所にできた橋を梶原橋といいました。



長通寺



岡益の石堂
(安徳天皇陵墓参考地)

平家の悲哀・安徳天皇四伝承

・御陵山

この山には安徳天皇の陵墓参考地に指定されている「岡益の石堂」があることから御陵のある山としてこの名が付き、また「石堂の森」とも呼ばれています。

・岡益の石堂

安徳天皇御陵墓との伝説があり、石堂の後ろにある五輪石堂群は平家一門の墓とも伝えられています。

・新井の石舟

二位の尼は文治4年(1188)の秋、「泉が谷」というところに大きな石舟を造らせて自分の棺と定めました。建久3年(1192)8月上旬病に伏し、医者拒み薬も食事もとらずただ一心に念仏を唱えていましたが、帝が崩御してから満5年と2日過ぎた8月15日、あとを追うかのように逝かれました。こうして亡骸は遺言通り泉が谷の石舟に葬られ、二位の尼の墓所があることからこの地を「二位」と呼びましたが、世に隠れて過ぎた人の名前を表に出すことをはばかり、その後同じ訓の「新井」へ改められたといわれています。



新井の石舟

・崩御ヶ平

安徳天皇が荒舟奥のこの地で崩御されたことから名付けられました。

長通寺の近くに帝の宝剣を埋めたところを「宝剣塚」ともいいます。

また、平氏の官女たちが後に住みつけたことから名がついた「姫路」(八頭郡郡家町姫路)には、小高い森に五輪の塔が数十基建ち並んでいます。これは西蓮法師が平家一門のために建てたもので別名「西蓮塚」ともいいます。近くには観音堂があり、安徳天皇を祀った上島田神社も鎮座し、彼岸の入りに崩御されたことからこの祭りは春秋の彼岸のとき行われます。

文治4年(1188)3月、二位の尼は吉野に光良寺堂を建立して、天皇の菩提を弔い昼夜念仏を唱えて過ごしました。また釣鐘も寄進し、平家一門と刻みました。知盛建立と彫りつけてありますが、施主は西蓮法師で平家一門の追善供養のためでした。

長い月日が流れ、時の住職長通10世牛尾得明師は伝説化されている広大な石堂に着目し、研究調査の結果、この石堂を安徳天皇御陵墓と断定して宮内省に陳情すること十数年、明治28年に安徳天皇御陵参考地としての認可を得ることができました。これを機に永劫に御陵墓をお守りするため、明治30年に寺を奥土居の地より現在地へ移転しました。

(6) 鳥取市のかたちが語るもの

亀

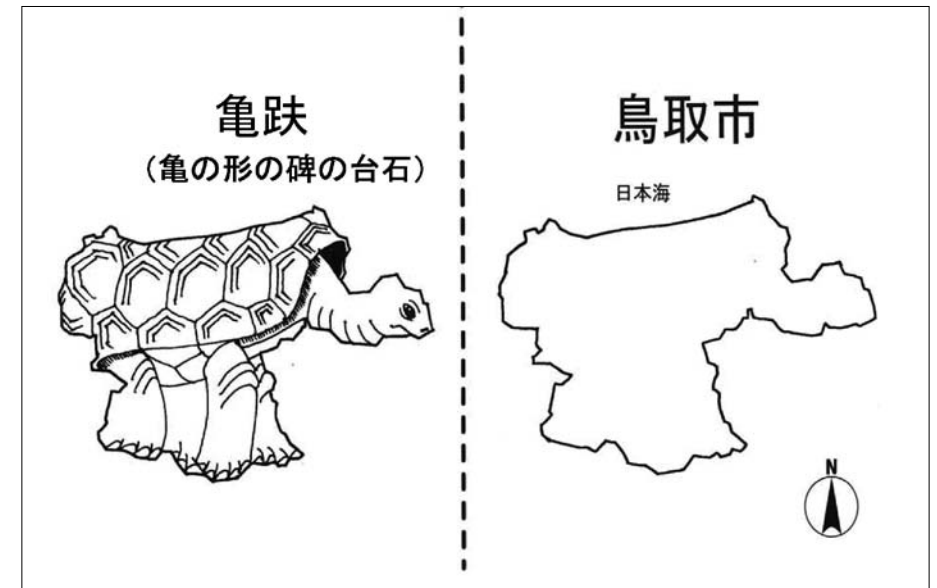
鳥取市の形を眺めていると、国府町のところを頭にした亀の形が見えてきます。日本海岸線を亀の背として、川原町、用瀬町、佐治町のところは少し不自然に足の長い亀が四足を大地に力強く踏ん張っている姿をしています。因幡で亀といえば、武内宿禰が双履を残したところを亀金といい、宇倍神社の家紋は亀をあしらっています。また、池田家藩主の墓石は亀趺と呼ばれる亀の形を象った神獣の台石の上に墓碑が載せられており、古くから亀と縁の深い地域です。

うさぎ

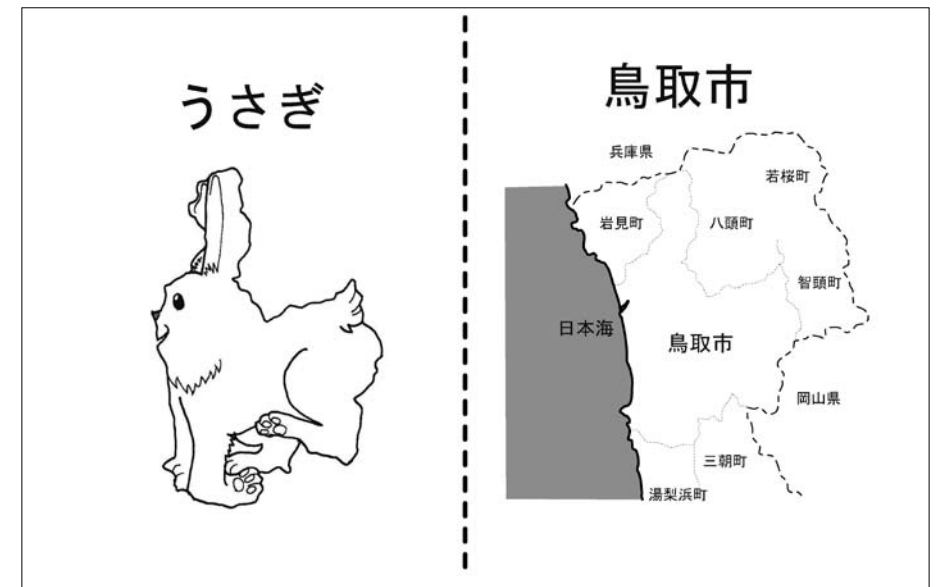
兎と言えば、『古事記』にある因幡の白兎の物語が有名です。鰐鯨をだまして因幡に渡ろうとした白兎が毛皮を剥がされ、神々にだまされて痛みに苦しんでいたところ、後の大国主神に助けられたという話です。古来より兎と関わりのあるこの因幡で、鳥取市の形を横にして左に日本海を置いてみると、国府町のところを兎の耳にして千代川の河口付近を口とする兎の形にも見えてきます。

古くから自然に親しんできた兎と亀が、ふるさとの“かたち”として浮かび上がり、この地域の歴史や誇りを物語っているように思われます。

▲鳥取市と亀の図



▲鳥取市とうさぎの図



(7) 子供達が築く理想郷

昭和25年12月28日NHK第一ラジオ放送のJOLG 中学校高等学校の時間

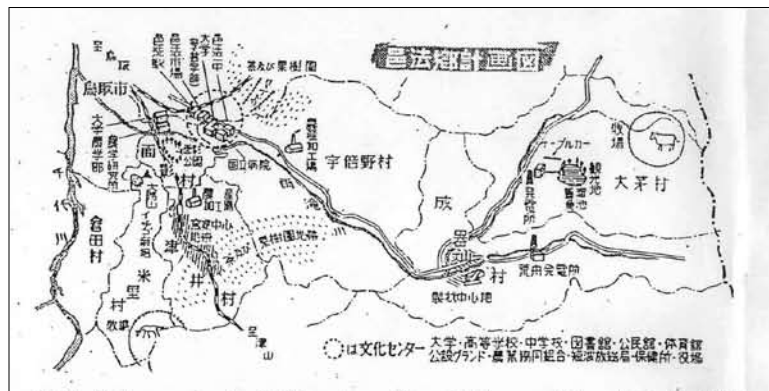
冬のラヂオ学校で約20分間「私たちの邑法郡(おうほうぐん)」と称したラジオ劇が全国に放送されました。

戦後まもない頃、安藤輝夫校長の邑法第一中学校では、地域社会を基盤とする学校経営を教育方針とする安藤校長の指導の元、1929年の世界

恐慌の対策として実施したニューディール政策の一環として、32個の多目的ダムなどの建設したテネシー川における総合開発(TVA)にならい、学校教育活動の一環として農村電化による「理想郷建設」の活動を行っていました。

中学生達は水力発電のしくみや発電所建設費用など電力会社まで取材し調査、袋川にダムを作り邑法発電所を建設する計画など練り上げました。また村の風土が茶の栽培に適していることを知ると鳥取市内の茶販売店の売上額や移入先など調べ上げ村でつくった茶でまかなおうと計画。子供達の真剣な活動はやがて大人達をも動かし発電計画が当時四ヶ村長会議の議題にものぼり専門家からも実現可能と折り紙もつけられたのです。実際に茶畑がつくられるなど着々と実現していったのです。

▲邑法郡計画図(『家の光』より)



安藤校長のこの特別な教育は文部省にも取り上げられ「稀に見る生きた教育」と賞賛され全国特殊中学十校の筆頭に取り上げられたほどです。

これらの活動について生徒自ら出演して紹介する冒頭のラジオ劇が全国に放送されたのです。現在残念ながら当時の録音テープは現存していませんが当時一員だった井上凌(ふかし)氏が放送原稿の一部を保管しており、現在袋川で事業が行われている殿ダムに先駆けて袋川にダムをつくり理想郷建設を計画した当時の熱意の様子を再演されることが期待されます。

12. 袋川流域 街道と峠



▲江戸の五街道



▲鳥取の四街道



智頭橋



若桜橋

(1) 京都—鳥取—岡山の一門集

古代大和国家から律令国家に移行し、中央集権を目指して地方行政区画や国司・郡司による地方行政などが実施されるとともに、地方と中央を結ぶ交通路も整備されました。千代川流域では、大和から山城、丹波、但馬を経て蒲生峠を越えて因幡に入る山陰道と、播磨から美作を経て志戸坂峠、黒尾峠あるいは物見峠を越えて因幡に入る道路が開かれ、重要幹線道路としての役割を担いました。

さらに江戸時代になると、主要な道路は江戸を枢軸として、東海道をはじめ中山道、日光街道、甲州街道、奥州街道の5つの幹線が定められました。慶長8年(1603)に徳川家康は日本橋に橋を架け、翌年にはこの橋を基点とする東海・東山・北陸の三道を幅約9mの規模で改修し、これに伴い全国の諸街道や往来も順次整備されていきました。

鳥取では池田長吉が城郭を広げ袋川を付け替えて柳堤を築き、そこに設けた9つの惣門が城外に通じる街道のはしりとなり、元和4年(1618)に入府した池田光政によって付け替えられた袋川には、上流から一本橋、若桜橋、智頭橋、鹿野橋、鋳物師橋、出合橋の六橋が架けられ、城下町を中心に各方面へ向かう街道が整備されていきました。

(2) 智頭街道

智頭口惣門から片原町、二階町、川端町を直交し、袋川の土手に架かる智頭橋を渡って川外の瓦町、棒鼻、智頭を経て山陽道へ抜ける、城主が通る格式高い道であり、参勤交代が往来した街道です。上方往来とも呼ばれました。

(3) 若桜街道

薬研堀の若桜口惣門から上魚町、若桜町、新町の小路と直交し、川端一丁目の浄覚寺から袋川を若桜橋で渡り、大工町から雲山、郡家、八東を通り若桜へ向かう街道です。

(4) 鹿野街道

鹿野口惣門から下横町を経て袋川まで右側へ曲折した線形をなして鹿野

橋を渡り、行徳から千代川湖畔の古海の渡しにつながり、古海から本高へ至って立見峠を越え、鹿野に達した街道です。伯耆往来とも呼ばれ、物資運搬のほか温泉やお寺詣での利用も多く、庶民に親しまれ賑わいがあった道です。

(5) 雨滝街道

鳥取城下から立川、宮下、谷、殿、拾石、木原、雨滝を経て十王峠を越え、但馬や岩井へと通じる街道であり、街道沿いには藩政期に設けられた道標やその後の道路改修の記念碑が建立されています。この道は法美往来“たじま道”“岩井往来”とも呼ばれ、部分的には“雨滝道”や“国府道”とも呼称されましたが、明治期に鳥取・雨滝間の路線改修が決定し“雨滝街道”と名付けられました。

① 街道の道しるべ

藩政時代の街道は人の往来が少なく草むらや山間地を通ったので、道の分岐点では迷うことも多く、尋ねようにも人がいなかったため、道の要所には石の道標を建て旅人の便宜をはかっていました。また、小さな山道であっても、道標や地蔵尊を建てて旅の安全を願いました。今日ではその多くが道路改修の際に取り除かれたり土の中に埋れたりしてしまいましたが、いまでも街道を見守る地蔵尊などを横目に歩を進めると、かつての旅人が道標を頼りに名勝旧跡を訪ねたり修験・廻国をしつつ往来した姿が偲ばれます。

大雲院の道標

『鳥府志』によると、大雲院の角には享保年間(1716~36)頃に「左は石井、右は一ノ宮」と刻された河石の道標が建てられていました。明治2年に新しい道標が建立されましたが、道の拡張に伴い現在は大雲院内に保存されています。切石製のこの道標は高さ137cm、幅51cmあり、「右国府 左石井道」「立川三丁目 施工澤屋市左衛門重吉」と銘文があります。

宮下の道標地蔵

かつて袋川に架かっていた旧中郷橋の宮下側のたもとに道標を兼ねた



日本の道百選の碑



鹿野橋

雨滝街道の一里塚

起点は国府口(江崎口惣門)といわれ、6つの一里塚が築造されました。里塚には松や榎が植えられていることが多いですが、雨滝街道には盛り土をして標石を建てただけのものだったとも考えられています。

一里...宮下。場所は村の下、奥谷村のあたり。

二里...谷村地内、梶原橋のあたり。

三里...殿村地内、中河原境のあたり。

四里...下木原地内、栃本廃寺に近いところ。

五里...十王峠の手前。「塚の元」という小字名が残り、街道より行者山道へ分かれるところ。

六里...場所は不明。洗井集落の内と思われている。



大雲院の道標

稲葉山の道標地蔵

稲葉山の山道横に建ち、地蔵像の左側に「左一宮二十四丁 萬人講中」、右側に「世話人宇倍野山勝五郎 甚七」と刻まれています。文化13年(1816)、古くから国府から但馬方面への近道として多くの人々に利用されてきた山道沿いに建てられました。



稲葉山の道標地蔵

腰折地蔵

美敷の東南の山すそに樹齢300年を超えると思われるタブの老木がそびえ、根元に古びた小さな祠が建っています。この中に、二股になったタブの幹にはさまれるように地蔵が安置されています。地蔵は高さ80cm 幅35cm 厚さ18cm くらいの凝灰岩の一枚石に、錫杖を持った菩薩像として刻出されていますが、ちょうど腰のあたりから上下二つに折れているため、この名が付いたと考えられています。現在は山の中にありますが、以前は稲葉山を通って京へ行く重要な道であり、高岡や糸谷へ抜ける分岐点でもあったため、見晴らしのよいこの地に地蔵を安置して、旅の無事を祈ったと思われます。



腰折地蔵

地蔵尊が建っています。総高約150cmの台座部分の正面には「供養塔 万人講 願主 角屋徳兵衛」と刻され、その上に地蔵尊が乗せられています。享和元酉年(1801)に建立され、左側面には「右 きさいち 左 おうかい」と刻まれています。“おうかい”とは大茅(大草)のことであり、街道筋を示します。

宮下の地蔵と七石塔群

宮ノ下小学校から無量光寺に向かう道の右端に「四国八十八箇所 八十八巻納経塔」「奉納大乘妙典日本廻国供養塔」など7基の石塔と、高さ70cmほどの石造りの地蔵尊像があります。国府橋付近にあったものが道の拡張に伴って移転したといわれています。

旧中郷橋の橋供養塔

現在、中郷橋は上流に付け替えられていますが、旧中郷橋の中郷側の土手の下に、天明元年(1781)に建てられた高さ約100cmの自然石による「新建立他力万人講橋供養」碑があります。

旧中郷橋の地蔵

橋供養塔からすぐ近くの右側の道ばたに地蔵尊像があります。文政5年(1822)に澤屋市左衛門によって建立されています。建立者は立川霊光院門前角に道標を建てた澤屋市左衛門重吉の父親と考えられています。

高岡口の道標地蔵

美敷橋を渡って麻生地区に入る道路の分岐点左側にあり、高さ約100cm 幅29cmの南無阿弥陀仏と刻された台座の蓮花の上に合掌した坐像が彫られています。寛政4年(1792)に元大工町の米屋利助によって建立され、向右に「大かいたじま道」向左に「むらみち」と刻されています。大茅谷筋を通り但馬に至る道筋と高岡方面への道筋を示したものだと思われます。

谷の道標

谷の旧道と新道の分岐点の手前、糸谷との分岐点に「右糸谷」とだけ刻まれた高さ約45cmの小さな自然石の道標があります。これは上流から下ってきて右に進むと糸谷になることを示しています。

谷入口の六地蔵

「村中 世話人 河上平一郎 山下久次郎 福田源次郎 明治十五年八月吉日」と刻まれています。ここから100mほど進むと峰の観音の参道にでます。

谷の旧道の常夜燈

峰の観音の参道に向かって右側の雨滝街道に面し、文久元年(1861)建立の常夜燈があります。

清水橋右岸の地蔵

清水橋手前の山際に、元は文政5年(1822)女講中によって建てられ、嘉永6年(1863)に再建された高さ約120cmの地蔵尊があります。

清水の大峰山信仰の碑を兼ねた道標

橋安全地蔵の先、清水川に架かる小橋を渡ると高さ約210cmの大きな道標を兼ねた石碑があります。文久2年(1862)に清水吉左衛門が33回の大峰山信仰を記念して建立し、右側面には「是より都へ五十五里 伊勢内宮へ九十一里 大峯へ八十一里」と刻されています。

清水の橋安全地蔵

清水橋の左岸橋詰に橋地蔵と呼ばれる地蔵が祀られています。昔は洪水のたびに橋が流されたため、橋の安全を祈願して建てられたと考えられ、嘉永6年(1853)に清水村の吉左衛門が中心となって鳥取の石工吉三郎に造らせたことが台座に記されています。なお、清水橋の手前には鳥取城下から二里の一里塚がありました。

山根入口の地蔵

山根の入口には道の右側に地蔵尊が建っています。台座からの高さが94cmあり、頭部が失われたのち、五輪塔の風空の部分に目と口を彫って代用としています。

旧山根橋の地蔵と一石一字経塚、仏石塔

旧山根橋のたもとに村人の念仏講中によって寛保(1743)年に建立された地蔵尊があります。山根入口の地蔵と同一様式でほぼ同高の造りのため、山根村の上手と下手に一对として建立されたと思われます。地蔵尊の横には4段の石壇上に高さ約130cmの一石一字経塚があり、その左右には南無地蔵菩薩と南無阿弥陀仏と刻まれた二基の石塔が建ち、前者は鳥取の福井伝兵衛が正徳3年(1713)に地蔵菩薩の大願に帰依して建立したことが記されています。

山根の地蔵と六地蔵

新山根橋と街道が交差する所に弘化3年(1846)に建てられた六地蔵と、文化3年(1805)と台座に刻された一基の地蔵尊があります。



高岡口の道標地蔵



谷の道標



谷入口の六地蔵



谷の旧道の常夜燈



清水の大峰山信仰の碑を兼ねた道標



清水の橋安全地蔵

笠地蔵（上荒舟）

上荒舟地区南側の墓地にあり、合掌した地蔵の頭上に笠石が乗せられた珍しい姿をしています。村の安全と一家親族が達者であるようにと願い、安政4年(1857)に建てられました。



中河原橋の橋安全地蔵



三界万霊塔



楠城の道標地蔵

堀越の道標

JR因美線の堀越踏切の近くに明治22年以降建てられた道標で、高さ約85cm幅50cmの石碑の正面には「右とっとり左わかさ前きさいち」と刻まれています。明治期に旧国道や私都中央道によって発展し、

船山の地蔵

吉野橋までの道の左側、船山の山際に地蔵尊が二基建ち、大きい方に「嘉永三年戌三月吉日」と刻銘されています。

中河原橋の橋安全地蔵

中河原橋左岸に総高約160cmの地蔵尊があり、「文化十年水無月 施主村中」と刻まれています。「水無月」と刻むのは陰暦の6月が陰陽道という土気強い月で水を克服して水害を防ぐことに由来し、橋の安全を願って建立されたものです。

三界万霊塔

中河原上手の寺屋敷という場所に建っています。これは生死流転の姿を欲界・色界・無色界の三界にわけ、生きる万霊の幸福を願い死後の冥福を祈って建てられたもので、側面には「文化十三年寅五月当寺十世滝本院了宥代 願主真先裕哲」とある高さ約2m幅45cmの細長い石塔です。

楠城の道標地蔵

拾石から楠城へ続く雨滝街道の道筋を示す小さな道標地蔵で、楠城地区への登り口左手の坂の下の三差路に建てられています。高さ45cm、横幅28cmあり、顔の右側が削げ落ちてしまっていますが、地蔵尊像の左右に「右なわ志ろみち」「左たちまみち」と刻まれています。地蔵尊の周りには五輪塔の地部や風空部、宝珠院塔の相輪部などが集められています。

雨滝橋の六地蔵

雨滝橋を渡って道の左手にあります。

雨滝番所

幕末になると各国の藩士や浪士の往来が激しくなったため、鳥取藩では文久3年4月に各要所に番所を置きました。雨滝番所は雨滝橋から十王峠に向かう間に置かれ、鳥取から十王峠と女峠(洗井村より蒲生峠まで)を越えて但馬に通じる要所に設けられました。

丸塚橋の地蔵

雨滝から丸塚橋の近くまで進むと右の道ばたにあります。台座が逆に建てられており「宝暦二年」と読めます。丸塚橋を渡ると道は分かれ、街道は左の蕪島へ向かいますが、右に行くと7kmで河合谷高原へ出ます。

十王峠の地蔵

十王峠への道は急坂で道幅も狭かったため、明治期に県道として約4mの道が洗井を通り、蒲生峠まで通じました。昔の峠は現在の峠の手前を左に入った所にあり、急な坂を下って銀山村に至ります。峠の手前で道は二つに分かれますが、左側に松の古木があり、根元に像高42cm、台座を含めた総高が72cmの地蔵尊がありました。難工事の十王峠の切割が完成したところ、峠の少し手前の地蔵尊が古い峠に淋しく取り残されていたので、新しい道路ができた数年後に現在の所に安置されました。一本松は、二本植えられていたところ、小さいときに一本を切れられてしまったということです。

2 雨滝街道の歴史を伝える三碑

宮下道路拡張記念碑

宮下の宇倍神社前を走る宮下道路の南側に、昭和27年2月建碑の「宮下道路拡張記念碑」があります。花崗岩切石製で総高2mほどの石碑には、従来の宮下道路は道幅3.6m、道路沿いには幅50cmの水路がある道でしたが、道幅が狭く交通上支障をきたしていたので、家屋移転などの協力を得て昭和22年に幅約6.5m、水路幅90cmに拡張したということが記されています。

上地道路改修記念碑

上地道路の改修に関して、山崎橋山麓の崖上に大正10年建立された「紀功碑」に見ることができます。それによると、上地道路は雨滝街道の支路であり、山崎村から荒舟・上荒舟の村を通って上地村に至る一里余の道で、山や川に挟まれた山道は狭く険しく折れ曲がり往来は困難を極めていたため、村人が県と郡に改修を請い、遂に明治41年に工事を開始して同43年5月完成したことが刻されています。

雨滝街道改修道路碑

雨滝街道は明治30年より県道となり、翌年6月これを記念して「開修雨滝道路碑」が谷地区中央に建てられました。長い間風雪にさらされ現在碑文を読みとることは困難な状態ですが、以前の雨滝道路は狭く険しい道で交通に難儀していたため、土地の人がこれを改修することになり、沿道の40村民が費用を搬出して明治16年に鳥取市立川大橋から工事を開始し明治22年但馬美方郡千谷村に達して終わり、県道に編入されたことや、道が広く平になったことにより天皇の行幸を望むことなどが詩とともに刻されています。

堀越は郡家町内でも重要な交通の要衝となりました。新しい集落であった堀越の中で、堀越の歴史を知っている古い石造物であるといわれています。



雨滝橋の六地蔵



雨滝街道と番所跡



十王峠の地蔵尊



谷入口の六地蔵



上地道路改修記念碑



雨滝街道改修道路碑



十王峠

3 雨滝街道と修験

十王峠

昔の峠は、現在の峠の手前を左に入った所にあり、急な坂を下って銀山村に至りましたが、峠道は急な上に幅も狭かったので、雨滝部落から十王峠を越えて洗井までの一里余りの工事が明治 23~24 年に行われました。その頃の一日の労働賃金は八銭か九銭の上、他所者の親方に使われるので人使いが荒く重労働であったといわれます。十王峠は土質が悪く雨の多い所なので、難工事であり、損工事ともなれば親方は人夫賃を払わずに姿を消す者もあったそうです。当時の流行歌には「ドッコイ道路の骨うずき 一文持たずの親方に コツカになる程使われて……」ともあります。難工事の十王峠の切割が完成したところ、峠の少し手前の地藏尊が古い峠に淋しく取り残されていたので、新しい道路ができた 2、3 年後に現在の所に安置されました。地藏の傍には 2 本の松が植えられていましたが、小さいときに切られてしまい一本松となり、この松も樹齢 80 を超えました。

十王図（殿）

因幡西国三十三ヶ所観音霊場十九番札所の殿の観音堂の堂内に、十王図（冥界地獄図）がありました。この世でおかした罪を裁く閻魔大王などを描いた十王像は十王峠の由緒を示すが如くといわれています。

不動坂（拾石）

殿から約 2km いくと拾石があり、その手前の神護への道の分岐点のすぐ先に狭い切り通しがあります。かつての拾石神社の鳥居と拾石発電所の間を通る坂道のこと、不動坂または十石峠とも呼ばれた法美往来最大の難所でした。この坂の頂上付近には昔のままの石垣や屋敷跡、「大乘妙典六十六部日本廻国供養塔」等の高さ 120cm 前後の石碑が 3 基残っています。

4 雨滝街道と文人墨客の旅

鳥取藩の国学者であった衣川長秋が、江戸時代の文政四年（1821）に出した『雨瀧紀行』には、ある年の秋、袋川流域などの名所旧跡をめぐった 2 泊 3 日の小旅行の様子が書かれています。雨滝を見るために朝早く出発。雨滝街道を経て宮下から新井の石舟を見学し、吉野で一句読み、さらに拾石・木原を過ぎ雨滝の里に至ります。それから宿の主の案内で雨滝、笹滝、布引の滝を見物して六句詠み、その夜は宿の主と酒を飲み明かします。翌日は十王峠を越えて、石井の出で湯に。3 日目は、湯山から多鯉ヶ池・浜坂を回り、鳥取に戻るといふ旅でした。『稲葉民談記』を著した小泉友賢も同じような旅をしており、鳥取を出発して法美往来沿道に数ある名

所旧跡を訪ね、名勝雨滝に遊ぶ旅は、因幡の文人墨客にとって、手頃で楽しい旅だったようです。

やがて、この地に新たな湖水が誕生しようとしています。これにより新しく素晴らしい名所も生まれます。古えの文人墨客たちがこれを眺めたら、一体どんな句を読むことでしょうか……。



▲雨滝街道と道しるべの位置図

13. 袋川が育む流域の自然

鳥取砂丘植物 16 種

- ハマボウフウ (セリ科)**
食用として珍重され、地下深く根を伸ばして葉が厚く夏に小さな白い花をたくさんつけます。
- オニシバ (イネ科)**
砂の移動が少ないところに大きな群落をつくり、四方に伸ばした地下茎の節から地上茎を出します。
- ケカモノハシ (イネ科)**
発達した多数のひげ根で砂を捕まえて風食から身を守り、熟した穂が縦に二つに割れた形がカモのくちばしに似ています。
- ハマニンニク (イネ科)**
葉がニンニクの葉に似ており、長い地下茎を持ち、群生して砂の移動をとめています。
- ウンラン (ゴマノハグサ科)**
秋にラン科の植物に似た淡黄色の花を咲かせ、砂の移動の少ないところに生息します。
- カワラヨモギ (キク科)**
初春の淡い緑色の葉は産毛に包まれて銀色に輝き、初夏に非常に小さな円錐状の頭状花を咲かせます。
- ハマウツボ (ハマウツボ科)**
カワラヨモギの根につく寄生植物で春に紫色の花をつけ、茎は淡褐色で葉緑素を持ちません。
- ハイネズ (ヒノキ科)**
スリバチ内に分布し、先が鋭くとがった堅い葉を密生させ、地面を這うように広がります。
- コウボウムギ (カヤツリグサ科)**
砂が積もる場所に大群落をつくり、枯れると葉の繊維が筆のようになり、フデグサとも呼ばれています。
- コウボウシバ (カヤツリグサ科)**
コウボウムギに似ていますが小さく、オアシス周辺や乾燥しにくい場所に生育し、花穂の上部に雄花、根ぎわに雌花をつけます。

(1) 鳥取市の花木

鳥取市の花【らっきょうの花】

新しい鳥取市を代表する花を一般公募した結果、市の花には鳥取砂丘の畑を 10 月から 11 月初旬にかけて赤紫色に染める「らっきょうの花」が選ばれました。らっきょうは、中国原産のユリ科の多年草で、江戸時代の参勤交代の折に持ち帰ったのが最初といわれ、今では鳥取市を代表する特産品のひとつとなっています。(平成 17 年 11 月 1 日制定)

鳥取市の木【サザンカ】

新しい鳥取市を代表する木を一般公募した結果、市の木には「サザンカ」が選ばれました。昭和 18 年の大震災や昭和 27 年の大火災で失われた街に緑を取り戻そうと昭和 43 年に旧鳥取市の木に制定されたサザンカは、年間を通じて緑を保ち山陰の厳しい冬に花を咲かせることから、新しい市の代表にも相応しい木として引き継がれることになりました。(平成 17 年 11 月 1 日制定)



サザンカ

(2) 袋川流域の生き物

袋川の thượng部は「氷ノ山後山那岐山国定公園」と「鳥獣保護地区」の指定を受け、ブナに代表される広葉樹林が広がりヤマドリ、ゴゲラ、クマタカ、カッコウなどの野鳥を見ることができます。袋川中流域の瀬や淵にはウグイ、オイカワ、カワムツなどの魚類が生息しています。また、支流や緩流部ではチラカカゲロウやゲンジボタルなどの姿も見ることができ、栲谿公園はホテル鑑賞の名所となっています。美敷川の合流点付近にはアオサギのコロニーが形成されています。下流部ではオギ、ヤナギ群が生息し、これらの草地を利用するオオヨシキリ等にとって良好な生息環境を形成しています。

代表的な動植物				
植物	鳥類	魚類	甲殻類	昆虫類
ブナ、ツルヨシ、オギ、ヤナギ	コゲラ、コジュウカラ、クマタカ、カッコウ、カワセミ、チュウサギ、アオサギ	ウグイ、オイカワ、カワムツ、アユ、フナ、ヤマメ、ウナギ	サワガニ	カワゲラ、ナガレトビケラ、ヒラタカゲロウ、チラカゲロウ、コガタシマトビケラ、オオシマトビケラ、ヒラタドムシ、コオニヤンマ、カワニナ、ゲンジボタル

(3) 鳥取砂丘の動植物

鳥取砂丘は、砂の移動や海からの潮風、地表面の高温と乾燥など、過酷な環境下にあるため、わずか 16 種の植物だけが砂丘特有种として生息しています。砂の上面温度が 50° C 以上になる真夏でも乾いた砂のすぐ下は湿っており、乾燥砂漠とは全く違う生態系を見ることができます。

また、砂丘の内陸部やクロマツ林やその周辺ではアリジゴクにつくったスリバチ状の小さな穴を見つけることができます。ハマスズのジーチチという鳴き声が夜の砂丘に響き、砂と同色のためその姿をとらえることはなかなかできませんが、カワラハンミョウは砂の上を音もなく滑るように走り、他にもオオハサミムシやキンモウアナバチ、イソコモリグモなどが生息しています。

野ウサギやタヌキ、キツネは砂防林のあたりをすみかとして、馬の背などに出てくることもあります。春の海辺にはシロチドリ、イソヒヨドリ、コアジサシ等の姿が見られ、冬になるとウミスズメやウミネコが波の上に群れをなすなど、四季を通じて多くの鳥が飛来しています。



鳥取砂丘

(4) 流域の貴重種

キマダラルリツバメチョウ生息地

キマダラルリツバメチョウは、シジミチョウの一種で、羽根を広げた大きさは 2cm 前後になります。羽根の表面は黒または暗紫色で、裏面には黒と黄色のまだらの縞模様があります。幼虫期はアカマツの樹皮の下でアリとともに過ごし、さなぎになるとアリの巣の中で過ごすといわれ、飛び方に特徴があります。



キマダラルリツバメチョウ (写真提供：鳥取市)

日本の固有種ですが、数が少なく生息地も限られているため国の天然記念物に指定され、鳥取市東町の長田神社、栗谷町の興禅寺、上町の栲谿公園の一角が生息地として特別保護地区に指定されています。

菅野のミズゴケ湿原

標高 400m にある高層湿原と周辺の山林からなるこの湿原には、オオミズゴケを中心に食虫植物のモウセンゴケ、カキツバタなどの湿原植物が群生しています。なかでも、毎年 5 月から 6 月頃にカキツバタが深紫色の美しい花を咲かせ、日本海側の代表的湿原として昭和 52 年に県の天然記念物に指定されました。



菅野のミズゴケ湿原



ハマゴウ

く、オアシス周辺や乾燥しにくい場所に生育し、花穂の上部に雄花、根ぎわに雌花をつけます。



コウボウムギ

○**ピロードテンツキ (カヤツリグサ科)**
葉はピロード状の微毛に覆われ水分の蒸散を防ぎ、硬い根が長く伸びています。

○**ハマニガナ (キク科)**
鳥取砂丘の砂の中に茎を直線的に伸ばし、葉だけを砂の上に出しています。春と秋に黄色い花を咲かせます。

○**ネコノシタ (キク科)**
海岸部のみに分布し初夏から秋に黄色い花をつけます。葉はネコの舌のようにざらつき、多肉質で耐塩性があります。

○**ハマベノギク (キク科)**
越年草で茎は根元から放射状に広がって砂の上を這い、先は立ち上がり秋にノギクのような薄紫色の花を咲かせます。

○**ハマヒルガオ (ヒルガオ科)**
鳥取砂丘のスリバチの斜面に地下茎を引き、斑状に密生しています。初夏淡いピンク色のアサガオのような花をつけます。

○**ハマゴウ (タマツヅラ科)**
砂丘唯一の木本植物で、枝を横に伸ばしながら夏に円錐花序に青紫色の花をつけます。果実は球形で淡黒色に熟します。

14. 袋川流域 暮らしの歳時記



雨滝

(1) 祭りイベント

① 八朔祭り (雨滝)

旧暦8月1日は雨滝不動明王の八朔祭りが行われていました。滝祭りの日がこの日に当たり、参拝人が多い大祭りで、露店や見世物など数十店が並び、但馬からの参拝者も多かったといわれています。氏神さまの境内では昼は宮相撲、夜は踊り、ときには田舎芝居もあり、また、ドジョウ汁はこの祭りの名物の一つでもありました。現在は祭りの存続が難しくなり、20年ほど前から行われなくなってしまったとのこと。

② 因幡の傘踊り

国府町高岡の山本徳次郎により考案され、100個もの小鈴をつけて、

袋川・因幡歳時記

12月	11月	10月	9月	8月	7月
	3日 万葉のふる里こくふまつり 【中央公民館周辺】	中旬 万葉朗唱の会【因幡万葉歴史館】 万葉ウォークラリー大会 大伴家持大賞表彰式【因幡万葉歴史館】 史跡梶山古墳壁画一般公開【梶山】 権現まつり【梶山神社】	下旬 聖神社例祭	第二土曜 鳥取しゃんしゃん祭 市民納涼花火大会【千代河原】 因幡の傘踊りの祭典 【因幡万葉歴史館】	第二日曜 「扇ノ山」山開き【扇ノ山】 袋川清掃奉仕作業 漁り火【鳥取砂丘】
下旬 鳥取砂丘イリュージョン	下旬 鳥取市社会福祉大会 フリーマーケット	下旬・日曜 ふへらつきまようマラソン大会【福部町】	中旬 RCグランプリinかわはら【河原町】 鳥取市スポーツリクリエーション祭 秋の鳥取砂丘一斉掃除【鳥取砂丘】	第一土曜 白兔まつり【白兔海岸】 月から節まつり【気高町】 鹿野町夏まつり【鹿野町】 さしアウトロパーク星まつり【佐治町】 砂丘ビーチ砂盛り大会【福部町】 天まき餅つき祭【山頂ヨンスアト】 千代川フェスティバル【若桜町】 千代川フェスティバル【若桜町】 ふれあいフェスティバル【用瀬町】	30日 白兔まつり【白兔海岸】

白、青、金、銀と美しく彩った長柄の傘を使い、揃いの単衣に手甲脚絆と白鉢巻、白たすき姿で、唄に合わせて傘を回転させながら強弱のリズムよく振り回すこの踊りは、昭和23年には天皇陛下の山陰行幸の際に天覧にあずかり、県内外の民俗芸能、民謡踊大会に主演するにとどまらず、日本万国博覧会や北京、ニューヨーク、台湾など世界の舞台でも高い評価を得る全国でも珍しい独特の伝統芸能として、昭和49年に「鳥取県無形民俗文化財」に指定されました。また、昭和40年夏からは、高山柳蔵によって誰でも踊れるように傘を小さくし簡単な踊りにアレンジされた「しゃんしゃんかさ踊り」による「しゃんしゃん祭」が開催され、目抜き通りを踊り歩きます。



因幡の傘踊り発祥の地碑

③ 麒麟獅子舞

鳥取での麒麟獅子舞は、慶安3年(1650)に鳥取の初代藩主・池田光仲が、徳川家康を祭った日光東照宮の御神霊を鳥取の樗谿に勧請し、鳥取東照宮(現・樗谿神社)を建立したさいに、「権現祭」を始めたときに舞われたのが始まりといわれています。毎年4月21日に行なわれる宇倍神社例祭をはじめ、鳥取県東部と兵庫県北西部、約150地区の祭礼で奉納されています。



因幡の傘踊り

6月	5月	4月	3月	2月	1月
中旬 「雨滝」滝開き祭【雨滝】 ホタル鑑賞会【樗谿公園】	第三日曜 聖神社神幸祭【隔年】 第四日曜 国府マストリフェスタ 【袋川上流】	21日 宇倍神社例祭【春】	上旬 桜まつり【久松公園】 第一ふるさと鳥取桜まつり 【智頭橋一帯】		
中旬 吉岡温泉ホテルまつり【吉岡温泉】	4日 河原町「春の茶会」【河原町】 やまめ釣り大会【用瀬町】 姉妹都市【姫路市】鳥取市親善スポーツ大会 鳥取県しいたげ品評会 もちがせ流しひなマラソン大会【用瀬町】 ふれあい広場【美保南体育館】	中旬 流しびな行事【用瀬町】 鳥取三十二万園お城まつり【若桜・智頭街道一帯】 鹿野祭り【鹿野町】 賀露ホーエンヤ祭【賀露】 春の鳥取砂丘一斉掃除【鳥取砂丘】 鹿野えもん市【鹿野】 鳥取市花のまつり	3日 動揺をうたう会【用瀬町】 網引き大会【気高町】	中旬 さしアストロパーク雪祭り【河原町】 鳥取市スポーツ表彰式	1日 河原町元旦イベント【河原町】 1日 新春歩こう会【佐治町】 3日 山の手マラソン【鳥取西高校発着】 酒の澤のどんとつ【気高町】

袋川周辺のお祭り・イベント

鳥取市周辺のお祭り・イベント

4 祭り・イベント

マスつりフェスタ

楠城の袋川上流で行う国府町最大のイベントです。家族連れや釣り愛好家など毎年1,000人以上の人が集まり、ニジマス釣りや、子どもたちによるマスのつかみ取りなどが行われます。また、やまめの塩焼きやジャンボ鍋によるみそ汁、よもぎ餅といった地元の特産品も味わうことができます。

「雨滝」滝開き祭

日本の滝百選に選定された、「雨滝」の滝開き祭りです。高さ40mの絶壁から落ちる飛瀑を前にして神事を行い、シーズンの中に訪れる観光客の安全を祈願します。また、雨滝をバックに小唄や傘踊りなどの伝統芸能も披露されます。



「扇ノ山」山開き祭

鳥取県と兵庫県の県境に位置して袋川の源流でもある、標高1309.9mの扇ノ山の山開きです。登山シーズンの開幕を祝い、安全を祈願する神事が厳粛に執り行われた後、山頂まで登り、下山後はおにぎりや串、流しそうめんなどの昼食会が行われます。



ふるさと鳥取桜まつり

きなんせ広場を中心に、若桜橋から智頭橋の間では屋台村ができたり、フリーマーケットやゲームを行ったりと、桜が咲き誇る中、いろいろなイベントが開催されます。

鳥取三十二万石お城まつり

例年秋に行われるビッグイベントでしたが、2006年より桜まつりと共催して春の桜

の時期に行われるようになりました。満開の桜の中、智頭橋から若桜橋一帯を初代藩主池田光仲公の参勤交代を再現した時代行列が華やかに市街地を練り歩きます。また、岡山鉄砲隊による火縄銃の実演や、川外通りでは鳥取城跡資料展示会が開催されるほか、新酒の屋台が建ち並び、フリーマーケットやステージイベントも行われ、桜とともに時代絵巻を楽しむことができます。

因幡の傘踊りの祭典

日本を代表する民俗芸能、因幡の傘踊りの発祥の地である国府町に、町内外約20団体が集い、それぞれに趣向を凝らした華麗な傘踊りを披露して、芸の伝承や技術の向上、発展を目指しながら傘踊りの魅力を全国に発信します。

万葉朗唱の会

万葉歴史館伝承館に集まった参加者が色鮮やかな当時の衣装を纏い、万葉集に収められている大伴家持の歌、470余首を歌に込められた思いを偲びながら朗々と詠み上げます。また、万葉歌がたりミニコンサートや曲水の宴、国府町史跡探訪などのイベントもあわせて開催されます。

大伴家持大賞表彰式

因幡国守としてこの地に赴任し、万葉集の編纂をして最後の1首を詠んだ大伴家持にちなんで「大伴家持賞」が創設されました。毎回テーマを示し、国府町の人だけでなく日本国内外からたくさん寄せられる歌の中から大賞を選び、表彰式を行います。

万葉ウォークラリー大会

1チーム2～6名のチーム編成をして、国府町内の自然や名所、旧跡など約6kmのコースをコマ図を見ながら巡り、各チェックポイ

ントで問題を解いたりゲームをしたりしながらゴールを目指し、獲得ポイント数を競います。

史跡梶山古墳壁画一般公開

梶山古墳は7世紀頃築造されたとする日本最古の方形壇を持つ変形八角形古墳で、魚をモチーフとした石室内の彩色壁画は全国的にも珍しく、中国地方では奈良の高松塚古墳に次ぐものとして高い評価を受けています。その壁画を年に一度、秋頃期日を限定して一般に公開します。付近では地元でとれた野菜や果物などの直売会も行われます。



袋川清掃奉仕作業

河川愛護月間の一環として毎年行われているもので、国府中央橋から宮下水位観測所までの約1.2kmの区間を清掃します。



鳥取しゃんしゃん祭り

因幡の傘踊りを誰でも踊れるようにアレンジした「しゃんしゃん踊り」を、約3,500人の踊り手たちが、色鮮やかでたくさんの鈴や短冊のついた装飾傘「しゃんしゃん傘」を手に、市内目抜き通りを2kmにわたり踊り歩きます。その他にも岩国太鼓やジャズダンスなどのフリーステージや、コンサート、花火大会等が開催されます。

市民納涼花火大会

市町村合併記念と千代川改修工事の功労者への感謝祭として開催されたのが始まりといわれ、スターマインをはじめ、キャラクター花火や300mの大ナイヤガラなど約6,000発の花火が夜空を華やかに彩ります。さらに、「夢キッズ!花火絵画コンクール」で選ばれた3作品の

花火が実際に花火職人によってつくられ、夢をのせて打ち上げられます。

万葉のふる里こくふまつり

11月の文化の日より3日間にわたり、文化、産業、福祉などの各方面で活躍した人への表彰状や感謝状が贈呈される記念式典や、記念講演会、映画上映、菊花展や文芸展等の各種展示のほか、地元の農作物の展示即売会、こどもまつり、バザーなどが開催されます。



ホタル鑑賞会

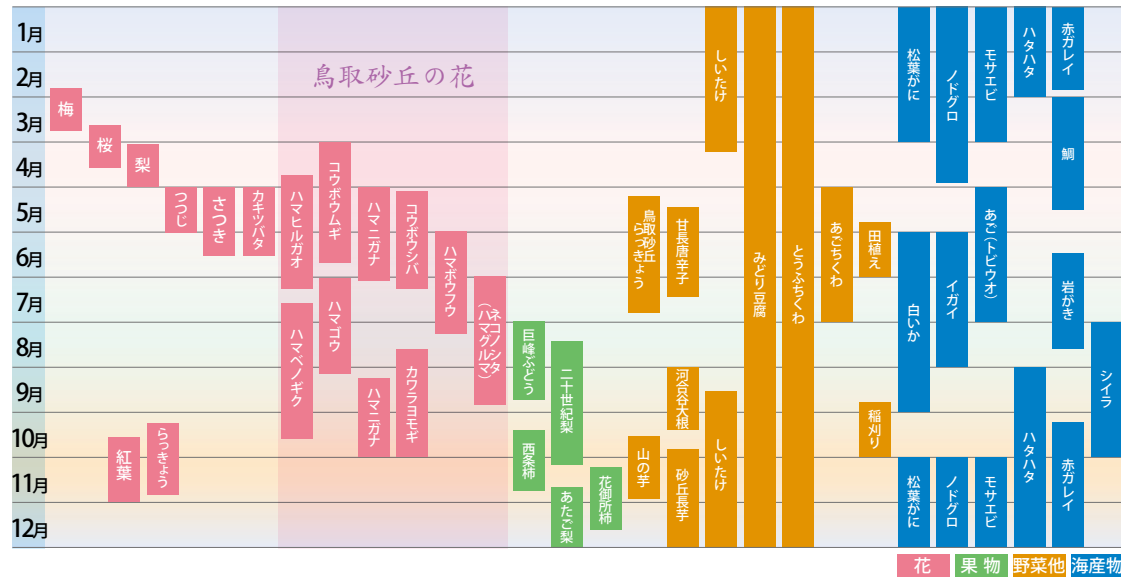
鳥取の中心地からほど近い樗谿公園には、源氏ボタル、平家ボタルのほか、陸生のヒメボタルも生息しているホタルの名所で、「ふるさといきもの里」にも認定を受け、毎年6月の最盛期には鑑賞会を開催しています。また、鳥取市歴史博物館やまびこ館ではホタルが乱舞する時期に合わせてホタルの展示やイベントを開催し、ホタルについて多角的な理解を深められます。

宇倍神社例祭

因幡の国一ノ宮であり県下唯一の名神大社で毎年4月21日に行われる例大祭では、重さ400貫といわれる大神輿とともに、鳥取藩の参勤交代の姿を伝える武者行列が国府の大路を練り歩きます。猩猩を先導役にした麒麟獅子舞が神前に奉納され、因幡地方特有の一本角の獅子頭が朱色の布を纏った姿で笛や鉦、太鼓の調べに合わせて厳粛に舞い踊ります。



(2) 四季の名産物



松葉がに

松葉がにとは、山陰地方で獲れるズワイガニの雄のことを指します。冬の日本海の味覚の王者といわれるように、日本海で育った引き締まった身と上品な甘みが人気です。雌がにのことはセコガニと呼ばれ、漁は保護のために11月上旬から1月上旬までの2ヶ月間と非常に短く、貴重な味となっています。

松葉がにという名称は鳥取藩の文献で初めて使われたと言われています。由来については、長細い脚の形や肉が松葉のように見えることや、脚をさいて水につけると身が松葉のように広がること、調理の際に燃料に松の葉を使ったことからなど、諸説あります。この最古の記述にちなみ、鳥取県では毎年11月の第4土曜日を「鳥取県松葉がにの日」と定めて、鳥取港を中心に多くのイベントが催されています。

みどり豆腐

因伯の名水に指定された雨滝の湧き水で作る豆腐は、無農薬で栽培されている緑色的大豆を使って作られています。そのため、若草色をしてふわっとした甘みのあるこの豆腐のことを「みどり豆腐」と呼び、雨滝地域の名産になっています。

とうふちくわ

江戸時代から鳥取県東部で作られているとうふちくわは、藩主池田光政公が漁獲高の少なさをゆえ、質素儉約のために魚のすり身の代わりに豆腐を使って作るように奨励したことがきっかけとなったと言われています。今や健康食品として注目の逸品です。

あごちくわ

あご(飛魚)のすり身から作ったちくわです。鳥取県沖で獲れた新鮮なあごを100%使い、石臼ですりつぶしてよく練ったあとにじっくり焼き上げます。しっかりと歯ごたえがあり、噛むほどに旨味がでてきて、お酒のおつまみとしても好まれています。

二十世紀梨

日本一の生産量を誇る、鳥取県を代表する秋の味覚です。皮が薄く、シャリ気がある舌触りと癖のないさわやかな味に、果汁が多いのが特徴です。明治37年、今から約100年前に栽培が始まり、現存する3本の苗木は、鳥取市桂見の「とっとり出会の森」にあって、今でも実を付けています。花は白く、4月頃に開花します。



鳥取砂丘らっきょう

砂丘畑で栽培されたらっきょうは、冬の日本海の厳しい風雪を受けて育ち、色が白く肉質はしっかりと引き締まっていて、その上繊維質が細かいため、絹のような歯触りとシャリッとした歯ごたえがあります。8月の炎天下に植え付けられ、10月中旬頃に釣鐘状の紫の花を咲かせ、砂丘畑は一面きれいな紫色に染まります。古くから漢方薬として用いられており、ビタミンB1が豊富で血液をサラサラにする食物として注目されています。



花御所柿

収穫時期が11月下旬から12月中旬と遅く、その分太陽の恵みをたっぷり受けた甘い柿です。富有柿の先が尖ったような形で、果肉はとても繊維が極め細かくて柔らかく、果汁も多くて、20度近い糖度をもっており、奥深い甘みがあります。今から約200年前、郡家町大字花(旧大御門村)の農民野田五郎助氏が大和の国から柿の枝を1本持ち帰って庭先に接木したのが始まりといわれ、地名をとってこの名が付けられました。郡家地方とほんの一部でしか栽培が難しく、日本一甘い幻の柿とも言われています。

西条柿

4つの溝が特徴的な、丸く、ずんぐりした渋柿です。合わせ柿として渋を抜いて食したり、干し柿にして食べられています。渋抜きすることで、甘柿には出せないまるやかな食感と肉質と甘みが引き出され、その糖度は18度にもなります。また、ポリフェノールを多く含むので身体にも良い効果をもたらします。

あたご梨

直径約13~15cm、重さ0.7~1.3kgもある日本で一番大きな品種の梨です。11月頃に収穫して冷暗所で追熟すると、糖度が高まり、果肉も柔らかくなって果汁をたっぷり含み、香りや甘さに深みが増します。貯蔵梨とも呼ばれ、クリスマスやお正月に味わえる梨としても人気です。

砂丘長いも

鳥取砂丘の砂丘地で栽培されている長芋は、肌が白く、長くまっすぐ伸びているのが特徴です。適度な粘りけがあり、舌触りがよく、あっさりとした味わいがあります。

巨峰ぶどう

粒が大きく、芳醇な香りと濃厚な甘さがあります。みずみずしさを保つためにその日の朝早くに収穫して出荷しています。

山の芋

粘りと自然薯に匹敵する甘みが特徴の山の芋です。

河合谷夏大根

雨滝の扇ノ山麓に開けた広大な大地、河合谷高原で生産されていた夏大根です。標高1,000mを越えたところにあり、澄んだ空気や水と土の畑で育った大根は、みずみずしさが特徴ですが、近年生産量が減少して幻となりつつあります。

しいたけ

標高約250mの稲葉山で栽培されているしいたけです。

米

山間地形と清らかな水に恵まれた国府町では、近年、減農薬・減科学肥料米の栽培や、京ヶ原棚田で酒米を栽培してお酒を作る取り組みが行われています。



白いか

イカの王者ともいわれる夏の幸、白イカは、オリイカよりも濃厚でとろけるように甘く、モチモチした食感が特徴です。

カキツバタ

菅野のミズゴケ温原は、標高400m高層温原と周辺の山林からなり、オミズゴケを中心に、アカマツ、カキ

ツバタやオ、モウセンゴケ、などの湿原植物が群生しています。湿原には木道が作られており、花やコケの群落を間近で見ることができます。



15. 山陰海岸ジオパークと殿ダム周辺のジオサイトを巡る旅

(1) 山陰海岸ジオパークとは

ジオパーク (geopark) とは、地球科学的に見て重要な自然遺産を含む、自然に親しむための公園です。日本語では「地質遺産」と訳されることがありますが、日本ジオパーク委員会では「大地の公園」という言葉を使っています。

山陰海岸ジオパークは、鳥取県、兵庫県、京都府にまたがる山陰海岸国立公園を中心とした日本のジオパークです。山陰海岸に存在する地質遺産を保護・研究・ジオツーリズムに活用し、教育や地域社会に貢献することを目的としています。2010年に世界ジオパークネットワークへの加盟が認定されました。

地質遺産とは、地域の地史や地形・地質現象がよくわかる、地質学的にみた貴重な自然資源を指し、ジオパークで、地質遺産を観察できる場所がジオサイトです。山陰海岸ジオパークの地形・地質学的特徴として、日本海形成に関わる多様な火成岩・堆積岩層の分布とそれらの岩石海岸での露出、日本海沿岸の多様な海岸地形、日本海形成後も引き続く火成活動による火山噴出物・火山地形、第四紀における地磁気逆転期の発見サイト（玄武洞玄武岩）、火成活動の影響を受けた豊富な温泉資源、日本海沿岸で生じる第四紀地殻変動を示す活断層・海岸段丘などがあります。

殿ダム周辺、袋川・千代川流域には、山陰海岸ジオパークの3ジオエリアと31ジオサイトがあります。

鳥取砂丘エリアには、①福部砂丘、②ラッキョウ畑、③直浪遺跡、④一ツ山離水海食洞、⑤鳥取砂丘、⑥火山灰露出地、⑦古砂丘と新砂丘、⑧オアシス（鳥取砂丘）、⑨追後スリバチ、⑩砂丘第2列と長者ヶ庭のオアシス、⑪放物型砂丘、⑫多鯨ヶ池の12ジオサイトがあります。

鳥取～白兔海岸エリアには、①鳥取港（賀露港）、②湖山砂丘、③湖山池、④白兔海岸、⑤鳥取層群の中新世魚類化石（鳥取県立博物館）、⑥鹿野断層、⑦吉岡断層、⑧鳥取温泉、⑨鹿野温泉、⑩吉岡温泉、⑪鳥取城跡の11ジオサイトがあります。

扇ノ山エリアには、①河合谷高原、②雨滝、③湯村温泉、④照来層群の昆虫化石（おもしろ昆虫化石館）、⑤上山高原、⑥シワガラの滝、⑦霧ヶ滝、⑧扇ノ山の8ジオサイトがあります。



鳥取砂丘

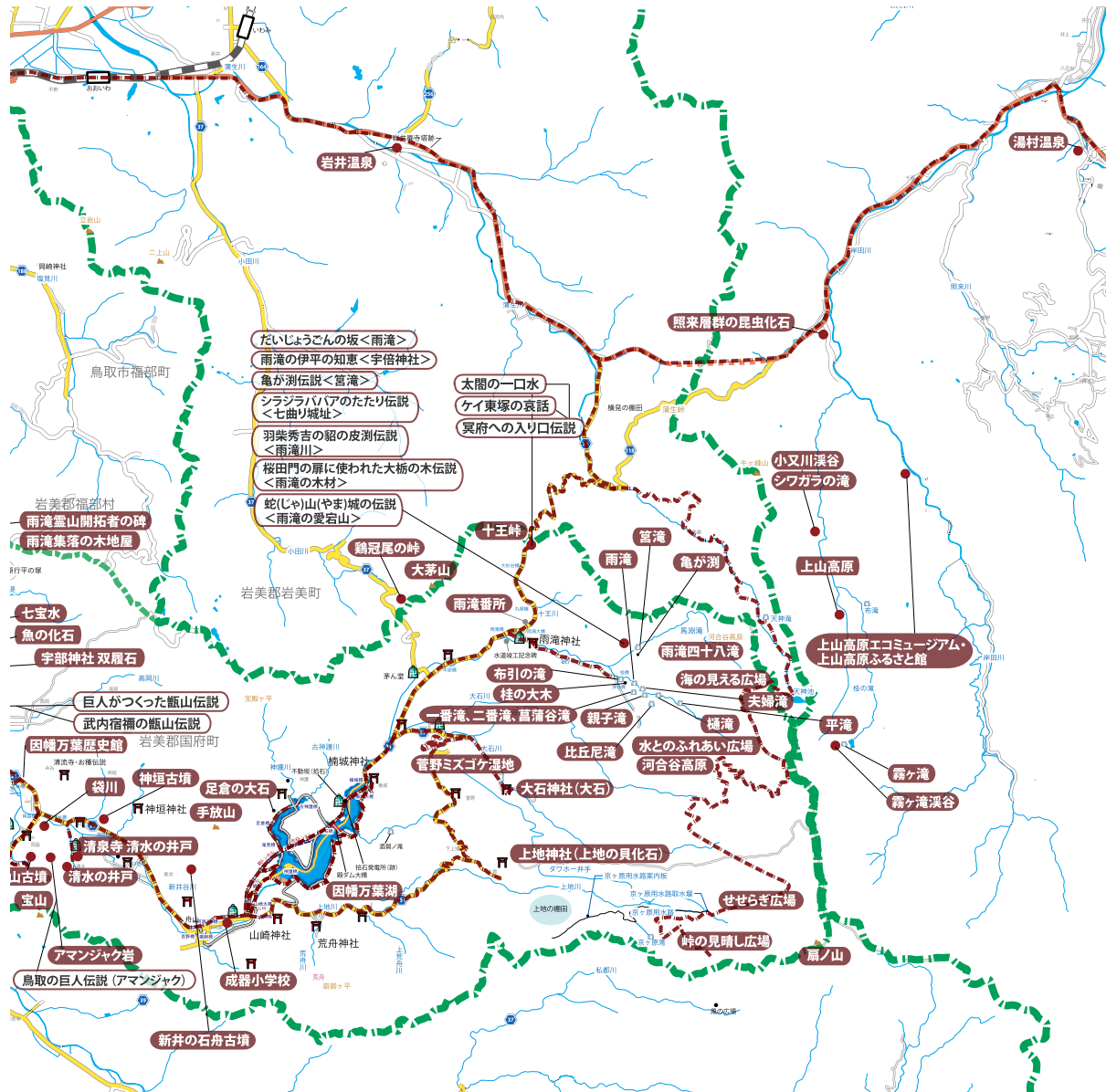
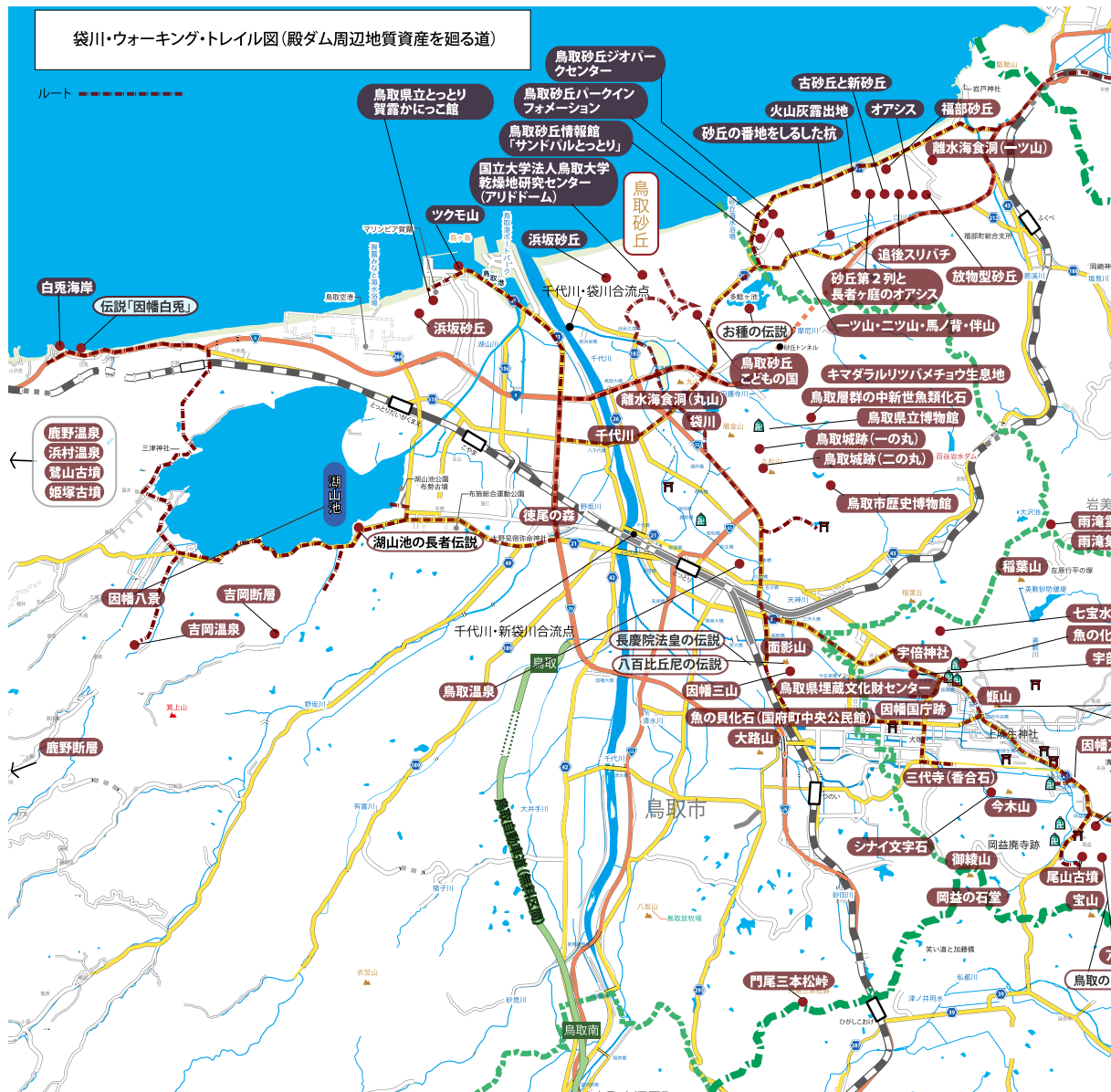
千代川の運び出した砂が砂浜をつくり、そこから砂が風で運ばれて形成された海岸砂丘です。大山倉吉軽石層等により古砂丘、新砂丘に2分されます。湾曲した急斜面に囲まれたスリバチが発達し、湧水なども見られます。



扇ノ山

中国山地東端の標高1,310mの120万年～40万年前の火山です。遠くから見ると扇の形に似ていることから名付けられました。新三紀末から新四紀にかけて盛んに噴火を繰り返して山が高くなり、噴出溶岩によってできた標高1000メートル付近の台地状地形は美しい高原となっています。

(2) 山陰海岸ジオパークと殿ダム周辺ジオサイトルート案内図



鳥取平野の成り立ち



古代の鳥取平野



ウルム氷河期



縄文海進時代



有史時代以降

(3) 殿ダム周辺の地質資産を巡る

① 鳥取平野の成り立ち

a 鳥取平野 海進・海退の4物語

- ・湯山層の堆積と古砂丘 古代の鳥取平野（200万年前）
- ・砂丘の草原化 ウルム氷河期の鳥取平野（2万年前）
- ・縄文人の生活 縄文海進時代の鳥取平野（6000年前）
- ・弥生人の生活 有史時代以降の鳥取平野（3000年前）

b 離水海食洞を今に伝える2洞

縄文海進によってこの洞窟が形成され、その後の海退によって陸化したと考えられています。現在は海岸線から遠く離れた場所にあります。

- ・丸山の離水海食洞
- ・一ツ山の離水海食洞（ジオサイト）

c 海進海退を今に伝える3化石

- ・香合石は海進海退の作用によって自然が作り上げた、全国的にも類のない珍しい石です。
- ・上地の貝化石は約1500万年前の新生代第三紀の層から出土した貝の化石です。太古は上地周辺も海の中であったことを物語っています。
- ・宇倍神社裏山の魚の化石から、宇倍神社周辺はかつて海に覆われていた時代があったことがわかります。

d 多島海であった古鳥取湾

- ・面影山や大呂山、湾奥附近の島
- ・鳥取砂丘の一ツ山、二ツ山、馬ノ背、伴山、湾の外側にある島々
- ・賀露町背後の岩山、スクモ山、湾の外側にある島々

e 縄文時代の生活の痕跡 桂見遺跡と丸木舟

湖山池南東岸の桂見遺跡において、全国最大級の丸木舟が2艘発見されました。縄文時代後期に外洋航海用と物資運搬用として使用されたと考えられています。

f 白兔海岸（ジオサイト）と伝説「因幡の白兔」

伝説「因幡の白兔」で知られているところで、白兔トンネルの手前に広がる広大な砂丘海岸は、夏季には、山陰地方有数の水のきれいな海水浴場としてにぎわいます。伝説「因幡の白兔」に登場する気多前は海岸の西のわずれ、海中に突き出した岬で、正木ヶ端あるいは気多ヶ崎ともいいます。

この背後にあるのが高尾山で、兎が泣いていたところ。身干山はガマの穂綿を敷いて身体をなおした場所です。

水門は白兔神社のそばにある深さ1m、周囲100mほどの池で、昔は内海池の流出口でした。浜の西端には河原火砕岩層の海食崖と断層によって切り離された淤岐ノ島などがあります。島の周囲には波食棚が取り巻き、飛び石状になった棚はワニの背にたとえられます。

g 中国山地の特徴

中国山地は、標高1,000m以上の山岳が中国地方をほぼ東西に延々と伸び、12ある山系中その半数以上が鳥取南東部に集中しています。

これは中生代の火山岩類と花崗岩類第三紀層で構成された山地で、鳥取県と兵庫・岡山両県と接する県境の氷ノ山、後山、那岐山といった連峰は「因幡山岳地帯」とも呼ばれています。そのため陸路で県外に出るためには、必ずこの山地越えをすることが必要な地域となっています。

扇ノ山はこの中国山地の東列に位置する古い火山で、わずかに火山地形を残し、妻鹿野付近と菅野には溶岩流が見られます。また、広留野、河合谷高原のような原野が開け、袋川・八東川の浸食が進み、川には多くの滝がかかっています。

h 殿ダム周辺地域の4地質構造

- ・最も古い時代の岩石 鳥取花崗岩（中生代白亜絶後半から古第三紀初頭）
- ・凝灰岩や泥岩を主とする最も広い面積を占める 鳥取層群（新第三紀の初頭）
- ・沈降と火山活動で形成 照来（はるき）層群（中新世後期から鮮新世にかけて）
- ・大氷河が繰返し発達、海岸・河岸段丘が形成 扇ノ山安山岩類（第四紀）

i 鳥取層群の中新世魚類化石（ジオサイト、鳥取県立博物館）

宮下魚類化石は1680万年前（中新世前期後半）の鳥取層群普含寺泥岩層から発見されました。発見された化石の種類から浅海～沿岸性の堆積環境が知られています。なかでも「トットリムカシギンポ」は浅い海に生息したイソギンポ科の新種で世界でも極めて珍しいものです。

j 照来層群の昆虫化石（ジオサイト、おもしろ昆虫化石館）

「おもしろ昆虫館」には小又川上流の海上出土の昆虫化石は新生代第三紀鮮新世（500～1800万年前）の照来層中の春來層から発見されたチョウなどの昆虫化石が多数収集展示されています。

伝説「因幡の白兔」

昔、大国主命の兄弟が出雲国から因幡の八上姫をめとるため気多前にさしかかった時、一匹の白兔が皮をはがされて泣いていた。この兔は高草に住んでいたが、洪水の時竹やぶの根に乗って海に流された。沖合150mの淤岐ノ島に逃れたが、いざ陸地に帰る時に、ワニをだまして戻ったため、その怒りにふれて赤裸にされてしまったというのである。

先に因幡に着いた八十神は、この兔の話を知り、「塩水で身体を洗い、風に当たりながら高尾山に寝ていれば、もどおりの身体になる」と教えて去った。兔が教えられた通りにすると、前よりもいっそう痛みが激しくなってしまった。

遅れてやってきた弟の大穴牟遲命（大国主命）が、ふたたび訳を聞いて、「すぐに水門に行って、真水で身体を洗い、ガマの穂にくるまればなおる」と教えた。白兔が言われるままにすると、元の美しい体になった。

大石神社と巨石

杉の木立の中にある祠の後ろに高さ2.5m、周囲26mの大石があり、この巨石の下から清水が湧き、境内に流れ出ています。祭神のみいのかみ御井神は、大国主神と八上比売の間に生まれた開拓神です。昔は自然崇拜の習慣があり巨大な石や泉の源流などを神聖視したことからこの地に神社を創建したものと思われ、この縁由によって大字名が大石となったといわれています。

アマンジャク岩

岡益の東側の山を寺山と呼んでいます。この山と清水との境付近に、大きな岩が横たわっています。むかし、アマンジャクという巨人が運んだのであろうという古い言い伝えがあり、「アマンジャク岩」と呼ばれています。

以前は、子供の欲しい女性がこの岩に祈れば、必ず願いがかなえられるということで、お祈りをする人があったそうです。岩の大きさは縦6m、横2m、高さ2mもある平たい岩で、その一部に溝が掘られており、むかしの人が動かしたようすがうかがえます。

岡益の石堂や、梶山古墳に使われているのと同じ凝灰岩で、もしかしたら古墳などに使おうとして、途中で止めたものではないかと考えられています。



鳥取砂丘

k 鹿野・吉岡断層 (ジオサイト)

・鹿野断層

鳥取地震(1943年 M7.2)によって現われた長さ8km、東北東方向の活断層です。

・吉岡断層

鳥取地震(1943年 M7.2)によって現われた長さ5km、東北東方向の断層です。

l 殿ダム周辺の巨石

大石神社と巨石、足倉の大岩、アマンジャク岩、シナイ文字石、宇部神社の双履石(鳥取の巨人伝説 アマンジャク)

m 鳥取平野と千代川

・沖積平野としての鳥取平野

この200万年の間に、現在私たちが住む土地の地形がほぼ形作られました。千代川の歴史も例外ではなく、この時間の流れの中、中国山地の山々の肌をけずり取り、谷を刻み、運んだ土砂を河口近くにためて、鳥取平野という沖積平野を生成しました。

・微高地や自然堤防と千代川の乱流

千代川河域で第四紀に造成された沖積平野と川の変遷には、多くの因果関係があります。川は流域から多量の土砂を運搬し、扇状地を造り、天井川となります。

ここから脱落した川筋は転位して新川となり、土砂を伴った水が平野の真ん中をまんべんなく流れていきます。そのため微高地や自然堤防は海進期の堆積地であったり、かつて流れていた古川筋の姿なのです。

長い年月をかけて、鳥取平野の中で千代川の流れは変遷を繰り返してきました。現在流れている千代川は、自然河川から綿々と人々の力により固定化された人工河川であるともいえます。

②鳥取平野と鳥取砂丘

a 鳥取砂丘(浜坂砂丘)の成り立ち

・成り立ち

鳥取市の北、日本海に臨む海岸一帯に鳥取砂丘が広がっています。砂丘の範囲は、東が岩美郡のしちやま駟馳山(314m)の麓から始まって、海士・浜場山・多鯨ヶ池・浜坂・賀露・湖山・白兎にいたる、東西約16km、南北2km余りに及びます。

鳥取砂丘は火山灰土に覆われた更新世の古砂丘と完新世の新砂丘(一般の海岸砂丘)から成る複合砂丘です。中国地方の基盤は花崗岩で、花崗岩は

地殻の深いところで固まった火成岩です。これが地表面に露出するには、長年月を経て上部の地層が削りとられたことになります。

千代川流域における花崗岩の分布は本流の智頭谷から中国分水嶺にかけて広く、最も厳しい侵食を受けたこの地域の大量の砂礫が日本海に運ばれたと考えられています。つまり、鳥取砂丘の莫大な砂は、中国分水嶺附近、湖山池南方などの花崗岩が侵食されて千代川によって大量に日本海に放出され、それらが海底に沈積し、後の地形変遷を経て吹き上げられ、海岸砂丘を形成するに至りました。

・古鳥取湾の形成

更新世末期(5~1万年前)の一時期には海水が増加して、現在の陸地は沈降海岸の形態となり、古鳥取湾とも呼ばれる大湾入がつくられました。当時の湾入はかなり深さがあったのではないかと考えられています。

中国の山地と新しい火山に降り注ぐ雨が洪水となって、侵食を激しくおこない、花崗岩・安山岩の山を削って礫・砂・土を大量に日本海に放出しました。砂丘を形成する海底砂はこの頃から存在していたものと考えられています。

・古砂丘の誕生

更新世にできた沿岸州は湾口を完全に塞がず、海水は内側に入り、内湾と外海はかなり広範囲につながっていました。

そのため外海から打寄せる波は海底を攪乱しながら沿岸洲の汀線附近に砂を打ち上げ、潮流が砂を運び、また打ち上げ、その砂が北からの風によって内側に運ばれます。これが繰り返されて、沿岸洲は次第に幅を広げて高さを増し、小岩島や砂の盛りあがりやを這い上がり、埋めつくして砂丘を形成していきました。

特に浜坂付近と多鯨ヶ池北東方には、山々が連なっていたので山裾付近で風勢が急に落ちることから、砂の堆積は大きくなり、砂丘は高さを増し、80メートルを越えるに至りました。

この時代につくられた古砂丘は現在の砂丘面積の4分の1から5分の1程度のものでしたが、このようにして鳥取砂丘の原地形である古砂丘が誕生し、その後長い年月を経て新しい砂丘がこれに重なって、現在のような大砂丘になりました。

b 鳥取砂丘の6ジオサイト

火山灰露出地、古砂丘と新砂丘、オアシス(鳥取砂丘)、追後スリバチ、砂丘第2列と長者ヶ庭のオアシス、放物型砂丘

c 砂丘の番地をしるした杭



火山灰露出地



オアシス



追後スリバチ



追後スリバチ



砂丘第2列と長者ヶ庭のオアシス



放物型砂丘

砂丘の番地をしるした杭

砂丘には、第一砂丘列の方向から海岸沿いに0、1、2…、内陸側にA、B、C…、と100m置きに線を引き、それらの交わる場所に砂丘の番地をしるした杭を打ち込んであります。これは鳥取砂丘の砂の移動を調査するために設けられたものですが、この番地で場所を把握しながら、自然観察や砂丘探索を楽しむことができます。



砂丘の番地をしるした杭

湖山池の長者伝説

かつて湖山池は池ではなく、長者所有の田地でした。ある年の田植の時、一日で植え終えることができなかつたので、金の団扇を持って夕陽に向かって三度招いたところ、山に入ろうとしていた太陽が3段ほど昇り、無事に田植を終えることができました。次の年も金の団扇で仰いだところ、ついに天罰が下り、田地はたちまち湖水へと変わって跡形もなくなりました。

d 鳥取の三砂丘群

二つ山（110m）から東側が福部砂丘、二つ山から千代川岸までが浜坂砂丘、千代川以西、白兎海岸までが湖山砂丘と呼ばれています。

- ・福部砂丘と直浪遺跡（ジオサイト）
- ・浜坂砂丘
- ・湖山砂丘（ジオサイト）

e 湖山池と多鯨ヶ池

- ・「かすみ湖」とも呼ばれる湖山池（ジオサイト）

かつては日本海の湾入部でしたが、千代川による土砂の堆積作用によって北部に湖山砂丘ができ、古代鳥取砂丘を塞いだために生じた潟湖です。春には湖面がかすんで対岸が見えないことから「かすみ湖」とも呼ばれています。池は東西に約4km、南北に2.4km、深さ3mほどで水面の広さは約6.8km²あり、池の周囲はおおよそ16kmになります。水は長柄川から注ぎ、湖山川によって賀露港に流れでます。

- ・中国地方で最も深い多鯨ヶ池（ジオサイト）

鳥取砂丘の南方に位置し、東西に930m、南北に480m、湖岸線3.38km、面積約2.4km²あります。2～3月の増水期と7～8月の減水期とでは1～2mの水位変化があり、最大深度は17.3mと中国地方では最も深く、湖面は海面より16mも高いところにあります。透明度も湖山池や東郷池に比べて高く、約3.2mあります。

昔は海に連なっていました。砂の堆積によって切り離されたせきこ潟湖です。一般の潟湖とは異った性質をもち、第三紀層の浸食谷を砂丘が塞いだ堰止湖であります。注入する河川も流出する河川もありませんが、近くの山々から水を集めて、排水は湖の東から行われ、灌漑用に使われています。また、中央部には巖のごぜ御前島・沖の御前島の2つの暗礁があり、減水期には水面上に姿を現わします。

f2 湖と伝説

- ・湖山池の長者伝説
- ・お種の伝説

③袋川流域の山々の伝言

a 外の5山物語

扇ノ山（ジオサイト）、大茅山、宝山、稲葉山、面影山

b 面影山の2伝説

- ・長慶院法皇の伝説
- ・八百比丘尼の伝説

c 内の4山物語

今木山、甌山、御陵山、手放山

d 因幡三山物語

面影山、今木山、甌山

e 甌山の2伝説

- ・巨人がつくった甌山伝説
- ・武内宿禰の甌山伝説

f 河合谷高原（ジオサイト）

g 上山高原（ジオサイト）

h 「平」（がなる）と呼ばれる5丘

宝殿ヶ平、崩御ヶ平、太閤ヶ平、天皇ヶ平（てんのうがなる）、戦場ヶ平（せんじょうがなる）

i 流域の三峠物語

十王峠、門尾三本松峠、鶏冠尾の峠

j 十王峠と逸話

- ・冥府への入り口伝説
- ・ケイ東塚の哀話
- ・太閤の一口水

④水の流れと自然メッセージ

a 千代川

- ・概要

千代川は、岡山県境に近い智頭町駒蹄の東方沖ノ山（1318.8m）を源流とする、流域面積1,190km²、幹川流路延長52kmの県東部を北流する一級河川です。智頭町・鳥取市用瀬町・鳥取市河原町を貫流し、土師川・佐治川・曳田川・八東川・野坂川・袋川を合流して賀露港に注いでいます。鳥取市円通寺で鳥取平野に達し、平野では自然流として幾度も流路を変えた暴れ川でした。昭和2年には八千代橋から賀露港まで水路をつけかえ、堤防が完備されました。

- ・成り立ち

地球が自然環境を形成していった200万年という時間の流れの中で、海進・海退を繰り返しながら、千代川は中国山地の山々の肌をけずり取り、

多鯨ヶ池の伝説

池には悲しい伝説があります。

昔、お種という美しい女中がいました。冬の夜、誰かが「何か甘い物が食べたい」と言うと、お種はどこからかおいしい柿を取ってきて食べさせてくれました。不思議に思った若衆がある夜、お種の後をつけると、お種はこの池に来て蛇に身を変え、池の中にある島の柿の木に登っていました。若衆は驚いて逃げ帰りましたが、本当の姿を見られたお種は、そのまま池に沈み、再び姿を現すことはなかったそうです。

千代川の名称由来

川名は戦国時代末期から江戸時代初期には「仙大川」（寛永22年『山県長茂覚書』吉川家文書）、『陰徳太平記』には「千谷川」と記され、一国数郡の谷々の流れがみなこの川に流れかわることから付けられた名で「せんたに」と唱えるのを文字に受けて「せんだい」と書かれたという説や、地元民が「せむだい」とよんだことから「千代」の字があてられるようになったという説があり、その他にも「泉台」や「千体」といった説があります。

「千体」にまつわる伝説

弘法大師が上流の山にある千の谷に一体ずつ仏像を安置しようと千跡の仏像を刻んでいたところ、999谷しかなかったために、仏像を全て川に流したという伝説や、三面鬼という山賊を退治の際に、薬師如来の像を千体に刻んで成敗の成就を祈願し、願いが叶ったという伝説があります。

袋川の名称由来と名称変更

『鳥府志』によると、「鳥取の山下にありたる沼沢を埋地となさんとて、川脈を此方へ切込みたる時、数町の間いづれを川脈と云ふことも無く、広き処を流通りしゆへ、袋川の名称は是より起りたる歟。されば今の御城下のあたりにて呼たる名ならん歟と臆察せらるる也」とあるように、屈曲の激しい蛇行河川であることから名付けられたといわれています。特に袋川下流部一帯は軟弱地盤のため浸食が甚だしく、流路の蛇行は千代川水系で最も激しいものでした。

『鳥府志』とは:文政12年(1829)に鳥取藩士・岡嶋正義(1784～1859)が著した鳥取の地誌。

昭和9年、大杖の大杖橋から西進して吉成・古市を通り、千代橋の袂で千代川に注ぐ放水路が完成したため、新河道を「袋川」と呼ぶようになり、大杖を北流し、市街地をうねるように流れて浜坂で千代川と合流する旧河道を「旧袋川」と呼称しましたが、平成18年4月より名称が改められ、新河道が「新袋川」、旧河道が「袋川」へと変更されました。

雨滝伝説

だいじょうごんの坂

雨滝集落から雨滝に行く途中にある急な坂道のことを、地元では「だいじょうごんの坂」と呼んでいます。「だいじょうごん」とは暦の吉凶を司る八神の大將軍のことで、たいはく太白(金星)の精であり、この神の方向は3年塞がるとされて忌み嫌われていたため、暦学の方位と急な坂道の地形を重ねて、この坂より先への立ち入りを避けていました。

谷を刻み、運んだ土砂を河口近くにためて、鳥取平野という沖積平野を生成していきました。

山間の谷筋を流れ下ってきた千代川は、鳥取平野で縦横にその流れを変えて上流から下流へと土砂を運びながら、その流れを洪水のたびごとに変化させてきました。底湿の沖積平野のほとんどの場所は人の生活できる場所ではなく、原始のままに川筋を変え、氾濫する千代川の沖積地は、アシの生い茂る湿原であったと考えられています。

こうした低湿地が水田に開拓されて整えられていくのは、16世紀(江戸時代初期)以降になります。それらの開拓と治水の歴史は、現在でも千代川の川筋に追うことができます。

b 千代川と2伝承

- 千代川の名称由来
- 「千体」にまつわる伝説

c 袋川

- 概要

千代川水系の1級河川。同水系では八東川に次いで2番目に長く、流長28.4 kmあります。兵庫県境にそびえる扇ノ山に源を発し、県下最大を誇る雨滝地区の高さ約40 mの雨滝から西流して木原・下木原地区で流れを南に向け、栃本地区で大石川を合流し、楠城・拾石と流れ、殿地区で神護川を、下流の源門寺地区で上地川をそれぞれ合流します。松尾地区で北西に大きく流れを変えて新井・山根・神垣・谷・玉鉾・麻生を通過し、南流してきた美敷川と合流したのち、宮下地区や面影山の北、東今在家・大杖の地区を通り抜けます。

- 袋川の名称由来と名称変更
- 袋川の源流を訪ねて

d 雨滝川から因幡川そして袋川「袋」の名称由来と袋川・9呼称

雨滝川、国府川、因幡川、袋川、新袋川、城川、法美川、湊川、とっとり川

e 小又川溪谷

- シワガラの滝(ジオサイト)

f 霧ヶ滝溪谷

- 霧ヶ滝(ジオサイト)

g 雨滝四十八滝物語

布引き滝、筥滝、樋滝、平滝、比丘尼滝、夫婦滝、親子滝、馬淵滝、一番滝、二番滝、菖蒲谷滝

h 古書に見る雨滝 『稲葉民談記』と『因幡誌』

- 『稲葉民談記』
- 『因幡誌』
- 雨滝の由来

i 雨滝伝説

- だいじょうごんの坂<雨滝>
- 雨滝の伊平の知恵<宇倍神社>
- 亀が淵伝説<筥滝>
- シラジラババアのたたり伝説<七曲り城址>
- 羽柴秀吉の貂の皮淵伝説<雨滝川>
- 桜田門の扉に使われた大桁の木伝説<雨滝の木材>
- 蛇(じゃ)山(やま)城の伝説<雨滝の愛宕山>

j 雨滝前のカツラ

k 国府町の2湧水

七宝水、清水の井戸

l6 温泉

鳥取温泉(ジオサイト、鳥取市)、吉岡温泉(ジオサイト、鳥取市)、鹿野温泉(ジオサイト、鳥取市)、浜村温泉(鳥取市)、岩井温泉(岩美町)、湯村温泉(ジオサイト、新温泉町)

m 殿ダム

千代川袋川の流域に住む人々が安全で安心して暮らしていくためには、河川の水の流れを適正に管理していく“治水”と、河川の水の効果的な利用を図っていく“利水”という2つの取り組みを、河川本来が持つ自然の環境を維持しながら進めていく必要があります。千代川流域の中心都市である市街地では、昔から何度も洪水による被害を受けており、その度に川の堤防を高くしたり、川の幅を広げたりする対策を講じてきました。また、雨不足の影響で日照りが続き、渇水被害にも幾度となく見舞われてきました。このような状況を受け、千代川・袋川の水を安全に流下させながら、増大する水利用に 대응していくことを目的として殿ダム建設事業に取り組んでいます。

昭和37年から鳥取県による予備調査に着手し、昭和43年に建設省(現・国土交通省)直轄事業として引き継いだ後、昭和60年に実施計画調

宇倍神社伝説

雨滝の伊平の知恵

ある日、若殿が領地を検分するので、物知りよく知恵のまわる雨滝村の伊平という老人が案内役に選ばれました。宇倍神社の前に来たとき、茶目気が多い殿様がこの寺の名前を尋ねると、伊平は“一宮山・長命寺”と答えました。さらに次々と絶妙に答える伊平の博学に殿様は感心し、引出物を下されました。

筥滝

雨滝村に亀という心の優しい男の子がいました。両親を早くに亡くし、心の悪い義理父に何一つ不平を言わずに働いていましたが、ある年の春、二人が淵の横の山で薪を伐っていたところ、亀が鉈を取り落とし、雪解け水で水かさが増した下の淵に沈んでしまいました。義理父に鉈を拾ってくるように命じられた亀は淵に入りましたが、それきり上がってくることはなく、この滝壺のそばに来ると亀の悲しげな声が聞こえるようになりました。

地名「因幡」

古くは「稲羽」と書かれ、『古事記』にも「稲羽のしろ素うさぎ菟」という記述が見られます。この国名は当時の政治の中心地、国府が置かれた法美郡稲羽郷に由来し、国の名を因幡と書くようになって、郷名はそのまま残りました。「いなば」の地名は稲葉・稲場・稲庭に由来するという説があります。稲葉は「稲の葉」、稲場は「刈り稲の寄せ場」、稲庭の庭は平坦地を指し「稲田」を意味し、いずれにしても稲作に関係する地名であると考えられています。

また、『因幡誌』では武内宿禰が下向の折、三韓遠征の幡をこの地に祀られた由緒によって国名の稲葉の字を因幡に改めたと伝え、『岩美郡史』では尺山の西南の狭間という所にある5畝歩ほどの半月形をした田地に稲葉大明神が初めて稲苗を植えた由来によりこの田地を古苗代と呼び、古苗代の地が稲葉の国名の起きた由緒の地であるとも伝え、因幡の国名の発祥の由緒を地名説話として伝えています。

査開始、平成3年に建設事業着手、平成12年からは本格的に付替道路工事に着手、平成19年にはダム本体工事に着手し、平成23年度の完成を目指しています。

殿ダムはロックフィルダムとして高さ75m、総貯水容量12,400,000 m³、有効貯水容量11,200,000 m³で洪水調節、工業用水の供給水道水の安定供給、河川環境の保全、・水力発電の4つを目的としています。

n 流域の自然

- ・菅野ミズゴケ湿原
- ・キマダラルリツバメチョウ生息地

⑤地名の伝言

a 地名の持つ意味

- ・地名「因幡」
- ・地名「鳥取」
- ・地名「国府」
- ・地名「法美」
- ・地名「邑美」

b 【殿ダム周辺 集落の地名】

- ・大茅地区の地名
雨滝（あめだき）、楠城（なわしろ）、拾石（じっこく）
- ・成器地区の地名
成器（せいぎ）、上地（わじ）、荒舟（あらふね）、山崎（やまさき）、神護（かngo）、殿（との）

⑥因幡万葉の里の歴史と暮らし

a 袋川流域 6古墳・墳墓、1古墳群

新井の石舟古墳と二位の尼の伝説、糸谷1号墓、梶山古墳、神垣古墳、鷲山古墳、姫塚古墳
宮下古墳群

b 岡益の石堂とエンタシス

c 鳥取城（ジオサイト）

（築城）

天文14年（1545）に因幡守護の山名まさみち誠通が、天神山城の出城として久松山山頂部に築城したのが始まりといわれています。当時、誠通は同族の但馬守護山名すけとよ祐豊と争い、その来攻を防ぐためにこの城

を築き守りを固めました。城が完成して3年後の天文17年（1548）、祐豊の攻撃を受けて天神山城は落城し、誠通も乱戦のなかに陣没しました。

（久松山）

鳥取市街地の東北にそびえる山で、山上に鳥取城があったため「城山」とも呼ばれている標高263mの山です。全山深成岩である花崗岩からなり、山勢は急ですが高さはほどよくハイキングなどの好適地となっています。登山路は長田神社口または久松公園から二の丸へ抜ける道、円護寺から雁金山の峰伝いに進む道、栲谿神社から太閤ヶ平・三枚札を経る道など4つのルートがあります。頂上には鳥取城の“詰の城”、すなわち本丸の天守閣跡・月見櫓の跡や古井戸などが残っており、山頂をやや降った辺りには門の跡・枳形なども見ることができます。

c 上地の棚田

d 河合谷高原（ジオサイト）の4広場

水とのふれあい広場、海の見える広場、せせらぎ広場、峠の見晴らし広場

e 河合谷牧場

f 雨滝街道と十王峠

雨滝霊山開拓者の碑、雨瀧番所、雨滝集落の木地屋

g 因幡八景

湖山落雁、丸山秋月、妨己尾晚鐘、賀露帰帆、三嶋夜雨、濱坂夕照、松原晴嵐、鷲峰暮雪

h 殿ダムを囲む2自然公園

- ・山陰海岸国立公園
- ・氷ノ山・後山・郡岐山国定公園

i 鳥取港（ジオサイト、賀露港）

謙天皇の天平勝宝六年（754）、吉備真備が唐から帰朝の折りに難破して、賀露の沖の小島に漂着したという話も伝わっており、古代先住民族時代から港としての機能を持ち、朝鮮・隠岐・但馬・出書方面との交通の要路にあたっていたとみられています。

とくに経済的発展をみたのは、鳥取の城下町が完成したころからで、その外港として大いに利用されることになり藩政時代には藩の御番所が置かれ、貿易港として繁栄しました。

因幡八景

因幡八景とは、因幡の地域を代表する八ヶ所の美しい景色です。中国湖南省にある名勝地・洞庭湖周辺の「しょうしょう瀟湘八景」に倣ったもので、湖山池を洞庭湖になぞってつくられたのではないのでしょうか。藩絵師沖家6代の沖探容が画を描き、鳥取藩士であり歌人である8人がそれぞれの情景に和歌を添えていると伝えられています。



鳥取城跡

しかし、港は砂浜によってつくられていたもので、風波や洪水などではしばしば形や港口の位置を変えていました。

近代的な港湾としての形が整えられたのは明治 22 年ごろのことで、西浜から磯島にいたる約 100m に防波堤が築造され、その後東浜の突端にも防波堤が築かれました。

また、大正 13 年には東浜防波堤を延長し、さらに昭和 4 年、西防波堤の補強改修工事が施されて、やっと港口が定まりました。

しかし、千代川の河口港であるため、流砂堆積の進度が早く、港内・港口がたびたび災害を受けることから、昭和 49 年、建設省のもとで港湾整備が計画され、河口を変更して川と港を分離する工事が行われました。

(4) 殿ダム周辺のジオサイトを学ぶ

①鳥取を学ぶ 4 博物館

a 因幡万葉歴史館

因幡に華開いた万葉・王朝文化や、因幡地方に伝わる「麒麟獅子舞」・「因幡の傘踊り」が一堂に集い、コンピュータ・ハイビジョンを駆使した、新しいタイプの館として平成 6 年オープンしました。万葉貴族の庭園を模した池水や、四季の万葉植物を回遊できる庭園があります。高さ 30m の展望塔からは、因幡の原風景が広がります。

b 鳥取県立博物館

昭和 47 年に西日本一の規模をもつ総合博物館として開設。山陰海岸ジオパークに関連する資料では、鳥取砂丘に関する資料や、鳥取市国府町宮下の魚類化石をはじめとする鳥取層群の化石を展示。鳥取県の地形・地質についても模型を使用してわかりやすく解説されています。鳥取県の天然記念物に指定されている「扇ノ山の火山弾」は、扇ノ山が火山活動していた約 200 万年前頃、噴火によって溶岩の破片が空气中に放出され紡錘形になったもの。このような大きな火山弾（長さ 105cm・重さ 336kg）は大変珍しいものです。

c 鳥取砂丘こどもの国

鳥取砂丘を歴史・自然科学両面から解説する自然科学館をはじめ、児童館・砂丘館・レストラン・あそびシェルター・砂の工房・プラネタリウム・音楽堂などの施設が整っており、サイクリング道路もひらかれています。

d 鳥取市立歴史博物館

鳥取市の樗谿公園内に平成 12 年 7 月 1 日オープンしました。子どもから大人まで、鳥取の歴史、風土について楽しく学べる体験型博物館です。



鳥取県立博物館



鳥取砂丘こどもの国

鳥取城シアターでは CG により想定復元された鳥取城内を疑似散策できます。また、江戸時代後期の城下町・鳥取の状況をパネルや実物資料で紹介するだけでなくコンピュータでも検索できるようになっており、当時の人々の暮らしの様子を身近に感じることができます。

②鳥取を調べる 3 研究施設

a 鳥取県埋蔵文化財センター

県内に所在する重要遺跡等の発掘調査を行って、長期的視点に立った開発等との調整や整備計画のための基礎資料を収集しています。

b 砂丘研究所

c 国立大学法人鳥取大学乾燥地研究センター（アリドドーム）

世界の乾燥地研究ネットワークの中核的役割を担う研究施設。アリドドームは、複数の研究者が自由に動き回れる規模の大型人工環境制御施設であり、世界各地の乾燥地の現地情報に基づいてシミュレーション実験を行うことができます。

③鳥取砂丘と海について学ぶ 4 情報館

a 鳥取砂丘情報館「サンドバルとっとり」

鳥取砂丘の情報拠点施設。鳥取砂丘の紹介や説明の他、観光案内、インターネットコーナー（無料）も完備しています。他にも、雄大な砂丘をテーマにした日本画家「松尾多英」の 26 枚連作「砂」を常設展示。

b 鳥取砂丘パークインフォメーション

鳥取砂丘市営駐車場に平成 13 年の春オープンした施設で、普段知ることのない砂丘の様々な情報を展示している他、砂丘を歩いた足を洗う「足洗い場」やコインロッカーが設置されています。

c 鳥取砂丘ジオパークセンター

2010 年春開設。鳥取砂丘の砂や植物などをわかりやすく展示・紹介する施設。砂丘の風景や魅力を撮影したハイビジョン映像も楽しめます。また風紋発生風洞実験も行っています。

d 鳥取県立とっとり賀露かっこ館

海の生き物に直接さわることができる水槽をはじめ、「松葉がに」や世界一大きくなる「タカアシガニ」など多くの生き物が間近に見られる、カニが主役の小さな水族館です。



アリドドーム



サンドバルとつとり



鳥取砂丘パーク
インフォメーション



鳥取砂丘
ジオパークセンター



鳥取砂丘
とっとり賀露かまっこ館

④ 殿ダム周辺の2施設

a 殿ダム管理庁舎

殿ダムと貯水池「因幡万葉湖」の模型や殿ダム周辺・袋川流域の風土資産の紹介ビデオの上映や資料を保管しています。

b 殿ダム記念公園（ダム直下広場）管理・学習棟

殿ダムウォーキングトレイルの拠点。車でアクセスして、「因幡万葉湖」の周囲を自由自在に散策することが可能です。

ウォーキングトレイルには距離標（ポスト）が設置されており、距離別のコースの選定やタイム計測などが可能です。

16. 殿ダム・因幡万葉湖を巡るウォーキングトレイル

殿ダムウォーキング大会

ダム完成後は水没し入ることが出来なくなる湖底や紅葉の始まったダム周辺を歩きながら、ダム周辺地域の利活用等について考える「殿ダムウォーキング大会」が平成22年10月31日(日)に開催されました。当日は、前日までの台風14号の影響が残る中、多くの家族連れで賑わい約600人の参加がありました。ウォーキングのルートは、ダム湖に沈む貯水池部分からスタートし、楠城のふるさと広場、貯水池横断橋、ダム堤体を巡るコースが設定され、参加者には殿ダム周辺地域の利活用等についてのアンケートにご協力いただきました。



(1) 殿ダム周辺ウォーキングトレイルとは

観光客や地域住民の誘客機能としてのダム空間の有効利用とともに、地域にとっては流域ビジョンでも期待している住民のリクレーションとしての健康増進を目的にしたウォーキングトレイルです。

全部で5つのゾーンからなり、ゾーンごとのテーマに沿って、ウォーキングトレイルのコースが設定されています。

①ダム天端ゾーン

- ・ダム天端散策

ダム堤頂部を中心に、UDを実施している湖面、下流空間、案内施設への景観眺望ウォーキングトレイル。

- ・ダム景観散策

ダム堤頂から殿ダム中央広場への散策で四季の変化や景観を楽しむウォーキングトレイル。

②ダム下流ゾーン

- ・子供散策

ダム下流の殿ダム記念広場を中心とした、子供たちの学習の場や遊びの機能を持たせたウォーキングトレイル。

- ・下流景観散策

ダム下流の殿ダム記念広場から、ダム堤体のオーバースケールを堪能でき、ダム施設や桜並木を楽しめるウォーキングトレイル。

③健康運動ゾーン

- ・健康散策(ダム堤頂周辺)

ダム堤頂を中心に、上流側の殿ダム中央公園までを結ぶ子供や高齢者の健康運動ウォーキングトレイル。

- ・健康増進(ダム湖周回)

ダム中央公園を拠点に、ダム湖を周回する住民の健康増進を目的としたウォーキングトレイル。

- ・運動訓練(ダム上下流周辺周回)

イベントや住民の運動を目的としたウォーキングトレイル。

④集落体験ゾーン

- ・集落散策(生活空間:地産地消)

周辺集落の小道や脇道を散策するウォーキングトレイル。生活感の共有により非日常感を体感できる。

- ・集落風土散策(神社仏閣歴史空間)

- ・集落周辺の神社仏閣や遺跡を巡るウォーキングトレイル。

- ・集落体験(宿泊・食事の提供)

集落散策の中で、食事や民家宿泊ができるウォーキングトレイル。

⑤広域連携ゾーン

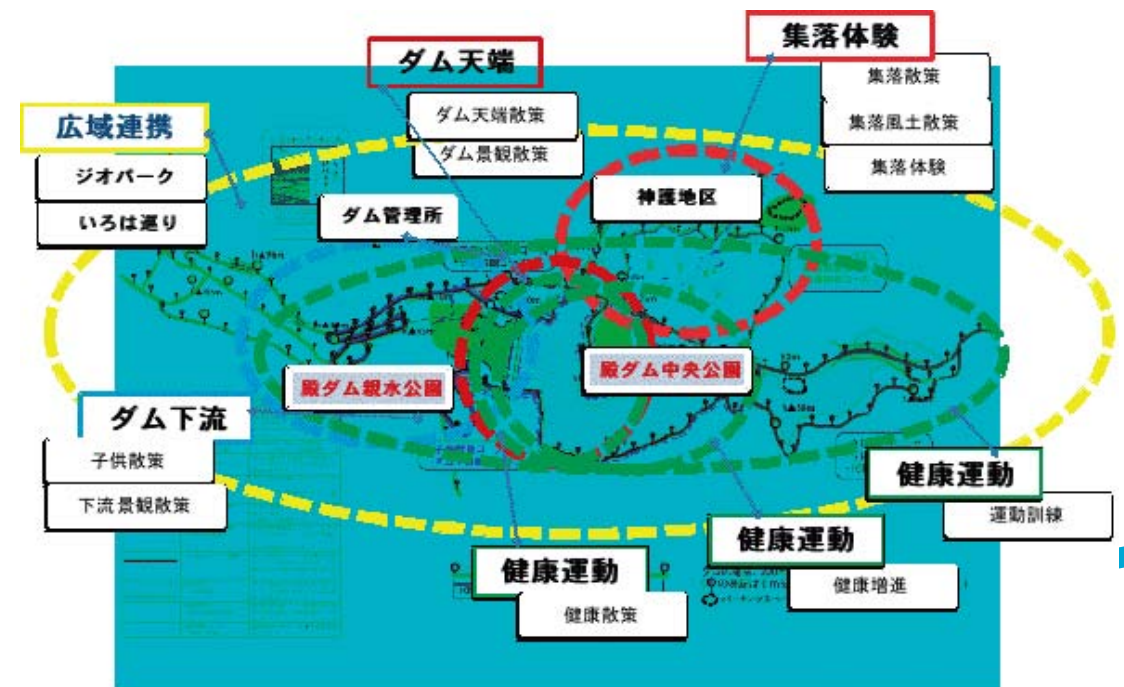
- ・ジオサイトや風土資産を巡る

ジオパーク観光と殿ダムや雨滝巡りのウォーキングトレイル。

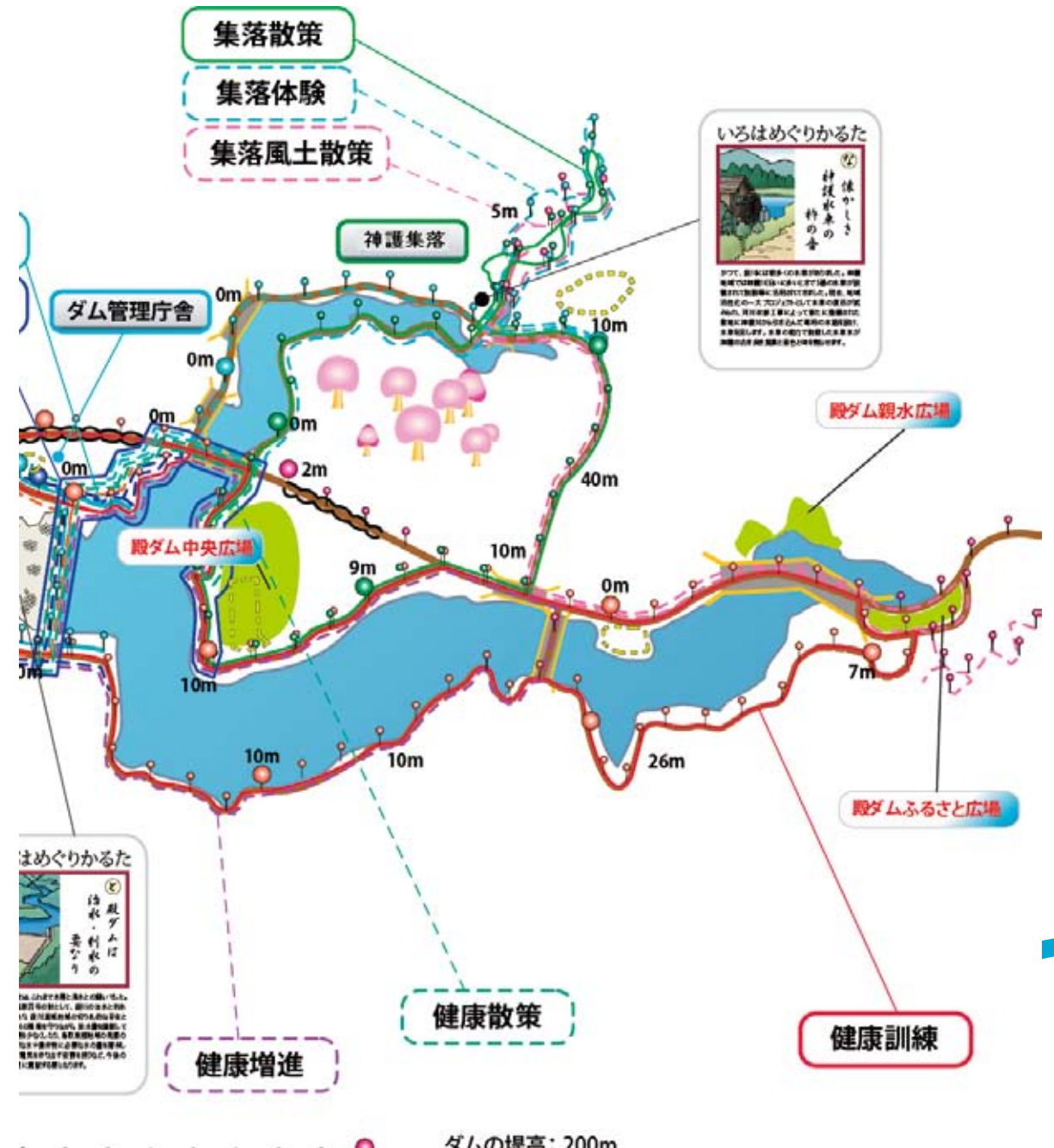
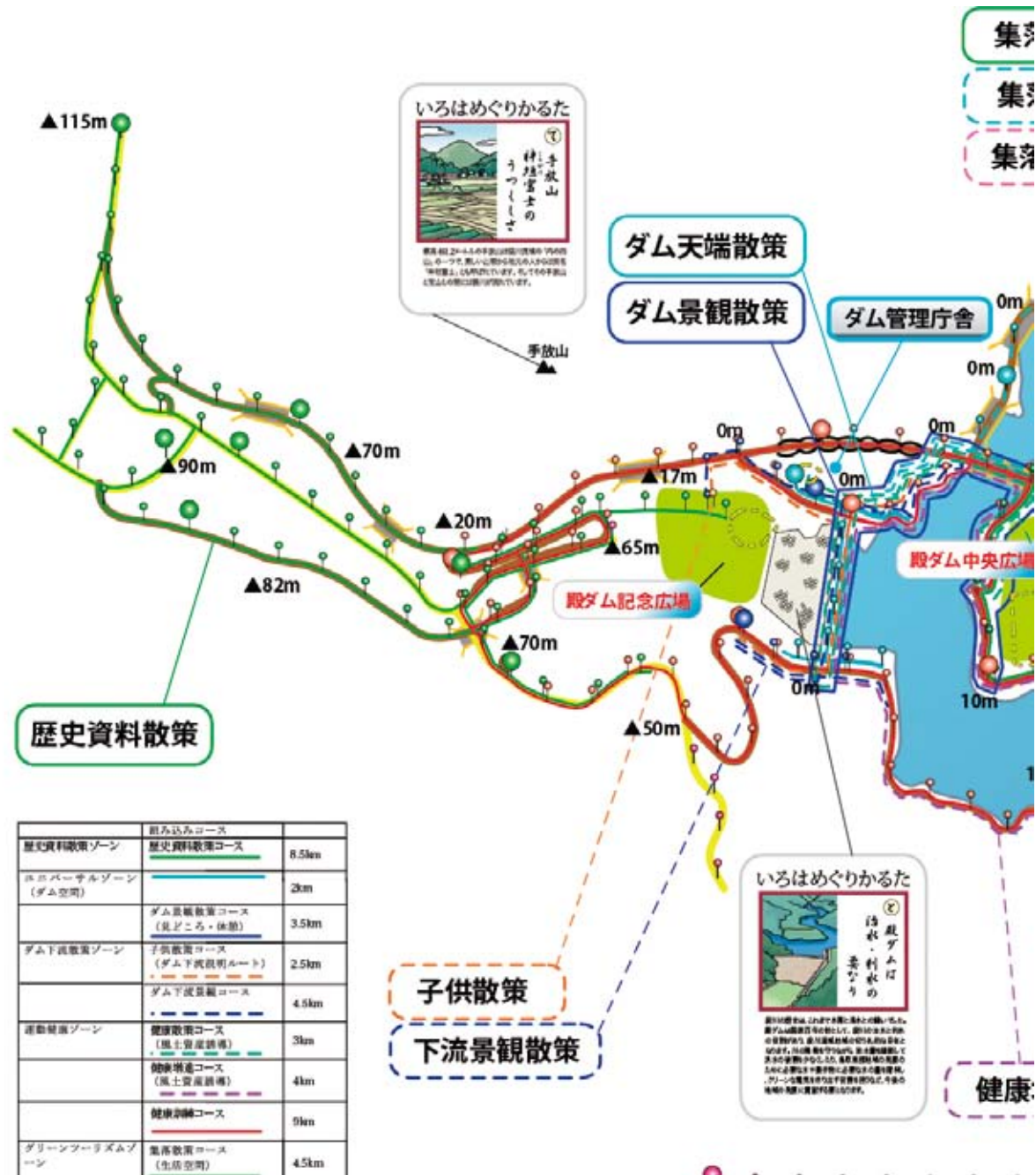
- ・いろはカルタ巡りコース(袋川流域の風土資産めぐり)

女性層を対象に、いろはカルタに書かれている風土資産巡りのウォーキングトレイル。

殿ダム周辺ウォーキングトレイルの5ゾーン



(2) 殿ダム・因幡万葉湖を巡るウォーキングトレイルのルートマップ



(3) 見どころ紹介

袋川・因幡万葉湖水八景

①大扇山の麗映

鳥取県と兵庫県の間境に位置する扇ノ山は、標高 1309.9 メートル、国府、郡家、八東、若桜の境でもあります。南北に連なるなだらかな尾根筋と、裾野に広がる広大な高原からなり、遠くから見ると扇の形に似ていることから名付けられました。新三紀末から新四紀にかけて盛んに噴火を繰り返して山が高くなり、噴出溶岩によってできた標高 1000 メートル付近の台地状地形は美しい高原となっています。麓には名瀑の雨滝があり、登山口の近くには河合谷牧場、それを過ぎると水とのふれあい広場があります。山頂は雑木林に囲まれた円形の広場ようになっていて、南西方向に展望が開けて兵庫県側がよく見下ろせます。袋川はこの扇ノ山に源を発し、国府町から雨滝地区にある県下最大の名瀑、雨滝から西流して鳥取市街地へ流れ出ていきます。



大扇山の麗映

②雨滝の瀑声

雨滝は幅 4 m、高さ 40 m という鳥取県随一の飛瀑を誇り、扇ノ山溶岩がつくる河合谷高原の北西縁部であって、溶岩流の末端部にあたります。黒ずんだ安山岩の冷却に伴って規則的な柱状節理の特異な景観を呈し、トチ、ブナなどの千古の原生林に包まれた滝です。断崖絶壁を轟音とともに落水する壮観な威容から、昭和 60 年に鳥取県が選定した「因伯の名水」の指定を受け、平成 2 年には「日本の滝百選」にも選ばれています。

古来より有数の霊場として善男善女の修行の場、お遍路さんの信仰の場として活用され、今なお神秘的な霊境としての雰囲気を残しています。滝の下には石造りの不動明王が安置されています。



雨滝の瀑声

③十王峠(法美往来)の夜雨

雨滝集落から十五町ほど登った所にある十王峠は、雨滝街道(法美往来)の国府町と岩美町の界にあたり、昔から但馬を通して京都に至る山陰道として、国府から国主を初め諸役人の往来や貢物の運搬などの重要な役割を果たしてきました。戦国時代の末、豊臣秀吉が牛が峯や七曲城を攻めた時に、十王峠を登ったとも言われています。

旧藩時代も但馬や岩井郡に行く通行の要路であったので、幕末には雨滝部落の峠道に番所を置いて通行を取り締った事もありました。十王とは、死者が冥途に行く時、この世でおかした罪を裁ばく閻魔大王など十人の王の事で、この王たちに裁かれて来世では善人になって生れてくるといわれています。山岳修験にゆかりの地でもあることから、あの世の入口と信じて名付けられたということです。



十王峠(法美往来)の夜雨

④山崎城の秋月

雨滝川の流れの上に山崎毛利氏がこもった山崎城跡がそびえています。この毛利氏は因幡の有力国人毛利一族とも称され、法美郡や邑美郡には、三戸古保雲山の砦、正連寺の毛利館、雨瀧の七曲ノ城など多くの館や砦があり、その所領が広く散在していたと言われています。また、城下の村には毛利重臣の屋敷が並んでいて、侍屋敷と騎馬の姿と、雨滝街道を往き来する旅人、そして山上に望み見る城の槽と、袋川に開けた国分寺扇状地に豊かな国を築いていたと思われます。下克上の世に城主の毛利山崎氏は従弟の私都の市場城主・毛利豊後守の婚礼を利用した策略によって城を攻め落とされ、逃げ延びた拾石村にてこの世を去りましたが、後の天正年間、羽柴秀吉の鳥取城攻めに先立って豊後守がだまし取った山崎城も落とされ、その歴史を閉じました。



山崎城の秋月

⑤雨滝川の清流

千代川水系の 1 級河川。同水系では八東川に次いで 2 番目に長く、流長は 28.4km あります。兵庫県境にそびえる扇ノ山に源を発し、県下最大を誇る雨滝地区の高さ約 40m の雨滝から西流して木原・下木原地区で流れを南に向け、栃本地区で大石川を合流し、楠城・拾石と流れ、殿地区で神護川を、下流の源門寺地区で上地川をそれぞれ合流します。松尾地区で北西に大きく流れを変えて新井・山根・神垣・谷・玉鉾・麻生を通過し、南流してきた美敷川と合流したのち、宮下地区や面影山の北、東今在家・大木の地区を通り抜けます。



雨滝川の清流

⑥上地棚田の落雁

県内でも標高の高いところにあり、『空』とも呼ばれる上地地区の棚田では、近年、農業従事者の減少に伴い田畑と水路の維持が困難になり、耕作放棄地が増加していました。そこでこの歴史的な水路と棚田に対し、平成 15 年に有志によって「プロジェクト京ヶ原実行委員会」が立ち上げられました。ボランティアと共に棚田と水路を保全に努め、酒米を栽培して新しい日本酒を特産品として作り上げて中山間地域の農村活性化につなげるといった取り組みが行われています。



上地棚田の落雁

⑦ミズゴケ湿原(カキツバタ)の春景

標高 400m にある高層湿原と周辺の山林からなるこの湿原には、オオミズゴケを中心に食虫植物のモウセンゴケ、カキツバタなどの湿原植物が群生しています。なかでも、毎年 5 月から 6 月頃にカキツバタが深紫色の美しい花を咲かせます。



ミズゴケ湿原(カキツバタ)の春景

⑧殿ダムの大観

袋川の歴史は、これまで水害と渇水との闘いでした。殿ダムは国家百年



殿ダムの大観

の計として、袋川の治水と利水の役割があり、袋川流域地域の切り札的な存在となります。川の環境を守りながら、放水量を調節して洪水の被害を少なくしたり、鳥取東部地域の発展のために必要な水や農作物に必要な水の量を確保し、クリーンな電気を作り出す役割を担うなど、今後の地域の発展に貢献する要となります。

二十勝

①七曲ノ城

雨滝の西側、布引き滝の上の険しい山を城坂山といい、城跡があります。南北朝時代の武将・赤松則村が城を築き、楠城の楠木氏とともに南朝を守ったといわれています。戦国時代の終わり頃になると、山崎城の毛利の武将がこの城を修理して七曲り城を築きました。城主の名はわかっていませませんが、天正8年(1580)11月に羽柴秀吉の中国攻めに遭い、寒気と食糧不足のため、城主以下全員が11月28日に自決し、落城しました。それ以来、毎年11月28日になると大嵐や災害が起こり、それは自決した城主の母親の怨霊だといわれるようになりました。この日になると、天気がよくても城坂山の近くには出かける者はなく、雨滝の人は、昔からこの怨霊を「シラジラババア」と呼んで恐れたそうです。今でも土塁や堀が残されており、晴天時には城跡から久松山や網代港、日本海が望めます。

②夫婦杉(木原)

境内はさほど広くありませんが、石段に河原石を敷き詰め、拝殿前にある大きな夫婦杉が厳かな雰囲気漂わせています。根元の太さは約8m、高さは約40mあると思われませんが、平成16年の台風18号により二本のうち一本が途中から折れてしまいました。また、9月15日の祭の日はこの社頭に立てられる大幟は他に類を見ないものです。

③大石神社(「御井ノ神」、大石)

杉の木立の中にある祠の後ろに高さ2.5m、周囲26mの大石があり、この巨石の下から清水が湧き、境内に流れ出ています。祭神の御井神は、大国主神と八上比売の間に生まれた開拓神です。昔は自然崇拜の習慣があり巨大な石や泉の源流などを神聖視したことからこの地に神社を創建したもののと思われ、この縁由によって大字名が大石となったといわれています。

④菅野大明神(酒賀神社)

栃本と上地集落の中間、人里離れた閑寂な丘の上にあり、『因幡誌』によると「すがの山の麓にある菅野大明神」のことでと書かれています。大草郷十二ヶ村の氏神として郷中一ノ宮と呼ばれ、創建は不明ですが、貞観3年(861)に従五位下、後に正五位を授けられています。天保10年(1839)に改築され、本殿は千鳥破風のある権現造りで、正面の桁の上の龍

や両側の酒天童子の彫刻は精巧で見事です。社名のように酒の神とも、禍をはらい、心清々しい神であるので須賀の神ともいわれています。また、源平争乱にまつわる秘話が残されています。

平家滅亡後、二位の尼がこの地を訪われ、三種の神器をこの宮に託されましたが、宝暦年間(1751~1764)に雲州の神官門脇好井というものがこれを見て「この宮におけば火災盗難のおそれがあるので出雲大社に保管するのが安全である」といってこれを持ち帰り、代わりに神器を模写した三幅を寄進したというものです。しかし、これはその後の火災(文政9年(1826))により焼失してしまいました。

平成14年6月、殿村神社および治石神社は殿ダム建設により酒賀神社に合祀されました。

⑤道標地蔵(楠城)

拾石から楠城へ続く雨滝街道の道筋を示す小さな道標地蔵で、楠城地区への登り口左手の坂の下の三差路に建てられています。高さ45cm、横幅28cmあり、お顔の右側が削げ落ちてしまっていますが、地蔵尊像の左右に「右なわ志ろみち」「左たちまみち」と刻まれています。地蔵尊の周りには五輪塔の地部や風空部、宝珠院塔の相輪部などが集められています。

⑥足倉の大岩

昭和の初め頃、松島岩吉という人が農作業をしていたところ、山の上から落ちてきたと伝えられています。

⑦甘茶畑

平成5年より神護地区で栽培され、特産品となっています。直射日光に当てると葉が赤く変色してしまい、雨にも弱いということで、大切に栽培されています。甘露を注いで産湯とした故事にならい、古くからお釈迦様の誕生祝いの灌仏会の際に、仏像に注ぐものとして用いられ、飲まれたりしてきました。

⑧神護の水車小屋

山間地の風景が失われ地域らしさが埋没しつつある状況を憂慮し、神護地区では住民が主体となって、昔懐かしい水車を地域のシンボルとして復活させる計画が立ち上がりました。かつての神護川沿いには多いときで3基の水車が設置され、脱穀等に活用されてきました。河川改修工事によって新たに整備された「国府神護ふるさと村」(仮称)の一角に設けられ、神護川から新しく引き込んだ専用の水路で水車を回し、脱穀などの動力として使用します。地区内で産出されたマツ材を活用している車輪部分は、直径2.8m、幅0.75mあり、実用水車としては県内で最大級といわれています。平成17年には完成した水車小屋でついた新米(水車米)を県知事へ



七曲ノ城



夫婦杉



大石神社



菅野大明神



道標地蔵



足倉の大岩



甘茶葉



神護の水車小屋

贈呈されました。



炭焼き小屋

9 炭焼き小屋 (荒舟ジャンボ炭窯)

国府町炭焼き体験の館は、木造平屋建の研修棟にて炭焼き体験ができる研修用炭焼き窯の施設です。炭焼き窯は、1 回に白炭 100kg を製炭することができ、隣には、1 回に 1700kg の製炭ができる「荒舟ジャンボ炭窯」があります。また、炭焼きの際に発生する「木酢液」は純度が高く、透明感があり、人気の品となっています。

10 子守神社 (子守権現、赤松大明神、上荒舟神社)

上荒舟地区の舗装道路をあがり、字「宮の後」の杉木立の中に鎮座しています。切り石の石段を上ると参道も切石畳で、小じんまりした 200 坪程度の境内ですが、この中に鳥居・献燈・本殿・神楽殿が巧みに配置されています。特に本殿の奥に位置する 2m2 ほどの厨子は他の神社では見ることのできないものであり、また拜殿には俳句の額が掛かっています。祭神は須佐之男命 (素盞鳴尊) と稲田姫命ですが、古くから子守権現とも赤松大明神とも称されていたことから、正徳年中に鳥取藩 3 代藩主池田吉泰公が男子がないことを憂い、この社に祈願したところ霊験著しく宗泰公の誕生をみたとして、藩では米三石を永久に寄進することになったといわれています。明治 7 年に上荒舟神社と改称されましたが、鳥居にはもとの両神社の額が掛けられています。



子守神社

11 神護神社

創立年代、沿革とも明かではなく、古くから武王大明神、聖大明神・緑大明神と呼ばれていましたが、明治 7 年に神護神社と改められました。神護地区を見下ろす小高い山腹に建ち、昔、松島神護兵衛という神主がこの地で大茅郷の一ノ宮、酒賀神社の社領を治めていたという言い伝えが残り、中世から戦国時代の記録にも神護神主と記されています。旧暦 2 月 9 日の御禰の祭には、神護の男が榊をかつぎ、本殿から古い御幣をいただいて太鼓をうちながら当番の宿の家まで行列するという神事が、今も受け継がれています。



神護神社

12 普含寺

天正 4 年の開基で、楠城山本六郎左衛門は自ら田地・畑を寄進し、秀山利旭大和尚を開山として迎えて東山山麓に普含寺を開きました。それから約 100 年後、この地に移転しました。また、大梵鐘が第二次世界大戦に供出のままなくなっていたので、開創 400 年を記念して再鑄造し、昭和 51 年に撞初式を行いました。普含寺の紋は池田家と同じアゲハの蝶であり、鳥取藩主池田家の位牌一基と、分家西館池田家の一基が伝えられています。



普含寺

13 学行院

慶長 6 年 (1601) 鳥取城主・池田長吉は、吉野にある正覚院という草庵が希代の霊仏であることを知り、これに寺領五石を下賜しました。いまままで秘かにこの霊仏を祭っていた覚行という修験者はこれに感激して同じ吉野の富農である紹慶とはかり、小堂を建てて薬師如来とその他を安置しました。これが「土ん堂」と呼ばれる学行院の前身です。その後、覚行の孫にあたる覚蔵坊が寛文 8 年 (1668) に寺を再建しました。

また、「むかし吉野に花慶山光良寺という寺があつて七堂伽藍がいらかを並べ、千体仏が金色に輝き大峽川 (大茅川) の鮎もその光を恐れて上らなかつた。しかし、寺は中世の戦乱により焼失したが本尊の仏体は残り、土堂薬師として永く崇敬された」という伝承もあります。



学行院

14 延命地藏

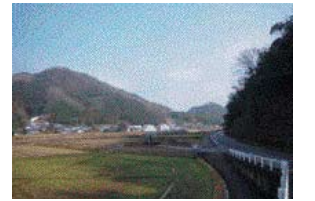
新井と船山の間の中道の県道沿いにあります。この地藏はすぐ近くの袋川の改修工事の際、川床から見つかりました。相当磨滅していますが、工事関係者の話によると、その昔この地藏さんの御加護で九死に一生を得たというので、その報恩と世の人々にも御加護があるようにと現在でも大切に祀られています。



延命地藏

15 手放山

美しい山容から地元の人々からは別名「神垣富士」とも呼ばれる、標高 461.2 メートルの山です。手放山は因美線東郡家駅の東北東約 7 キロメートルの位置にあり、西南西 3 キロメートルの宝山との間に袋川が流れています。



手放山

16 栃本廃寺跡

二つの塔心礎が残る貴重な寺跡として、昭和 10 年に塔跡が国の史跡に指定されました。古代因幡国の国府からおよそ 14km 山間部へ入った栃本の集落より、奥の谷合に拓かれた狭い平地にあり、大石川の右岸に立地します。塔の北寄りに、明治時代まで、水田中に土壇状の方形の高まりがあったと伝えられていること、さらに約 27m 離れて 2 個の心柱の礎石が存在することや、地名に塔ノ垣・下塔ノ垣が残っていることから、瓦の出土はないものの、かつてこの地に寺院が建っていたと考えられていました。



栃本廃寺跡

また、この寺院の性格については、7 世紀末に因幡国が銅鋳を献じたことから『続日本紀』の記事や、位置がかつて銅を生産した岩美町荒金に近いことから、法美郡の有力郷族・伊福吉部氏に関連した寺院であるとの説と、僧侶の修業や信仰本位に形成された山寺ではないかとの説があります。

17 野村愛正文学碑

明治 24 年鳥取市国府町楠城に生まれ、本名は愛正。鳥取中学 (現・鳥



野村愛正文学碑

取西高) 在学中から小説を発表しており、鳥取新報社の記者となったのちに上京し、大正6年に大阪朝日新聞の懸賞小説に応募した『明ゆく路』が第一位に選ばれ、大正後期から昭和初期を中心として短編や長編小説を数多く発表しました。初の児童向けとして出版された『三国志物語』は三国志作家からも推薦されるほどの幻の傑作といわれ、また、『泉は放射線に流れる』では生地楠城を舞台にして封建性の中に喜怒哀楽を綴り上げています。愛正の作品は自然主義的な手法であらゆる社会の姿を描きながら、その中に人類愛の理想を色濃く滲ませる点で、他の通俗作家の追随を許さざるものがあるなどと評されています。また、俳句の嗜みも深く、「牛身」と号しました。83歳の生涯を終えた翌年の昭和50年、楠城地区の入り口に「野村愛正文学碑」が建てられました。



源門寺廃寺の塔心礎

18 源門寺廃寺の塔心礎

中河原に源門寺という寺の名前は残っていますが、詳しいことは分かっていません。現在、源門寺の心礎といわれる遺構は、元の位置より80mほど下流にある妙見堂の前に移動されていますが、旧位置は、袋川上流右岸に当たる中河原字源門寺谷口になります。

山が川にせまり大きな平地は見られない土地であり、心礎の旧位置も山ぎわに幅30mほど小平地が見られるのみで、七堂伽藍の可能性はなく、塔を重要施設とした特異な仏教施設だったのではないかと考えられています。

心礎規模は、長径1.7mほどの自然石に径47cm、深さ15cmの柱孔が穿たれ、径73cmほどの円形柱座が浮刻されていて舍利孔はありません。また、旧場所で一個の須恵器が収集されています。平底を思わせる長頸壺(瓶)であり、形状から平安初頭と推定される唯一の資料になります。



荒舟発電所

19 荒舟発電所

明治40年の春、上地橋下流から上地川の水を取り入れ、上荒舟まで1450mの導水路によって72.7mの有効落差を得た水力により、出力100kwの発電所として完成しました。

境・鳥取間の山陰線開通を祝って5月17日に皇太子(後の大正天皇)が山陰行啓されたのを記念し、上荒舟で起こされた電気によって、宿泊所の仁風閣をはじめ市内86戸に初めて点灯されました。明治44年になると八頭と千代川上流の八頭奥地に大型発電所が建設されましたが、明治の黎明期に荒舟発電所が果たした役割は大きいものでした。その後、改修工事によって導水路延長1546m、出力は240kwと大幅に上げられ、開設以来100年の歳月を経て今なお発電を続けながら、地域の文化と産業の発展に貢献しています。

20 新井の石舟

石舟古墳は直径約10mの円墳と推定され、横穴石室の玄室に凝灰岩をくり貫いた家形石棺が安置されています。石棺の蓋は2枚ありましたが現在は1枚だけ乗せられており、上の方が扁平な屋根型に加工され、横には方形の把手が造られています。

二位の尼は文治4年(1188)の秋、「泉が谷」という所に大きな石舟を造らせて自分の棺と定めました。そして、建久3年(1192)8月上旬病に伏し、医者拒み薬も食事もとらずただ一心に念仏を唱えていましたが、帝が崩御してから満5年と2日過ぎた8月15日、あとを追うかのように逝かれました。こうして亡骸は遺言の通り泉が谷の石舟に葬られ、二位の尼の墓所があることからこの地を「二位」といいましたが、世に隠れて過ぎた人の名前を表に出すことをはばかり、その後同じ訓の「新井」へ改められました。



新井の石舟

17. 袋川八景二十勝

(1) 因幡八景

因幡八景とは、因幡の地域を代表する八ヶ所の美しい景色です。中国湖南省にある名勝地・洞庭湖周辺の「八景」に倣ったもので、湖山池を洞庭湖になぞってつくられたのではないのでしょうか。藩絵師沖家6代の沖探容が画を描き、鳥取藩士であり歌人である8人がそれぞれの情景に和歌を添えていると伝えられています。



1 湖山落雁

のはな おつる夕べの 秋風に
入江の雁の 声ぞそひ行く
中島官門 (文化4〜明治27)



(資料提供：鳥取県立博物館)

2 丸山秋月

まどかなる 月のひかりに 霧はれて
山のかひある 夜半の道かな
篠田惟成 (不明〜明治5)



(資料提供：鳥取県立博物館)

3 防己尾晚鐘

かねのおとに 梅か香たくふ 夕風も
また春さむし つつらをの里
飯田秀雄 (寛政3〜安政6)
加知弥神社宮司/国学者



(資料提供：鳥取県立博物館)

4 賀露帰帆

みなとをも ちかつく真帆の 追いかぜに
さちつむ海士や 声きほらむ
宮原積 (文政6〜明治17)



(資料提供：鳥取県立博物館)

5 三嶋夜雨

なかれ江の ここはみしまの 影もなし
竹の葉わりや 雨になりゆく
山杉大茂 (寛政8〜明治3) 国学者



(資料提供：鳥取県立博物館)

6 濱坂夕照

青うな原 浪よりかけて まよこちに
夕月かがやく 濱坂の里
加須屋武義 (不明〜慶応元)



(資料提供：鳥取県立博物館)

7 小松原晴嵐

あらばらけ 露なかるる 松はらに
夜ハのあらしの ゆくへをぞみる
小谷古陰 (文政4〜明治15) 国学者



(資料提供：鳥取県立博物館)

8 鷺峰暮雪

晴曇る いり日の影も 降る雪の
そらにみたるる わしの山風
飯門年平 (文政3〜明治19) 国学者



(資料提供：鳥取県立博物館)

(2) 湖山池の八景・湖上八勝



「湖上八勝」は、「八景」を歌題として、湖山池周辺の名勝を江戸時代に詠ったものです。『稲葉佳景 無駄安留記』に記載されている湖上八勝からは、当時の人たちが湖山池周辺の美しい景色を文化的伝統の中に位置付けながら鑑賞していた姿を偲ぶことができます。

・野崎落雁

群雲の その琴桂かと みるばかり
野崎に連れて 落る雁がね

石がま

湖山池の西岸に位置する三津地区周辺では、他に類を見ない湖山池独特の伝統的な漁法「石がま漁」が藩政期ごろから行なわれてきました。湖岸近くの水中に石を積み上げて内部に魚道を作り、一番奥の栗・ケヤキ材を利用した「どうかん」に魚類を追い込み、たも網で捕獲するという仕組みです。厳冬期に、一家総出で魚道に潜んでいる魚類を石がまの上から突棒で突き、どうかんに追い込む作業が休むことなく一日中続けられます。昭和18年の鳥取大地震等でほとんどが崩れてしまい、現在操業できる石がまは数基しかありませんが、かつては50基以上あったといわれています。



湖山池（津生島）

・矢山暮雪

武士の ややま(矢山)の雪の 夕暮は 弓とたはめる 磯の枯あし

・三津帰帆

沖つ風 いたく吹らん 山蜂の みつ(三津)の浦べに 帰る釣ふね

・福井晩鐘

山風の ふくみ(福井)の寺の 入相に 磯うつ浪の 花や散らむ

・松原夜雨

夜の雨は 芦の音づれ ばかりにて 人まつ原(松原)の 里ぞしづけさ

・高住夕照

高住や 夕日に浪は 染ながら そまらで青き 嶋のねの松

・布施晴嵐

雲をなす あぢむらまでも 逃げてけり けつはものを ふせ(布施)の嵐に

・湖山秋月

小山田の 濁にしまぬ かげみえて 湖遠く すみわたる月

(3) 袋川・湖水八景二十勝案 (139 ページ位置図を参照)

これまで紹介してきた袋川流域並びに殿ダムにより誕生する湖水周辺の風土資産を題材として八景二十勝を選定してみました。

八景

①大扇山の麗映

鳥取県と兵庫県の県境に位置する扇ノ山は、標高1309.9メートル、国府、郡家、八東、若桜の境でもあります。南北に連なるなだらかな尾根筋と、裾野に広がる広大な高原からなり、遠くから見ると扇の形に似ていることから名付けられました。新三紀末から新四紀にかけて盛んに噴火を繰り返して山が高くなり、噴出溶岩によってできた標高1000メートル付近の台地状地形は美しい高原となっています。麓には名瀑の雨滝があり、登山口の近くには河合谷牧場、それを過ぎると水とのふれあい広場があります。山頂は雑木林に囲まれた円形の広場ようになっていて、南西方向に展望が開けて兵庫県側がよく見下ろせます。袋川はこの扇ノ山に源を發し、国府町から雨滝地区にある県下最大の名瀑、雨滝から西流して鳥取市街地へ流れ出ていきます。

②雨滝の瀑声

雨滝は幅4m、高さ40mという鳥取県随一の飛瀑を誇り、扇ノ山溶岩がつくる河合谷高原の北西縁部であって、溶岩流の末端部にあたります。黒ずんだ安山岩の冷却に伴って規則的な柱状節理の特異な景観を呈し、トチ、ブナなどの千古の原生林に包まれた滝です。断崖絶壁を轟音とともに落水する壮観な威



大扇山の麗映



雨滝の瀑声

容から、昭和60年に鳥取県が選定した「因伯の名水」の指定を受け、平成2年には「日本の滝百選」にも選ばれています。

古来より有数の霊場として善男善女の修行の場、お遍路さんの信仰の場として活用され、今なお神秘的な霊境としての雰囲気を残しています。滝の下には石造りの不動明王が安置されています。

一帯は雨瀧四十八滝と呼ばれ白布を引いた様から「布引の滝」、水が数段に落ち神秘的な「箱滝」滝つぼは「亀」という子供の伝説が残る「亀が淵」、急な流れに樋のようになった三段滝の「樋滝」その上の「平滝」、「比丘尼滝」、二つ並んだ「夫婦滝」と「親子滝」、長者の息子の愛馬が落ちたという「馬淵滝」、そのほかに「一番滝」、「二番滝」、「菖蒲谷滝」など多くの滝があります。

雨滝の名は『因幡誌』の「飛溜沛然」として四方に乱れ散る勢ひ、さながら暴雨のそそぐが如く空翠常に人衣を濕せり。昔は如何許りにや有けん。あめ滝と名づけしも其故なるべし。」により雨のように勢いよく飛沫を上げて落ちてくることに由来するといわれています。

③十王峠(法美往来)の夜雨

袋川下流は智頭街道、若桜街道、鹿野街道、法美雨滝街道の拠点です。宮下の道標地蔵は、昔、中郷橋が架かっていた所にあり、享和元年(1801)に角屋徳兵衛が雨滝の分岐点に旅人の便宜と安全を願って建てたものと言われています。また、稲葉山にある道標地蔵は、稲葉山の山道横に建ち、国府から但馬方面への近道になります。かつては街道沿いに多くの道標、地蔵や常夜燈が建ち、人々の往来を見守ってきました。

雨滝集落から十五町ほど登った所にある十王峠は、雨滝街道(法美往来)の国府町と岩美町の堺にあたり、昔から但馬を通って京都に至る山陰道として、国府から国主を初め諸役人の往来や貢物の運搬などの重要な役割を果たしてきました。戦国時代の末、豊臣秀吉が牛が峯や七曲城を攻めた時に、十王峠を登ったとも言われています。旧藩時代も但馬や岩井郡に行く通行の要路であったので、幕末には雨滝部落の峠道に番所を置いて通行人を取り締った事もありました。十王とは、死者が冥途に行く時、この世でおかした罪を裁ばく閻魔大王など十人の王の事で、この王たちに裁かれて来世では善人になって生れてくるといわれています。山岳修験にゆかりの地でもあることから、あの世の入口と信じて名付けられたということです。

④山崎城の秋月

雨滝川の流れの上に山崎毛利氏がこもった山崎城跡がそびえています。この毛利氏は因幡の有力国人毛利一族とも称され、法美郡や邑美郡には、三戸古保雲山の砦、正連寺の毛利館、雨滝の七曲ノ城など多くの館や砦があり、その所領が広く散在していたと言われています。また、城下の村には毛利の重臣の屋敷が並んでいて、侍屋敷と騎馬の姿と、雨滝街道を往き来する旅人、そして山上に望み見る城の槽と、袋川に開けた国分寺扇状地に豊かな国を築いていたと思われる。下克上の世に城主の毛利山崎氏は従弟の私都の市場城主・毛利



雨瀧と桂の大木



桂の大木



十王峠(法美往来)の夜雨



山崎城の秋月



雨瀧川の清流

豊後守の婚礼を利用した策略によって城を攻め落とされ、逃げ延びた拾石村にてこの世を去りましたが、後の天正年間、羽柴秀吉の鳥取城攻めに先立って豊後守がだまし取った山崎城も落とされ、その歴史を閉じました。

5 雨瀧川の清流

千代川水系の1級河川。同水系では八東川に次いで2番目に長く、流長28.4kmあります。兵庫県境にそびえる扇ノ山に源を発し、県下最大を誇る雨瀧地区の高さ約40mの雨瀧から西流して木原・下木原地区で流れを南に向け、栃本地区で大石川を合流し、楠城・拾石と流れ、殿地区で神護川を、下流の源門寺地区で上地川をそれぞれ合流します。松尾地区で北西に大きく流れを変えて新井・山根・神垣・谷・玉鉾・麻生を通過し、南流してきた美歎川と合流したのち、宮下地区や面影山の北、東今在家・大杖の地区を通り抜けます。

昭和9年、大杖の大杖橋から西進して吉成・古市を通り、千代橋の袂で千代川に注ぐ放水路が完成したため、新河道を「袋川」と呼ぶようになり、大杖を北流し、市街地をうねるように流れて浜坂で千代川と合流する旧河道を「旧袋川」と呼称しましたが、平成18年4月より名称が改められ、新河道が「新袋川」、旧河道が「袋川」へと変更されました。

「袋川は雨瀧の奥にその源を発し、山間の岩石の間を奔流して、法美の沃地に来り、緩く鳥取の市街を廻るなれば、その水質極めて良好、清冽にしてすこぶる飲料に適す」(『鳥取藩史』)



上地棚田の落雁

6 上地棚田の落雁

県内でも標高の高いところにあり、『空』とも呼ばれる上地地区の棚田では、近年、農業従事者の減少に伴い田畑と用水路の維持が困難になり、耕作放棄地が増加していました。そこでこの歴史的な用水路と棚田に対し、平成15年に有志によって「プロジェクト京ヶ原実行委員会」が立ち上げられました。ボランティアと共に棚田と水路を保全に努め、酒米を栽培して新しい日本酒を特産品として作り上げて中山間地域の農村活性化につなげるといった取り組みが行われています。



ミズゴケ湿原(カキツバタ)の春景

7 ミズゴケ湿原(カキツバタ)の春景

標高400mにある高層湿原と周辺の山林からなるこの湿原には、オオミズゴケを中心に食虫植物のモウセンゴケ、カキツバタなどの湿原植物が群生しています。なかでも、毎年5月から6月頃にカキツバタが深紫色の美しい花を咲かせます。



殿ダムの大観

8 殿ダムの大観

袋川の歴史は、これまで水害と渇水との闘いでした。殿ダムは国家百年の計として、袋川の治水と利水の役割があり、袋川流域地域の切り札的な存在となります。川の環境を守りながら、放水量を調節して洪水の被害を少なくした

り、鳥取東部地域の発展のために必要な水や農作物に必要な水の量を確保し、クリーンな電気を作り出す役割を担うなど、今後の地域の発展に貢献する要となります。

二十勝

1 七曲ノ城

雨瀧の西側、布引き滝の上の険しい山を城坂山といい、城跡があります。南北朝時代の武将・赤松則村が城を築き、楠城の楠木氏とともに南朝を守ったといわれています。戦国時代の終わり頃になると、山崎城の毛利の武將がこの城を修理して七曲ノ城を築きました。城主の名はわかっていませんが、天正8年(1580)11月に羽柴秀吉の中国攻めに遭い、寒気と食糧不足のため、城主以下全員が11月28日に自決し、落城しました。それ以来、毎年11月28日になると大嵐や災害が起こり、それは自決した城主の母親の怨霊だといわれるようになりました。この日になると、天気がよくても城坂山の近くには出かける者はなく、雨瀧の人は、昔からこの怨霊を「シラジラババア」と呼んで恐れられています。今でも土塁や堀が残されており、晴天時には城跡から久松山や網代港、日本海が望めます。



七曲ノ城

2 夫婦杉(木原)

境内はさほど広くありませんが、石段に河原石を敷き詰め、拝殿前には大きな夫婦杉が豊かな雰囲気をもたらしています。根元の太さは約8m、高さは約40mあると思われませんが、昭和34年の伊勢湾台風によって老樹の上部が折れたため、雨露を防ぐために銅板をあてて枯れるのを防いでいましたが、平成16年の台風18号により二本のうちの一本が途中から折れてしまいました。また、9月15日の祭の日はこの社頭に立てられる大幟は他に類を見ないものです。神社下にある古さびされたお堂が「神人共楽」の面影をしのばせ、下木原の「茅ん堂」とともに歴史の重さをたたえています。



夫婦杉

3 大石神社(「御井ノ神」、大石)

杉の木立の中にある祠の後ろに高さ2.5m、周囲26mの大石があり、この巨石の下から清水が湧き、境内に流れ出ています。祭神の御井神は、大国主神と八上比売の間に生まれた開拓神です。昔は自然崇拝の習慣があり巨大な石や泉の源流などを神聖視したことからこの地に神社を創建したものとされ、この縁由によって大字名が大石となったといわれています。



大石神社

4 菅野大明神(酒賀神社)

栃本と上地集落の中間、人里離れた閑寂な丘の上にあり、『因幡誌』によると「すがの山の麓にある菅野大明神」のことであると書かれています。

大草郷十二ヶ村の氏神として郷中一ノ宮と呼ばれ、創建は不明ですが、貞観3年(861)に従五位下、後に正五位を授けられています。天保10年(1839)に

菅野大明神(酒賀神社)



改築され、本殿は千鳥破風のある権現造りで、正面の桁の上の龍や両側の酒天童子の彫刻は精巧で見事です。社名のように酒の神とも、禍を払い、心清々しい神であるので須賀の神ともいわれています。

また、源平争乱にまつわる秘話が残されています。

平家滅亡後、二位の尼がこの地を訪われ、三種の神器をこの宮に託されましたが、宝暦年間(1751~1764)に雲州の神官門脇好井というものがこれを見て「この宮におけば火災盗難のおそれがあるので出雲大社に保管するのが安全である」といってこれを持ち帰り、代わりに神器を模写した三幅を寄進したというものです。しかし、これはその後の火災(文政9年(1826))により焼失してしまいました。

平成14年6月、殿村神社および冶石神社は殿ダム建設により酒賀神社に合祀されました。



楠城の道標地蔵

5 道標地蔵(楠城)

拾石から楠城へ続く雨滝街道の道筋を示す小さな道標地蔵で、楠城地区への登り口左手の坂の下の三差路に建てられています。高さ45cm、横幅28cmあり、お顔の右側が削げ落ちてしまっていますが、地蔵尊像の左右に「右なわ志ろみち」「左たちまみち」と刻まれています。地蔵尊の周りには五輪塔の地部や風空部、宝珠院塔の相輪部などが集められてあります。



足倉の大岩

6 足倉の大岩

昭和の初め頃、松島岩吉という人が農作業をしていたところ、山の上から落ちてきたと伝えられています。



神護の甘茶葉

7 甘茶畑

平成5年より神護地区で栽培され、特産品となっています。直射日光に当てると葉が赤く変色してしまい、雨にも弱いということで、大切に栽培されています。甘露を注いで産湯とした故事にならい、古くからお釈迦様の誕生祝いの灌仏会の際に、仏像に注ぐものとして用いられたり、飲まれたりしてきました。山紫陽花の変種の植物で、紫陽花の花によく似た淡い紫色から淡い紅色に変わる花を6月頃に咲かせます。葉は乾燥させると甘み成分が増し、甘さはあっても低カロリーのため、胃腸にやさしい健康飲料となります。

8 神護の水車小屋

山間地の風景が失われ地域らしさが埋没しつつある状況を憂慮し、神護地区では住民が主体となって、昔懐かしい水車を地域のシンボルとして復活させる計画が立ち上がりました。かつての神護川沿いには多いときで3基の水車が設置され、脱穀等に活用されてきました。河川改修工事によって新たに整備された「国府神護ふるさと村」(仮称)の一角に設けられ、神護川から新しく引き込んだ専用の水路で水車を回し、脱穀などの動力として使用します。地区内



神護の水車小屋

で産出されたマツ材を活用している車輪部分は、直径2.8m、幅0.75mあり、実用水車としては県内で最大級といわれています。平成17年には完成した水車小屋でついた新米(水車米)を県知事へ贈呈されました。

9 炭焼き小屋(荒舟ジャンボ炭窯)

国府町炭焼き体験の館は、木造平屋建の研修棟にて炭焼き体験ができる研修用炭焼き窯の施設です。炭焼き窯は、1回に白炭100kgを製炭することができ、隣には、1回に1700kgの製炭ができる「荒舟ジャンボ炭窯」があります。また、炭焼きの際に発生する「木酢液」は純度が高く、透明感があり、人気の品となっています。



炭焼き小屋(荒舟ジャンボ炭窯)

10 子守神社(子守権現、赤松大明神、上荒舟神社)

上荒舟地区の舗装道路を上がり、字「宮の後」の杉木立の中に鎮座しています。切り石の石段を上ると参道も切石畳で、小じんまりした200坪程度の境内ですが、この中に鳥居・献燈・本殿・神楽殿が巧みに配置されています。特に本殿の奥に位置する2m²ほどの厨子は他の神社では見ることでできないものであり、また拝殿には俳句の額が掛かっています。祭神は須佐之男命(素盞鳴尊)と稲田姫命ですが、古くから子守権現とも赤松大明神とも称されていたことから、正徳年中に鳥取藩3代藩主池田吉泰公が男子がないことを憂い、この社に祈願したところ霊験著しく宗泰公の誕生をみたとして、藩では米三石を永久に寄進することになったといわれています。明治7年に上荒舟神社と改称されましたが、鳥居にはもとの両神社の額が掛けられています。



上荒舟神社



上荒舟神社の額

11 神護神社

創立年代、沿革とも明かではなく、古くから武王大明神、聖大明神・緑大明神と呼ばれていましたが、明治7年に神護神社と改められました。

神護地区を見下ろす小高い山腹に建ち、昔、松島神護兵衛という神主がこの地で茅郷の一ノ宮、酒賀神社の社領を治めていたという言い伝えが残り、中世から戦国時代の記録にも神護神主と記されています。

旧暦2月9日の御禊の祭には、神護の男が神をかつぎ、本殿から古い御幣をいただいて太鼓をうちながら当番の宿の家まで行列するという神事が、今も受け継がれています。



神護神社

12 普含寺

天正4年の開基で、楠城山本六郎左衛門は自ら田地・畑を寄進し、秀山利旭大和尚を開山として迎えて東山山麓に普含寺を開きました。それから約100年後、この地に移転しました。また、大梵鐘が第二次世界大戦に供出のままなくなっていたので、開創四〇〇年を記念して再鑄造し、昭和51年に撞初式を行いました。普含寺の紋は池田家と同じアゲハの蝶であり、鳥取藩主池田家の位牌一基と、分家西館池田家の一基が伝えられています。



普含寺



学行院

13 学行院

慶長6年(1601)鳥取城主・池田長吉は、吉野にある正覚院という草庵が希代の霊仏であることを知り、これに寺領五石を下賜しました。いままで秘かにこの霊仏を祭っていた覚行という修験者はこれに感激して同じ吉野の富農である紹慶とはかり、小堂を建てて薬師如来とその他を安置しました。これが「土ん堂」と呼ばれる学行院の前身です。その後、覚行の孫にあたる覚蔵坊が寛文8年(1668)に寺を再建しました。

また、「むかし吉野に花慶山光良寺という寺があつて七堂伽藍がいらかを並べ、千体仏が金色に輝き大峽川(大茅川)の鮎もその光を恐れて上らなかつた。しかし、寺は中世の戦乱により焼失したが本尊の仏体は残り、土堂薬師として永く崇敬された」という伝承もあります。



延命地藏

14 延命地藏

新井と船山の中間の県道沿いにあります。この地藏はすぐ近くの袋川の改修工事の際、川床から見つかりました。相当磨滅していますが、工事関係者の話によると、その昔この地藏さんの御加護で九死に一生を得たというので、その報恩と世の人々にも御加護があるようにと現在でも大切に祀られています。



手放山

15 手放山

美しい山容から地元の人々からは別名「神垣富士」とも呼ばれている、標高461.2メートルの山です。手放山は因美線東郡家駅の東北東約7キロメートルの位置にあり、西南西3キロメートルの宝山との間に袋川が流れています。



栴本廃寺跡

16 栴本廃寺跡

二つの塔心礎が残る貴重な寺跡として、昭和10年に塔跡が国の史跡に指定されました。古代因幡国の国府からおよそ14km山間部へ入った栴本の集落より、奥の谷合に拓かれた狭い平地にあり、大石川の右岸に立地します。塔の北寄りに、明治時代まで、水田中に土壇状の方形の高まりがあったと伝えられていること、さらに約27m離れて2個の心柱の礎石が存在することや、地名に塔ノ垣・下塔ノ垣が残っていることから、瓦の出土はないものの、かつてこの地に寺院が建っていたと考えられていました。

また、この寺院の性格については、7世紀末に因幡国が銅鋳を献じたとする『続日本紀』の記事や、位置がかつて銅を生産した岩美町荒金に近いことから、法美郡の有力郷族・伊福吉部氏に関連した寺院であるとの説と、僧侶の修業や信仰本位に形成された山寺ではないかとの説があります。



野村愛正文学碑

17 野村愛正文学碑

明治24年鳥取市国府町楠城に生まれ、本名は愛正^{ちかまさ}。鳥取中学(現・鳥取西高)在学中から小説を発表しており、鳥取新報社の記者となったのちに上京し、大正6年に大阪朝日新聞の懸賞小説に応募した『明ゆく路』が第一位に選ばれ、大正後期から昭和初期を中心

として短編や長編小説を数多く発表しました。初の児童向けとして出版された『三国志物語』は三国志作家からも推薦されるほどの幻の傑作といわれ、また、『泉は放射線に流れる』では生地楠城を舞台にして封建性の中に喜怒哀楽を綴り上げています。愛正の作品は自然主義的な手法であらゆる社会の姿を描きながら、その中に人類愛の理想を色濃く滲ませる点で、他の通俗作家の追随を許さざるものがあるなどと評されています。また、俳句の嗜みも深く、「牛身」と号しました。83歳の生涯を終えた翌年の昭和50年、楠城地区の入り口に「野村愛正文学碑」が建てられました。

18 源門寺廃寺の塔心礎

中河原に源門寺という寺の名前は残っていますが、詳しいことは分かっていません。現在、源門寺の心礎といわれる遺構は、元の位置より80mほど下流にある妙見堂の前に移動されていますが、旧位置は、袋川上流右岸に当たる中河原字源門寺谷口になります。山が川にせまり大きな平地は見られない土地であり、心礎の旧位置も山ぎわに幅30mほど小平地が見られるのみで、七堂伽藍の可能性はなく、塔を重要施設とした特異な仏教施設だったのではないかと考えられています。

心礎規模は、長径1.7mほどの自然石に径47cm、深さ15cmの柱孔が穿たれ、径73cmほどの円形柱座が浮刻されていて舍利孔はありません。また、旧場所で一個の須恵器が収集されています。平底を思わせる長頸壺(瓶)であり、形状から平安初頭と推定される唯一の資料になります。



源門寺廃寺の塔心礎

19 荒舟発電所

明治40年の春、上地橋下流から上地川の水を取り入れ、上荒舟まで1450mの導水路によって72.7mの有効落差を得た水力により、出力100kwの発電所として完成しました。

境・鳥取間の山陰線開通を祝って5月17日に皇太子(後の大正天皇)が山陰行啓されたのを記念し、上荒舟で起こされた電気によって、宿泊所の仁風閣をはじめ市内86戸に初めて点灯されました。明治44年になると八頭と千代川上流の八頭奥地に大型発電所が建設されましたが、明治の黎明期に荒舟発電所が果たした役割は大きいものでした。

その後、改修工事によって導水路延長1546m、出力は240kwと大幅に上げられ、開設以来100年の歳月を経て今なお発電を続けながら、地域の文化と産業の発展に貢献しています。



荒舟発電所

20 新井の石舟

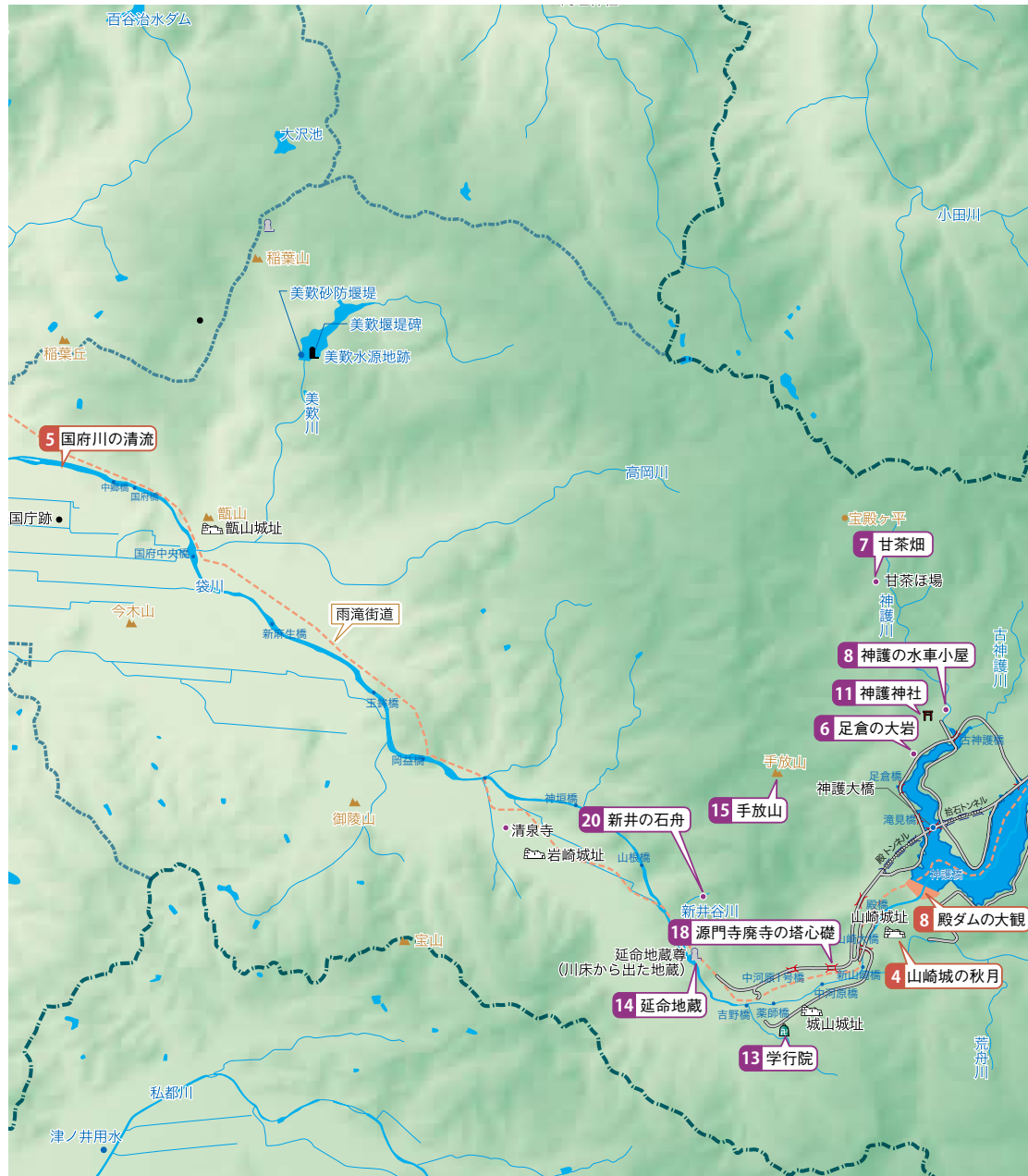
石舟古墳は直径約10mの円墳と推定され、横穴石室の玄室に凝灰岩をくり貫いた家形石棺が安置されています。石棺の蓋は2枚ありましたが現在は1枚だけ乗せられており、上の方が扁平な屋根型に加工され、横には方形の突起が造られています。

二位の尼は文治4年(1188)の秋、「泉が谷」という所に大きな石舟を造らせて自分の棺と決めました。そして、建久3年(1192)8月上旬病に伏し、医者拒み薬も食事もとらずただ一心に念仏を唱えていましたが、帝が崩御してから満5年と2日過ぎた8月15日、あとを追うかのように逝かれました。こうして亡骸は遺言の通り泉が谷の石舟に葬られ、

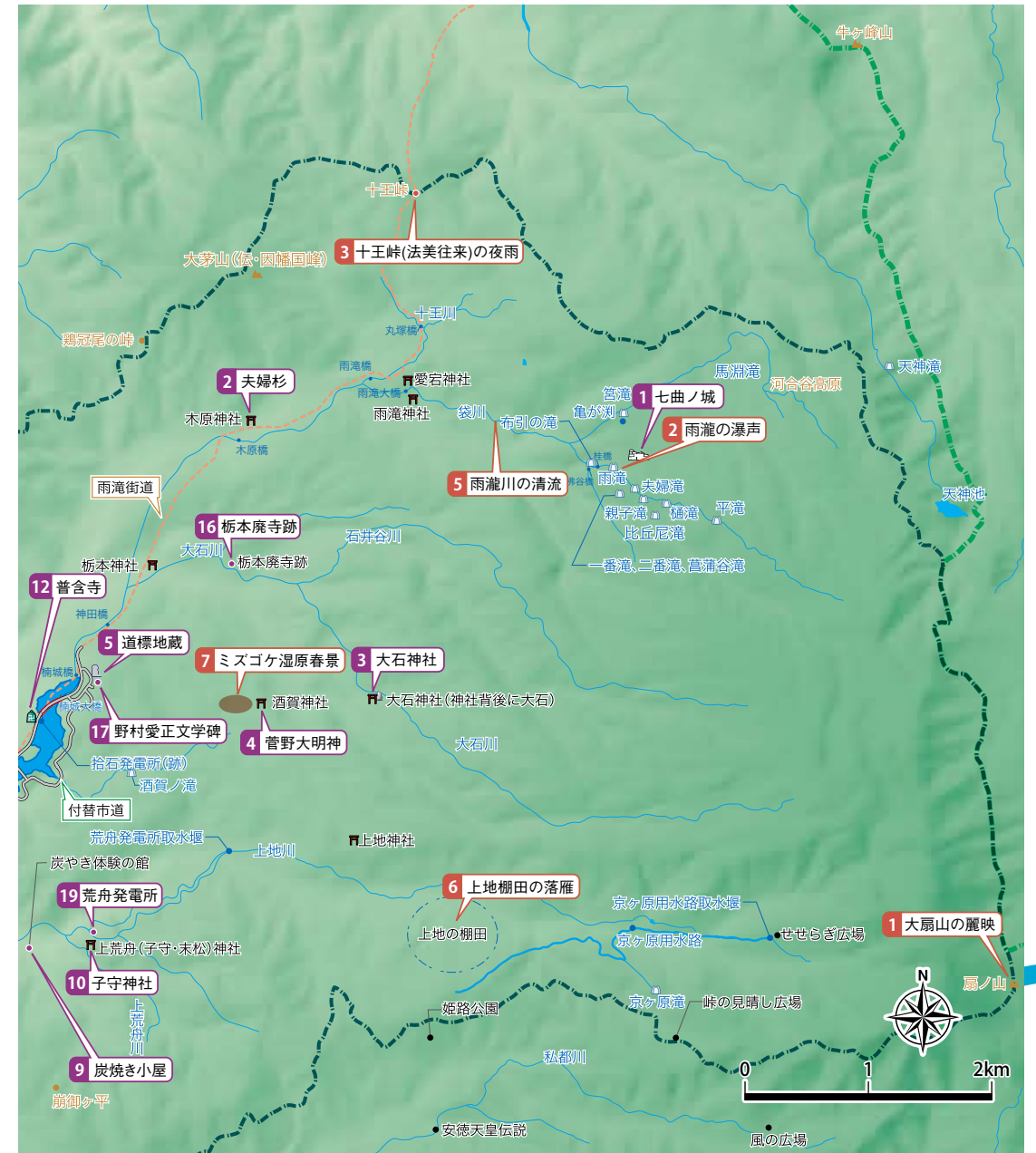


新井の石舟

二位の尼の墓所があることからこの地を「二位」といいましたが、世に隠れて過ごした人の名前を表に出すことをはばかり、その後同じ訓の「新井」へ改められました。



▲袋川・湖水八景二十勝（案）位置図



18. 袋川 風土いろいろは歌留多



へ 平時より
水質保全
御法度

袋川の水は鳥取城下の町人のための飲み水、生活用水として大切に水質保全がなされました。寛文3年(1663)から、水遊び、ゴミ捨て、汚らしいものを洗うこと、川での洗濯の禁止や、肥え舟の通行区間を設置するなど、袋川の水質保護を目的とした「袋川御法度」が度々出されました。また、お盆の15日に行われていた燈籠流しについても、寛政6年(1794)に千代川で行うように藩命が下されました。



ほ 防御線
川への出入り
「ことば」なり

「いと場(為登場)」とは、江戸時代から昭和の始め頃まで袋川に数多くあった、川への降り口のことです。川船に積んだ荷物の積み上げや、洗濯をする場であり、また、この降り口以外を全て竹藪として、敵の来襲に備えた防御線としての役割や、洪水への防壁として、21世紀、天変地異の世紀に突入り、今後ますます水への防壁的な備えが必要となるのではないのでしょうか。




に 二位の墓
新井の石舟
匠技

新井の石舟は、長さ1.5メートル、横1メートル、深さ0.7メートルの凝灰岩を精巧に加工した家形石棺がある古墳のことです。壇ノ浦の合戦の折、岡益に落ち延びてきた安徳天皇の祖母、二位の尼の墓だとする言い伝えがあり、「二位の石舟」とも言われています。また、石棺の中に常にたたえる水をかき乱すと百日間雨が降り続くとも言われ、新井地域では現在でも供養の祀りが執り行われています。



を 雄雄しい方
経家の像
哀れなり

天正9年(1581)、羽柴秀吉の山陰侵攻により、鳥取城城主となった吉川経家は2000の兵と民と共に4ヶ月間籠城を続けましたが、秀吉の包囲網の中、援軍も食糧の補給も受けられず、餓饉地獄化した兵民を救うために開城し、責は城主たる自分にあるとして自刃されました。その深い最期は武人の鑑として歴史的に高く評価され、鳥取城のふもとに「吉川経家公像」が建立されて、地域の方々から温かく見守られています。




る 留守の水
高麗水で
町悲惨

文禄2年(1593)8月の大洪水は、豊臣秀吉が朝鮮の高麗に出兵中に起こった洪水であったことから、「高麗水」と称されるようになりました。7月末より太陽に雲霧が覆い雨は止も間なく降り、八月の中頃から豪雨が降り続いて希有の大洪水となりました。壮年や若者はみな徴収され出兵していた時に起きた災害であったため、人畜に及ぼした被害は殊に大きく、また、復旧作業の労も大変なものであったと伝えられています。



ぬ 自主害
兵糧攻めの
生き地獄

羽柴秀吉は第二次鳥取城攻めにおいて、因幡中の穀物を時価の数倍で買い占め、日本海から鳥取平野、久松山の東側にかけて約20キロメートルにも及ぶ包囲網を敷いて徹底的に兵糧攻めをしました。孤立無援となった鳥取城では次第に食糧が尽き、ついには人肉まで食するとう生き地獄状態になったと伝えられています。秀吉からの開城の求めに応じて、城主の吉川経家公が自害し、4ヶ月の攻防戦は終焉を迎えました。



そ その走り
近代水道
美歎ダム

美歎ダムは、近代水道ダムとして山陰地方第1号の記念すべき水道ダムです。大正4年に完成したダムは大正7年9月14日の大雨で堤が崩れ落ち、溜水が美歎地区へ流れ出して死者8名を出しました。翌年から復旧工事が行われ、強固な堰堤として再生しましたが、老朽化のため昭和53年に水道局のダムとしての運用は停止しました。その後、転工工事をし平成10年に砂防ダムに生まれ変わりました。




れ 歴代の墓
池田家の墓
亀の上

池田家の墓所には、初代鳥取藩主池田光仲から11代慶栄公までの歴代藩主とその夫人、分家当主等75基の墓碑が270余の燈籠とともに整然と立ち並んでいます。歴代藩主の墓碑は、いずれも玉石垣を巡らして三段の台石の上に亀趺と呼ばれる大亀の形をした石を据え、円頭扁平な墓碑を建てた格式高いものです。平成の町村合併で誕生した新しい鳥取市の市域の輪郭は、足を踏ん張って重いものを支えている亀趺のかたちに見えてきます。



た 大応寺
川の底から
観音様

浜坂バス停のすぐ近くに曹洞宗の大応寺があります。この寺の大きな聖観音像は、水に流されて近くの川岸の泥の底に埋まっているのを発見され、江戸時代に復元修理されたものです。古来より度々重なる洪水の歴史と大きさを、その身をもって体験したと私達に伝えている観音様ではないのでしょうか。



は 治道の
乙卯水の
四善政

第6代藩主・池田治道公が寛政7年(1795)の「乙卯水」と呼ばれる大洪水時に、四つの善政を施したことが語り継がれています。①洪水の後、食料が水に浸かり困窮していた町民に炊き出しを施した。②届け出れば、米を貸すとの号令を出した。③藩の倉米を舟で運び込み、値段を安くして提供した。④物価を高値にしたものを処罰した。また、それに応えるような町人達の助け合いの心も伝わっています。



ろ ロマン満つ
因幡・万葉
歴史の地

国府町には、万葉の里として多くの歌人の歌碑があります。斉衡2年(855)に因幡守となった在原行平が詠んだ歌には「いなば山」が登場します。「立ちわかれ いなばの山の 嶺に生うる まつしきかば 今帰りにむ」と百人一首にも選出されているこの歌は、一説には松風・村雨姉妹とともに暮らした福葉山での生活が終わり、二人との別れを惜しんだ歌と言われています。因幡には、万葉時代のロマンに満ちた歴史が数多く伝わっています。



い 因幡とは
川稻寄せ場
名のいわれ

因幡の地名由来は稲の刈り場で、稲場のことであると言われています。古くは「稲羽」と書かれており、「古事記」にも「稲羽の素鬼」とあります。名前は当時の政治の中心地、国府が置かれた法美郡稲羽郷の名を用いたもので、国の名を因幡とした後も、稲葉の名は郷名として残りました。




り 立派なり
伊福吉部徳足
比売の塚

無量光寺の裏山に伊福吉部徳足比売の墓跡があります。徳足比売は因幡国法美郡の豪族伊福吉部氏の娘で、文武天皇の御代に大和の宮廷に仕えて慶雲4年(707)には従七位下を賜りましたが、和銅元年(708)年に亡くなりました。その後火葬されて郷里の因幡国に送られ、骨蔵器に納めて葬られたという旨が墓に刻字されています。伊福吉部氏は渡来人で、因幡の開拓に寄与した部族のルーツではないでしょうか。



ち 長通寺
ふすま絵見事
大波濤

長通寺のふすま絵は、八百谷冷泉画伯によって賀露港に打ち寄せる北西の風による大波濤が見事に描かれた大作です。冷泉は明治20年鳥取市に生まれ町内の中住道雲の手ほどきを受け、後に京都に出て丸山春挙に師事して、丸山応挙の写実風近代画風を取り入れた独特の画風を生み出しました。昭和19年から10年間同寺で生活し、住職から日本海の絵を所望され描きました。



と 殿ダムは
治水・利水の
要なり

袋川の歴史は、これまで水害と温水との闘いでした。殿ダムは国家百年の計として、袋川の治水と利水の役割があり、袋川流域地域の切り札的な存在となります。川の環境を守りながら、放水量を調節して洪水の被害を少なくしたり、鳥取東部地域の発展のために必要な水や農作物に必要な水の量を確保し、クリーンな電気を作り出す役割を担うなど、今後の地域の発展に貢献する要となります。



よ 良き甘茶
神護自慢
万能薬

神護地区で栽培されている甘茶は、神護の特産物としても有名です。甘茶は山間地域に適した作物で、6月中旬頃から収穫され、乾燥後に出荷されます。甘露を注いで産湯とした故事にない、古くからお釈迦様の誕生祝いの灌仏会の際に仏像に注ぐものとしても用いられています。山紫陽花の変種の植物で、葉は乾燥させると甘味成分が増し、甘くて低カロリーで身体に良い万能薬です。



か 傘踊り
雨乞い祈願
鈴の音

因幡の傘踊りは、江戸時代末期の大干魃の時、五郎作という年寄の農夫が3日3晩菅笠を振り回して踊ったという雨乞い祈願に由来し、百個もの小鈴をつけた、赤、白、青、金、銀と美しく彩った長柄の傘を、揃いの単衣に手甲脚絆と白鉢巻き白袴姿で、唄に合わせて振り回す勇壮で激しい踊りです。この踊りは山本徳次郎により芸術性の高い郷土芸能にまで高められました。鈴の音は来るべき天変地異への警鐘の音のようにも聞こえてきます。



わ 若桜・智頭
鹿野・鏝物師
出合橋

袋川には鳥取藩の管理する橋が五橋ありました。その若桜橋、智頭橋、鹿野橋、鏝物師橋、出合橋は、藩指導のもと洪水で流されないように桶や大石を橋の重しとする他、大綱で橋脚を結ぶなどの方策をとっていましたが、記録的な大洪水の場合は橋の流失は免れず、その度に架け替えが行われました。また、乙卯水後の復旧作業では町人が自発的に架け替えを行ったという希な記録も残っています。



う 海風が
逆流もたらす
宿命地

千代川の河口、袋川河口部は北西の海風が洪水の逆流をもたらし、洪水の流出の阻害となって洪水被害が大きくなるという宿命を負っています。この海風は大鳥取砂丘の形成にも大きく寄与しており、外海から打ち寄せる波は海底を攪乱しながら沿岸部の汀線付近に砂を打ち上げ、潮流が砂を運ぶとまた打ち上げる自然の営為が繰り返されて、次第に砂丘誕生へと繋がっていきます。それほど、海から吹く風が強い地域なのです。



む 武者走り
敵から護る
兵站線

武者走りとは、城壁や城のまわりの土手の内側に設けた通路のことを言います。鳥取城下では袋川の付け替え工事に伴い、いと場とともに、川土手の内側に幅二間(3.6メートル)の通路をつくりました。この武者走りは、敵に包囲された場合に備えたもので、本陣と戦場を連絡するための輸送連絡路となる、兵站線を確保する重要な役割を担うものです。



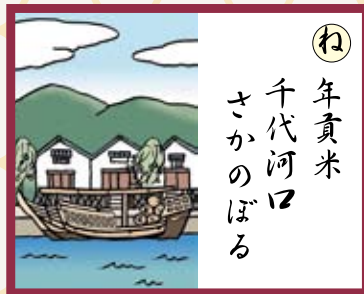
ら 乱流と
扇の要で
固定する

袋川は、標高1310メートルの扇ノ山を源とした全長28.4キロメートルの河川で、鳥取市市街地を横断して千代川に合流しているため、洪水になれば大きな被害を引き起こします。袋川の流れは玉鈴の地を扇頂として、今在家、卯垣を裾野とする、きれいな扇状地形をしています。扇状地の乱流は扇の要の扇頂部の治水が最も重要であり、このポイントの直上流部を股ダムが治めることにより、氾濫を食い止めることができます。



な 懐かしき
神護水車の
杵の音

かつて、袋川には数多くの水車がありました。神護地域では神護川沿いに多いときで3基の水車が設置されて脱穀等に活用されてきました。現在、地域活性化の一大プロジェクトとして水車の復活が試みられ、河川改修工事によって新たに整備された敷地に神護川から引き込んだ専用の水路を設け、水車を回します。水車の動力で脱穀した水車米が神護の古き良き風景と音色と味を甦らせます。



ね 年貢米
千代河口
さかのぼる

鳥取城下への年貢米は、千代川の河口から袋川を遡って藩蔵へと運び込まれました。その他にも河口から様々な品が運ばれ、袋川筋には木材問屋や魚・青物市場などが置かれていました。また、藩主が賀露の御茶屋や下屋敷へ向かう際の交通路、光仲公の墓標を運ぶ運搬路としても使われ、川船の妨げや目障りになるような行為を禁止するお触れも出ており、袋川の水運が重要な役割を果たしていたことがうかがえます。



つ 追放者
御城下払いと
川払い

池田藩の律によると、「御追放者御構場所」として罪人の追放には2つの仕様がりました。一つは「袋川払い」、もう一つは「御城下払い」です。御城下払いは城下には入ってはならないが、袋川払いは「一本橋(吉方)より出合橋場所木戸迄を限り、上は川を越え候う共に、立川大橋より天神川を限りして御城下の方構」とあるように、追放者は袋川より中に入ってきてはならないことが決められていました。



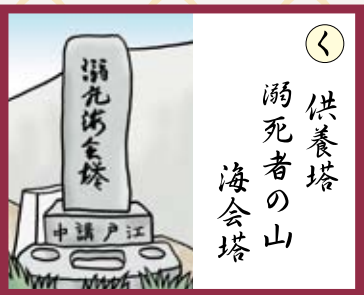
ま 万葉の
大伴家持
歌碑の里

因幡の国府は、万葉集編纂者・大伴家持の縁の地です。天平宝字2年(758)に因幡国守として当地に赴いた大伴家持は、翌年の元日、淳仁天皇即位後の初朝賀の日に、因幡国庁にて天皇を讃える歌を詠み、万葉集4516首の最後を締めくくる歌としました。現在残されている資料の中では、因幡国赴任中に家持が詠んだ唯一の歌といわれています。「新しき年の始めの初春の今日降る雪のいや重け吉事」



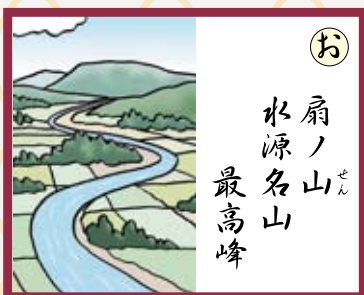
や 薬研堀
池田長吉
柳土手

慶長6年(1601)関ヶ原で東軍に味方した池田長吉公が鳥取城主を封ぜられ、入府後、城の拡張と城下の整備をしました。現在の市役所から醇風小学校に至るまで堤防を築きました。土手に柳を植えたのでこれを柳堤とい、また外側に堀を掘って、因幡川の水を通じました。寺町辺りから江崎方面に切り込んで流れた袋川筋のほか、長吉公が掘った若桜町惣門から柳蔵までの堀についても、薬研に似た断面だったので薬研堀と呼ばれました。



く 供養塔
溺死者の山
海会塔

浜坂の小丘上に「溺死海会塔」と刻まれた水害供養塔があります。寛政7年(1795)、8月24日から30日にかけて降り続いた雨の影響で、鳥取平野には深さ1.5メートルから3メートルの水が覆い、円通寺、国安、袋川などの堤防が次々と決壊して家屋を押し流し、溺死者は650人を超え、海風により海へ流出せずに吹き溜まった遺体が山となったそうです。「乙卯水」と呼ばれる洪水の悲惨な歴史と記憶を今に伝える供養塔です。



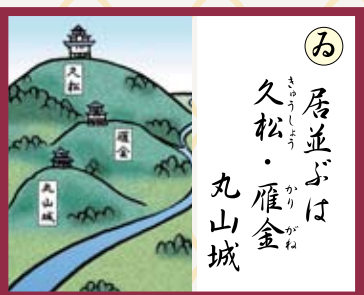
お 扇ノ山
水源名山
最高峰

鳥取県と兵庫県の県境に位置する扇ノ山は、標高1309.9メートル。国府、郡家、八東、若桜の境でもあります。南北に連なるならかな尾根筋と、裾野に広がる広大な高原からなり、遠くから見ると扇の形に似ていることから名付けられました。袋川はこの扇ノ山に源を発し、雨滝地区にある県下最大の雨滝から西流して国府町を抜け、鳥取市街地へ流れ出ていきます。



の 野道沿い
道標地蔵と
常夜燈

袋川下流は智頭街道、若桜街道、鹿野街道、法美雨滝街道の拠点です。宮下の道標地蔵は、昔、中郷橋が架かっていた所にあり、享和元年(1801)に角屋徳兵衛が雨滝の分岐点に旅人の便宜と安全を願って建てたといわれています。また、稲葉山にある道標地蔵は、稲葉山の山道横に建ち、国府から但馬方面への近道になります。かつては街道沿いに多くの道標、地蔵や常夜燈が建ち、人々の往来を見守ってきました。



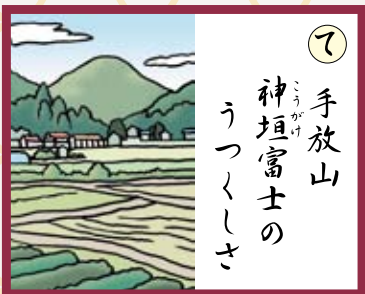
ろ 居並ぶは
久松・雁金
丸山城

吉川経家が守備する久松山の鳥取城、塩治高清水を将とする雁金山の雁金城、鳥取城の出城であり奈左日本之助らが守る丸山の丸山城は、天正9年(1581)羽柴秀吉による鳥取城攻めにおいて籠城を続けた三山です。毛利家からの補給物資は袋川水路を使って丸山城から雁金城を経由し、本城に輸送されましたが、物資の補給を行っていた要塞の地、雁金砦が落とされたため、ついに補給は途絶え、落城しました。



あ 雨滝の
四十八滝
美を競う

袋川の上流には、日本の滝百選に選ばれた雨滝をはじめ数多くの滝があり、雨滝48滝と呼ばれています。48という数字は実際の滝数を示すものではなく、いろは48文字に例えて数の多さを表しています。雨滝のほか、白布を引いたように見える布引の滝や、4段の重箱が谷の斜面に並んで一つの滝をつくっている管滝、岩が樋の如く3段になった急流の樋滝など、個性豊かな多くの滝を見ることができます。



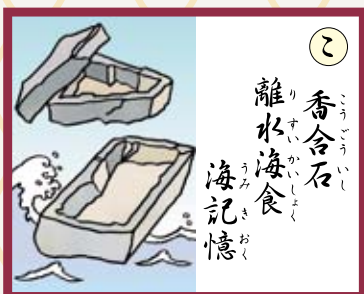
て 手放山
神垣富士の
うつくしさ

標高461.2メートルの手放山は袋川流域の「内の四山」の一つで、美しい山容から地元の人からは別名「神垣富士」とも呼ばれています。そしてその手放山と宝山との間には袋川が流れています。



え エンタシス
岡益石堂
安徳帝

岡益にある石堂は、6メートル四方の基壇上に、厚さ約0.4メートル前後の礎石で囲った石室の中央に、高さ1.8メートルのエンタシス方式の円柱が立てられ、その上部にのる中台には忍冬唐草文様などが浮き彫られている、七世紀後半の建造物です。明治29年に安徳天皇御陵参考地として指定を受けました。壇ノ浦の合戦から逃れてきた安徳帝がこの地に留まり、崩御されたという伝説が残されています。



こ 香合石
離水海食
海記憶

昔、鳥取平野は海の底でした。「離水海食洞」は海の波浪によって形成された高さ1メートル、幅0.6メートル、奥行18メートルの海食洞です。現在は海岸線から遠く離れた場所にあり、縄文海進時代(約六千年前)の海岸線を今に伝える重要な洞です。また、「香合石」は海進海退の作用によって自然が作り上げた珍しい石で、表皮は褐鉄鉱ですが、内部に粘土を含んで空洞になり、香合のような形をしていて、たたくと高い金属音を発します。



ふ ふるさとは
岡野貞一
想い馳せ

『勇ましいかの山 小ぶな釣りしかの川』。日本人なら誰もが口ずさめる唱歌「故郷」は、鳥取県吉市で生まれた岡野貞一が作曲しました。詩は長野県の山間の村で生まれた高野辰之が、故郷の情景を思い描きながら作ったといわれています。岡野もまた、己の故郷であるここ鳥取の久松山や袋川の景色を思い起こしながら、この詩にメロディーを乗せたのではないのでしょうか。



け 契機なる
三大水害
大改修

大正元年9月、大正7年9月、大正12年9月と大正時代に起こった度重なる大洪水被害を契機として、千代川、袋川の抜本的な河道付け替えの大改修工事が大正15年から昭和9年まで行われました。鳥取市秋里付近で大きく右回蛇行していた千代川下流を海へ直進させる新しい水路が開かれ、これに伴い蛇行を重ねる袋川も、大村から千代川鉄橋付近に千代川に合流する放水路として、新袋川が開かれました。



し 惚ばれる
光政つけかえ
桜土手

元和3年(1617)姫路藩から鳥取藩に転封になった池田光政公は、鳥取城下を大拡張するために袋川の付け替え工事を行いました。吉方稲平のドントから出合橋にかけての間に、幅7間(約12.6メートル)、深さ3間半(約6.3メートル)の溝を掘り、さらに外側に川の流れを変えました。この新川掘削工事によって掘り出された土で築かれた土手は、今では桜の名所として、桜土手と呼ばれています。



み 光仲と
遷封水
出迎える

寛永12年(1635)8月、池田光仲公がお国替えで鳥取城主となった直後に大洪水が起こり、「遷封水」と名づけられました。7月下旬より連日雨が降りしきり8月になって止まず、大雨はお盆をひっくり返すような激しさで、ついには袋川の堤防を押し破って市中に流れ出しました。水は7~8尺(約2メートル強)から一丈(約3メートル)の深さにまで及び、家屋も人も押し流され、大きな被害を出したことが伝えられています。



め 名水の
みどり豆腐
無農薬

雨滝の名水で作る豆腐は、無農薬で栽培されている緑色的大豆を使って作られています。そのため、若草色をしてふわっとした甘みのあるこの豆腐のことを「みどり豆腐」と呼び、雨滝地域の名産になっています。雨滝に行くときみどり豆腐を使った豆腐料理のほか、そのおからや豆乳を使った料理も味わうことができます。



袋川 袋川
蛇行河川
名のいわれ

袋川の名前の由来は、『鳥取志』に、「鳥取の山下にあたる沼沢を埋地となさんとて、川脈を此方へ切込みたる時、数町の間に川脈と云うこともなく、広き処を流通りしゆえ、袋川の名称はこれより起りたる」と書かれているように、屈曲の激しい蛇行河川であることから名付けられたといわれています。特に袋川下流部一帯は低湿地の軟弱地盤のため流路が定まり難く、流路の蛇行は千代川水系で最も激しいものでした。



す 水害の
五水・因溢
物語

江戸藩政期に起きた水害は、『五水記』と『因溢物語』に記され、今日その様子を窺い知ることができます。「五水記」は5つそれぞれの水害の被害状況や洪水に直面した人々のエピソードなどを書き伝え、「因溢物語」は寛政7年(1795)の乙卯水について、著者自身の身に立脚して、溢れるような人間愛に貫き通されている内容が特徴的な記録書です。このような水害記録書は全国的にも他に類を見ることがない、大変貴重な資料です。



せ 千躰の
仏像伝説
千代川

千代川にまつわる伝説の一つに、弘法大師が上流の山にある千の谷に一つずつ仏像を安置しようと千躰の仏像を刻んでいたところ、999谷しかなかったために、仏像を全て川に流したという話が伝わっています。そのほか、千代川の名前の由来には諸説あり、山賊退治の際に薬師如来の像を千体に刻んで成敗の成就を祈願し、願いが叶ったとする伝説や、「せんたに」が「せんだい」となったとする説などもあります。



ゆ ゆったりと
麒麟獅子舞
宇倍神社

宇倍神社は孝徳天皇の御代、大化4年(648)の創建と伝えられています。延喜式には県下唯一の名神大社と記され、また因幡の国一宮の称号を得る格式高い神社です。毎年4月21日の例祭には、池田光仲公により創始されたといわれる「麒麟獅子舞」が神前に奉納されます。獅子頭は因幡地方特有の一本角で、笛、鉦、太鼓の調べに合わせて朱色の布を纏った獅子が殿前舞に踊ります。



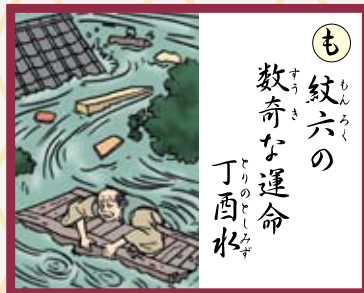
き 久松山
天下の名城
鳥取城

鳥取市街地の背後にそびえる久松山は、山上に鳥取城があったため「城山」とも呼ばれています。鳥取城は天文14年(1545)因幡守護の山名誠通によって築かれたといわれており、羽柴秀吉の徹底的な兵糧攻めと城主吉川経家公の誇り高さ決断によって遂に陥落した、難攻不落の名城でした。その後、池田家の居城として明治まで存続しましたが、現在は城跡は久松公園として整備され、また桜の名所にもなっています。



さ 三山は
凱・面影
今木山

因幡三山は因幡国庁跡を取り囲むようにして身近に位置する、3つの山を指します。因幡国庁跡から夕陽に照らされた美しい姿を見ることが出来る面影山、因幡国庁跡から南東にあり平野に屹立する今木山、因幡国庁跡から朝日を迎える真東に位置する観山のことを指し、国府に赴任してきた当時の人々にとって、この山は大和三山(耳成山、岐傍山、天香具山)を彷彿させたであろうことに因み、昭和30年頃命名されました。



も 紋六の
数奇な運命
丁酉水

享保14年(1729)7月14日から北東の風が強く吹いて夕方から豪雨となり、15日の明け方に袋川が溢れましました。丁酉年の洪水であったので「丁酉水」、「とりどりの水」と呼ばれています。民家や若桜橋以下の橋はみな流失し、溺死者も多い希有の大洪水でした。「五水記」には、流された夫婦が漂着した村で無事生まれた紋六が、60歳になってまた洪水で流されるという数奇な運命を辿った話などが記されています。



ひ ビックリす
種稲水
五月雨

江戸時代の五大水害の一つは寛文13年(1673)の5月に起こりました。ちょうど田植時だったので「種稲水」、または「丑年の水」とも称されています。大雨がしきりに降り注いで川の水が溢れ、但馬殿橋、鑄物師橋、丹後町の橋が落ちました。外構の土手が崩れなかったため、危機は免れましたが、郊外の浸水は深さ8~9尺(約2.5~2.7メートル)に及び、田畑に多大な被害をもたらしたと伝えられています。



え 絵の如し
京ヶ原用水
上地棚田

袋川の上流地域、上地地区には絵のように美しい棚田の風景を見ることができます。その棚田を潤しているのが、京ヶ原用水です。標高300~600メートルにある20ヘクタールの棚田に灌水するために、上地川上流の溪流より取水し、急峻山腹に沿って約3.9メートルを導水するこの用水路は、明治時代に開削されました。最近では、ここで栽培した酒米で日本酒を醸造する取り組みも行われています。

19. 日本列島 災害の宿命と備え

(1) 日本の国土の七つの宿命

- ①日本の国土 70% 以上は山地であり傾斜地です。
- ② 20 世紀 M8.0 以上の巨大な地震は世界で 51 回、内日本は 10 回。
- ③世界の活火山約 800 に対し、日本の活火山数は 79。
- ④世界平均が 973mm に対し日本は 1714mm です。
- ⑤台風や梅雨に集中し、沖積平野は国土の約 10%。51% の人が住み、75% の資産が集中。
- ⑥地質は極めて細かく分かれ、断層などにより切刻まれています。
- ⑦国土の 52% は豪雪地帯。積雪 50cm 以上の地域の人口密度は極めて高い。

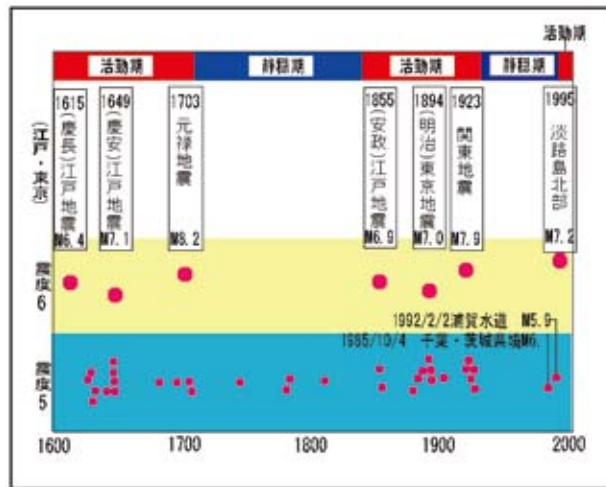
(2) 日本列島は砂山

活断層の権威・藤田和夫先生は日本列島の地形地質の特徴を日本列島砂山論と称しました。

- ①かつての地震などによる地殻変動の傷跡である断層だらけの地形で形成されています。また、一層が極めて小さい火山活動の何層にも折り重なった跡です。
- ②高温多湿地帯がつくった花崗岩の深層風化地帯です。
- ③毎年、センチメートルのオーダーで隆起し、それのみあうだけの侵食を繰り返して、大量の土砂生産量を誇るのが日本の脊梁山脈です。

(3) 21 世紀 天変地異の世紀が始まった

- ①無降水日数は、着実に増化。
(年総降水量の減少化)
- ②時間雨量 100mm 以上の降雨が着実に増化。
(降れば大雨)、
(降雨変動幅拡大)
- ③場所を選ばず豪雨に見舞われる事例が多発。
(局地豪雨)
- ④師走の夏日、低湿の冷夏、中秋の夏本番、
12 月の暴風雨等が続出。
(季節・時期異変)



(4) 巨大地震の活動期に突入

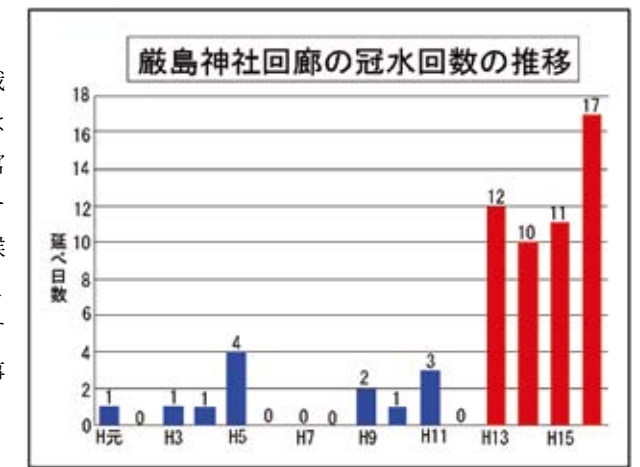
巨大地震はプレートの動きが原因です。歪みのエネルギーは蓄積量が少ない時期は、巨大地震はなく静穏期です。

一方、歪みエネルギーの蓄積が進み限界になると巨大地震が頻発する地震活動期となります。過去 400 年間の震度 5、震度 6 の巨大地震の活動記録を見ますと、明確に平穏期と活動期は分かれており繰り返し交互に生起しています。マグニチュード 7.9 の関東地震 (1923) 以降約 70 年間は平穏期でしたが、マグニチュード 7.2 の阪神淡路地震 (1995) は明らかに活動期の端緒と見なすことができます。東海地震は兄弟の地震です。

関東地震は少し離れた兄貴分の地震です。東海地震が近いといわれて久しい今、迫り来る巨大地震にいかにも備えるか！

(5) 着実に進んでいる地球温暖化

地球規模の温暖化は着実に進んでいます。我が国においても、色々なところにその影響ではないかという現象が生起しています。安芸の宮島の厳島神社回廊の冠水回数の水位などもその現われではないかといわれます。少し天候不順になれば大変な水不足に見舞われます。これらのことは一過性で直ぐに忘れ去られますが、天災は必ずやってきます。それに対する事前の備えが必要なのです。



(6) 備えあれば憂いなし

モルディブの首都・マレ島を救った消波ブロックに学ぶ

スマトラ沖地震によるインド洋大津波によって 20 万人以上の犠牲者が出ました。インド洋に浮ぶ国、モルディブの首都マレ島は 1 人も犠牲者が出ませんでした。マレ島は標高ほぼ 1m、広さ約 180ha (幅約 1.1km、長さ約 1.6km) の珊瑚礁の島です。人口 7 万人、世界一人口過密な首都です。今回、マレ島の 70% が浸水しましたが、死傷者は奇跡的に出なかったのはそれだけの理由があります。

1897 年マレ島を襲ったサイクロンの高波により、マレ島の 3 分の 1 が浸水し、首都機能が麻痺し、伝染病が発生し甚大な被害が出ました。これに対し国際協力事業団 (JICA) が日本の開発援助 (ODA) の無償資金協力によって 2002 年島全体の海岸線に消波護岸堤をつくった効果でした。備えあれば憂いなしということです。